明治三十七年十二月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第四巻第十六號

口繪
初冬の郊外　永耕畫
歳の暮
寒菊
藪柑子　毛筆畫
名家の庭園
滿洲旗人の妻

記事要目
戰後の女子教育
生活狀態の改良
松村中將の家庭
藤井參謀長の夫人
俗人生活
大慈善家
女學校の寫生



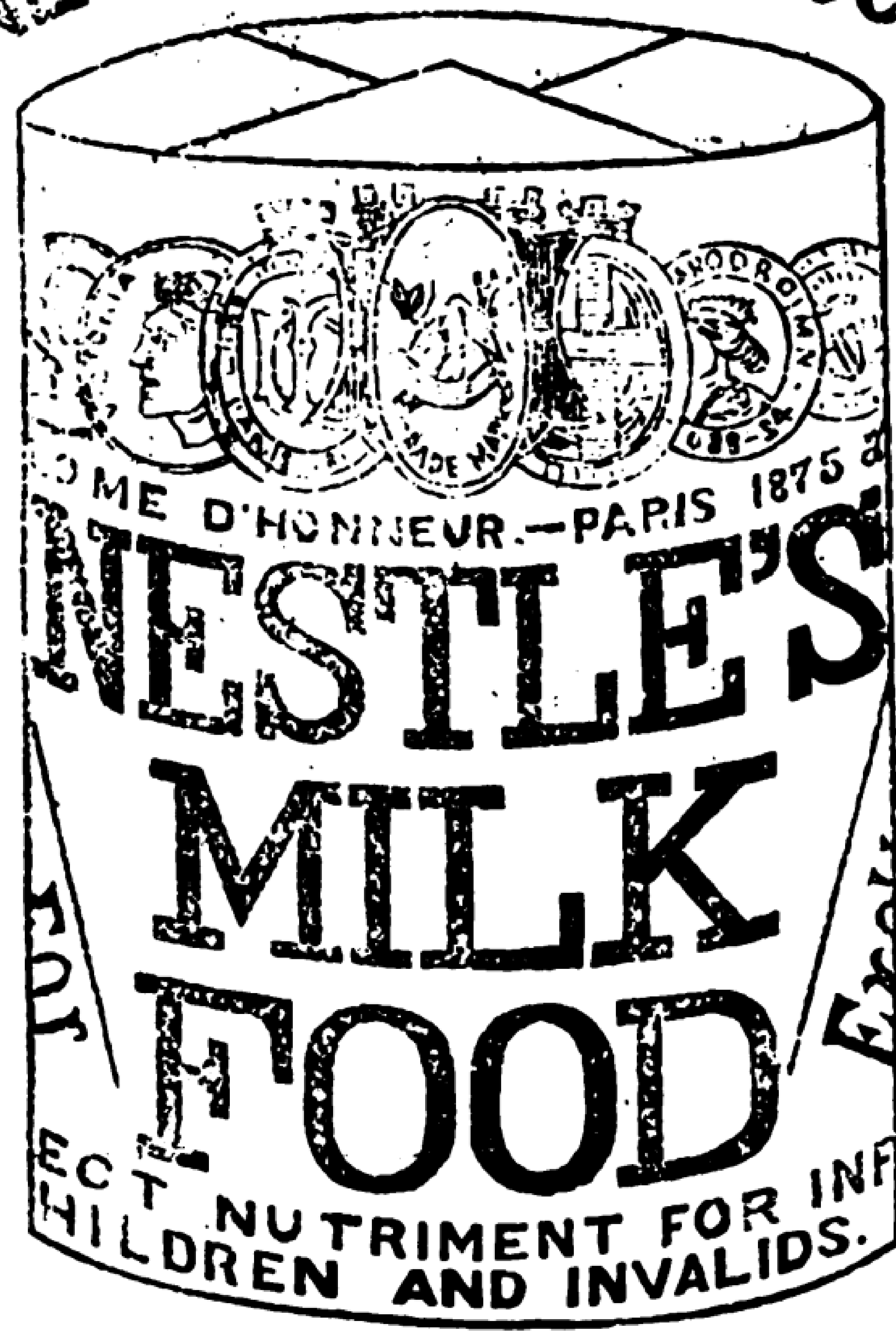

季節向
新柄もの
いろいろ取
揃へ置候
御用命の程
奉希上候
東京日本橋
三井呉服店

女學世界 第四巻 第拾六號 目次

NESTLE'S MILKFOOD

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド



各國帝室御用品

各國醫科大學、大病院、

醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

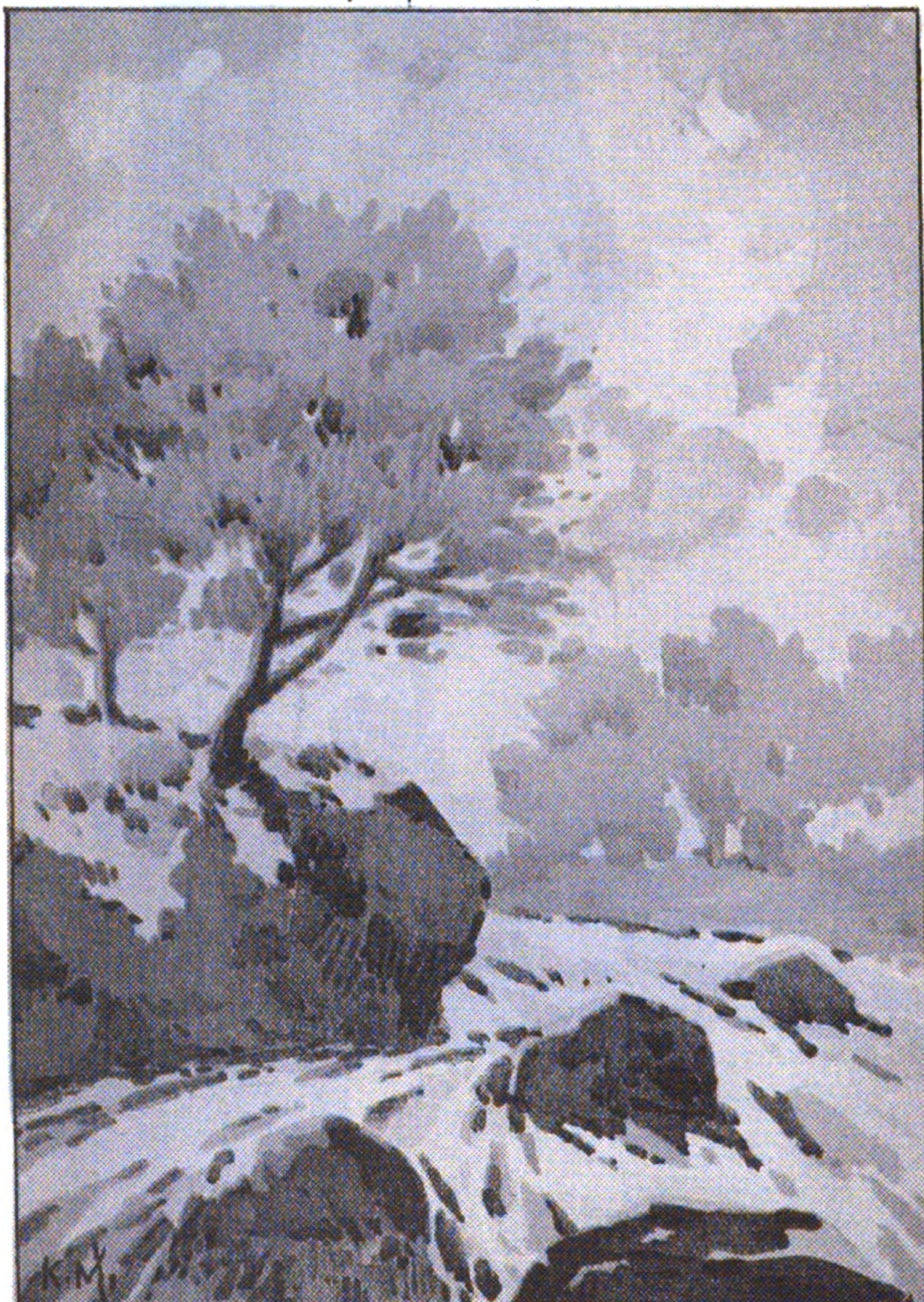
ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり


ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

初冬の郊外

三宅克己氏筆



歳の暮



三宅克己筆

歲暮



跡見花蹊女史筆

寒菊藪柑子

跡見花蹊女史筆



三宅花圃女史筆

何となく人あはれにしおもほゆる折り

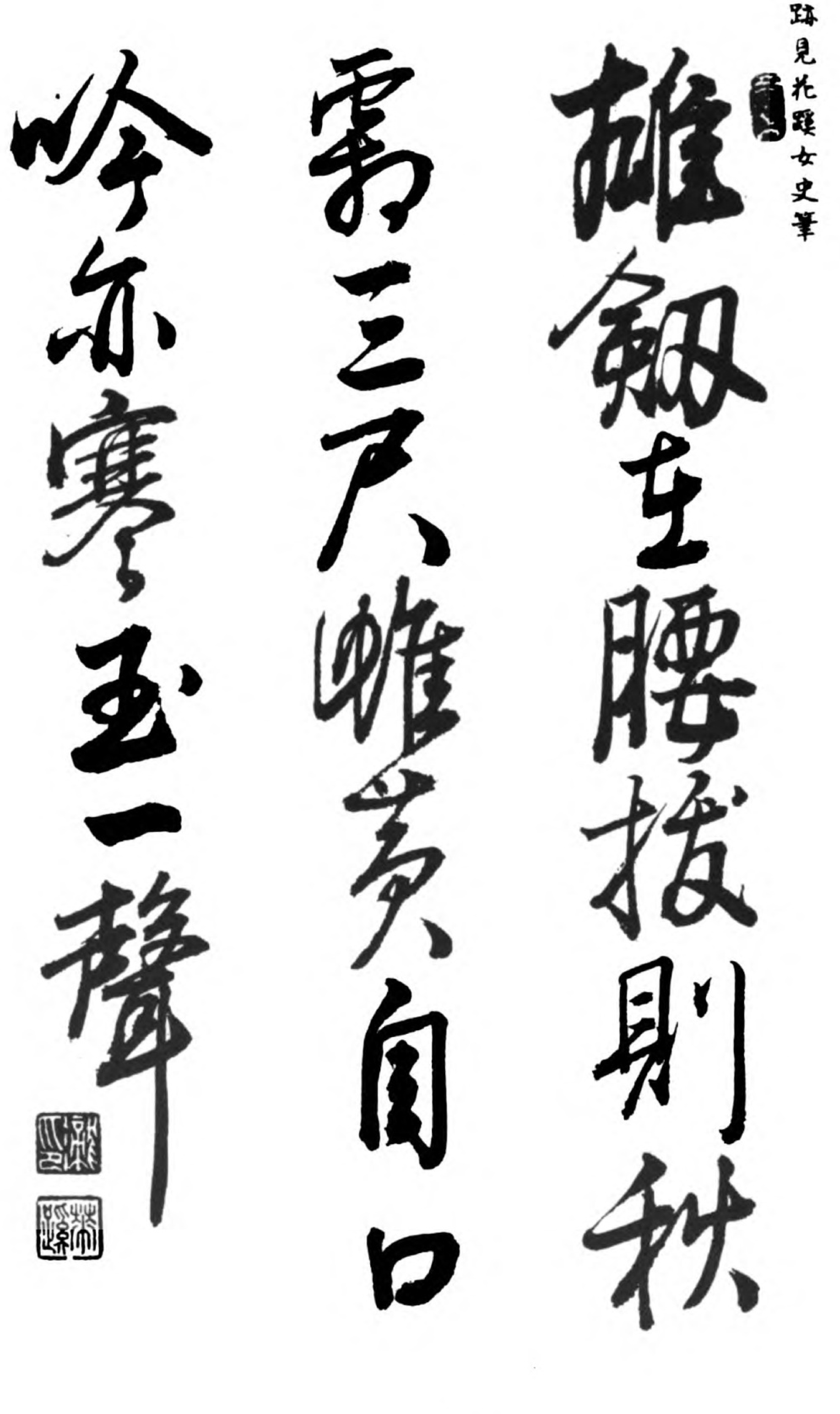
大かたの紛れに文かはしける君

こゝろよせし人にてはあらねどかう春のこゑ

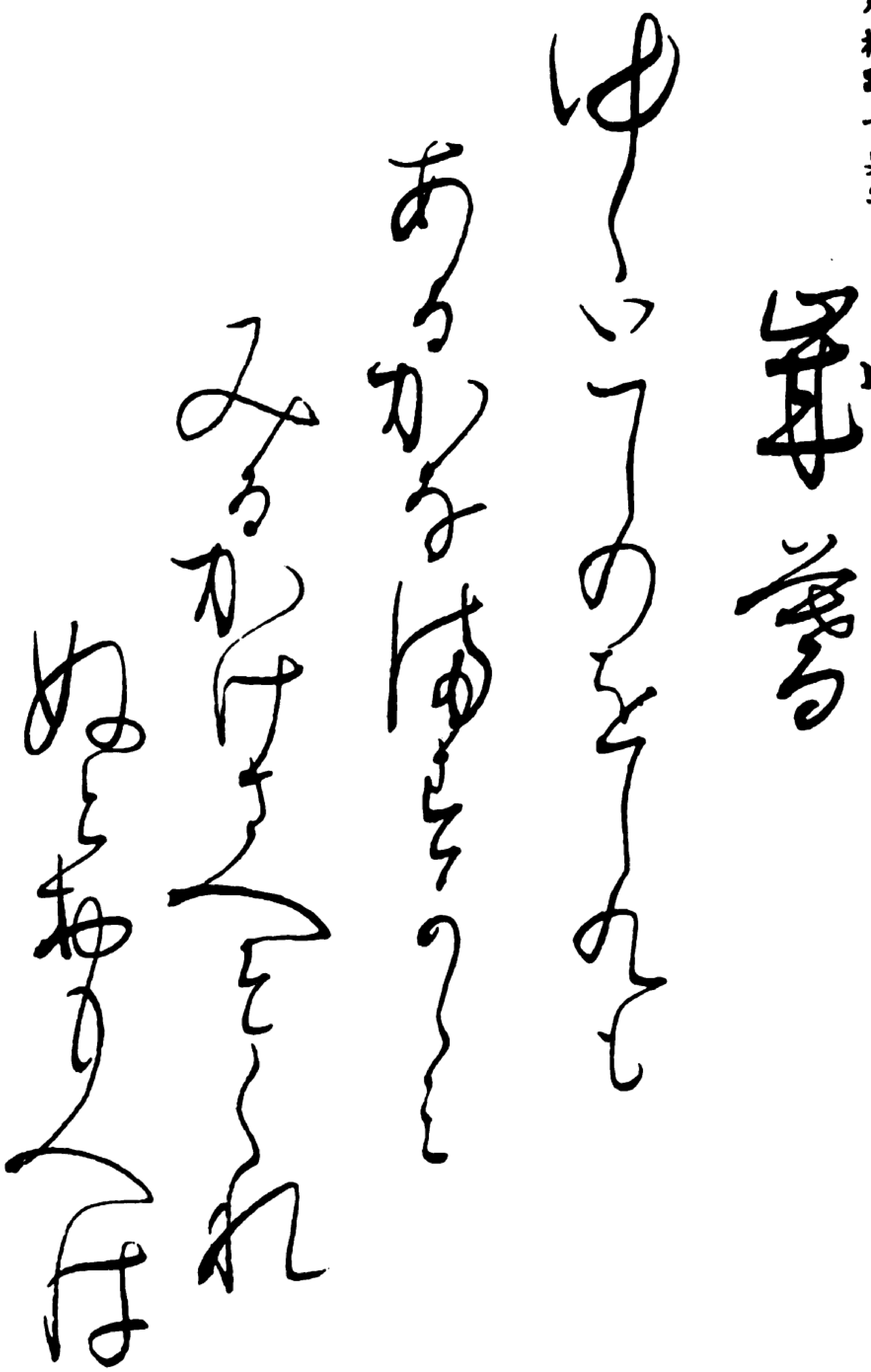
梅の花さきにけるよしきこえし記

あなかしこのかれと彼らにかへしあり

侍従をも教へけるやゆかしも
この比防ぎ見へ日ごとに去つ侍らふ
るとかへし遠きよしをかし申侍一ぐし
御果来の遠き候ふに申ききすぎ侍
ゑをいかし　かたかやうにかまへ給ふのこ


跡見花蹊女史筆
雄劍在腰拔則秋
霜三尺雌黃自口
吟成寒玉一聲

跡見花蹊女史筆



大日本地誌

理學士 山崎直方先生
理學士 佐藤傳藏先生
共編

齋藤文學士大日方理學士大塚文學士田山花袋君補輯

第三卷 中部 出版

尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛彈、信濃

第一編

第壹章 地形概說＝尾張、三河、駿河、伊豆、甲斐、美濃、飛彈、信濃

第二章 海洋並に海岸線＝相摸灣伊豆、海並に其沿岸、駿河灣並に其沿岸、遠江灘及其海岸、伊勢海及其沿岸、海流及潮、近時に於ける重要なる地變、

第三章 地質＝汎論、始原大統、古生大統、中生大統、御坂統及び三倉統、新生大統、噴出岩、地體構造、鑛泉

第四章 氣象

第二編

第一章 沿革＝石器時代、上古、寧樂朝より平安朝に至る、鎌倉時代、南、北朝の時代、諸族割據攻伐の時代、豐臣氏の時代、幕府時代、維新以後

第二章 政治宗教＝行政、司法、軍事、教育、宗教、交通、

第三章 產業＝農業、林業、水產、工業、鑛業、商業、

第三編

地方法＝靜岡縣、山梨縣、長野縣、愛知縣、岐阜縣、

我邦空前の大著たる大日本地誌は、既に第一關東、第二奧羽の二卷を刊行し、今又爰に其第三中部の卷の發刊を見るに至りぬ。夫れ中部の地たる海岸線は關東奧羽に比して及ばざるも火山彙の形狀、河流の壯大頗る研究に價すべきものあり、殊に此の地方には中京名古屋の如き乃至は靜岡長野の如き繁盛なる都會を有するが故に、人文發達の上に注目すべき事多く、沿革はまた德川時代の爭闘史に富み產業は工業、鑛業、林業に於て他地方に卓越し、政治宗教、教育、地方誌に關して記すべき事甚だ多し。今此篇を編むに當って、著者は凡て最近の材料に依り、勉めて詳細にまた努めて簡明ならん事を期しぬ。其の如何に苦心經營の結果に成りたるやは、本書を繙く人の必らず首肯する所ならん地形地質圖及び寫眞版皆共に精巧無比。

既刊

第一卷 關東　正價二圓五十錢　小包送料十五錢

第二卷 奧羽　正價二圓五十錢　小包送料十五錢

續刊

第四卷 近畿　第五卷 北陸　第六卷 中國　第七卷 四國　第八卷 九州　第九卷 北海道　第十卷 臺灣琉球（以上）

裝幀

全部十卷菊判總紙數約八千餘頁脊皮金模樣金文字入頗高尚優美

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の一）

（甲の二）

帝國百科

第百拾八編

彥根第三佛教中學校教頭 文學士石原即聞君著

日本佛教史

（製本既成）

上製五拾五錢
郵税拾錢
並製四拾錢
郵税八錢

佛教の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の事なり、其間時に弊害なきにあらざりしも我國の精神的幷に物質的の文明に貢献せし處實に尠しとせず、斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗教の傳來起原若くは敎義の研究に心を用ゆるは少くとも現代學者の義務なり、彥根第三佛敎中學校敎頭文學士石原即聞君夙に玆に着眼し今や本書の著あり、由來我國佛敎史に關する書少からずと雖其多くは專門家の手に成り、一般人士の解しがたきもの多し、然るを本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して沿革的系統を立て最も平易に其變遷を叙述せられたれば日本佛教の歷史を知らんには無比の良書なり

第百拾九編

農學士 高橋久四郎君著

園藝各論

（製本既成）

上製五拾五錢
郵税拾錢
並製四拾錢
郵税八錢

近頃園藝の進歩は益々學理の應用を促しそれが栽培の方法又精巧を極めて珍種佳品の產出又漸く多きに至らんとす、著者曩に園藝通論を編して園藝全般に關する學理及び之れが應用の方法を述ふる所ありしが今又玆に各論を編して各果樹蔬菜及び花卉に就きて各其特性を比較的詳細に説明し以て世の此道に志す人々の研究に資せらる其編述の整然として通讀に便に斯學講究の上に一段の趣味を覺ゆるべく筆を執られたるは流石に著者が學殖の豐富にして實際に熟達せられたるを知るべく、園藝家の一讀を術もすべからざるべき良書なり。

發兌元　東京市日本橋區

（甲の四）

全書新刊

第百貳拾編

農學士 井上正賀君著

食物論

（近刊）

上製 五拾五錢
郵稅 拾錢
並製 四拾錢
郵稅 八錢

目次

今や我國民は其生命財産を賭して大戰闘を爲しつゝあり此時に當りて井上農學士食物論を編するもの其理なかるべからず夫れ人は「パン」なくして生活するものにあらず實に食物は吾人生命の根元にして活力の源泉たり故に吾人の活力如何は食物の性狀に關すること最も大なりといふべし本書は食物に關する全般の理論並に其千差萬別なる食品の成分性狀の大要を述べ吾人は如何に食品を撰ふべきかを詳述せり讀者よ宜しく本書に依り少費多効の食物を採り活力を強盛にし此空前の時世に最大の任務を盡すべきなり。

第百廿一編

文學士 松本孝次郎君著

兒童心理學

（近刊）

上製 五拾五錢
郵稅 拾錢
並製 四拾錢
郵稅 八錢

抑も兒童心理學は兒童の精神狀態を攻究し兒童の心的發達を明にするを以て目的とせり而して此研究は一方に於ては普通心理學と相待て心に關する問題を解決し他方に於ては普通心理學と動物心理學及民族心理學との連鎖をなし尚精神狀態上より生理學解剖學及病理學とに關する所少からず是れ近時學者間ありて兒童心理學が心理學中の一學科として重要なる位置を占め最新研究として最も價値ある科學と稱せらるゝ所以なり著者教鞭を高等師範に採られ久しく斯學に進涉する所あり、此頃[illegible]學の傍ら本書を公にし以て將來斯學の進步發達に多大の貢獻を與へらる。

本町三丁目 博文館

（甲の五）

明治三十八年 懐中日記

新形（船來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帯至便）●正價金貳拾錢　郵税二錢

上製（船來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾八錢　郵税二錢

並製（船來洋紙總クロース表紙金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾貳錢　郵税二錢

體裁

表、収支一覧表、友人住所録、最新重要統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ（懐中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覧案内、日陰暦氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月日ノ歴史、七曜、干支、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納録アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懐中當用兩日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々するの要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尚一層の改善を加へ殊に本年調製の新形懐中日記はポケット挿入に至極便利にて附録には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し倘趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の三種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及幸田露伴先生の旅行の心得某醫學士の衛生の心得等を掲け尚ほ伊東祐穀氏の嚴格なる調査に係る最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ正確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

◎賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

◎取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

（甲の七）

女學世界

明治三十八年度の新光彩

女學世界は時代の風潮に伴ひて女子必須の學問智識を供給するの目的にして其編輯人の用意は各女學校に就業する女學生と家事を担當する江　一般の主婦に向つて無二の良友たり日用品たらしめんと期し其大綱を家庭と社會の二項に分ち家庭に於ては専ら內界の智識を網羅し社會に於ては外界の智識を採集し婦人をして家事を修むると同時に又社會の耳目を擴張せんことを期す

●觀察　●社交　●家庭　●談叢　●史傳　●英語　●日用科學　●衛生顧問　●家政顧問　●學事欄　●交詢欄

來年度は本年度に比し更に學事欄交詢欄を增設し學事欄に於ては各女學校の內容と教授の項目並に製作品を紹介し交詢欄に於ては世上百般の事項の質疑に應じて親切丁寧なる解答をなし以て日用家事の活用に資せしむ

良家風の紹介

上は公侯貴爵の家風より江湖名流の家風にして模範となるべき家の內容を紹介し家庭改良の一助たらしむ蓋し趣味ある生活を知るは趣味ある家庭を造るの方便なればなり

口繪

口繪＝風景、人物、風俗並に時事に關するものは之を寫眞銅版として掲載し習畫手本は水彩畫（風景）、油繪（人物）の施彩鮮麗なる物の外更に墨炭畫の用器自在なる物を紹介し習字手本は名流貴婦人の筆蹟十二ヶ月を集め之を寫眞石版として掲載す、猶亦鮮明なる花鳥の繪端書を添ふ

新年附錄

婦人風俗双六　水野年方筆

縱一尺八寸　横二尺五寸

彩色三度刷

發行日　毎月一回　五日發行

定期增刊　年四回　定價同一

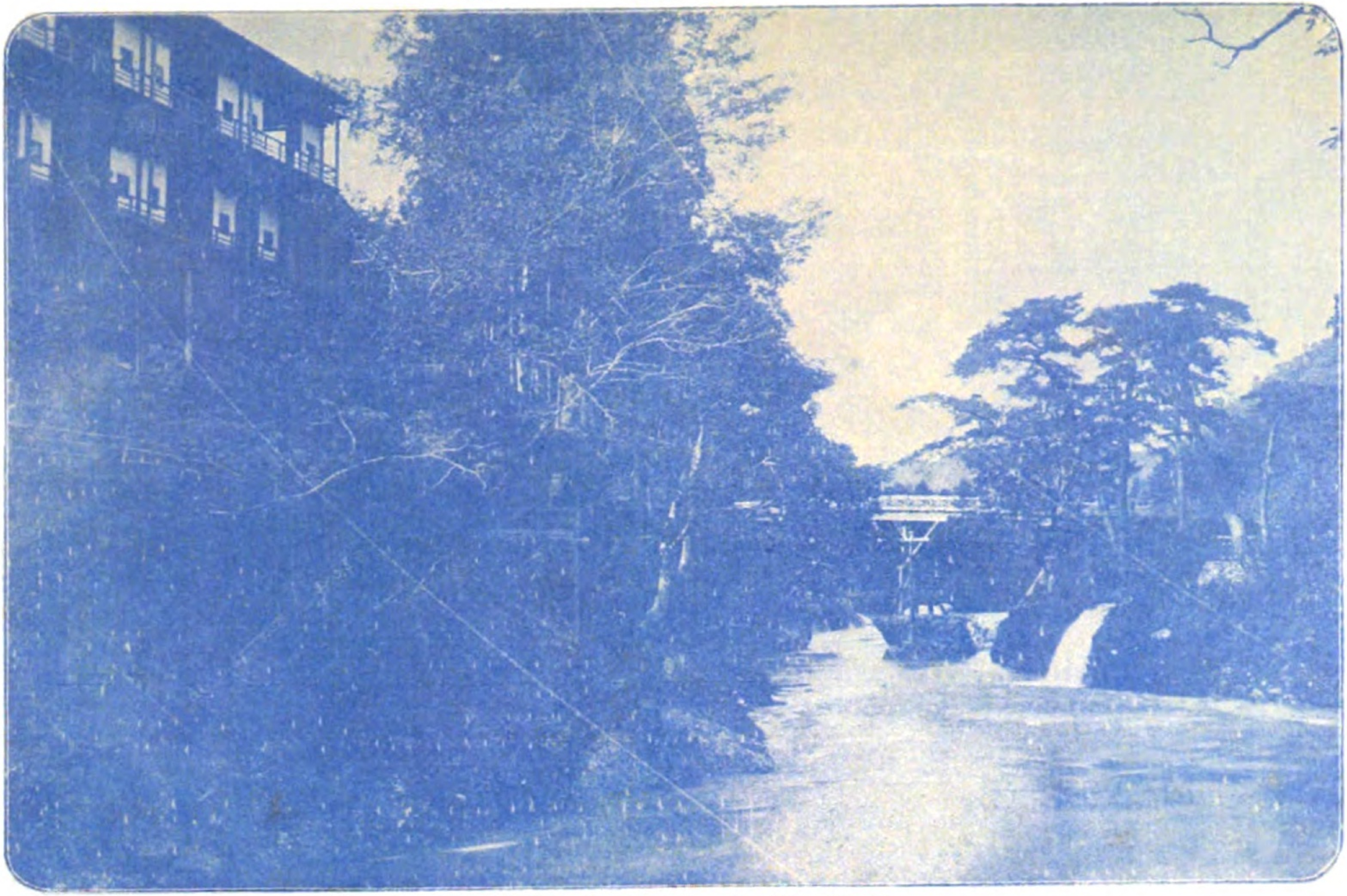
●壹冊正價金貳拾錢……郵稅貳錢

前金　●四册金七拾五錢●八册金壹圓四拾五錢●拾六册金貳圓八拾錢▲外に要郵稅

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の八）

洗塵境



加賀國山中溫泉黑谷橋

（博運社寫印行）

満洲旗人の家庭



旗人の妻（二十三歳）



同少女（十四歳）

妹



（同　一女[illegible]子）

姉



（國[illegible][illegible]八合[illegible][illegible]妓）

足立太郎氏の家庭



京釜鐵道會社常務理事　足立太郎氏　夫人　ヒサ子

長女　すゞ子　次女　いは子

少年世界

明治三十八年之大革新

本誌が世に出てより今回已に滿十年を經たり爾來月進日歩、少年雜誌界の覇權を掌握するに至りしもの實に我敬愛なる少年讀者諸君の愛顧の致す處、されば本誌は來る三十八年の第十一卷を期して非常なる大發展を試み以て天下の少年諸君が多年の愛顧に酬ゆる處あらんとす、若し夫れ其改頁の要點の如きは左記に示せりと雖來一月一日の本誌が如何に縫糚して諸君の机邊に到るべきか冀くは諸君が大なる滿足を表して本誌を迎へ給ふなるべし、國定教科書に準する科目を彩麗なる繪畫と平易なる筆意を以て記述するもの實に本誌の獨壇なりといふべし

口繪――には毎號實物を見るが如き着色美麗の寫生標本と別に少年節物に關する彩色畫の外斬新なる四頁の寫眞版は必ず本文と連關せしむるものなり

お伽噺――卷頭に揭ぐる長篇お伽小説は毎號桂舟氏の挿畫と相俟て好讀物たり

記事――は國定教科書に準して勉めて其種類を精選し何れも名家の起稿に成る

讀者倶樂部――の一欄を設けて記者と讀者と互に談論を交へ氣焔を吐くの塲に充づべく文壇又擴張して大に勇飛すべし

挿畫――は從來の木版の外西洋木版寫眞版等を加へ何れも鮮麗を極む

第拾壹卷第壹號要目

記事

卷頭に主筆小波君が熱心にして且懇切なる筆法を以て少年の訓育に資すべき物を揭げ小波お伽噺も又從來より一層長篇にして趣味湧くが如く歷史地理科學軍事小說等皆當代名流の筆になり下瀨工學博士石川理學博士箕作文學博士森陸軍少佐窪田主計中監諸氏を始め學術教育界に名聲高き先輩の作を網羅す

口繪

は西野猪久馬氏の博物標本畫及び尾竹國觀氏の軍國少年の正月を揭ぐるの外皇孫殿下最新の御尊影の外三頁の斬新なる物を撰む挿畫には從來の桂舟古洞兩氏の外新に洗鱗古洞の諸氏を加へて錦上更に花を添ふる觀あり

大附錄として特に本誌記者の考案になれる本誌八頁大の繪畫は決して世間の企て及ふ能はざる新意匠を凝らしたるもの之を壁間に掲けて繪とすべく之を机上に開きて千思万考を要す

毎月一日發行　年刊十二冊　定期增刊年四回　正價一冊拾錢　郵稅壹錢五厘

前金四冊三十八錢、八冊七十五錢、十六冊壹圓四拾錢、外に郵稅一冊壹錢五厘

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（その二）

紅葉山人 尾崎德太郎君遺著

紅葉全集

全部六冊總紙數五千六百頁

洋裝大判 總クロース 上製 金文字金模樣表紙

正價一冊壹圓八拾錢 小包送料一冊拾五錢

第六卷

◎金色夜叉

◎煙霞療養

十二月上旬發賣

紙數約九百五十頁 函入頗美本

正價金壹圓八拾錢 小包料十五錢

紅葉山人の文章に托し、麗、春日の如く、淸、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇思縱橫字々靈快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、後群英を養ふて藻社の名一生を歷す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文苑頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點歟せるは聯れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、順を追ふて之を收め、謹みて江湖文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

既刊

第壹卷
●色懺悔 ●巴波川 ●戀の蛻 ●關東五郎 ●猿枕 ●二人むく助 ●風雅娘 ●南無阿彌陀佛 ●此ぬし
●新色懺悔 ●わかれ蚊帳 ●二人女房 ●新桃花扇 ●拈華微笑 ●夏痩 ●文ながし ●七十二文命の安賣

第貳卷
●伽羅枕 ●紙きぬた ●むき玉子
●おぼろ舟 ●夏小袖 ●戀の病

第三卷
●三人妻 ●心の闇 ●男ごゝろ
●俠黑兒 ●袖時雨 ●むらさき

第四卷
●隣の女 ●三箇條 ●青葡萄 ●懺料理
●不言不語 ●冷熱 ●八重欅 ●浮木丸

第五卷
●多情多恨 ●手箱の玉章
●安知歇貌林 ●寒牡丹

十千萬堂藏版——博文館發兌

松方伯爵題辭　井上伯爵序文

十五銀行頭取園田孝吉君著

赤心一片

（製本既成）

全壹冊洋裝菊判
紙數約三百頁
正價四拾錢
郵税八錢

日露戰爭は帝國空前の國難にして國家存亡の繫る所なり、此秋に方り國民たるもの貴賤貧富を論せず堅忍奮勵大に軍資の供給を圖り出征將士の忠勇義烈と相俟て以て國家最終の目的に達するを務めざるべからず此書は園田氏が軍資の供給其他政治經濟社交風俗等に關する赤誠餘情にして松方伯は本書に題するに言々愛國の四字を以てするもの偶然にあらざるなり讀者乞ふ一本を座右に備へ以て軍國に處する國民たるの精神を養ふべきなり

目次

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（乙の五）

金利精覧

金の貸借は勿論商工業の事より國家の財政に至るまで、金利の事が分らなくては、到底眞正の仕事は出來ませぬ、といふて金利の計算は中々六ケ敷いものですから、本書は元利合計、割引價額、年賦金、利回はり、償却年限等を一目に見える樣に表にしたもので、此表があれば餘り算盤の出來ぬ人でも、容易く精細な利息を見ることが出來る、故に銀行會社の役員は勿論商工業家、政治家、經濟學者等の凡上には、無くてはならぬものです

▲菊判半折上質紙二百二十六頁　總クロース表金字入説明談話体

▲本書　定價一部金五拾錢、五部以上定價一割引、郵税一部四錢宛（目方四十五匁あり）

▲歳暮年始の贈品又は商工業會社、實業學校經濟學校等の賞品に極妙

第一生命保險相互會社專務取締役　矢野恒太君著

東京日本橋區本町　博文館發賣

第一表　終價　一圓の元金から生ずる或年後の元利合計……

第二表　現價　或年後に一圓を得る爲めに要する元金……

第三表　年金終價　每年一圓つゝの積金の元利合計……

第四表　年金現價　或年間每年一圓を得る爲に要する資金……

第五表　年金　一圓の元金を年（月）賦として每期の賦金……

以上五表いづれも金利は二厘五毛より二割迄（五分迄は二厘五毛宛、一割迄は五厘宛、二割迄は一分宛の間隔にて年數は九分以下は百年迄九歩五厘以上は五十年迄各別に計算せり）而て表每に極平易に應用法を説明せり

第六表　【對數表附複利算法】　此表は算盤の出來る人の爲めに附けた景物です……

（乙の六）

工業叢書

工學士　市川俊雄君著

燃料及測熱法　全壹册

（製本既成）

洋裝總クロース製

正價金六拾錢

郵稅金　六　錢

抑も大規模の工業として汽機、汽罐を備へざるものなく、隨ひて之を運轉せしむるに燃料を要せざるものなきや論を俟たず而も燃料採擇の當否及之を焚用する方法の如何は直に以て工學の成敗に關すべきものなりといふ市川工學士夙に茲に見る所ありて遂に本書を著述せり其說く所素より各種の燃料に及べりといへども就中現下の實行問題たる液体燃料に至りては善く之を詳悉して亦遺憾なし尚本邦に於ては未だ以て公衆に紹介せられざりし高熱計に就きても其要を記されたり誠に本書の如きは時世に適切なる好著といふべし苟も世の工業家技術家其他學者たる人は勿論其他工業學校の教員生徒に缺くべからざる參考書なりとす

專門技師大見鐐一君　在大學院工學士淺川彰一君共著

ペイント製造及檢査法　全壹册

洋裝總クロース製

正價金

郵稅金

【第一編】第一章―原料に對する準備（一）乾式碎粉法（二）濕式碎粉法　第二章―ペイント製造器及裝置（一）ペイント混合機械（二）ペイント練磨機械（三）鉛白の練磨裝置（四）亞鉛華の練磨裝置（五）酸化物より成れるペイントの練磨裝置（六）黑色ペイントの練磨裝置【第二編】第一章檢査法第一―（一）器具及試藥の說明（二）油及ワニシの抽出（三）白ペイント及顏料（四）黃色ペイント及顏料（五）綠色ペイント及顏料（六）青色ペイント及顏料（七）赤色ペイント及顏料（八）褐色ペイント及顏料（九）黑色ペイント及顏料（十）油製ワニシ（十一）アルコール製ワニシ（十二）亞麻仁油（十三）ボイルド、オイル（十四）的列亞油　第二章檢査法第二―（一）標本（二）顏料の色彩（三）顏料の着色力（四）顏料の被覆力（五）顏料の不透明度（六）顏料の可混性（七）顏料の粉末度（八）顏料の比重（九）顏料がペイントの乾燥性に及ぼす作用（十）顏料の耐久度（十一）硬練ペイント（十二）調製ペイント及エナメル（十三）油製ワニシ（十四）アルコール製ワニシ（十五）ドライヤ（十六）亞麻仁油（十七）的列亞油【第三編】雜錄―ペイントの使用に就て外八項

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の七）

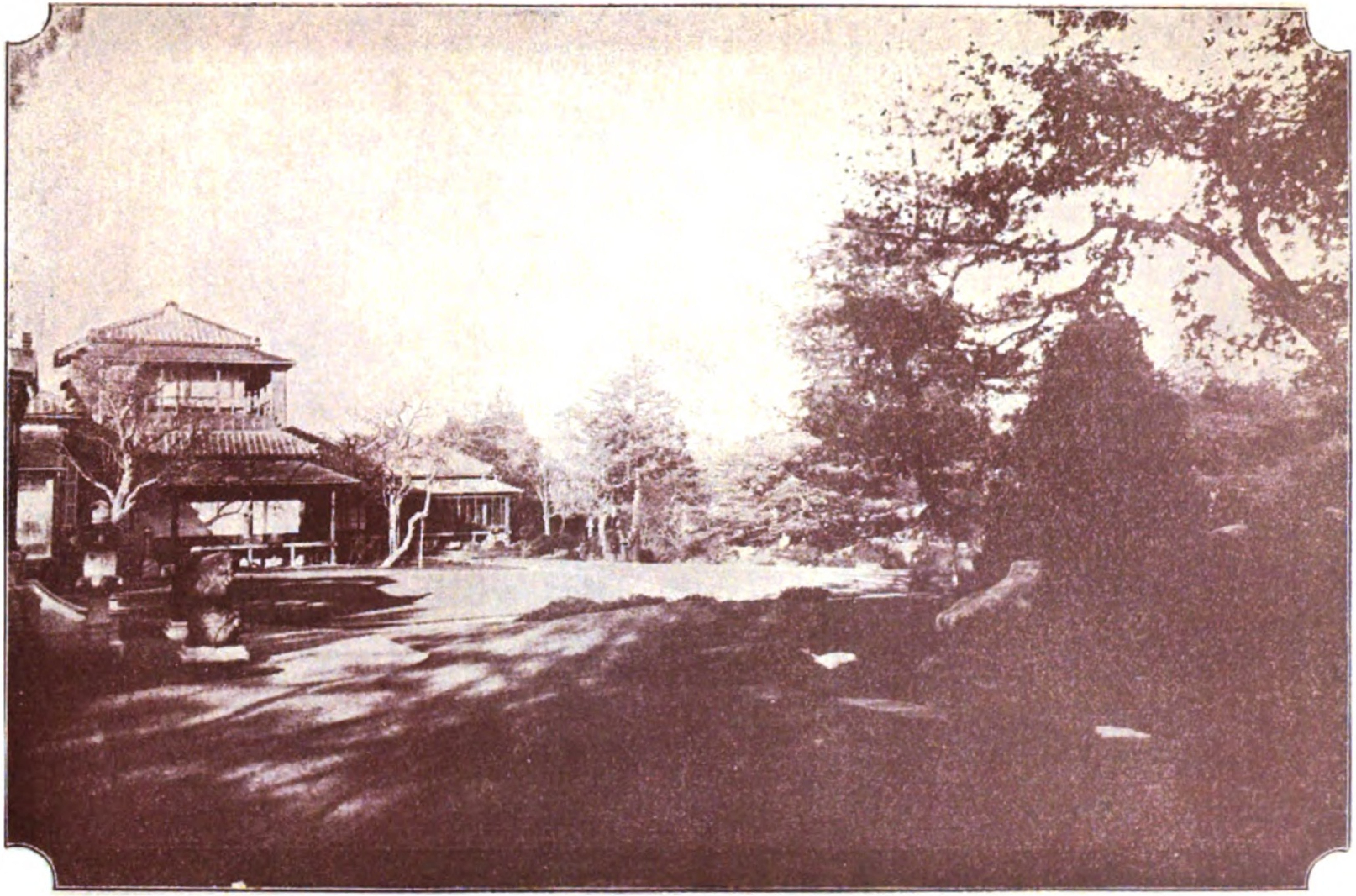
（乙の八）

西比利亞の橇旅行



ニコリスク附近の冬の景

名流庭園



大隈伯爵家の庭

太陽

毎月一回　**明年の本誌**　一日發行

茲に十年の長日月を重ね年々進步發達せる本誌は**帝國の發展**を代表して東洋唯一の**證典**たらむとす年改ると共に生々たる**新面目**を備ふべし

口繪增加　從來十二頁なりしを更めて二十頁(アート刷四頁、赤門刷十六頁)とし人物、建築、風景、藝術品等を美術的に印刷す殊に戰況は眞に迫るものあり■誌の特色を益々發揮すべし。

時事評論　時事の眞想を詳述すると共に公平無私の判定を下すにあり、又特に清韓問題に重きを置き開戰中は戰局の經過を組織的に記述す、記事內には寫眞版十數箇を挿入す、

人物月旦　鳥谷部春汀子が婉曲の筆克く人物を躍如たらしむ明年よりは更に擴大の筆を揮ひて社會各方面の人物を捕へて縱横に評論す、光彩陸離たり又時事短評及諷叢は短刀亂麻を斷つの慨あり。

論說　各大家の時事に關する評論又は多年の研鑽に成れる大論數篇を掲載して讀書界の參考たるは本誌の多年盡瘁したる所也明年より益々重きを本欄に置き各方面の大家に請ふて毎號大論文數篇を集む。

讀者文壇　是れ新設の一欄なり主題の何たるを問はず警拔なる議論は本欄に掲ぐ奇拔なるものを選ぶ問題は特に指定するともあり。(投書心得)投書は成るべく二十字詰二十行以內なるべし文章簡潔言論

文藝　小說脚本の熱誠を凝がれたる大文字毎號本欄を飾るべし其他一流の大家が隨筆、紀行文、歷史、和歌、俳句、漢詩、新体詩皆な本欄にあり文藝時評亦本誌に一異彩を放つ。

學藝　日進月步の科學を一般に紹介せんとするは本欄なり毎號當代一流の大家に請ふて學藝の蘊奧を平易に記載す殊に醫學衞生に關しては讀者が日常の參考たるべき材料を掲載し趣味津々たり。

雜纂　本欄は有ゆる方面の記事を集む家庭の讀物あり、娛樂記事あり、社會研究あり、歷史あり其他前記の諸欄に配合しかたき材料を網羅す、千萬の變化あるがりに興味多きものあり。

評論の評論　內國外國の二部に分ち思潮の如何に變遷しつゝあるかを簡明に紹介す、本欄を通讀すれば最近の思潮を窺ひ得ると共に如何なる論文の社會を動かしつゝあるかを了解し得べし。

刷新要旨　▲同記事を時事と接近せしむ▲特に名家談叢の欄を設けたれど訪問錄は性質に從へ各欄に配置す、▲歷史地理の一欄亦斯の如く材料に從て各欄に配置す是れ却々好材料を編纂するの良法たり▲懸賞募集＝從前の通り一日より實行▲時事日抄＝英文＝益す記事を精選す

新年大附錄　**日露國勢比較便覽**　地理、國体、政治、陸海軍財政、產業等百般の事項を對照す、記述簡潔に要を得たり、戰時何人も必携の便覽二十四頁餘……

定期增刊　年四回價同一　**正價**一冊**參拾錢**郵稅三錢　**前金**●四冊金壹圓拾五錢●八冊金貳圓貳拾錢●十六冊金四圓貳拾錢▲外に要郵稅

(丙の一)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

明治參拾參年戰役

參謀本部御編纂

清國事變戰史

▲上製總クロース金文字入
▲並製脊クロース堅牢製本

上製 定價拾五圓
並製 定價拾貳圓

▲全部八卷 ▲本文六册二千零六十頁 ▲附圖壹册着色大判十五枚 ▲附表壹册石版着色精細無比

●特價發賣 來卅八年一月十日限 第一版製本出來着金順序に送本す 期限後は斷然正價に復す

▲上製金拾參圓 ▲並製拾圓五拾錢 小包料金六拾錢づゝ

明治三十三年**清國**に**義和團**の**匪徒**蜂起す、其勢甚だ猖獗、清廷之を鎭壓する能はざるを以て、列國、皆其公使館領事館員並に居留民警護の爲め、或は水兵を上陸せしめ或は陸兵を派遣して之が救援に任ぜり、我が**日本**は其兵力の優勢なりしを以て、列國聯合軍の**主動**と爲り、以て到る處に團匪の一類を掃蕩し遂に北京を重圍に救ひ、各國公使を救援して出兵の**目的**を達せり、抑も古來戰亂枚擧に遑あらず、又聯合作戰其例に乏しからずと雖も、此事變の如く列强七ヶ國各其師を出し、世界の人心を聳動せしめたる實に空前の**一大珍事**とす、而して此聯合軍の主動となりて**作戰**を計畫し之を運用せられたる我**參謀本部**は該**戰史**の編纂に力められ諸種の方面より精確なる材料を蒐集し義和團の由來事變の起因より說起し北京陷落して清國皇室蒙塵の後列强の媾和協定に至る迄細大洩すことなく、然も深淵緻密なる**戰略。戰術**の觀察を以て審査詳究し、能く其事實の眞相を穿ち簡明確切に之が編纂を終結せられたり、加之作戰、戰鬪の着色詳圖百有餘種を附挿して、讀者をして作戰地の形狀、或は作戰の景況、各時期に於ける戰鬪の情況に至る迄歷々指摘するを得せしめられたり本館之を**發賣**するの**特許**を得たり、我五千萬の同胞は須らく本書を購讀し、當時七ヶ國の列强が如何の作戰。戰鬪を爲せしや、之に因て我國體の如何に面目を發揮せしや、又此事變が如何に東亞の大局に影響せしやを識得せらるべし本書の眞價値の如きは讀者宜しく講究玩味して自ら之を了解せらるべし。

(其の二)

發賣元 東京市日本橋區本町 博文館

陸軍々醫監醫學博士森鷗外先生序　田山花袋君著

第二軍從征日記

全壹冊洋製
紙數四百頁
正價
郵稅

一讀再讀紙上即戰場

第二軍の滿州に於ける功蹟は實に赫々として日月の天地を貫くがごとし。南山、得利寺、蓋平、大石橋、遼陽、其の進路の極めて遼遠たりしにも拘らず、其戰捷の活潑なる、實に端倪すべからざるものありて存す。されど其軍の行進は軍機上極めて秘密を要するものありしを以て、筆を載せて軍に從ふの從軍記者なく、從つて其眞相の世間に傳はらざるもの甚だ多し。著者は博文館從軍寫眞班の一員として、宇品より其軍と共に乘船し、嘗むべきの困難は共に嘗め、耐ゆべきの辛苦は共に耐え、かくして漸くに身を寓するを得たるは天地最壯最美の大活劇。況んや著者はかの大活劇を觀るに一種特色なる眼光を以て、戰鬪を記し、砲烟を記し、殺戮を記するに於ても、尋常紀文家のごとく乾燥殺伐なる文字を用ゐず、多樣にして多趣、恰かも一篇の敍事詩を繙くの概あるに於てをや。即ち第二軍の滿州に於ける行動は此著に依るにあらざれば斷じて詳細に知る能はざる而已ならず、讀者はまたかの著によりて戰爭美の最も完全に發揮せられたるを認むるなるべし。蓋し戰爭文學中最も光彩に富める著作なること勿論也。其他寫眞は一々撮影せし箇所を文中に示し、第二軍の行進踏查地圖を附し、寺崎廣業畫伯の實寫になれる寫眞圖を添ゆ。錦上の花とは是也。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(四の三)

◀文壇良師友▶

編輯＝日本女子大學校教授 鹽井文學士、中内文學士、巖谷小波先生、廣津柳浪先生、佐々木信綱先生、德田秋聲先生其他數名

富强の源は家庭の健全なるに在り、健全の家庭は良妻賢母に依て造らる、即ち國家の急務は女子教育に在りと謂はんも誣言にはあらじしかも文藝に依るに非ずんば、智德を進むることは能はず、『女子文壇』の發刊實に已む能はざる所以なり。戰勝國才媛淑女の絕好伴侶。

寄書歡迎＝○和歌○新体詩○小説○俳句○消息文○寫生文○雜文其他家庭教育に關する有益の讀物等…

＝本誌内容其他の規定は壹部(金拾壹錢)購讀あれば明瞭

女子文壇

第壹號

卅八年壹月壹日發刊

毎月一回一日發行 水彩密畫挿入

定價 壹冊(大判百頁餘)金拾錢●六冊前金五拾七錢●十二冊前金壹圓八錢●外に郵送料壹冊壹錢宛申受く▲郵券代用必ず壹割増▲爲替京橋南傳馬町局振込注文前金▲最寄賣捌所無くば發行所へ

社主 野口竹次郎

東京京橋區大鋸町十一
女子文壇社發行

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂外雜誌書店

▲青年文士の良師友

秀才文壇

本誌十二月一日發行十四號既刊には新年豫告の詳細あり就て見よ

●定價一冊郵稅共拾壹錢○六冊同六拾三錢

三十八年一月一日發行 第五卷第一號

大附錄
北蓮藏先生書
軍國大觀兵式圖
大判額面油畫彩色 一尺六寸一尺一寸

本誌の編輯は中内文學士、久保文學士、佐々木信綱君、雪中庵雀志君、小笠原虛舟君其他數名にして**新案獎學賞與法**は亦本誌の獨特也

新刊
軍艦寫眞帖
附軍歌 十二月中旬出來

正價一冊金五錢 郵稅二冊迄金二錢

●學校等にも一時に多數の御注文あれば割引す
●百聞は一見にしかず。少年を益する事此上なし
●小學校賞與品、歲暮、年始の贈答には最も好適す

發兌元 東京小石川區指ヶ谷町一三三 文光堂

大賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 良明堂 外新聞雜誌店

(丙の五)

☞ POCKET DIARY ☜

For Meiji 38

Price: 25 sen; Postage: 4 sen.

英學新報社編纂

寫眞版肖像四十圖挿入

正價金貳拾五錢 郵税四錢

明治三十八年 英文懷中日記

天長節發賣

意匠優美
携帶至便
製本堅牢
紙質良好
印刷鮮明

◉附録 日用單語、前置詞用法、郵便規則等◉

方今英學の隆盛と共に英文日記の需用益々急なり一昨年我社率先して之を出版するやメール新聞は最美の日記と頌し國民新聞は最も完全に近き者と賛せり爾來毎歳好評を持續し拔群異類と稱せらる、本書は實用美術を兼備し挿むに精撰したる金言名句古今英雄の肖像を以てし日々修德の友たらしめんことを期し這般面目一新せり印刷製本亦遺憾なからんことを務めたり若し夫れ歳暮新年クリスマスの贈遺には恰適の品なり

發兌書肆 東京日本橋區本町 博文館 東京神田表神保町 東京堂

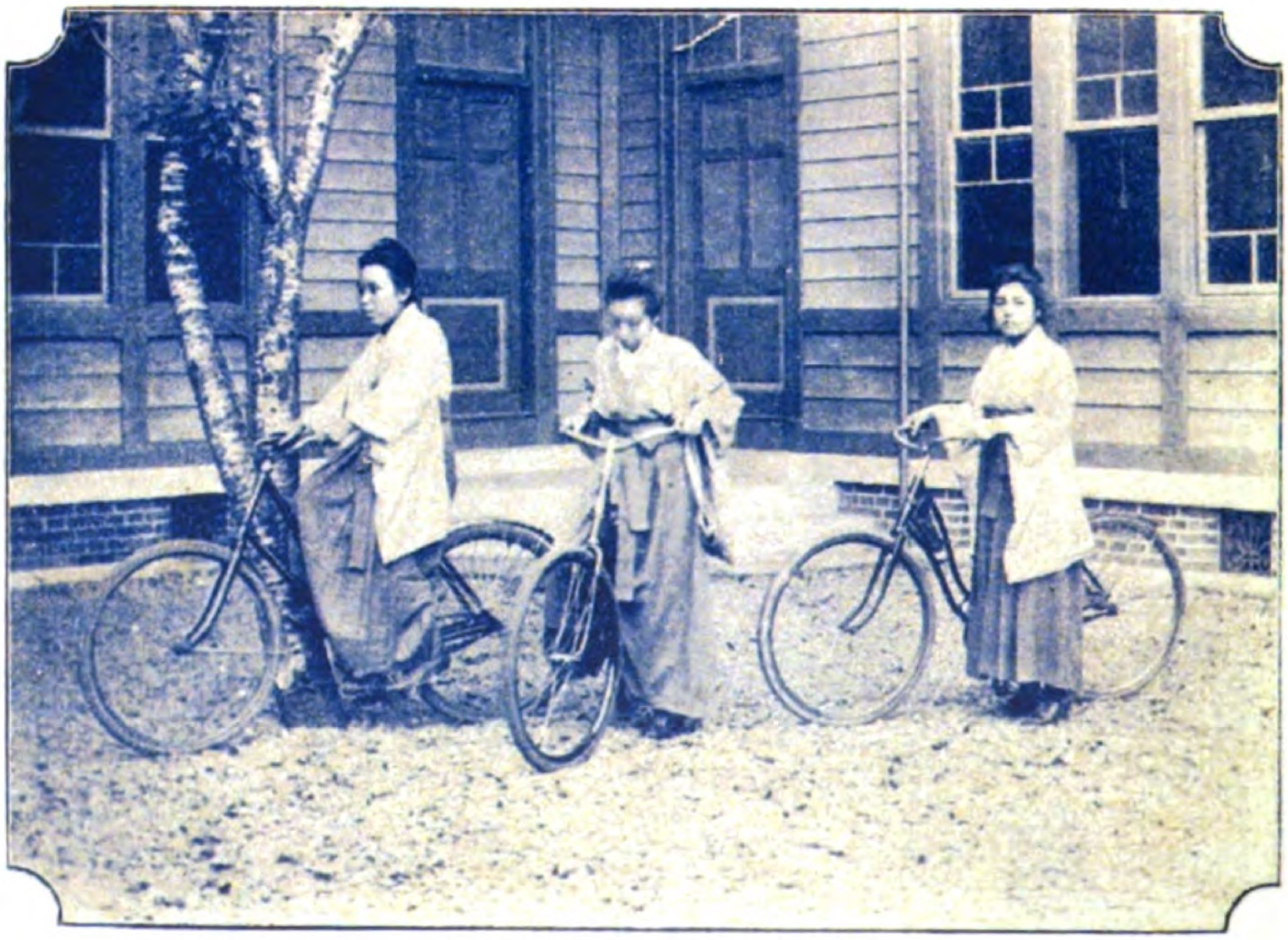
(丙の六)

(丙の七)

女子大學生徒の體操



水砕舞



自轉車競爭

西比利亜露人の家庭

ニコリスク軍團長リチウイツチの夫人と令孃



浦鹽駐在醫官の小兒



文學博士 姉崎正治君編
文學士 齋藤信策君輯

樗牛全集 第二巻 文藝及史傳

全壹册洋装總クロース金文字及金模様入装幀△著者少壯時代肖像筆蹟寫眞入總紙數約一千餘頁正價金未定

故文學博士高山樗牛君著

文藝時評

文學と人生、近松巣林子

第一期（明治二十八年九月より同廿九年九月迄）

運命と悲劇、歷史的精神、研究の道念と觀念、詩人と模倣と天然、文學と美術、日本西洋兩畫風の折衷、文化の關聯、天才論、叙事詩と叙情詩、何故に叙事詩は出でざるか、戲曲に於ける幽靈、退壇に臨みて吾等の抱懷を白す、

第一期（雜論）

文學會漫評、青年文人の厭世觀、武島羽衣の「小夜砧」を評す、演劇界の風潮と劇評家の責任、美術と道德、「文學界」の諸君子に寄する書、敢て日本美術史の編纂を促す、批評眼、明治二十八年の文學界、少壯漢學者に告ぐ、宗教小說、裏面の觀察とは何ぞや、女性作家に望む、賞鑑家と國民、時好と批評家、春の家が「桐一葉」を讀みて、寫生と寫意、意想と畸形、大塚文學士を贈る、今日の新躰詩家を警醒す、諧談一策、美學史及美術史、一葉女史の「たけくらべ」を讀みて、俳句及狂詩、俳句と符號俳句、鑑定家と批評家、鷗外に答ふ、一葉女史の「われから」、德富蘇峰君を送る、市川新藏、今戸心中と情死、能樂會、能樂の性質、脚本の批評法、田山花袋の「わすれ水」

第二期（明治三十年六月より三十三年七月迄）

我國現今の文學界に於ける批評家の本務、明治の小說、所謂社會小說を論ず、支那文學の價値、春の家主人の牧方を評す、坪内逍遙が「史劇に就ての疑」を讀む、史劇に關して再び逍遙に答ふ、小說革新の時機、（非國民的小說を難ず）、詩的の兩面、其利弊、カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて、ワルト、ホイットマンを論ず、ホイットマン（再び）、僞詩人とは何ぞや、文明の裏面、時代精神と大文學、友人某に與へて昨今の文壇を論ずるの書、土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずるの書

第二期（雜論）

齋藤緑雨の色道論を讀む、泉鏡花に與ふ、「先秦文學」を讀む、藤田劍峰を送る、文學に對する根本的誤解、現今美術家の精神的教育、美術家の絶好題目、歷史を題目とする美術、佛像陳列の可否、如何なる閲歷と空想、小說中に現はれたる現代の女性、德富蘇峰、市川新藏を悼む、少年演劇に警告す、朦朧体の末路、柳浪の「畜生腹」を讀む、晩翠の詩、今の滑稽文學、最も悲しき聲、詩人唱はず、老人時代、作家自衛の法、實在と空想、詩書の誘惑、新聞記者の資格、ビヨルフンとゾラ、疑問、たそがれの辭、一葉舟を讀みて、「國民の友」を惜む、滑稽小說の作者に告ぐ、自己の修養、漢文を書き換へよ、西郷南洲の銅像を評す、民族傳說の蒐集、新建築と美術、評家及作家として不知庵、藝術の尚古主義、詩人と批評家、木村鷹太郎君に與ふ（富士新聞の發刊に際して）、本邦文章の問題、我國演劇の前途に就て、明治卅二年に於ける小說界の傾向を論ず、漣山人の日本お伽噺、言文一致の標準、自國の作を讀まざる風、小說の意義、少年の文學熱、煩瑣學風、小煩瑣學風と文學者、人名辭書中の文學者、人の出處進退、學者と文章、瑣々錄（一）（二）、無題錄（一）（二）（三）（四）

第三期（明治卅四年七月より卅五年一月迄）

文明批評家としての文學者（本邦文壇の側面觀）、姉崎嘲風に與ふる書、作文論、現代文章私見、嗚呼風俗改革、笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す、「元祿時勢粧」を讀む、元祿時代の側面觀、土井晩翠を送る、大濱乙羽を悼む、美術の保護者、將來の美術界、三一問題、留學生諸君を送る、無題錄、三十四年の文藝界、文藝雜誌、藝苑鎖談、裝飾と日本美術、雜誌

史傳之部

大隈伯の「菅公」の後に書す、「菅公論」に就て、淸盛論、菅公傳

發兌元 東京本町 博文館

（丁の二）

小波山人編

少年日露戰史

密畫數多挿入

(正價一冊拾貳錢郵稅四錢)

第一編 開戰の卷

▲戰爭の原因 ▲三國の干涉 ▲露國の無法 ▲露西亞は何な國 ▲文明と野蠻の戰 ▲艦隊の出發

▲仁川の勝利 ▲旅順の攻擊 ▲宣戰の詔勅 ▲國民皆兵 ▲擧國一致 ▲新艦の到着

附錄 軍國讀本

●葉山の御夢●東洋の子ルソン●三殿下の御勇戰●敵前の尺八●殘る劍●軍歌旅順の海戰●下瀬火藥の事●初瀬の初花

第二編 決死隊の卷

▲日韓の條約 ▲閉塞の計畫 ▲決死隊の出發 ▲決死隊の行動 ▲驅逐隊の激戰 ▲間接射擊

▲第二回の閉塞 ▲閉塞の成効 ▲マカロフの戰死 ▲行軍の困難 ▲騎兵の奮戰 ▲露艦の亂暴

附錄 軍國讀本

●決死隊の歌●勇士の膝枕●機關兵の沈勇●軍神の歌●氷割勇士●大切な軍艦旗●子供好の中尉●斥候の犧牲

第三編 九連城の卷

▲鴨綠江の地理 ▲海軍の應援 ▲架橋の掩護 ▲江上の大砲戰 ▲九連城の陷落 ▲蛤蟆塘の激戰

▲敵兵の同士討 ▲諸兵の苦心 ▲金州丸の事 ▲捕虜の厚遇 ▲鳳凰城の占領

附錄 軍國讀本

●黑木大將●牧澤中隊の苦戰●九連城は占得たり●大膽な斥候●士官●武士の情●裸體の勇士●志士の不運●戰場の物語

第四編 南山の卷

▲第三回の閉塞 ▲閉塞の成功 ▲上陸の困難 ▲普蘭店鐵道破壞 ▲大戰前の小衝突 ▲金州の占領

▲南山の大激戰 ▲南山の占領 ▲第二軍の名將 ▲青泥窪占領奇功 ▲大連灣の掃海 ▲嗚呼吉野、初瀬

附錄 軍國讀本

●南山の攻擊●伏見宮殿下の御武德●鳥海艦長●勇猛士官●宮本武藏の末孫●苦戰の聯隊●友愛の嬉淚●決士の志願

第五編 得利寺の卷

▲恨は深き玄海洋 ▲常陸丸と佐渡丸 ▲和泉丸と羽後丸 ▲上村艦隊の苦心 ▲第二軍の新行動 ▲得利寺とは何處

▲龍王廟の騎兵戰 ▲得利寺の激戰 ▲中央隊の戰況 ▲左翼隊の戰況 ▲右翼隊の戰況 ▲戰爭の結果

附錄 軍國讀本

奧大將●君前の星野少佐●常陸丸琵琶歌●不運なる上村艦隊●忠孝兩全●敵にも勇士●嗚呼須知中佐●三富特務曹長の功名

第六編 摩天嶺の卷

▲大孤山上陸軍 ▲岫巖の占領 ▲塞馬集の掃淸 ▲張家石の激戰 ▲炎天の行軍 ▲分水嶺の戰鬪

▲摩天嶺の逆襲 ▲二度目の逆襲 ▲我軍に強き馬場 ▲橋頭の大戰 ▲滿州軍總司令官 ▲天の時と人の和

附錄 軍國讀本

●我軍の兩殿下●大庭少佐の詩●海門艦長の最後●滿州の蠅●勇猛無比の若武者●自敵陣に斬死す●兵にも豪傑●不思議の勇士

(丁の二)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

太陽臨時增刊　十一月二十日發行

日露海戰史

正價三拾錢
郵稅三錢

▲評論 海戰に關する內外評論家及軍人の諸説を掲ぐ皆是剴切の文字 ▲本紀 海戰の開始より最近の戰況に至るまで最も趣味多く叙述し一讀人をして戰場を親睹するの感あらしめ讀み來つて端なく痛快と絕叫せしむ ▲史傳 海軍將校の列傳を掲げ精忠貫日の勳功を詳叙す ▲雜纂 海戰に關する軍器軍艦の說明より地理に至までを掲げ我海軍の大捷を搏するに至れる所以を知らしむ ▲地圖 鮮明精確の圖を以て海戰の狀況を明示す ▲日誌 ▲其他海戰に關する事項一切を網羅す

砲火一たび黃海の一角に轟きて玆に日露の大戰は開かれ我艦隊の嚮ふ所粉碎せざるなく仁川沖の大捷となり旅順口の封鎖となり浦港艦隊の追窮となり數日にして制海權を我に收め數旬にして敵艦隊を殲滅し日露戰爭の大勢は此大勝と共に其第一齣を告げ全勝の我に歸する既に炳然たるに至りぬ今や敵は猶數隻の殘艦を有するも再び其舵を東する能はずして全滅將さに朝夕を圖られざらんとす是れ殆んと海戰の終焉をなせしものにして我海軍の絕大なる力を世界に發揮して遺す所なきものたり本館是に於て『日露海戰史』を編し凡そ今回の海戰開始より最近の戰況に至る細大の事實を網羅し以て此偉蹟を千載に傳へんとす啻に軍國人民の紀念に充つるのみならず又世界海戰史上最も壯烈痛快なる記述として世人の必讀を要するものなり

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丁の三)

文藝倶樂部

來年度の大飛躍大發展

每月一回
一日發行

定期增刊
年四回

我文藝倶樂部が始めて呱々の聲を擧げたるは、實に明治二十八年一月にして年を閱すること十、月を重ぬること百有二十に達しぬ、此間本誌は絶えず名篇佳作を江湖に薦め、號を追ふて益々其聲價を昂め、常に文學雜誌の牛耳を執りつゝある又喋々の要なし、今や新たに明治三十八年の佳辰を迎ふに當り、本誌のみ獨り朝起暮倒の雜誌界に如斯き長壽を保ちたる、是れ皆な江湖百萬の讀者が眷愛の効すところ編者感奮措かず、殊に日露戰爭の事起りしより、一般文學の萎靡を免れざりしにも拘らず、本誌のみ毎號印刷部數の增加を見るの幸を擔へり、乃ち來春より本誌は更に層一層の英氣を鼓舞し戰局の進捗に伴ふて益々其步を進めんとす、本誌は實に現社會の珍寶！日本文壇の魁！

改善の目的

●口繪の改善
每號懸賞法を以て廣く天下に募集す

●小說の洗練
第一流の大家に囑して其傑作を網羅す

●新欄の增設
活社會の新家庭等は其主なる二三なり

●挿繪の革新
寫眞版を挿してこゝに一生面を開く

來春初刊の大附錄

●新案繪端書
筆者水野年方氏にして精巧無比眞に繪端書界の巨擘といふべし

●文藝節用
編者が特に意を用ゐて編輯せるもの文士の机邊缺くべからざる重寶

●五百圓の俳句
四月定期增刊準備としての大懸賞の投書用箋を添ふ刮目せよ

新設と膨脹

正價一册廿五錢
郵稅一册二錢五厘

前金
●四册金九拾五錢
●八册金壹圓八拾錢
●十六册金參圓五拾錢
▲外に要郵稅

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丁の五)

(丁の七)

内閣總理大臣伯爵桂　太郎君題辭
內務大臣子爵芳川顯正君題辭
司法大臣波多野敬直君序文
內閣法制局長官法學博士一木喜德郎君序文

增訂現行 日本法令大全

博文館編輯局編纂

全壹冊洋裝
背皮金文字
入紙數約三千八百餘頁

▲正價五圓 小包一貫二百目 送料金四十錢 本年十二月卅一日迄の注文に限り豫約價參圓五拾錢 外に要送料

◉豫約期限　十一月卅日迄の處出版豫定の如く進捗せざる爲め更に期限を十二月卅一日迄延長す

法規を類聚せるもの、中に於て最も精確なるものとして好評を博したる本書は玆に十三版を發刊するの盛運に會せり輯むる所の法規は維新以來今明治卅七年十月に至る三十六年十ヶ月間に發布せられ現に其効力を有するものは大小新古を問はず幾と之を網羅したり類を分つ二十有餘、類中更に篇、章、節、款に分ちて序次整然、加ふるに目次には新に總目次あり又類別編年の諸目次ありいろは引索引ありて其搜索に便せるが上に今回よりは新に爪掛見出を附したるを以て輯むる所の法令約一万に達せるに拘らず搜索に時を要せざるは編者數年の經驗上得る所のものにして本書の誇とする所なり而して又本書は今回新規編纂せしものなるを以て、前版に增補せしもの、如く、法令の追加、改正等の爲前後を併覽せざれば、其用を缺くが如き煩なきは勿論、全文悉く新鑄の活字を用ひたれば、印刷極めて鮮明なるは亦本書の特色なりとす其他製本は堅牢にして繁き使用に耐へ體裁は高尚にして机邊の裝飾たるに適す出版部數に限りあり豫約期間內至急御送金御注文あらんことを

（十の八）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



女學世界

第四巻第十六號

起居十訓

▲智識益々進めば其人益々謙遜となる。

▲學問の道他なし、其放心を戒むるのみ。

▲我が無識なるを知るは智識に達する一大着歩なり。

▲三年間學問するは三年間師を選ぶに如かず。

▲學問は繁榮の裝飾、艱難の逃避所、老年の糧食なり。

▲何事をも知らざるは最も幸福なる生活なり。

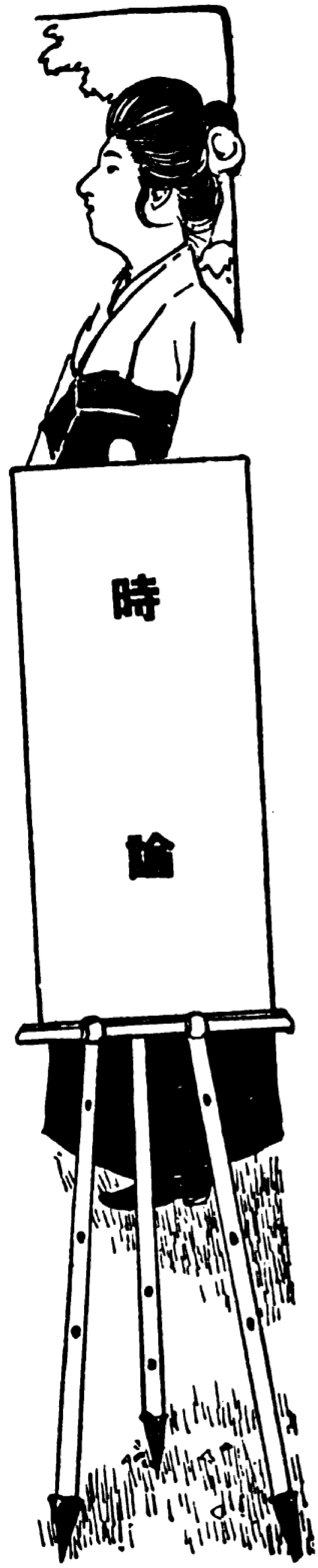
▲情慾に克つは克己の最大なるものなり。

▲他人の過を非難せんよりは寧ろ之に鑑みよ。

▲秘密を守るべき唯一の方法は何事をも言はざるに在り。

▲傲慢は下賤の地位に成長する雜艸なり。





戰後の女子敎育

日本女子大學校長　成瀨仁藏

日露戰爭に於て我は終局の勝利者たるべきも、之が爲に經濟界に大打擊を蒙るは勢ひ免る可からざる所である隨つて其戰後の經營に總ての事業に緊縮を來し、敎育界殊に女子敎育には一大影響を蒙らずやとは何人も憂慮する所の問題で我々女子敎育に從事するものは殊に杞憂に堪へぬのである、併しながら敎育事業殊に女子敎育を戰後經營事業の度外に置き之を緊縮する樣の事あつては由々しき一大事と言はねばならぬ、否な寧ろ戰後經營の途を誤つたものと言はねばならぬ、何となれば、戰爭なるものは此日露戰爭の決勝が終局ではない、尙ほ今後幾多の戰爭は次で來るであらう、縱し戟を採つて戰ふ武士的の戰爭は之れにて終るとするも、之よりも以上の戰爭夫れは言ふまでもなく世界を相手とする商工業の戰爭がある事は覺悟せなければならぬ、尙之れに次では、智識の戰爭、道德の戰爭、即ち精神敎育に關する戰爭が來ると思ふ、そこで是等次いで來るべき戰爭に勝利者たらんとするには、如何なる準備をなすべきかといふに、夫れは國民一般を充分に敎育するのである、

殊に國民の母たり家庭の基礎たる婦人を作るのが最大急務である、其れには大に女子教育を奬勵せねばなるまい、今回の日露戰爭に於ける日本軍の勝利は何に起因するかといへば、こゝ五十年間許りに養はれたる文明的教育が古來の武人教育即ち武士道を益々有効に發輝した結果に外ならぬのである、故に今後五十年間に起るべき戰爭即ち前に述べた商工業、智識、道德等の戰爭には何うしても國民の母たり家庭の基礎たる女子を育成しなければ到底最終の勝利は覺束ないと思ふ、近頃英國では教育家、學者、專門家の某々數人を選拔して亞米利加に使はし種々の取調べをなさしめたとの事であるが、夫れは何の爲めかと言へば御承知の如く米國は近來に至りて諸種の事業發達し、殊に富の程度の如きは世界に其比を見ざる所、其文明進歩の度に於ても故國たる英國の到底及ぶ能はざる所、斯樣に格段の發達をなしたのは何か原因があるであらう、我が英國たるものいつまでも現今の儘に唯保守的をよしとして行たならば、遂には米國の凌駕する所となつて足許にも寄り附けられぬ事になりはせまいか、されば此の際米國が斯く一時に隆々の進運を表し來つた、其原因を取調ぶる必要があらうとの議が起つて遂に學者等の派遣と成つたといふ事である、然るに前記の調査委員は米國に於て、種々取調の上「夫れは唯教育の能く行はれて居る結果だ」との報告をなしたさうだ、實に米國の今日ある所以は確に教育制度の完備と國民一般が教育思想に富んで居る結果に外ならぬと言ふて宜いのである、四年許り前の事であるが、合衆國の人民で而かも個人で四千萬圓を教育費に附寄した者さへある、斯る狀態であるから、普通人民より是迄大學其他に寄附した金額は實に五億圓以上に達して居るとのこと、尙政府でも經費の半分を教育に使用して居るとの事である、殊に米國にては女子教育が非常に發達して諸種の事業に女子を採用し、女子も有益なる事業に關繫して其技能を發揮して居る、中にも初等教育などは殆んど女子の手に行はれてゐるのである之に因て是を觀ても米國の富と文明は確に教育の力殊に女子教育の偉大なる力であると明言しても敢て過言で

はあるまい、翻て我國の教育界殊に女子教育の有樣を見れば、哀しい哉之に及ばざる事數百千步で、併し近來に至りては國民一般女子教育の必要を認め、益々之を獎勵し發展しつゝあるが、尙一層の精力を盡くして教育ある多數の女子を作ることに努めなければならぬ、若し夫れ戰後に於て經濟界に些かの打擊がある爲めに、女子教育を忽諸にする樣では今後五十年間に起るべき商工業さては智識の戰爭場裡に於てチャンピオンたることは到底出來ぬのであるから、縱令戰後に於て軍備の經營に莫大の費用を要すればとて、教育費を刪減せず、益々之を充實して、今后の發展に備へんことを當局者に對して望むのである、其と同時に一方多數國民に向つて聊かの經濟界の打擊の爲に、女子教育を忽にする樣の事なきを希望するのである、勿論女子教育の隆々進步しつゝある、今日、斯る悲觀的の機運には立至るまじとは確信する所なれども、戰後經濟界の事情が女子教育をして斯る悲運に立至らしめてはと聊か杞憂に堪へざる餘り、斯樣に述べた次第であるが之をして唯々吾人の杞憂に終らしめば、誠に大幸の至りである。

生活狀態の改良

伯爵　柳澤保惠

上流社會の狀態に關し、改良すべきの點少からず、我華族社會に於て殊に然りとす、まづ、その第一着は生活狀態の改良なり、華族の生活改良は、家政改革の動機なり、而して其改良は、生活の有樣を簡易になすにあり、所謂貴族的なるを廢し、平民的に改むるにあり、予は華族を以て皆富者なりとは謂はず、舊公卿華

族の大部分及小落華族の過半は、寧ろ貧者に近きの觀あり、されど大名華族、及新華族の過半、舊公卿華族の一部分に至りては、相當の財産を有し今日の生活程度より觀察する時は、先づ富者と云ふべき位地を占め居る事なるが、是等は今日猶諸事に就て、形式に重きを措くの觀あり、是等華族の家庭は、專ら形式を貴び外觀の美を裝ふと甚しく、父子兄弟親愛の感情薄くして、虛禮の中間に彷徨するもの多きが如し、タトエば朝は隨意の時に起き、隨意の時に飲食し又隨意の時に眠るがごとし、されば未成年者（殊に十五歲未滿の輩）が、此の如き不規律の行爲に習慣を作る時は肉體幷に精神教養上憂ふべき結果を生ぜんかを恐るゝなり、卽ち俗語の所謂我儘なる行爲は、人生の教育上最も戒むべき事とす。

肉體及び精神の健全なるは、比較的富者に少くして、貧者に多きは事實也、而して華族社會に比較的不健全なる多數の子女を見るも職として是等家庭的教養の不備なるに基くものにあらずや、予は此點に留意し、歸朝後我が家庭改良の第一着として、子女の獨立自營主義を取り以て子女自然の發育を養成すると共に、規律的行爲を重んぜしめ、學校に關する時間の制限の外は、常に閑暇を以て一堂の下に會し、自由に談話を交へしめ、又日曜日には同行して散步を試み、時に戶外運動をなし、以て親族的關係を益々密ならしめんとせり。食事の如きは、從來形式に流れ、裝飾として無益なる食品を陳列し、滋養を主とせずして体裁に重きを置きたるがごとし、此等は次第に改良して飲食の主意を了解すると共に、一定の時間に一定の物を食はしめ、以て嗜好の偏するを避けしめたり、又女兒の衣服の如きも世上の奢侈的風潮に伴はれて多少の感化を受けたりしが、此等も予の改革其の効を奏して、爾來は外出の際と雖も濫りに華美を避けて實質を尊ぶ樣になり殊に彼等平生の衣服はすべて木綿服を用ゆる事にせり。右衣食の改良に就て得たる結果こ

第一、徒食の全癈せられたること　第二　食物嗜好の普通的となりしこと

第三　家族團欒の愉快を感ぜしこと　第四　附屬者(侍女)に依賴せる習慣の消滅せしこと
第五　戸外運動を好むに至りたること　第六　衣服に神經的注意をなさゞるに至りしこと
すべて家族の快樂の缺乏は、家族間の不和を生じ、家族の不和は其極父子兄弟姉妹をして、其意を内に向けずして外に向けしむ、一家にして既に一家に非ず、予は此の如き形跡の我華族社會に少なからざるを慨歎す

和歌と戰爭

伯爵　大隈重信

歐米の人士は、動ゝすれば日本人を指して、好戰國民だといふ、此頃も或外國人が來て、日本人の、嗜好は、和歌と戰爭だといつた、私は之れを駁して、日本國民は、決して好戰國民でない、その證據は、足下が謂ふ和歌を好む點を見ても明かである、即ち和歌といふものは、最も淸き優しきものである、今日でこそ言葉が粗雜になつて、言葉其物が和歌にはならなくなつたが、由來日本國民の言葉は、言葉其物が和歌であるのである、一体歌といふものは、特更に造り出すべきものではない、自然に歌を成すものでなければ、眞の歌ではない而して其歌に長ずるのは、日本國民である、優美なる國民、平和なる國民にあらざれば、歌を好む國民たるとは出來ぬ、喧嘩を好む國民は、自然に心が荒い、随つて音が荒い、誰れか喧嘩を爲すに優美なる音調を以てする者があらう、たとへ喧嘩でなくとも、演說でもする時には、誰れでも音を高くする、調子が優美に行かない然るに歌のみは、最も優美なる淸音を尊ぶのである、現に支那の音は濁音、重音が多いけれども、日本の音は

此の濁音、重音が極めて少くして、淸音に富んで居るのである、隨つて歌を能くする、否昔は言葉其物が歌であつたのである、この淸音に富み、優美なる思想に富む國民が、何で好戰國民であらうか、好戰國民どころか斯くの如く優美にして高尙、平和なる國民は、世界恐らくは、其類を同じくするものはないであらう。

併し日本國民は、戰爭には強い、強いけれども、其戰爭に強い所以は、必ずしも戰爭を好む國民であるといふ譯には行かない、之れは日本民族には、一種傳來の血統があるのである、即ち今日の日本民族なるものは、決して一種族ではない、固有の日本民族に加ふるに、或は蒙古、韃靼、支那、又はマレー其他の各種族が混合して、今日の日本民族を爲したのであつて、其各種族が、自然に陶汰せられ、其血が自然に溶解せられて、而して其好き所の血が沈澱して、而して今日の日本民族を形造つたのである、隨つて支那の思想に感化せられた所もあり、又蒙古、韃靼の慓悍なる猛烈なる所もあり、其他各種の點が有せられて居るのであるが、日本民族固有の眞の氣象たるや極めて和平に、極みて優美にして、恰も歌の如き點が、其本色ではあるが、一たび外侮を受け、一たび屈辱に會するや、その平和、優美なる氣象に包まれて居る一點、彼の慓悍なる蒙古的の血が湧き、燃えて、憤然として起てば、向ふ所前なき有樣となるのである、之れぞ日本國民が、戰へば勝ち、攻むれば取り、而して世界をして其勇武比なきに驚嘆せしめ、遂に誤り認めて好戰國民だなど丶云ふ所以であるけれども日本國民は決して好戰國民ではない、戰に強きは、この一種の血があるからである、單に戰に強きを以て戰を好む國民なりといふが如きは、實に皮相、淺薄の見たるを免れぬ、日本國民の本色は、優美なる和歌の如きものである、而も一點勇猛なる血は、此和歌の如き氣象の裡に包まれて居るのである、是れが日本國民の本色ぢや。故に某外國人が、日本人が和歌を好むといつた點は、私の首肯する處であつて、此點は眞に氣に入つたのぢや。

家庭月令

十二月――大――しはす

（十三日）煤拂。……昔は此の日新吉を迎ふる準備として家内を淨掃したるものなるが、今は日を選ばず。年の市……東京市内にては此日より歳末まで年の市立つ、注連飾り、門松、庭厨雜器、三寶、破魔弓、手鞠、羽子板等を商ふ。（二十日）歳暮の進禮……此頃より始まり、砂糖、鰹節、鹽魚、鳥類等を歳末の進物として知己朋友に贈る、又た所々に忘年會の催しあり。（二十一日）冬至、……一年中最も日の詰りたる時、家事に忙殺さる、此日湯屋にて柚子湯を沸かし、諸家餅を製して陽復を賀す。（二十五日）耶蘇降誕日……耶蘇教の家庭にてはクリスマス祭を行ふ。（二十六日）冬季休業……此日より諸學校休業し諸家にて餅搗を始む、東京市内にては所々に賃餅仕候の招牌を見る。（三十日）門前店頭に門松を立て注連飾をしつらふ。（三十一日）大祓……六月に同じ、取引勘定及び懸取にて世間多忙を極む、「大晦日定めなき世の定めかな。」

（氣節）「大雪」「冬至」。北又は西の風吹きすさびて氣温大に減少し、寒冷肌を襲ひ、裏日本には降雪頻繁なり、衣服は綿入を重ぬべし。

（農事）播種收穫漸く終り農家稍々閑散の時季に入れども、尚ほ冬作の手入を要とす、麥、菽、茶、桑等の手入施肥、葱、蕪菁、小松菜の收穫、油菜の收穫。

（食品）白魚の吸物、ひらめの賞付、鹽昆布の賞付、鮟鱇汁、おこと汁、小鳥めし、葱めし、蕪菁の千枚漬、大根の淺漬、新鹽鮭、干海苔、鳥獸類。

（行樂）時下見るべきの花なけれど、郊外に枯野の錆びたる景を見るもよく、雪降らば雪見に轉ぶ所まで雅懐を縱にするも亦た快なり、壯者は銃獵の好時期なれば山野に狩り入るべく、老人は湯治に赴くも可なり、市内にありては年の市の賑はひを見るも仲々に面白し。

（日曜日）四日、十一日、十八日、二十五日。

社交

松村陸軍中將夫人

中村鈴子

夫人擧子は舊幕臣青木直規氏の第二女にして安政六年十一月の出生なり人と爲り冷靜緻密勤勉にして善く家政を整理するのみならず又公共事業に盡瘁して毫も勞を惜むとなく今回の征露役に就ては兵服裁縫に繃帶製造に是れ日も足らざるなり。

陸軍中將松村務本氏が金州南山の激戰以來最も困難なる方面に當つて居らるゝとは國民が最も感謝して居る所で御坐いますが、中將夫人も日夜兵服裁縫や繃帶製造に頗る御繁忙であると承はつて居りました。四谷荒木町に鐵柵を繞らし石門に松村務本、同務（令息）と陶製の標札を掲げられた御邸、記者の伺つたのは去る日曜日の午前、石門を入ると左右に矮檜を列べ植ゑて其下に松葉牡丹の紅黄白花咲き亂れたのが御玄關まで續いて居ります。記者は御中の口へ伺ひ、御取次に名刺を出しましたが、夫人は直に立ち出でられ、『何卒こちらから』とて、御玄關より應接室へ導かれました。此室の中央には圓卓子と椅子五六とを置かれ、御床の間には『我武揚』の三大字の一軸を掛けられ（中將出征の當時手づから掛けて立たれしと）、寫眞帖二三を重ね、卓子側の書棚には戰時畫報十餘冊、臺灣風俗の寫眞數枚を積み置かれてあり。東南の廻り緣淸らかにして、高穗の袖垣瀟洒の趣を添え、八手、槭樹、松、杉など蓊欝として翠影を古雅なる水盆に横せる樣ゆかしく感じました。夫人は丈がスラリとして肉附程よく、淸秀な眉と眼に愛嬌溢れ、水際の立つた富士額に漆の如き黑髮、ふつくりとした鬢髱の丸髷に紫絣鹿子の手柄、卷繪の笄、金無地の櫛を挿され、銘仙の袷に黑繻子と茶博多の帶を締められ、何處までも人品の氣高い奥樣。去りとて應接振り鹿爪らしからで、一見舊識の如く打解けて話されました。夫人が椅子を勸めつゝ初對面の御挨拶さるゝ折柄、襖を開いて茶菓、烟草盆など運ばれたのは、丈の高い愛くるしい青年で、何處や

ら中將の御面影に肖通ふて居られましたが、後で承はれば令息務氏で御坐いました。

▲御家庭

貴女方も當節は嘸御忙しくて在らつしやいませうに、ようこそ御出で下さいました。……私共の家庭はこれぞと申上げるほどの事は御坐いません。子供は多勢持ちましたが、皆亡くなりまして、此へ出ました倅一人限になりました。ハイ彼は學習院の高等學校へ通學致して居ります。もと〳〵陸軍幼年學校へ入れます積りで、入學試驗を受けさせました所が、近眼と云ふ事が判つて止めまして御坐います。『乃公が軍人だから彼は他の方面で國の爲めに働くも宜からう』と主人は申して居ります。

▲中將の御嗜好

主人は極無頓着で勤務向一方の人ですから、何も別に嗜好と申すほどの事は御坐いません。唯だ食道樂で是れだけは少し嚴ましい方で御坐います。偶に御交際で宴會へ出ますと、時によつて困る事があるさうです、矢張り嚴ましい故で御坐いませう。ハイ洋食の方が好きですが、御酒は日本酒の方が好きで御坐います。西洋料理は私も教師を頼んで少し習ひましたが、ロクな事は出來ません。

▲中將は鳥類を愛す

主人は小鳥類を飼ふのが大好きで、鶯などの餌も自身で悉皆世話を致します。鷄も好きですが、御覽の通り庭も手狹なので飼つて居りません。尤も臺灣に居りました時は、飼つて置いたさうで御坐います。

▲和氣藹々

僅か三人だけの家族ですから、一人缺けてもならぬと申すので、衛生には充分注意致して居ります。主人も至て構はぬ方でありますし、私も極呑氣な性質ですから人樣が『貴女はいつも氣樂相だ』と仰しやいますよ。家族打寄つて話すと云ふ暇も御坐いませんが、平生は晩御飯の時を一番の樂しみと致して居ります。

▲國家の爲め

出征先からは、南山の戰爭後一度だけ手紙が參りまし

たが、只モー簡短な文面で御坐いました。留守居の私共は別に國の爲に盡す術も御坐いませんが、出來るだけの事は何卒一生懸命に致したい精神で、赤十字社、報國會なぞへ日々出掛けて居ります。ハイ往復は電車で……。宅に居ります日は又シャツとヅボン下の裁縫を受け合つて持つて參り、奥様方も御出でまして終日仕立てゝ居ります。イエ却々御役には立ちませんが、精神だけは何處までも盡す積りなので御坐います。私の性質は事を始めたらば一生懸命に遣り徹したい方なので、一生懸命にならぬ位なら始めぬ方が宜いと存じて居ります。

▲報國會

此度は上下推しなべて非常な御奮發で、報國會の裁縫場へも熱心に御通ひに成り、私のやうな者も皆様と日日樂しく仕事を執りながら、聊かでも御國の御爲の萬分の一を盡すと思へば、誠に嬉しいので御坐います。

▲新聞

時事と萬朝を取つて居ります。萬朝はチョット早分りがして便利で御坐います。主人は新聞を種々取り變えるのが嫌ひで、以前から同じのを取つて居ります。

次の室には、奥様方の御話し聲がして、ミシンの刻む音も漏れ聞えました。記者は夫人の御多忙を察し上げ、長坐は御仕事の妨げと氣づかつて御暇申上げました所、

日限りのあるシャツ縫を致して居りますので、誠に失禮を申し上げました、何卒惡しからず。

と叮嚀に見送られた時、束髮の美しい夫人が徒步で御門内へ進み入られましたが、夫人は『サア奥様何卒こちらへ』と迎へられましたので、矢張りシャツ縫を成さりに御出でましの御方と推しました。

藤井參謀長夫人

征露第一軍の參謀長陸軍少將藤井茂太氏が我軍の張良たるとは一世の公評なるが同少將夫人登久子は純粹の江戸兒加藤德兵衛氏の第二女にして慶應二年十一月十九日に生れ明治二十五年少將に嫁す家政整理に長じ良人をして毫も内顧の憂なからしむるは夫人の特長なり

滿洲の露軍が一番恐れを成して顫へて居るのは黑木軍との事で、其原因は黑木軍の戰略戰術が常に敵の意表に出るに在ると承はりました。申す迄もなく黑木將軍を始め智勇勝略の將士雲の如く集まつて居られますが、日露戰爭實記で黑木軍司令部の內外觀戰者招待會寫眞を拜見すると、「前方に跪坐して劍を横へ帽を脫し圓滿なる顏容聖僧の如くなるは參謀長藤井少將なり。」と圖解してあつて、如何にも兒女の親しみさうな風采であるが、張良の容貌婦人の如くであつたと云ふとを聯想して、我軍の張良と申す世評の偶然でないとを悟り、秋雨のしめやかに濺ぐ朝、四谷大番町の御留守宅へ伺ひました。御邸は方形に刈り込まれた樫の生垣亭々たる一構で、御門を入ると右手に大きな厩があつて扇骨木、梧桐、檜などが枝を交へ、御中庭の入口に蔦の這つた枝折門が見え、其側に瀟灑な御玄關があるのです、應接室は八疊二室推し開いた淸々と心持のよい御裝置、御床の間には兒島高德櫻樹を削る大書幅を掛けられ、匾額は怡然有二餘裕一の五文字のと、獨逸人筆景色油繪と、水彩畫四五枚を掲げられ、違棚には箙に挿める征矢數本と劍製雉子を置かれ、土佐畫の金屛、紗の戶帳などは、室隅に程よく飾られてあり。露深き芝生の御庭に老松を主位として、矮柏、椿、多羅葉などが姿優しく附屬せる有樣、却々ゆかしく見受けられました。記者の着坐致したる途端直に出で迎へられた夫人は、白茶地のフランチル單衣に、鼠小紋縮緬の羽織を召され、濃い黑い髮をアッサリとした花月に卷かれ、ハッキリとした重瞼と小さい口元に愛嬌こもり、細面で纖柔な御風姿、御話振りは慇懃の中に折く警語を交へ、客をして馴れしめず飽かしめぬ方で感服致しました。

▲淋しき御留守居

私共には子供が一人も御坐いませんから、誠に淋しう御坐いまして、兒玉さん(德太郎少將)の御宅なぞが御羨しくてなりません。斯ういふ際に子供がありましたら、噺話相手になりますだらうと存じまして……。それに一人の姑は國元の方に居り、此宅はホンの私

一人と兩人の下女だけで御坐います。留守中は人を頼みましても、却つて面倒で御坐いますから、夜分だけ親戚から一人泊りに來て貰ひます。留守中はモット小締りと仕まつて、下女も一人に致さうと存じましたが主人の申し付けもあり、僅かの間と存じて其儘にして居ります。ハイ赤十字の方は金曜日の例會と繃帶卷に一日と一週に二度だけ出ますが、未だ昨年から入會したばかりで何の御役にも立ちません。一體私は東京の外はドチラも存じませぬので、人樣と御話しする術もなく、それに無教育で折角御出で頂いても、誠に御恥かしいので御坐います。

▲舅　姑

主人の父は一昨年高齢で沒しましたが、極嚴重な武張つた人で御坐いまして、日清役の時主人は第二軍附で出征致し、主人の弟は海軍の方で扶桑へ乘組んで出ましたが、舅は何卒兩人が勇ましい戰功を立てる樣にと毎日氏神へ參詣して武運を祈つて居りました。唯今國に居る姑も矢張り氏神に日參致して居るさうですが、戰地へ手紙など遣つては却つて邪魔になつて惡いから一度も出さぬと申越しました。至つて氣丈な母ですから、私も心配が無くつて幸福で御坐います。

▲少將の平生

別に是れぞと申して道樂のない人で、勤務の餘暇には書物を見るのを一番樂みに致して居り、凝つて見ます時は、夜も遲くまで部屋に籠つて居ります。少し込み入つた調査物を致して居る時には、部屋へ人が來ないやうに致しますから、私なども用事があれば入口で入つても宜う御坐いますかと尋ねてから、部屋へ入るやうに至して居ります。ハイ書物は矢張り役所の用に關係したものゝやうで御坐います。年を取るに隨つて、漸々父親に似て嚴ましくなりましたが、時によると子供のやうな眞似をして笑はせる事がありますので、良人が其樣な眞似を爲さる所を嚴ましいことを仰しやる時に見せて上げたいと申すのです。矢張り子供がない故で、時々自分が子供のやうな眞似を致すのだと見えますよ。

▲園藝好き

少しの間も唯居ることが出來ない性分で、唯だ居る位なら、植木屋の手傳ひでもした方が可いと申して、庭木や柴の刈込を致したり、又畑へ出たりして居りますそれで植木屋が「旦那樣松だけは御免被ります。」と斷りました。裏の中庭は植木屋に關係させずに乃公が自由に植ゑると申し、躑躅などを勝手に植ゑて樂んで居ります。植木いぢりは道樂の一つですが、盆栽のやうな細かいものは好きません。畑の方も暇さへあれば鍵つたり、肥料を施つたり、何でも致して居ります。澤山もない畑ですから、肥料は大抵馬糞で間に合せて居ります。「乃公は身躰が暇になつたら、果物の樹を澤山植ゑて育てゝ見たい。」なぞと申して居ります。

▲谷川の釣

暑中に暇のある時は、二週間位箱根などへ參り、私をも一緒に連れて行きますが、滯在中は善く谷川へ釣魚に出掛け、少さい魚を澤山捕つて參ります。主人は郷國に居る頃、始終谷川で釣を致したさうですから、矢張り其味を覺えて居るから致すので御坐いませう、一躰旅は極好ぎで、又何處へ出掛けるにも極手輕の方で御坐います。

▲飲食物

これが嫌ひと申す物はありませんが、西洋に居りました故か、どちらかと申せば洋食の方が好きで御坐います。一昨年少し腸を患ひましてから、非常に食物が嚴ましくなりまして、お魚なぞも極新らしいのを選んで居りますが、此邊はお魚に不便なので困り切ります。主人の頂きますものだけは私が拵えますが、ホンの間に合せの折衷料理ばかりで御坐います。唯今まで朝は牛乳に卵を用ゐましたが、近頃は又日本風の方が宜いと申して、尋常に御飯を頂くやうになりました。御酒はトント好きませんけれども、賑かな御酒の席は大好きで御坐います、よく御客と御話をして面白いと申しては皆樣を笑はせます。烟草は好きですが、腦に障るので加減して用ゐ……大概卷烟草の常盤なぞを喫んで居ります。御菓子類は餘り甘くない物なら何でも頂

きますし、果物も瓜や西瓜の他は大抵好きで御坐います。戦地へ送るものを問合せましたが、何にも不自由はないと申し越しました。

▲攝生家

留守中別に心配と申すとも御坐いませんが、唯だ御役に落度がないやうにとそれのみ案じます。平生極養生家で、暑中でも毛織の肌着を離した事はありません、食物も極注意致す方ですから、病氣の心配はない方で御坐います。宅に居る時は、朝夕冷水で身躰を拭ひ、お湯には隔日に入つて居りました。

▲動物

主人も私も犬が大好きで、一昨年頃まで雑り種の小さい尨犬を座敷飼に致して置きましたが、それが死亡ましてから他のを飼ふ氣も御坐いません。誠に善く馴んで悧巧なもので御坐いまして、主人が洋行致す半年前に飼ひましたが、三年經つて歸朝つて參つても善く覺えて居て、大層喜び頻りと尾を掉りました。私は猫も大好きですが、主人は猫を大層嫌ひます。鷄も飼つて御坐いますが、最早年を取つて卵も產みません。併し私共では家に飼つたものは何時までも離すのが嫌ひで、役に立たなくなつても死亡るまで置くのです。

▲馬

馬は三頭居りますが、誠に可愛いもので、外から歸つて來た時、私が玄關に立つて居りますと嬉しさうな容子を致します。パンでも持つて行つて遣りますと、それは〳〵喜びますこと……。宅では馬を何より大切に致して居りますので、一昨年此家へ引移る時も、住居は舊の儘で忍耐致しましたが、厩だけは地面を清めて新らしく建てました。馬が此家で一番幸福で御坐いますオホヽヽ。

▲秣

秣は秣屋から悉皆持つて參りますので、原料は麥と麩と枯草で大抵一頭に就て一個月に十四圓程ですが、秣料は役所から下るので御坐います。私共の馬丁は心から馬好きで、善く世話を致しますから幸福で御坐います。主人が馬丁には決して勝手向の使など頼むな、馬

さへ大切にして與るれば可いと申して居ました。馬が不在になりまして以來、夜分トン〳〵と云ふ足音を聞きませんから、誠に淋しい心地が致しまして……。

夫人は淡然と良人の地位を忘れたやうに話されるので、記者は少しも黒木軍參謀長の夫人と云ふ感に刺戟されずに御話を伺ひました。軍人にして軍人臭からず、貴夫人にして貴夫人臭からぬは、藤井少將御夫人で御坐いませう。

滿州土人の生活

●生活程度は甚だ低くて御話にはなりません、取分け都會を離るゝこと十里十五里の寒村に行きますと寒暑の別こそあれ衣服は十年一袍で靴は穿かず蓬頭垢面蒜臭い口で何んでもかでも生噛りよく病氣にもならず暮せたものだと日本人は驚ろいて居ます。

●中產以下の暮向　衣服は淺黃木綿の綴れ家屋は二間位づゝの長さで兩側にアンペラ莚を敷た向合ひのお座敷、其下を竈からの煙が通つてポカつかせる工風、喰物は三度が三度高粱の御粥、お菜は此頃では淺黑い鹽で煮た茄子か唐瓜、箸休めの香物に白菜でもあれば上々、太概は葱の皮を剝て之に粗だらけの味噌を附けて食べる有樣實に大變なものです。

●中產以上の生活　之れとても別段の違はありません、家屋は一棟が三棟四棟となり土塀で圍ふ處が煉石塀、草葺屋根が瓦葺牛馬や豚犬が少し澤山居て衣服が少奇麗で何時も靴を穿く位のものです食物は遼陽附近の豪家で日常は高粱飯、年に一度の正月三ヶ日丈け主人に限り陸米の御飯、併し豚は祝日には必ず膳に上り金持は自ら飼養する者を屠り貧乏人は組合で一疋の豚を切殞けるのです、併し

●滿洲土民の富は意外で朝から晚まで跣足で働いて居る苦力でも五百や七百の圓銀を所持せぬ者はない、何萬といふ大家の旦那が薄汚ない着物で牛車を追ふ、渠等は何の爲に金を蓄へ何の爲に生存へるかと考へると憫然の感があるが渠等は倅に嫁を貰ふにも嫁の身体を幾百兩で買ふのであるから日本の樣に宵越の錢は持たぬなどゝいつては終生一家を作すことが出來ぬ、處で表は飽まで乞食風にして無暗矢鱈と懷へ金を捻込むのです。

家庭雜感

巖谷小波

▲惡習改良の好時機

いよ〳〵本年も今月限りと成つた。毎年歳暮と成れば、面白からぬ事に忙しく、ひいて家庭の平和をも、幾分か害せられる事と成る。―――錢が要つて、閑が無く、まことに感服の出來ぬ時節だ。

何事もキジメを付けねば成らぬ此歳暮の事であるから、隨つて金錢の要るのは、勢ひ止むを得ぬ事ではあるが、在來の習慣に依て見ると、年末の金錢の要るのは、只に必要條件に向つてのみならず、不必要條件の下にも少からぬ支出を見るのだ。こゝに不必要條件とは、例の虚禮虚式にのみ走る所謂『お歳暮』の贈答である。

一體贈答の事に付ては、己に愚見を陳べた樣にも思ふが、贈る者も受ける者も、喜んで樂しんで之を爲てこそ、初めて贈答の趣意に適へ。それが全く反對に、遣る者も眉を皺め、貰ふ者も舌打をする樣な、義理一遍の贈答ほど、愚を極めたものはあるまい。

然るに歳暮の贈答には、得て此種のものが多いので。遠い玉子屋の切手を貰つて、買ふのに車代の損を呟き、腐つた鴨を業々しく持ち込まれて、捨てるにさへ場所に困るなどの、滑稽の屢々演せられるのも、多くは此際に見る所だ。

斯る無用な虚禮は、只さへ之を改めねば成らぬ。況して軍國多事の際、何を苦しんで、更にこの愚を繰返へすに及ばう。

否、余は思ふ。此の軍國多事の際こそ、此種の惡習を改良するに、最も適切な時機なれト。

▲家庭改良の實

家庭改良の聲は、十數年前から歌はれて居たが、漸く此頃に至つて、その實を擧げる事に、着々歩の進められるのは、大いに賀すべき事である。

聞けば某々の人々は、家庭改良研究會の下に、良家の夫人内君達が、日を定めて一堂に會し、互ひに實驗を語り、理想を陳べ、又時には知名の士の講話などを聞いて、熱心に研究しつゝあるとやら。これも大いに結構な事だ。

尤も家庭改良と云ふ事にも、形而上と形而下、精神的と物質的とあるが、その前者は、暫く此所に別問題として、後者即ち物質的の改良から、まづ實行に着手するのが、蓋し捷徑に相違無い。

然るにその捷徑の前に、小ならざる障害の横はつて居るのは、此の日本風の家屋である。

一體日本と云ふ國は、形の如くの文明國であるが、衣食住の三俗を見るのに、衣と食とに於てこそ、その文明を誇るに足らうが、只住の一點に至ては、殘念ながら二三世紀後れて、正しく半開時代の觀を存じて居る。

空氣の流通がいゝの、地震の用心によいのと、辨護說は相應にあるが、一口に云つて見れば、明ッ放しの掘立小屋の、僅に進歩した物に過ぎず。空氣の流通のよい丈に、白晝盜人も通り拔が出來、地震の用心がよい代りには、風が吹くともうぐら付いて來る。

かう云ふ不用心な家に住んでも、間は留守番でも賴まなければ、夫婦連れ立つて旅行する事も出來ず。腕白盛りの子供でも居た日には、地震を待たずして内から打壞される。それに臺所の不整頓さ！　あれでは家の下女たる者、一日襷を外づす間の無いのも、實に止むを得ぬ次第であるが、それも皆家屋の構造の、甚だ迂遠に、且つ不經濟に出來て居る故だ。

所詮家庭の改良には、まづ以て家屋の改造が必要であり。そしてその一事が、抑も甚だ億劫であるとすれば家庭改良の實を擧るのも、亦容易な話では無い。

但し容易で無いと云つて、まるで夫に手をつけず、在來の儘を守つて居れば、更に容易で無い事に成る。寧ろ此困難を排除し、まづ手近の行ひ得る範圍から着々實を擧げて行くのが、眞の捷徑と云ふべきであらう。

▲不具の家庭分子

男仲間でさへ、一旦學校を出て、夫々立場が異つてしまふと、自然間が遠ざかつて、偶々同窓會が開かれても、此同窓的の交情は、勢ひ冷めて行かざるを得ぬ。況んや婦人に至つては、一度インキの浸た海老茶袴を脱いで、代へるに糠味噌臭い前垂を以てすると、舊の學友との往來は殆んど跡の路と成り、やがて乳兒の一人も出來れば、愈々世帶造つてしまつて、まるで人中へは顔も出さない。――ト云ふのが現在の有樣である。是も前の項に云つた、家庭の現狀の然らしめる所だが、一つにはまた本人の、心の持ち樣にもよる事だ。で、世間の婦人の多くは、學校を出て、まだ親の家に居る間こそ、隨分校友會へも出、社交會へも臨んで學校以外の新智識を得る事に、決して怠りはせぬが、一旦緣付いてしまふと、さながら生れ變つた樣に、急に主義を更へてしまつて、只管引込思案に成つてしまひ、甚しきに至つては、女の道を盡して居ながら、緣付いた事を極まり惡がり、子を產んだのを耻に思ふ類さへある。さりとは氣の知れぬ遠慮では無いか。

尤も一家の主婦たる以上、さう家を外にして、世間交際ばかりされては、甚だ迷惑なものであるが、さうかと云つて家に引込んで斗りで、一向世間を見ないでは、いくら學校で學問をしても、その學問は皆死んだ物に成り、果は世間に取り殘され、良人に見くびられて、一家の主婦は事實に於て、高等下女に成つて了ふのも、皆心柄なのである。

要するに世間を知らぬ女房は、家事に晦い亭主と共に、所謂家庭分子としては、何も不具の者であるのだ。

▲容貌と手蹟

容貌は必しも美を要せぬ。が、醜であるより美である方が、人間として德である。

書は姓名を誌すに足る。が、下手であるより上手の方が、また人間として德である。

然し容貌は、何分天賦の事であるから、如何にその醜を悔んでも人爲では如何とも仕難いが、手蹟は練習の勤怠に依つて、その巧拙が分れるとすれば、人はそ

の練習を積んで、書はうまく書き度いものでは無いか。

まして婦人に付いて、更に之を感ずる事が切だ。まだ交際つて見ぬ間は、容貌に依つてその人を判斷する。恰もそれと同じ樣は、まだその人に會はぬ間は、手蹟に依つてその人を推測するのが、まづ世間の通例で、手蹟の麗はしい短冊でも見れば、その歌主は如何にも美しさうに、之に反して其所にひじきが列んで居ると、その書手の顏までが、勢ひがんもどき面に思はれるものだ。

所詮婦人の手蹟のよいのは、その容貌を上げる事、正に二割以上であらう。

▲美音と話術

麗しい手蹟の、知らぬ者を床しく思はせると同く、美しい聲音は、まだ見ぬ人をして懷かしく思はせる。但しその聲音は、矢はり容貌と同じく、半ば、天賦の物であるから、求めて如何んともする事は出來ぬが、更に話術に至つては、恰も手蹟に於ける如く、練習に依つて巧妙に成るものである。

然るに今の婦人の、聲音の美なるは少くないが、話術に長けて居る者の、存外多からぬは何したものか。雨宿りの燕の樣に、ペチヤクチヤ喋舌る婦人はよくある。が、話術は必しも能辯の謂で無く、多辯の事では無論無い。只緩急度に適ひ、聞く者をして自然と耳を傾けしむる樣なのが、眞の話の上手であるのだ。

また話術の上に注意すべきは、用語の正確に、且つぞんざいで無い事である。今の所謂る海老茶式部なる者の、言語の卑俗なのに對する小言は、屢々聞く所であるが、それにつけても、今の女學校の課程の中に、まだ話術課の設けられぬのを、余は私かに訝かるのである。

女生に行儀の必要なる如く、話術も大いに大切である。只默つて立たり居たり、三指ついたり、摺足したり、生人形の眞似ばかりやつても、イザと云ふ場合には、何の役にも立たぬでは無いか。

尤も此所に話術と云つても、多勢の人を集めて、そ

れに聞かす話をのみ云ふのでは無い。否、婦人にはむしろその話よりも、客に對して差し向ひの場合、即ち應接對話の事を云ふのだ。

▲來年の宿題

世が進むに連れて、社會の問題が段々複雜に成つて來るのは、蓋し勢の免れぬ所であるが、余は玆に本年度の筆を擱くと同時に、今日までに解釋し、判定し得なかつた問題を列記して、敢へて來年度の宿題と爲し、滿天下の本誌愛讀諸姉と共に、大いに研究したいと思ふ。

其一　小言を云うても何うしても聞かぬ子は、之を罰するに、一時の鞭撻を以てするがよいか、或はは一定の時間を期して之を監禁する方がよいか?

其二　夫を選み、妻を擇ぶは、自ら進んでその事に當るがよいか、或はまづ以つて人を煩はし、然る後自ら選擇するがよいか?、——語を變へて云へば、從來の日本式求婚法と、西洋風の自由結婚との可否。

其三　現今の下婢の位置を高めて、これに出來る丈の自由を與へ、所謂る人權を重んじて、從來の主從の關係を破り、更に傭者、被傭者の關係にする事の、果して我邦に行はれるや否?

其四　女子の服裝改良に付いて。

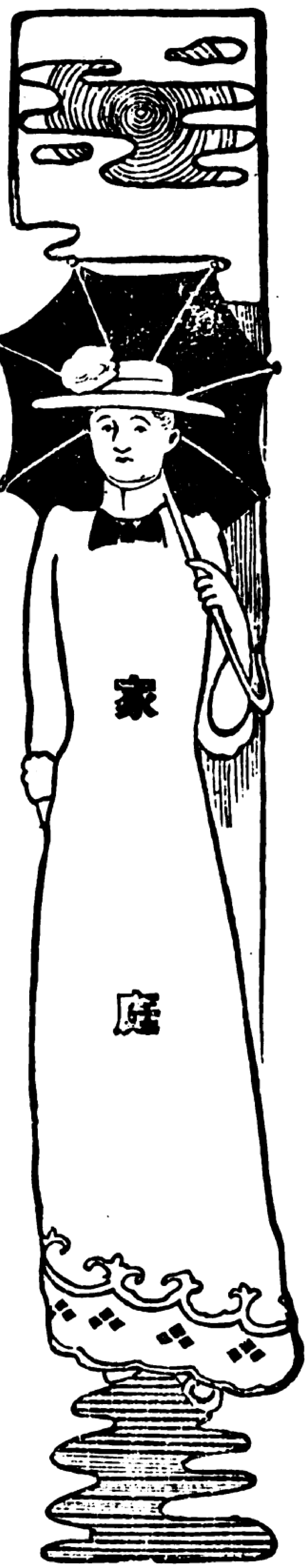
其五　未亡人再婚問題!

其六　戀愛と結婚!

以上は世の識者間に、已に定論のある樣にも覺えるが、多くは卓上の空論で、實際如何あらうかと、尙懸念を要せずには居られぬ。

凡そか丶る問題に對しては、些の感情にも驅られず、毫も衒氣を交へず、極めて眞面目に、また極めて忌憚無く、思ふ通りを十分に吐露して、廣く社會に諮ふべきである。

たま〳〵世論に逆つて、彼是批難を受けやうとも、爲めに自信を枉げる樣では、まことに賴しからぬでは無いか。



俗人生活

水原翠香

○人の世に經る、其生活の狀、千差萬別なりと雖、上は王侯貴人より、下は賤民乞食に至る迄、其身の程々にそなはれる處あり、諺に云ふ、天無祿の人を生せず、赤子生れて未歯を生せず、自ら食物を咀嚼し能はざるうちは、母の體に乳といふ滋養物涌出て、是を含めて克生育し、臼歯迄も生揃ひて、何にても喫ひ得るに及べは、自然母の乳も出止にても知られたり、されば各自の運不運はあれど、左之右之、一命を繋ぐだけの天祿を得ざるはなし、されどそは各自、其勤むべきを勉めて得らるゝにて、苟も勤を怠り、又は分外の欲望を企つれば、忽にして盡齟齬て、富貴なりしも零落し、身に附たる天祿迄も失ひて、今日にも窮するに至る事、現今の露助が、世界の大國にて在ながら、猶飽事を知らず、東洋の天に、荒鷲の翅を展延て、半開貧弱の朝鮮と同一視して、只一揉に踏潰すべく思ひたる、日本と戰ひて、海に陸に連戰連敗、手古摺本の味噌を塗たる、此末奈何なり行くらむ、强欲非望のよき誡なるべし。

○總て人は各々其身に能はざる處を願ひ他を羨む、賤民より高貴の人を見れば、殆極樂世界にて、憂苦と

いふ事は、絶て知らざる如く思ひて羨めども、其貴人富豪必しも、娯樂通しの者に非ず、他より想像し能はざる苦惱ありて、常に心を安んじ能はず、却て今日暮しなる下等社會の氣樂なるを羨むもの也、是其生活の程度遙に懸隔するが故に、其苦樂も又大に相違して、貧乏人の今日の飯米を買ふ錢なきに苦み、寒空に袷すら着る由なくて、戰顫る如きは、富貴の絶て知らざる處、衣食の足るを常とすれば、敢て娯しくも有難くも感せず、又賤民が時に存外の錢を得ては、忽ち酒を買肴を畜り、久しく殺せし質を受出して、快く醉て笑ひ興じつ唄ひつ舞ひつ喜見城の娯樂を爲すも、富貴に有ては、美酒佳肴も常に口に馴て然のみ甘からず、歌舞音曲も又然り、されば邂逅に爲す者程面白からず　昔越前の春嶽公が近侍なりし、佐藤何某我と親しかりしかば、常に來りて談話する中に、其師なる儒者何某が讀る樂しみ十首とて見せられける歌、悉は忘たれど、其中に記臆せし物二三

樂しさは、年來見たく思ふ書を、人に借得て歸りくる時

樂しさは、常に好める燒豆腐、甘く煮たてゝ喰せける時

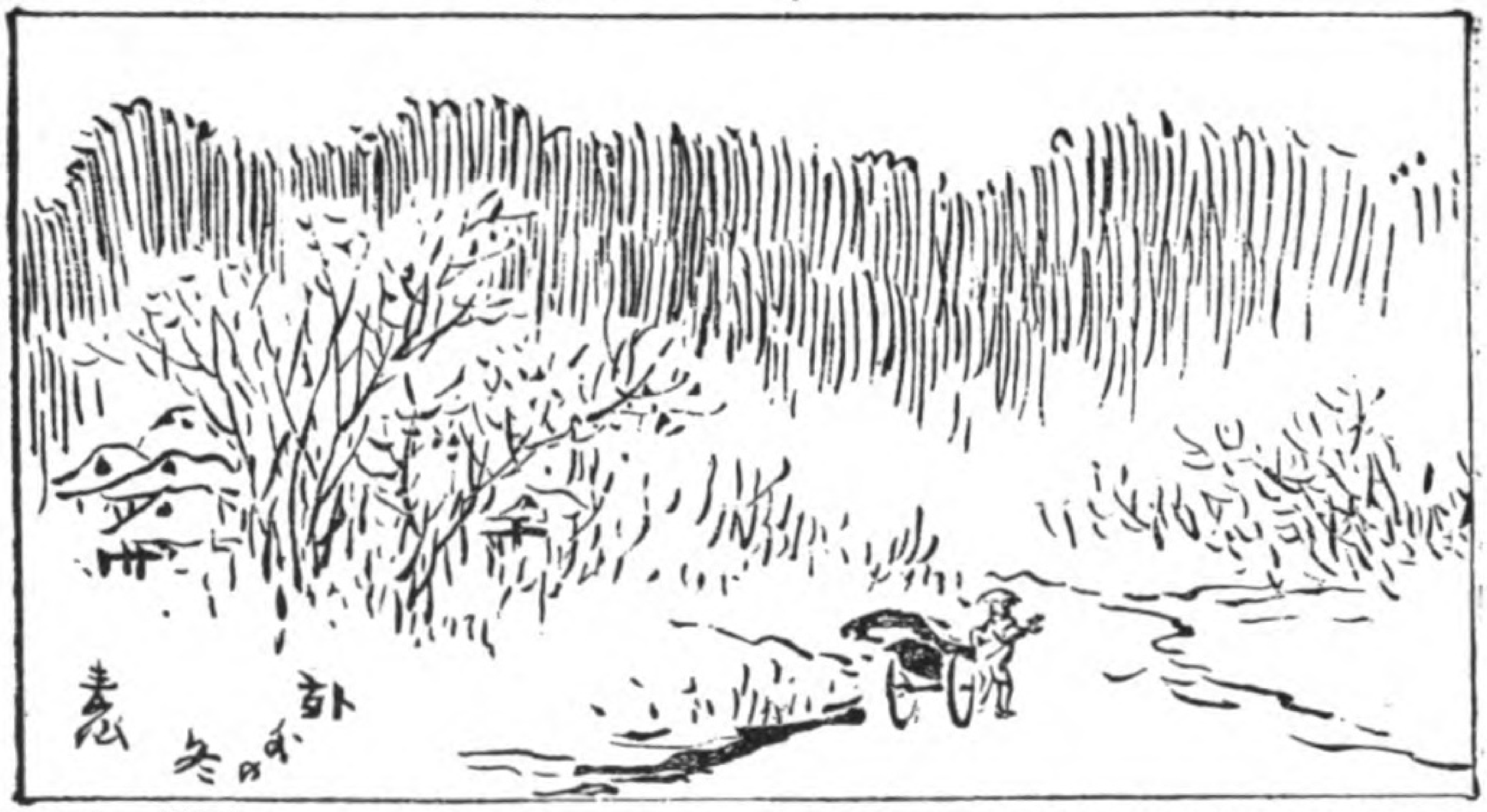
樂しさは、人の惠みし美衣を、兒に打着せて將てありく時

此他も忘たれど、大かた此類なりし、清貧を樂しめる儒博士の心、實斯有けむ、佐藤氏曰、此歌を過日主公の一覽に供したるに、公の曰、下々の者は斯も樂しみ多き歟、予などは斯樣の樂しみは一もなし、之を思へば、大名は詰らぬ者よ、下民こそ羨しけれと仰られたり、實然こそ覺さるらむ、書物は向にても、見たしと仰あれば、近臣畏りて、土藏より取出し來り、新著なれば、城下の書林に使者を馳て、即刻買上て机上に供し奉る、長日月見たしと思ふ事もなければ、辛うじて借得たる嬉しさもなし、珍膳美味も常となれば、好める燒腐豆程も甘味を感せず、況や兒女に美衣きせ度などの心配は、夢にも思ふ處ならねば、いかに美々敷粧ひたりとて、當然の事にして、差て樂しとも思は

れぬ也といひぬ、是下等社會の苦は上流に及ばず、樂の方は有ても常になりて、樂しとも感せぬ也、又上流の苦みは、下等人の想像の外にあり、男子の事は暫くおきて、女子に附ていはん、先むかしの貴婦人なる者は、身には錦繡をまとひ、口には美食に飽き、出るに馬車あり、衆人に尊敬されて、何處を推ても不足の音は出ぬ筈の樣なれど、其紅帳内に入てみれば、或は殿樣と御中睦ましからず、側室跋扈して、夫人を床の飾飾品とし、正腹の公子、疎せられて、妾腹の二男寵愛せられ、或は毒殺等の危險の爲に、晝夜戰々兢々とし夫人は每夜空閨に、無量の怨を呑て、黑髮も蛇に化せむとする、御家騷動は德幕時代のみならず、今將似たる事絕てなしとは云難し、よし然迄甚しからずとも、上には男姑の昔堅氣なるがお座在、下には家令老女の輩、我召遣ふ者に氣を兼、心置かれて、一言をもうかとはいはれず、物事一も自由にならず、針程の誤あれば、棒大にいひ立る惡狹あり、忍泪の絕間なきも身分重ければ、猥りに離緣を乞ふが如き、輕々敷事もならず、九尺二間の裏店の夫婦が、お鍋ヒヨツトコの惡口雜言、甸喚と爲合て、胸倉髻を摑み合、近處合壁を騷がして、雷盆土鍋を打毀して、一件サラリと落着する如き埒の明たる物に非ず、一生涯を憂欝中に沈みて病を惹出し、敢なく終るも多く在、決して他よりみて思ふが如き羨敷ものに非ず、又何某女史と世に其名を知られて、花々敷以榮さるゝ女先生は、天稟に得たる才有て、若年の昔より、種々の艱難を經歷して、具に辛苦を甞たればこそ、老境に入て漸々に、其名世上に顯れたれ、其處に至る迄の困難、豈容易なる物ならんや。

○扨功成名遂て、何々會の會長、某女學校の校長と、立派になれば成に連て、其事業の爲に心勞も又多大になりて、或は借財の爲に差押に遇、不名譽の事を新聞に唄はるゝさへなきに非ず、されど元來自己一身の爲にのみせし借金ならねば、其中には又援ふ神も無に非ず、とにも角にもやり手也と、其名はます／＼高まる也、世上一般の葡萄茶式部、少しく學才有者は、十人

に三四迄も、獨立して適の女先生たらむ事を思へど、ソウ容易くは問屋で卸さず、昔より發達する人は天授の大才あるが上に、非常の忍耐力ありて、克艱難を凌ぐの勇氣有、加るに幸運にして、必是を引立る人に邂逅也、楷梯なくては高きに登れず、木下藤吉郎も、信長に引上られて、羽柴筑前守と迄、成上りたればこそ、終に風雲に乘して太閤にもなられたれ、いかに英雄豪傑、又は博學才子にても、始に之を引立る楷梯なくて、世に名の顯はるゝ事はなし、運は天に有といへども、能勉勵する者に非ざれば、頭上に下り來らず、薄志弱行なる者には、及びもなき事勿論也、或は中途の窮厄に耐得す、自暴自棄して、墮落する者あり、是唯人を羨



み、功名心に驅られて、生活問題を思はざる故也、慾に小才を憑みて、身にも應せぬ獨立せんよりは、寧父母親戚の撰に從ひ、尋常一家の妻と成て、碌々として譽は無とも、新聞三面の種となる恥辱を貽さず、生涯を易く送らむこそ得策なるべけれ。

○又富家の女兒にして學才あれば、父母も之を許して、其好む處に打込で學ばせ、高價の書類機械何に拘はらず、乞がまに／＼買與へて、費用を惜まず、事十二分に竭されて、廿を過る迄勉强すれば、何事かならざらむ、立派に肩書付の卒業して、間もなく某女學校に聘せられ、又何某學士と結婚して、樂しき家庭を造るもあり、是等は運命の寵兒たり、是にて生涯無事ならば、誠に羨む可限

なれど、運は世界の巡り持にて、同處に長くは止まらず、若年に幸運なりし人は、老後に窮阨する事あり、家計に難なければ、身に不慮の遭難、又は病に罹り、生もせず死もやらで、長日月を病床に呻吟し、世は花紅葉の好時節も、我は垂籠て春秋の行方も知られず、美食も口に味なければ、何娯樂もなき身也、斯ては富貴も何かせん、然れば我身もし幸運ならば、愼て奢らず、德を修め、人の怨を買はず、よく謙退て敵を作らざる樣に心掛、月に年に貯蓄して、老後の計畫を怠るべからず、病も未然に克防ぐ時は、大概醫者を迎るに至らず、大患となる事なかるべし。

○凡學才と世才とは、全く別問題也、博學宏才の大博士、又技藝一世に冠たる名人、必しも經濟に長せず、凡人よりも迂遠なもの也、交際場裡に巾を利かして、八方美人と稱せられ、應接駈引に拔目なき人は、學藝共に深からず、或は皆無の人さへ在、人の性は各自異なりて、其好む處も等しからねば、一際には云ひ難けれど、公平不偏に評せんには、君子の德有て度量廣く、衆を歸伏せしむるの大器あるを第一等とすべき也、男女に拘はらず、上流の人は斯社有たけれ、自身はたとひ學藝に深からずとも、斯道の學者名人を使役して、立派に事を辨ずべし、又世智に賢からずとも、敏腕の人を撰拔して、樽俎折衝の外交官とする事を得べければ也、第二流よりは尤敏腕を要す、夫より段々と下る程、何にまれ一藝に秀たる者、有付易く生活に便宜あり。

○お孃樣にて育ち、夫人となりては夫の財產に衣食して、安樂に年月を經過し、世の辛き味ひを知らず、病に罹りて忌食多き時か、使ひ馴たる侍女の暇取し時の外、不自由と云ふ事を感せぬ樣の人は、幸にして太平無事なればよけれども、一朝事ありて、決斷を要する場合には、周章狼狽爲處を知らず、其虛に蹈入る奸棍あり、甘く口實を設て己が田へ水を引けども、世故馴ぬ身の悲しさに、只顧深切也と信激しく思ひて、終に家の大事を誤つ等、よくある事也、世の波風に浮沈して、經歷たる人は、然のみ聰明ならずとも、人の言

の虚か實かは、大體其擧動にて悟らる丶物ぞかし、若年に艱難を爲ざる人は、歳を取ても事ある時の用に立がたく、生活問題を解すべからず。

○徒然草に云ふ、人毎に我身に疎き事をのみぞ好める、法師は兵の道をたて、夷は弓ひく術しらず、佛法知りたる氣息し、連歌し管絃をたしなみ合へり、されどおろかなる己が道よりは、猶人に思ひ侮られぬべし、法師のみに非ず、上達部殿上人押なべて、武を好む人多かり中畧 其家に非ずば好みて益なき事也、昔も今も人は唯、自己に能はざる事をのみ希望する物なる哉、商家の婦女は時の流行を逐ふが爲に、藝妓の風俗を擬し、俳優を慕ひ、演劇は替每に一度見たらば澤山なるを、二三度も同劇

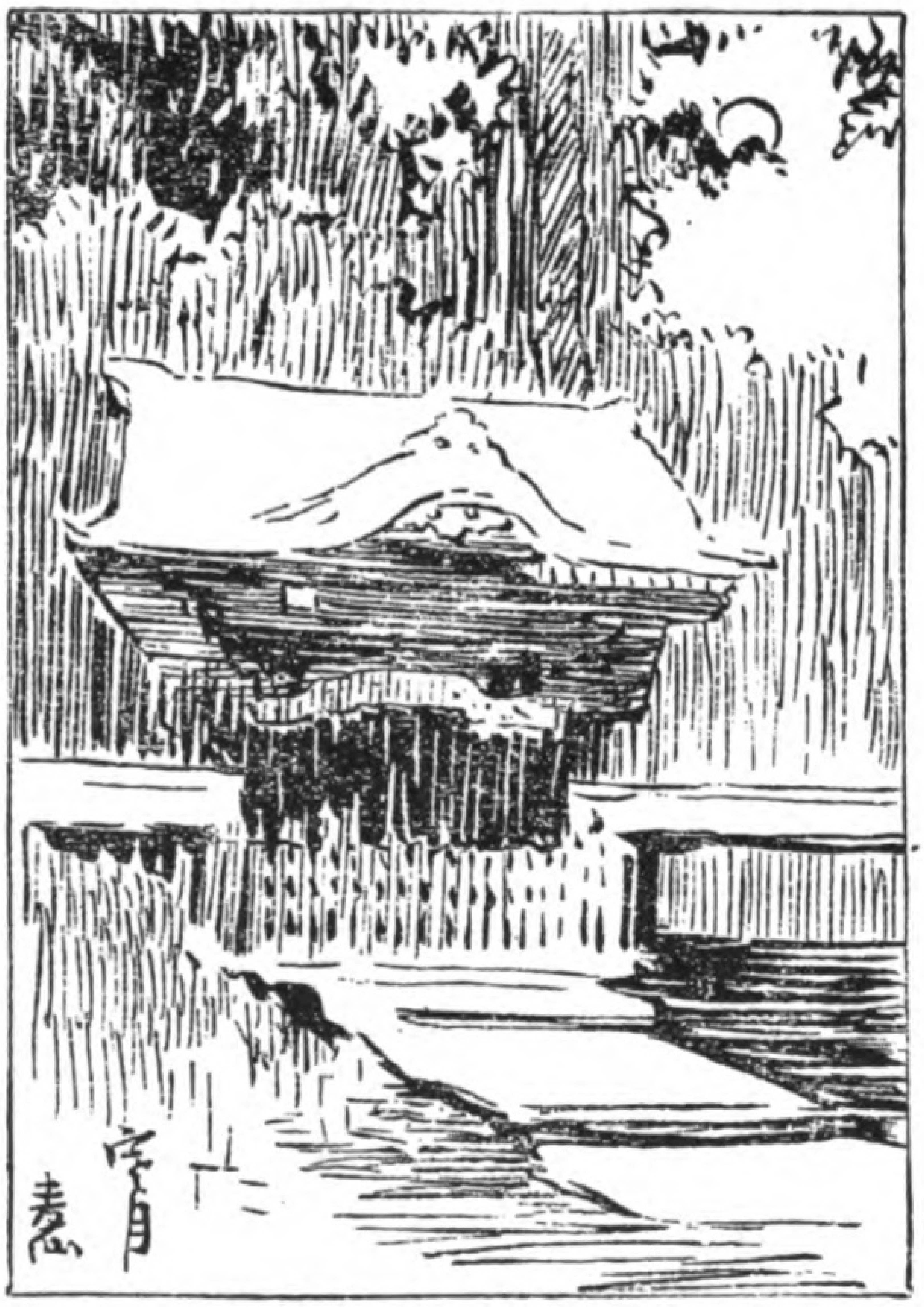


にゆく人を羨み、妓輩は却而、一日も早く丸髷に結て、黒縮羽織の夫人風と成たしと願ひ、姑は嫁を於轉婆也として、他家の女兒の靜淑なるを羨み、女兒は親の分限を知らずして同級の何子さんが、美服新調避暑旅行を羨み、おさん孃樣の親に嬌へて物強求にいふめの出るを羨めば、丁僕は隱居の午睡を羨み、上下交々、自に不可能の事をのみ庶希也、とかく我庭園に咲花よりも、他の盆栽がよくみゆるが人情にて、紅塵萬丈の都會より、偶溫泉海水浴等に行時は、山谷の清流海岩の波濤に、俗腸を洗はれて、空氣は淸し景色は佳、寒暖計は盛夏と雖七八十度の間を昇降して、苦熱を感ぜず、かゝる所に住たらば、壽命も延て奈何樂しからむと

思へど、扨其土地に別莊等構へて、半季一年と住着てみよ、始の程こそ物珍しさに面白かりけれ、佳景も日夜詠續くれば、目に飽て又他を思ふに、何一つとして處には有らず、二里三里の山坂越て、汽車馬車を要する小都會迄、態々買に往復するか、さらずば郵便にて都會より取寄せざるべからず、或時は延着して、俟てども／＼音沙汰なし、其煩はしく物不自由なる事、實に豫想外にして、便利に習ひし都人の、歸るに由なき謫居ならばいざ知らず、然もなき限りは辛抱續かず、殊更山里の冬と來ては、人めも草も枯はてゝ、雪は樵路を埋みて交通遮斷も唯ならず、折たく柴のしば／＼は、都の便も聽によしなし、海邊とても同事にて、彼顯基中納言の、配所の月を罪なくて見たしといひしも都にての想像也、若も眞實荒磯に住居せば、忽飽て都に歸らむ、況や暴風雨の起る際は、晝夜雨戸も閉られぬ位はまだしも、海嘯といふ恐ろしき事變ありては、家も地面も奪ひ去られて命辛々避難せざるべからず、山も又溫泉ある地は、火山脈なれば噴火の危險、海嘯と撰ばず、よしさる天災に遭はずとても、物の不便不自由に耐兼て、遲かれ疾かれ元の都會へ、逆戻りする外有べからず、畢竟山水名所古跡は、偶然遊覽に行こそよけれ、永住すべき處には非ざる也

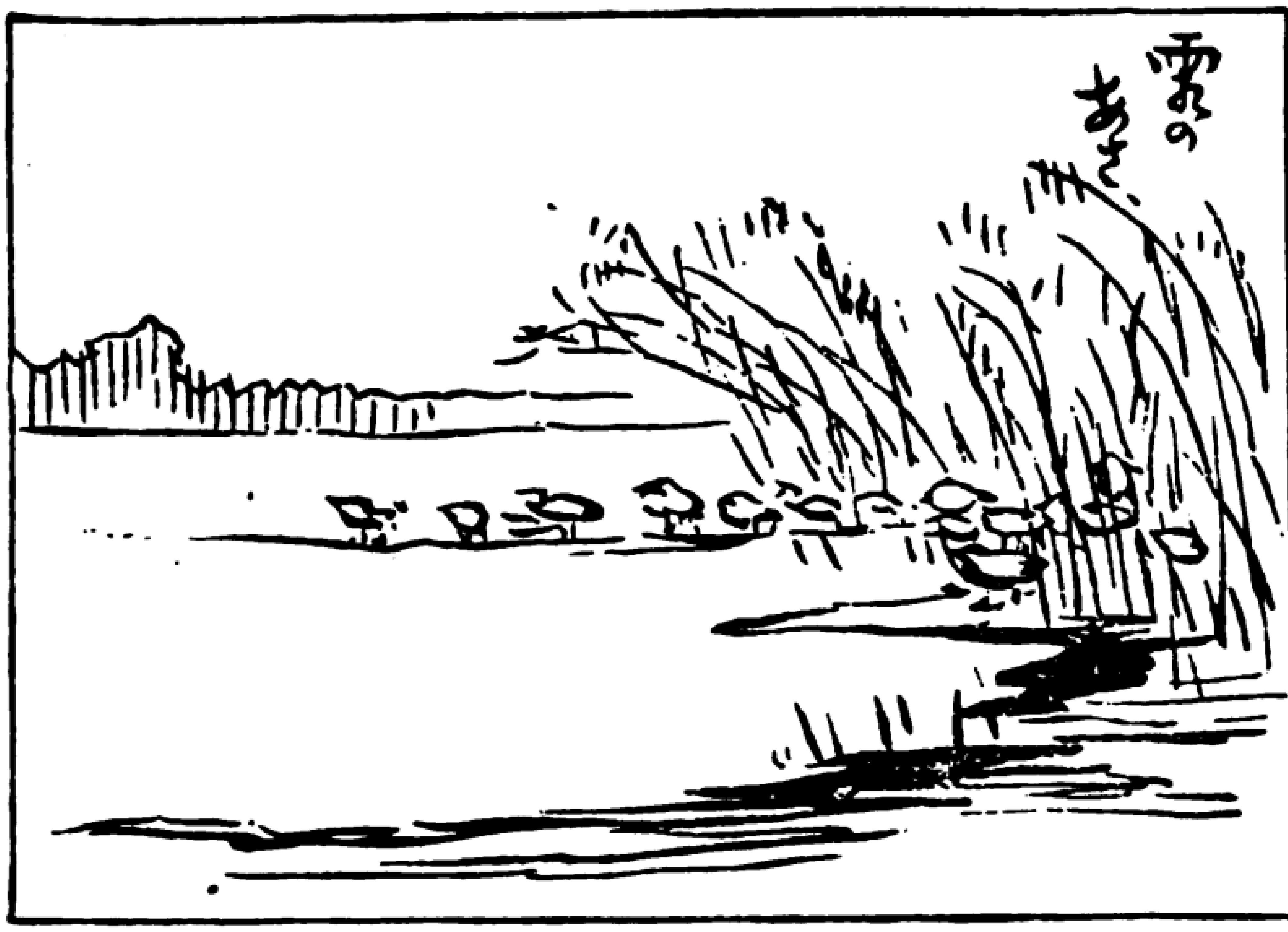
○又地方僻鄙に生れし者、始て都會に出る時は、先汽車の疾走に驚くを第一番として、新橋上野に着みれば、山の崩るゝ如く人を吐出して、貨物を持運ぶ響、轟々雷の如く耳も聾せんとし、稠人の中に押れ揉れて、辛く大路に出ぬれば、上には數千の鐵線、太く細く堅横に架渡されて、機糸の如く、蜘蛛の巣に似たり、電車の自ら動くを不思議と見送れば、忽背より、自轉車の馳來るに、危く突飛されんとし、其間を縫ふ馬車有人力車有、馬を驅る軍人有、彼處へ除、此方へ替すに忙はしく、音樂隊の囃し、廣目屋の行列に、巴々的口を開て見惚れ、腰なる矢立の落るを知らず、三井の店飾りの美麗に眼を驚かし、丸ノ内の廣濶、三菱の建築の大仕掛なる、日比谷公園上野淺草、至る處人出の多きに驚き、夜に入ては、市中の店毎に、瓦斯電燈露店の

火光と相輝きて、晝を欺き、劇場寄席の景氣宜賑ひ、みる物きく物、耳目を驚さずといふ事なく、今宵は何の祭なりやと問へば、何にてもなし、毎夜如斯のみと聞ては、唯呆るゝの外非ず、かゝる繁華の都を看ては、野山の奥の偏郷漁村へ、歸る心も有まじと思へば、郤以然に非ず、人間古郷忘難しにて、將歸らむと爲日には、皆欣然として出發す、然と雖、年期奉公又は學術修行の爲に、長く都に留る者は、古郷の戀しきも始の程にて、去者は日々に疎く兩三年も送るうちには、漸々都會の風俗に染み、文明の事物を解して、大都會の味をしむるに及べば、戀しかりし古郷も、次第〱に疎ましき方に傾きつ、一とせ久しぶりに歸省してみれば、兼て村中第一等の美人と思ひし女も、田舍臭くて愛相が竭き、事ある毎に物を問ふ、識有才子と稱せし人も、土地の尊敬は渝らねど、我身遙に進步したれば唯迂遠なる村夫子のみ馬鹿々々しくて話されず、地方にても彼温泉場、海水浴など云ふ所には名所もあれば風景もよく、至る處に高莊の大館旅宿ありて、美酒佳肴を供し、遊具を揃へて、只顧客の意を迎ふるに勤むればこそ都人も珍しく面白けれ何一つなき僻地にて、目を慰むる景もなく、唯父母村人の眞心厚き欵待は有難けれど、何を出されても、鹽からきに閉口し、村に居た時好物なりしを、奈何に喫



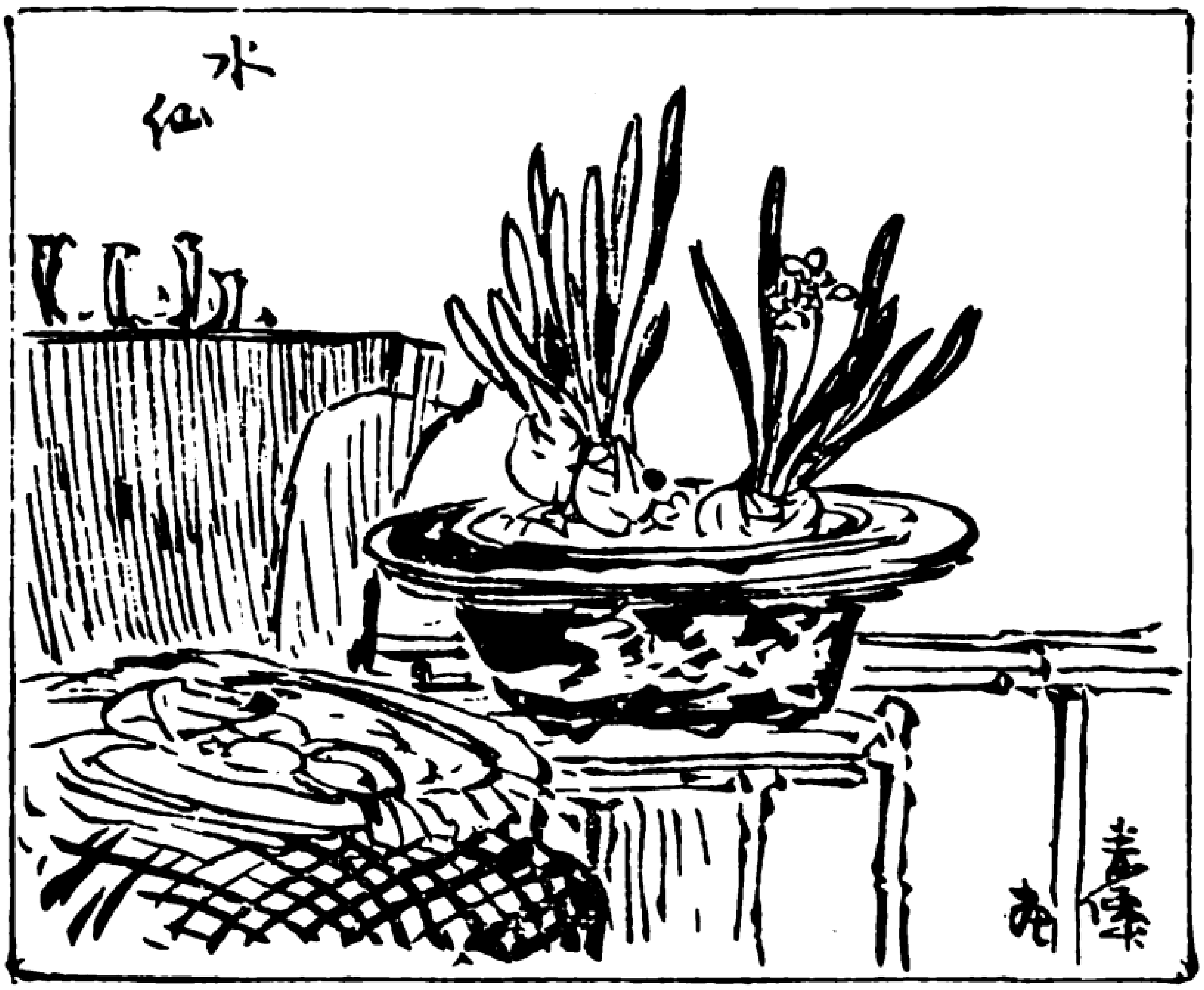
ぬと咎められて、勉強して一椀一皿を竭す、唯天然物なる果實が、相替らず美味なるのみ、是は又都會にては、一個幾錢を要するを、爰にては我持地より自由に採來りて、新しく克熟せるを撰み、飽まで貪り喰はるるぞ、何よりの馳走なりける、之を歸京の土產にも爲べし、かくて一周間も滯在すれば、早田舍に厭果て、人々は名殘を惜めども、何とか口實を設て强て出發し其後は再び古鄕へ歸る事を思はず、終に都會の人と成終る者多し、是即都會に馴ては、僻地に住まれぬ例也。

○翠香元來京都の生れにて、幼より振袖長裾にて育ち長じても又豪家に嫁したれば、お姫樣夫人の、上流生活をせし者也。されば其窮屈に六かしき、內容を能知れり、殊に昔は今の如く、磊落なる事微塵もなければ、今にして當年を追想すれば、我ながら、克も命の續きし事よ、畢竟其世にては、女子に外交なければ、世間を知らず、我身分は斯有物と思へばこそ、過したれ、若明治今日の女兒をして、吾昔の境界に在らしめば、三日と堪得る者は非じ、今語る荒唐談と思はれんが、實錄を其正人が申なれば、些も間違なしの眞中也、之に思ひくらべ、以て文明の今日の有難さを知り賜へ。



○先上流の婦女としては、他人に見らるゝを恥とし、常に奥まりて、來客有ても親しき親族ならざれば對面する事なく、奥庭は步行ども表の方は中庭へも出られず、僅に物見の窓より大路を覗くも簾越にて、其の簾は卷上得ざる樣に釘にて打附けてあり、家中にても茶の間を限とし、臺所へは一歩も出ねば、竈

前栽物土藏等は申迄もなく、下婢下僕の部屋等、我家の中に一生みず知らぬ處あるぞ今思へば可笑き、外へ出る事とては、先祖の法事に墓參する外は、正月の年禮に本家へ行と、春秋二季に實家へ歸省するのみ、その時は里の母に倶はれて、嵐山の花高尾の紅葉、又は演劇をも觀る事を得れば、年中の娯樂也、嫁入先よりは、タツタ一度、石山詣せし事有し、其時の爲體、勿論汽車のなき世なれば、道は遠近に拘はらず、轎に乘て行也、媵兩人左右に附き、老女と宰領の男、茶辨當を荷ふ下僕、先後に立て石山寺に至り、下乘より轎を出て、歩行するにも、供の輩に取圍まれて、脇眼もふらず只ゆくのみ、奇嵓を撫つ、胎内潜を試みなどして戯れ遊ぶ他の參詣人を、横目に視つゝ休息の



樓に登れば、轎褥を持ち出して、上段の毛氈の上にすゑて吾獨り着座し、次の間に茶辨當を開きて、紋付の高茶臺にて茶を供し、蒔繪梨子地の提重を開き、銀壜の味淋酒を小盃に半蓋斗つぎたるをも一口には呑干さず、舐るが如くし、皿に盛て薦たる、鮓や肴もホンの些なれば、今少し欲しやと思ひても、傍より氣を利かして薦る者のなき限りは、我よりお替りなど云ふ可も非ず、若し構はずしていはむには、よく召上ゑゝと陰言をいはる、飽足ねども是非なくて、箸を納むれば、是を下て供の男女が圍居し、味淋は媵兩人、他は別に酒を呼て笑ひさゞめき酒醼するを、上段より見やりて心中に羨むのみ、如斯次第なれば何の面白くも、をかしくも

なし、惣じて花嫁といへば、小食なるを上品とし、普通一人前に喰ふをば、下劣張として卑みし也、故に花嫁は日々三度の膳も、給仕人の手前を兼て、其杓子當り惡ければ、空腹の憂さを辛抱する事、我一人に非ず世上一般皆然也、されば川柳にも、「氣の利た附人嫁に握飯」などいへるをみても其習慣知らるべし、空腹斗も容易ならぬに、上に嚴酷なる姑在て、座作進退に睨付られ、下に意地惡き老女在て、一擧一動を皮肉に批評し、表は敬して裏は監視す、恰も繩目なき囚人の如し、否々想へば、現今松山の捕虜の方が、遙に増りて自由なるべし、吾は彼等にしば〱賄賂を撒て、其毒舌を免れたり、然れば大家に嫁來れば、彼輩は財主を得たりと悦ぶ也、嫁もし不注意又は吝嗇ならむか、忽此輩に憎まれて、譬へ佛の如き姑在ても、反間の毒計に陷入て終には離縁せらるゝ也、故に大家の嫁御寮は、只顧穩順一方にて、萬事傍人の言做次第となる好人物か、又は頭拔て度量有、物事を苦にせず、人を籠絡する手腕あるかの、兩極端にして納るべし、（我は後者の方なりし）普通は大概憂苦に得耐ず、しば〱紛紜を起すと雖、一度嫁しては去らるゝを此上もなき大恥辱とすれば、父母も呉々諫諭して、泣々怺へ居るうちに、男兒にても擧る時は、世繼の母たる勢力附て、次第に居心もよくなる也

斯る大家なりしかども、維新の際、幕府と共に瓦解して、其後は處々方々と流轉して、山家にて一冬を深雪に埋もれたる事もあり、海邊にて海の荒るゝに困難せし事もあり、中頃は生活の爲に、種々の職を試みたる事もあり、七やの暖簾も潜たり、或時は女先生となりて、大勢の生徒を敎授し、近頃やうやく樂隱居となる事を得たり、女學世界に我が生活實驗談をかけといふ注文に任也、在の儘の實歷談を、造らず飾らずかくのごとし。

物の價は其物の缺乏するに由りて始めて知る

大牢の珍味も每日食へば飽きます、粗食も空腹の時には山海の珍膳に勝ります。何でも物は缺乏の時に當つて其の眞價が知られるのです、この一言、實に社會のあらゆる事相を言ひ盡して居ります。

小供と賞罰

寺田勇吉

△賞罰の執行者

兒童の家庭に在るや、起臥飲食遊戯談笑より、一擧手一投足の微に至るまで、晝夜の別なく、之を教導して正鵠を誤ることなからしめ、之を監督して惡弊に陷ゐることなからしむるは、母親の任務なり。從て兒童の行爲若しくは意思の善に適し、義に合ふや否やを判斷して、其の善は速に之を賞し、其の惡は之を罰するは母親の職務の重もなるものにして家庭に於ける兒童の賞罰權は、一に慈母の掌中に在りと謂ふべし。

我國に於ては兒童の訓育上母親の權力未だ十分に行はれず、往々父親の干渉する傾向なきにあらずと雖も、歐米の文明國に在りては兒童の一言一行も、皆母親の意思に支配せられざるはなく、兒童は先つ母親の顏色を觀て、自己の行爲を決定する程にして、家庭に於ける母親の勢力の非常に强盛なるは吾輩の説明を待たず一たひ歐米諸文明國を視察したるもの丶皆實地目擊して驚嘆する所なり。

然れば「スマイルス」氏の如きは母親を以て磁石に比し家族の心は總て、母親に吸收せられざるはなしと云へり、又母教の効力を說て、母親の清純なる思想――行爲――慈愛――訓育――克己――勤勉等の諸德は日夜兒童を感化し、其の効力の顯著なるは遠く子々孫々に及ふものなりと云へり、實に母親は家族の中心にして衆人の悅服する所殊に兒童に對する感化力の强盛なるは何人も之に及ぶものなき程なれば、其の賞罰權を執行するや、兒童の精神上及ひ身体上に及ぼす影響の尋常ならさるを察するに足るへし、世の母親たるもの豈深く其の適用に注意せざるべけんや。

△賞罰の意義

兒童に褒賞を與ふるは、其の行爲若くは意思の善良なるを嘉みして、滿足の意を表し益々之を奬勵せんが爲

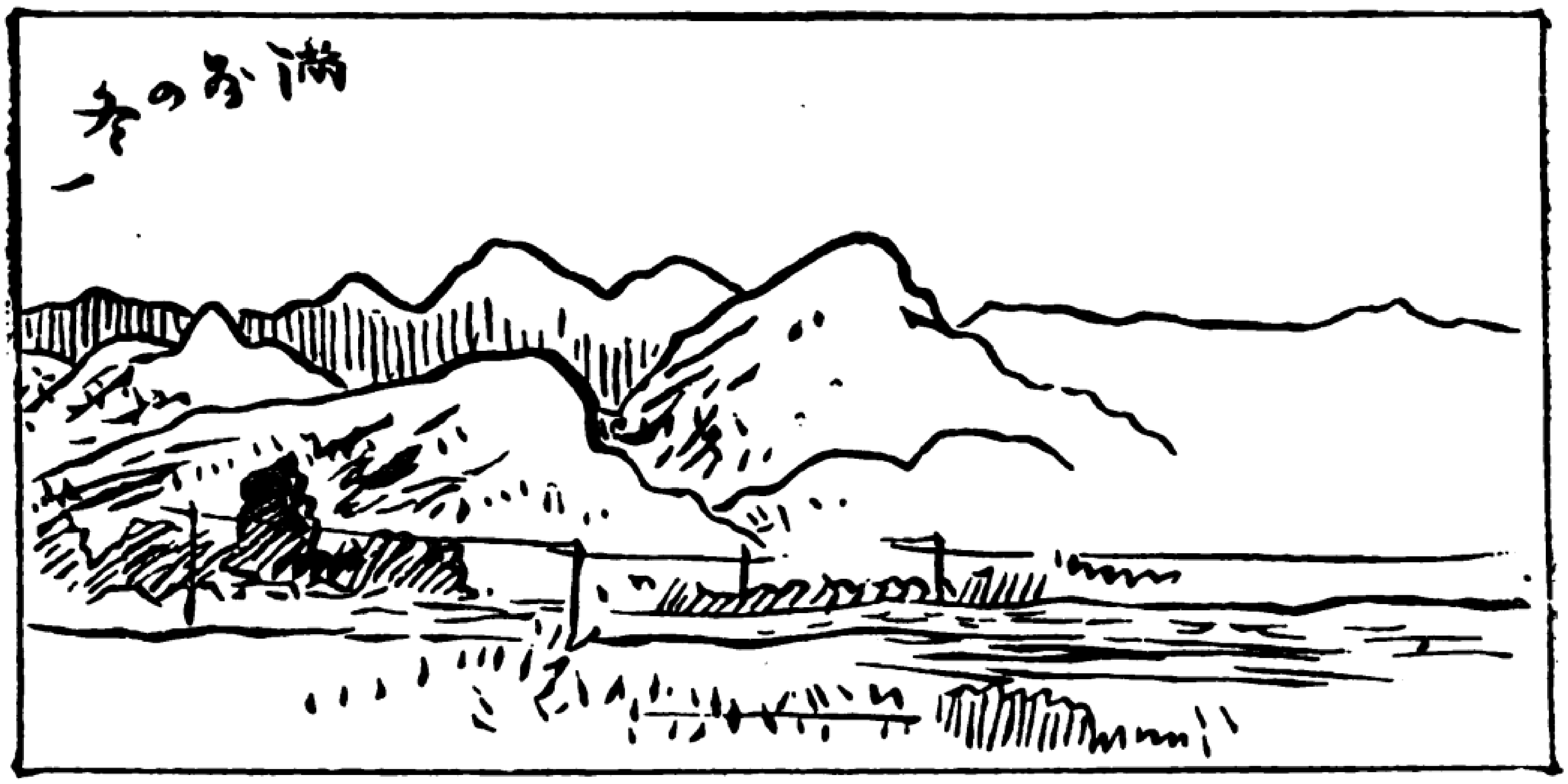
なり。然るに世の母親たるもの往々懸賞を以て兒童の善行を奬勵するの最良方法と信じ、何事を命ずるにも必ず褒賞を與へんことを豫約し、遂に兒童をして褒賞は自己の行爲に對する當然の報酬なりとの感想を懷かしむるに至る、兒童をして一たひ此の感想を懷かしむるときは、何事を爲すにも褒賞を要求して已まず、遊戲を爲すも褒賞を得んが爲なり幼稚園小學校等に通ふも褒賞を得んが爲なり、睡眠に就くも褒賞、臥床を出づるも褒賞を要求して已まざるものあり。世の所謂寵兒愛孃等に就きて斯る實例を觀ることの尠からざるは吾輩の常に遺憾とする所なり。

此の如く兒童一切の行動を擧げて褒賞を目的と爲さしむるに至ては、啻に褒賞の本旨に戻るのみならず、吾輩は兒童の將來を誤るの端、將に之より生せんことを恐るゝなり。今日諸官廳諸會社、銀行等の在職者にして、或は昇給の遲きを恨み、或は賞與の寡きを嘆じ常に不滿を抱き、不平を鳴らし、自己の職務に對し忠誠を缺ぎ、怠慢に流るゝものあるか如き、又出征軍人の遺族救恤若くは貧民救恤の資金を義捐し、學校の新築費、神社佛閣の修繕費等を寄附したる富商豪農にして、猶ほ其の姓名金額を大書したる木札を、街頭に建立して、世人に廣告せらるゝを以て虛榮心を滿足せしむるものあるが如きも、其の原因は幼時より褒賞を以て一切の行動を操縱せられたる習慣の年齡と共に益々增長したるに由るものならん、故に兒童をして人は自己の職務に忠實にして、之か爲に心身の全力を盡すは人たるものゝ當然の義務にして褒賞の有無若くは其の輕重の如きは、固より之を考慮に加ふべきものにあらざることを知らしむるは、兒童訓育上の要件なり。

今回日露の戰爭に際し、我皇軍は上は軍司令官將校より下は下士卒に至るまで各自國家の大難を雙肩に擔ひ身命を抛て以て臣民の本分を盡さんとするに急にして復た一身の安危榮辱を顧みるものなきは實に精神敎育の結果なり之に反し敵軍の士官中偶々冒險的偵察等を試むるものあれば、其の多くは「ケオルグ」勳章を得んが爲なりと云ふに至ては、兩軍勝敗の原因を說明し

て餘りありと謂へし、世の兒童訓育の任に在る者は須らく此等眼前の活ける教訓に鑑み懸賞の弊に陷ゐらざるの注意を取らざるべからず。

兒童に對する懲罰は兒童をして其の心中深く自己の行爲若くは意思の正理に合せさるを悔悟せしむるに在り兒童の良心に訴へて將來の改悛を要望するに在り、然るに世の母たるもの、兒童の非行を戒しむるに其の行爲の善良ならざる理由を説明せすして、徒に懲罰を受くるの故を以てし懲罰を以つて兒童を威嚇するの具に供し、兒童をして只管懲罰に觸れんことを恐れしむるを以て、懲罰の目的を達したりと信ずるものあり、是を以て兒童は懲罰の恐るべきを知て其の行爲の不善たり其の意思の不良



たるを解せず、遂に懲罰の有無輕重を以て自己の行爲を規正するに至る虚言を忌むも懲罰を恐るゝが爲めなり、學校へ通ふも懲罰を恐るゝが爲なり、惡戯を爲さゝるも懲罰を恐るゝが爲なり、禮讓を守るも懲罰を恐るゝが爲なり、若し懲罰の苦痛なくんば彼等は毫も虚言を吐くを躊躇せざるなり、禮讓を守らざるを耻辱と爲さゝるなり。

此の如く懲罰を以て兒童の行爲を規正する尺度たらしむるときは、其の弊や兒童をして道義上の制裁を忘却せしめ、懲罰の伴はざる行爲は總て爲さゝるなきに至らしめんとす、是れ兒童訓育上の一大憂患なり、故に母たるものは兒童の行爲の何故に善良ならざるや何故に懲罰を受けざる

べからざるやを説明し、兒童をして眞に其の行爲の不良なる理由を了解せしめんこと肝要なり、然らざれば懲罰は徒に兒童の精神上及び身體上に苦痛を與ふるに止まり、將來の改悛に向て何等の効を及ぼすを得ざるべし、是れ豈に懲罰の本意ならんや。

△賞罰の方法

兒童に對する賞罰をして能く其の効を收めしめんと欲せば其の方法を選擇せざるべからず凡そ賞罰には物質的及び精神的の別あり顔色容貌を以て兒童の行爲、若しくは意思の善惡を悟らしめ、兒童をして衷心深く快感を覺え、或は苦痛を感じ、以て無上の榮辱と爲さしむるものは賞罰の最も巧妙なるものなり、言辭を以て明に其の行爲若くは意思を是非するもの之に次ぐ、物品を與へて之を賞し、苦痛を加へて之を罰するは世上一般に行はるゝ方法なれども、是れ賞罰の最も拙劣なるものなり。

賞罰を兒童に施すに當り執行者の深く考量を費すべき要件あり。

其の一　賞罰をして輕重其宜しきを得せしめざるべからず、若し輕重其の權衡を失はん乎、賞するも以て其の善を奬勵するに足らず、罰するも以て其の惡を改悛せしむるに足らず、啻に奬勵又は改悛の効を奏せざるのみならず之が爲に却て怨恨――不平――失望――落膽を生せしむること尠からざるべし。

其の二　賞罰は其の功過と自然の關係を有せしめざるべからず、是れ賞罰の目的を達するに於て極めて有効なり、例之

▲勤學の賞として散歩を許し、

▲習字優等の賞として筆墨を與へ、

▲物品取散しの罰として之を整理せしめ、

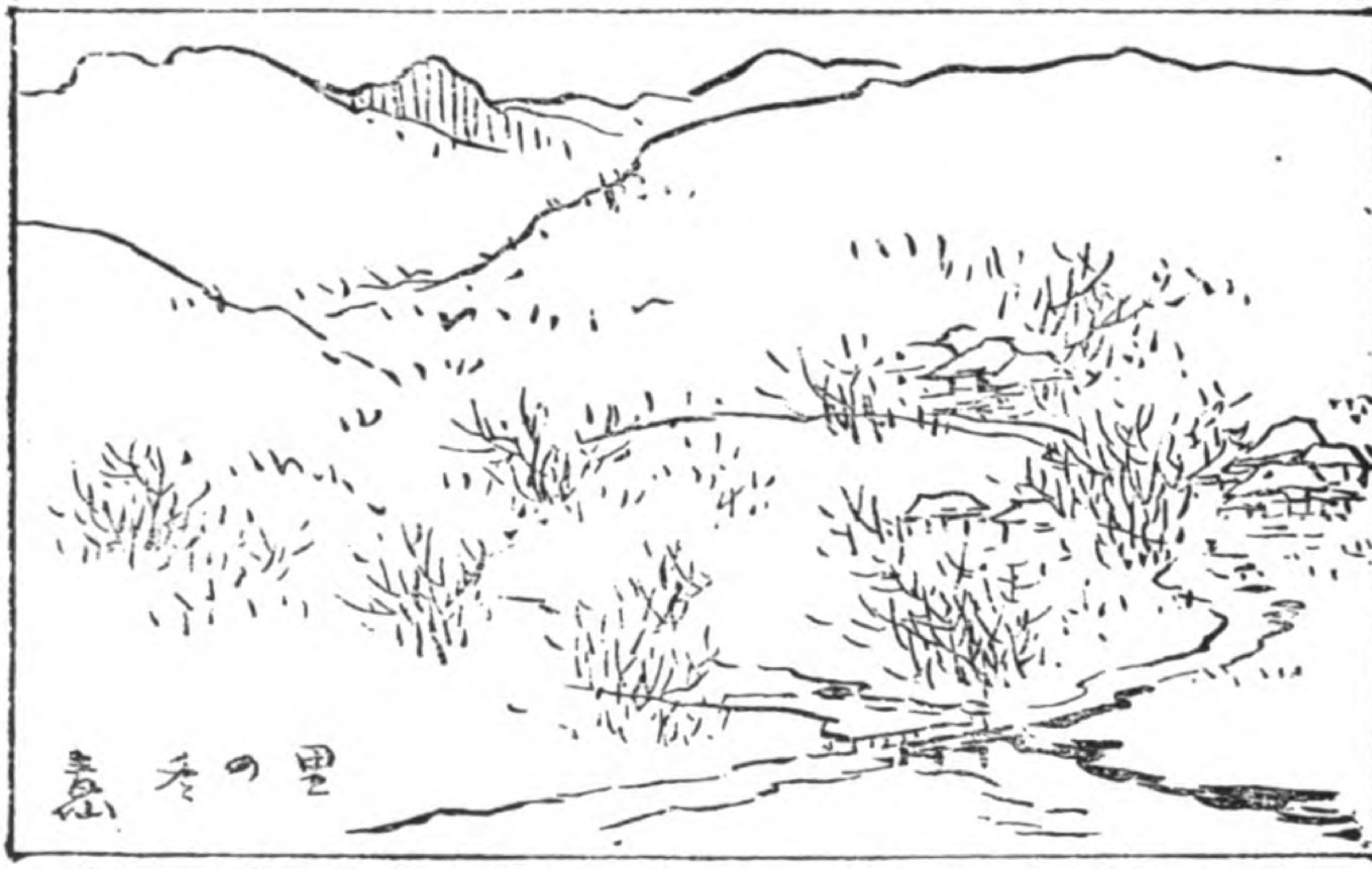
▲衣服を汚損したる罰として粗服を着せしむるが如き

是なり。

此の如くなれば兒童は容易に自己の功過を認め賞せらるれば益々憤勵其事に從ひ、罰せらるれば速に改悛の心を生ずるに至らん。

其の三　賞罰は兒童の精神上の特性を顧慮せざるべからず、是れ兒童の個性の同じからざるに職由するものにして簡短なる褒詞も深く其の腦裏に銘刻して感激禁ずる能はざるものあり、諄々たる訓戒も馬耳東風何等の感應なきものあるが如し、故に兒童の個性を審にし、個性に應じて賞罰を加減するにあらざれば同一の賞罰も甲に輕く、乙に重きの實あるを免れず、蓋し同腹の兄弟姉妹と雖も其の個性は各人各別にして必ずしも同一ならざればなり。

其の四　賞罰をして愛憎心の爲に支配せしむることなきを期せざるべからず、彼の繼母が繼子を憎惡して酷罰を課するが如きは論を待



たず、實父母の實子に於けるも亦往々一時の好惡に依りて賞罰を行ふことなきにあらず、此の如きは子女を以て自己の欝憤を漏すの具に供するものにして、猶は主婦に譴責せられたる下婢が井戸の釣瓶を手暴く取扱ふて其の欝憤を散するの類に異ならず、思はざるの甚だしきものと謂ふべし。凡そ兒童に賞罰を加ふるに當りては、常に熟慮――深思――誠實――公平――博愛――克己等の諸德を失はざる樣心懸けざるべからず、若し賞罰の執行者にして一點愛憎の念あらん乎、重賞嚴罰も何等の効を奏せざるのみならず、寧ろ反對の結果を生ずるに至るは世間其の實例に乏しからざるなり。

其の五　賞罰は容易に之を課すべからず成るべく愼重の注意を取り寧ろ一種の特例たらしめんことを要す、若し些末の事件に對し、濫に賞罰を加ふるときは、兒童は觀て以て常事と爲し、之を賞するも以て喜ぶに足らず、之を罰するも以て恐るゝに足らずと爲し、非常の重賞を與へ若くは嚴罰を課するにあらざれば其の効を擧ぐること能はざるに至るべし。譬へば猶酒を飲用すること稀なるときは少量も猶ほ能く人を醉はしむるに足ると雖も、平素之を飲用する者に在ては口を追ふて益々多量を用うるにあらざれば醉を買ふこと能はざるが如し、然れば獨逸の有名なる敎育家「コメニウス」氏は訓育の要を述べて、敎育の任に當る者は猶は天の如し、光線の溫暖は毎日之を與へ、風雨は隨時之を與へ、雷電の如きは之を與ふること極めて稀なるべしと云へり。味ある言と謂ふべし、賞を與ふること時雨の百穀を潤すが如く、罰を課すること雷電の人を震動せしむるが如くならば、賞罰の効庶幾は兒童を感化するに足らん。

然れども常に賞罰を以て兒童を率ふるときは、兒童の良心を痲痺せしめ、一切の標準を賞罰の有無若くは輕重に取らしむるに至らん、是れ兒童將來の爲め甚だ憂ふべき欠點なり。故に兒童をして成るべく父母の賞罰を待たず、自己の意思を以て自己の行爲を決定し、自ら進で善を爲し、惡を避くるを以て良心の欣榮と爲さしむるは、蓋し兒童賞罰上の要訣ならん、世の母親たるもの及將來母親となるべき目下の女學生の深く鑑むべきなり。

家庭科學

理科應用 家政廿四時

河西璞

▲早飯湯茶漬、汁懸飯の害

一秒三町の速さで初冬の空を渡つて來る午砲の響！其

を待兼ねて膳に就く坊ちゃん嬢ちゃんの、無中で攻撃する箸の運動を緩めさせて、早飯の惡習慣を矯め直すといふことは、親の注意の大切な一つに相違ない、何故といふに、もと我々御互の食物の立物は米麥のやうな澱粉質で、前にも言ふた通り、澱粉質を消化す消化液は膵液腸液もあるが、第一に唾液で、これを十分に交せなければ、胃腸は疲れて遂ひには消化不良病に罹り易い。食物、別けても澱粉性食物は、必づ先づよく嚙み碎いて、其時自然に口から出て來る唾液を交せ唾液の中にあるプチアリンといふ消化素に十分の働きをさすべきで、之の利益は、只消化れよくといふ丈のことではなく、第二に胃腸を無理に苦しめ疲らさぬこと、第三に他の種類の食物の消化を妨げぬこと、第四に食物の分量を節約すること、此四つの利益がある。此間西洋のある學者は、食物をよく嚙んで食べれば、平常の三分一の分量で、十分身體を健康に保つて、勞働に堪へるものだといふ説を立て、自分で實驗して天下に示したといふことだが、よし三分一とまで行かずとも、少くも三分一位は減しても決して不足では無いと、これは斷言して差支ない。世間には學理を知らぬ悲しさ、唾液の効能を、只滑らこく咽へ食物を通す丈のものと思つて居る輩がある。さういふ輩は、溜飲で苦しがつて居る癖に、猶曉らず、惡習慣の早飯丸吞、湯茶漬がぶ〳〵、汁かけ飯の流し込みをやつて居て、湯茶で、猶其上に胃腸膵肝の消化液を薄めて、消化力を減すことも氣付かず、歯で嚙み碎くことが、食物の此等消化液に接する面積を廣くするといふ所以も考へぬ。何たる恐の事であらう。西洋人にも勿論日本人に劣る習慣はいくらもある、が、食事を緩り樂しんでするといふ習慣は誰が何と言はうが、たしかに日本人のに勝つて居る。勝つて居る事は我に取るが宜しからうましてかくと承知した以上、可愛子供の健康上、此點に注意するのは親の大切な務めの一つでは無からうか食事の時に湯水を欲しがるならばやるが宜しい。御飯は必ず何も注けずに、よく嚙み碎いて、唾液を十分交せて食べさせるやうせねばならぬ。

▲食事中の笑談

日本流の無言食事では、子供に緩り食べさせることは少しむづかしい。性急な子供は、是非大急ぎで食べて外に待つて居る御友達の所へ行きたがる。そこで食事中は、頭を使はぬ（頭を使へば血が頭へ上つて胃腸に減り從つて消化を損する）罪の無い世間話し、笑ひ話しで、生命の洗濯をするべし。抑も食事の目的は、一に身體を養ふ爲、二に味の樂を樂しむ爲であるから、アヽこれて御役目が濟んだといはぬばかりに、箸を投げてプイと立つ流儀は、好んで閻累の側へ顔を向ける愚の骨頂で、無いとは言はさぬ。

▲食事力學

食事と生理、食事と化學、これらの關係の密接なることは言ふ迄も無い。食事と物理の關係も亦二三にして止らぬ。

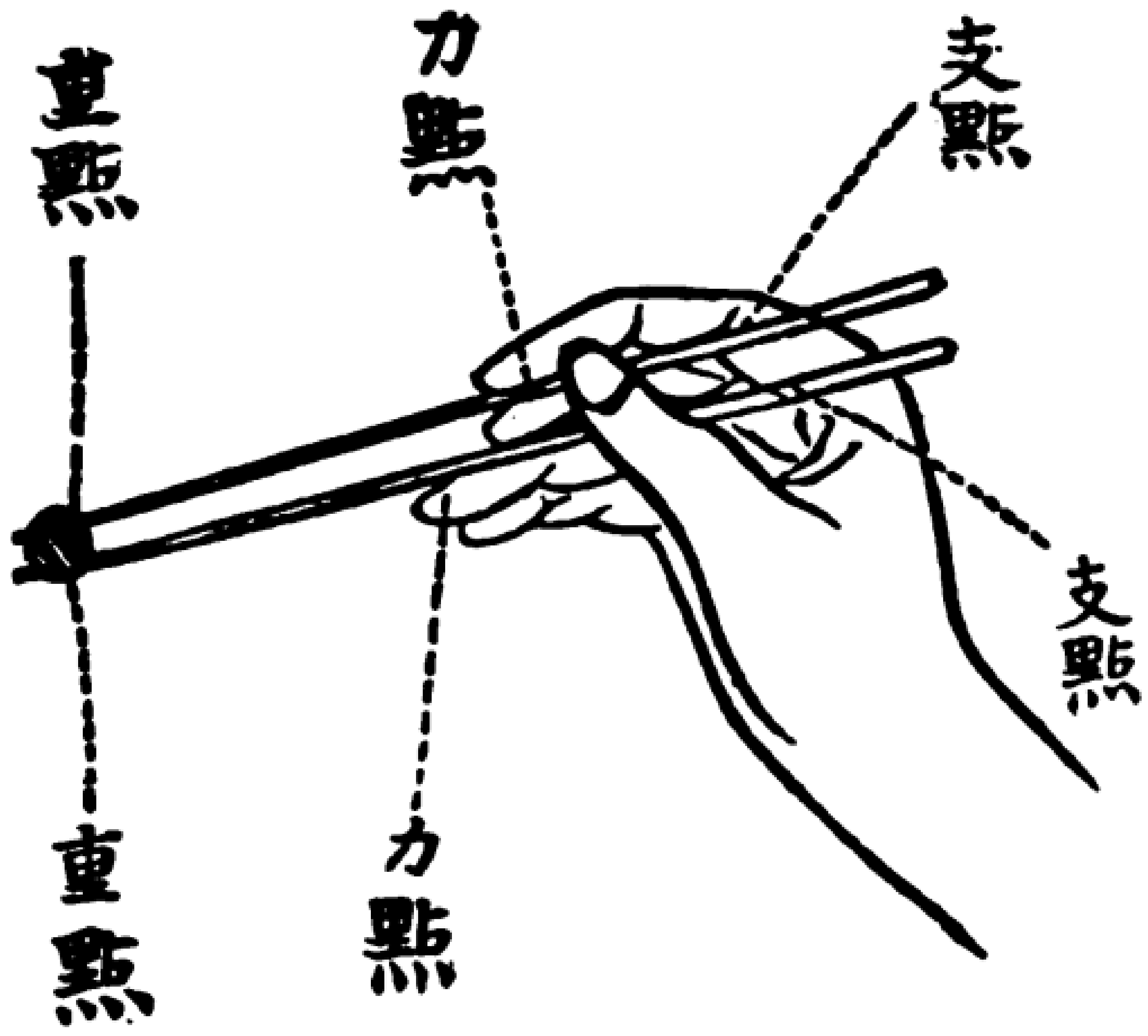
先づ食事に關する力學上の法則應用について言ふて見やうならば、第一に箸と横杆の理。右の手に持つ箸を見れば、其一本手前の方のは定規で動かず、向ふの一本が指の力につれて動き、夫と手前のと二本で、物を挾んで口に運び、若くはそれを挾み切る、其時の二本は何れも立派に横杆の働になつて居る。向ふの一本では、人指指の腹、箸のぴたり着いて居る點が支點で、力を入れる指先が力點、物を挾むところが重點、即ち三種の横杆の中、一番力の損な種類になつて居るので横杆の規則によつて、支點から重點迄の長さの數と重點に働く力の大さと懸けた數が、支點から力點迄の長さの數へ力點に働く力の大さを懸けた數が等いところで釣合ふのだから、箸は先端に近く



短く持つ方が力が得、即ち指の疲れ方が少くて、重い物を楽に挾み上げ、又は堅い物を挾み切ることが出來る道理。子供に短い箸を與へる一つの理由はこゝにあるのだ。

箸の今一本の方もよく見れば矢張同じ種類の槓杆になつて居ることが分るであらう。

力點に働く力は指の筋肉の力、重點に働く力は、挾み上げる時は其物の重さの力(重力)で、挾み切る時は魚なり芋なと其物體の形を造つて居る分子の凝集力といふ力だ。箸の手前の方の一本は力點の力は藥指で向ふへ支へる力、重點の力は挾まれた物の推す力だ。此二つの力と支點から力點重點までの距離とを懸けた數が等しいので釣合つて動かずに居るのである。



箸で挾んだものを口へ運び上げる時、左の手の茶碗を持上る時、屈んだ身體を起す時、何れも矢張槓杆の理を應用して居る。箸の物を口へ運ぶ時のことを考へて見やうなら、先づ支點は肩の骨の繼ぎ目、こゝ丈は動かない。夫から力點は肩から腕へ着いて居る筋肉の附着點、力は此筋肉の縮んで箸持つ手を引上る力、重點は腕と、箸と、挾んだ物、この三つの重さの合して働く一點即重心點で、そこの力は即ち此等の合力、かういふ次第だから此槓杆の種類は箸や日本の手鋏と同じものになる。屈んだ腰を延す時の理合もこれで分るだらう。

物を頰張つて噛む時、口の働きが又槓杆の理になる。物を噛む時自分の顎を撫でゝ見れば直ぐ分るが、上顎は定規で下顎丈が動く、丁度箸と同じこと。そこで此槓杆の三點はといふに、言ふ迄もなく上下顎の接着點が支點で、噛み砕く歯の所が重點、夫から頰の筋肉の骨へ着いて居る點

が力點、これの收縮力が力、かうなるから、箸と同じ種類の槓杆で、力は矢張損になる。丁度箸なら先端を握る程力に得がある通り、支點に近い奥齒で嚙む程力に得があることになる。前齒では丸藥を嚙み砕くさへ力が入るのに奥齒では時には砂さへもジヤリ〵〵ッと嚙み砕くでは無いか。槓杆の効能はこゝにあるのだ。

▲食物の冷熱

飲食物に暖くあるべきものがある。又冷くあるべきものがある。同じ料理でも、夏は冷く、冬は暖く、これが一般だ。然し暖いといひ冷いといふのは、程度の話で、あまり冷いもの、又あまり熱いものは、必ず身躰の爲に宜くない。あまり熱いものは消化器の內壁を刺激して之を疲らせ、あまり冷いものは消化器へ來る血を追ひ拂つて其働きを妨げる、特に氷や雪の如きものを多く食べれば、只血管を收縮させて血液循環を妨げるばかりでなく、食道胃腸の內壁は之が爲に犯されて爛れる。何故といふに、氷や雪は純粹の水の結晶で、純粹の水は物質を溶す力が強いから、此氷や雪が溶ければ其水は觸れる所の胃腸食道の內壁を溶す、かうなるのだ。氷水を澤山飲んでコレラになつた、赤痢になつたといふ話は隨分聞くが、氷水其物の中にコレラの病菌や赤痢の原因が入つて居るのではなく、消化器が弱り疲れるから、此機に乘じ外から入つた細菌が犯すといふ順序になるのが普通だ。冬雪が降る、氷柱が下る、子供衆はよく之を取つて食べる、此等の雪や氷は其中に不潔物を器械的に交へて居る事が少くないから其害は夏熱い時候に檢査を經た氷を食べるのとは程度が違ふ。親々は注意なさるが宜しい。

▲齒と冷熱

あまり熱いもの冷いものは、胃腸を損ふばかりでなく先づ齒を損ふ、言ふ迄もなく、齒は消化機關の關門でこゝを破られゝば、胃腸の本陣も忽ち不消化軍の來襲を受けて苦戰に陷ると定まつて居るのだから、齒は出來得る限り大切に保存せなければならぬ。さて齒の構

造はどんなものであるか。其內部は石灰質で、外圍に琺瑯質といふガラスのやうなものを被つて居る。喩へて言へば素燒の磁器へ釉藥を懸けたやうなもので、此被つて居る琺瑯質は中々丈夫なものだが、內部の石灰質は酸いものや腐敗菌には容易に犯される。

ランプの火屋の冷えて居るのへ心を大く出して急に強い熱を與へ又は熱くなつて居るのに冷い風を當て、若くは冷い水をかければ割れたがる其通り、琺瑯質も、溫度の激變に逢へばひゞ割れる虞があるこれは分子の部分的收縮膨脹に基く當然の結果であるから、齒を大事に思ふ人は、注意してかやうな恐れある境遇に齒を暴してはならぬ。一度誤つて齒の琺瑯質を破るが最期、少し熱い物も冷い物も、直ぐに內部の石灰質の根に來て居る神經に感じて痛みを覺えるのみならず、酸い食物はこゝから入つて石灰質を犯し溶し、腐敗の細菌は直ぐに內部へ攻め込んで、蟲齒の製造に取りかかる。齒の養生としては、先づ此過冷過熱を避くるを第一にして、酸い物、纖維多き物、夫から不潔を敵と心得、食後は必ず楊子を使ふが、溫湯で含嗽をし、ジヤリ〳〵する齒磨粉を使はぬやう、砂を嚙まぬやう、釘拔の代用などにせぬやう、夫からあまり大事に爲過ぎて、遊ばせて許り置かぬやう、此等の注意が大切です。傳手に申添へて置きます。



▲熱い湯を吹いて飲む事

熱い湯茶や御飯を吹いて飲食する其折の理論は、熱の變化奪却といふことになつて中々面白い。一體我々の呼吸して居る此空氣は、いつでも何處のでも、必ずいくらかの水分を眼に見えぬ水蒸氣の形にして持つて居

るもので、空氣が水分を含む其分量は、水さへ十分あればいつも同じといふ譯には行かず、是非其時の温度の支配を受けねばならぬ。例へば、こゝに箱か何かの中に閉ぢ込めた空氣があるとし、其中に水を入れて、取りたい丈取らせるとしても、取る分量は温度によつてちやんと一定して居て、攝氏寒暖計零度のものが一なら、同く十度のものは凡そ二、十五度のものは凡そ三、二十度のものは凡そ四、三十度のものは凡六、飛んで五十度になれば凡二十、九十度になれば凡そ百十五、夫から水の沸き立つ温度即ち百度になれば凡百七十、こんな勘定になる。さて空氣がかく其温度々々に應じて取り得る限りの水分を取つたとすれば、これが即ち飽和空氣で、此以上は取らうとはせないが、若し空氣の水分が其温度相應以下ならば、機會さへあれば飽和までは取らうと熱中する。そこでやつと本題に入るが、今茲に一椀の熱湯があるとする、すると此湯の上にある空氣は此の熱を得て暖まると同時に、其暖まつた温度相當の水分を蒸氣の形にして自分に取る。即ち湯の上の空氣は飽和にあらずんば、飽和近くなる。勿論此空氣は暖まるにつれ膨らんで上へ上り、其空虚を補はんとして、外から空氣が入つて來て、かく始終そこに空氣の運動はあるが、若し之に人力を加へて此運動を一層盛にしたならば、其結果はどうなるだらうか。第一斷えずそこへ入つて行く比較的冷い空氣に熱を分けてやる爲に、湯の持つて居る熱は段々減つて、即ち湯は冷める。熱い御飯でも汁でも同じこと、之を吹くといふことは、其の上の空氣を始終入り代らせるといふことだから、熱い湯茶御飯は吹けば冷めねばならぬ。が、これは只一つ、しかも弱い一つの理由だ。吹いて冷める理由にはもつと有力なのが今一つある。物理上の法則として、如何なる液體を問はず、これが形を變へる時には、必ずそこに熱の出入が附いて廻る。廣く言へば一切の物質は熱の出入なくして狀態を變へることは出來ないものだ。液體の變態には二色ある。一つは固結つて固體になる。今一つは蒸發して瓦斯蒸氣の形になる。水について言へば、一方には氷雪一方

には目に見えぬ水蒸氣。さて言ふ迄もなく此變態を催す原因は熱だ。が、之と同時にそこに熱の變態といふ面白い結果が伴つて行く。水を例に取つて言はうか。こゝに一匁の水があるとする、此水が冷へれば氷になる、氷になると共にそこへ其中から熱が出て來る、其分量は八十匁の水を攝氏寒暖計の一度丈暖める程のものだ。又こゝに同じ一匁の水があるとする、此水が暖まれば水蒸氣になつて立つて行く、其時きつとそこから熱を奪ひ取る、其分量は氷になる場合よりはずんと多くて、凡五百三十七匁の水を攝氏一度温める丈のものに相當する、これ丈の熱は最早熱ではない、別のあるものだ。雪の日は割合暖かいといふ事實は前の場合の一適例で、熱い湯や御飯を吹いて飲み又食ふといふ事實が正に後の場合の一適例だ。湯を吹く、其上の飽和空氣は追ひ遣られて不飽和空氣が代つて來る、此不飽和空氣は必ず湯の一部を水蒸氣にして取る、其時今言ふの丈の熱を熱でない形のものにして持つて行く、熱を取られて湯は冷める、冷めたところから飲む、熱發せない、かうなるのだ。熱が化けて水蒸氣の中に含まれて居る此あるものを潜熱と名づけておく。が、潜熱は熱ではない、水蒸氣が冷えて水に戻る時は復び熱と化けて出て來るあるものだ。丁度懐中の金錢が熱ならば、潜熱は信用と言ふたやうなもの、熱が手にある饅頭なら潜熱は財布にある金錢とも見やうか。

疲れた足へ燒酎を吹くとか、庭へ水を打つとか、濡手拭で顏を拭くとか、以上の類例はいくらもあらう。熱い日には水が多く水蒸氣に化けて熱を奪つてくれ、寒い日には水蒸氣が雨露雪になり、水が氷雪になつて熱を出してくれ、かくして氣候を調和してくれる、自然の經濟の實に微妙なることは、此潜熱の分量が固體のにせよ、液體のにせよ、萬物中水が最大であるといふ他の一事實と合せて、只驚かるゝばかりである。

▲茶椀から口へ

吹いて冷された湯茶が吸られて茶椀から口へ入つて行くのは、喞筒で水を吸ひ上げ、蠅や蜘蛛が天井裏を逆

さに歩き、頬に堅が寄り、洋燈に火屋を用ひ、風が吹き、龍巻が上るなど、大體同じ道理に基づく空氣壓力の現象だ。昔のある學者が自然は空虚を嫌ふと言ふた通り、ある一ケ處に空氣の無い處、又は薄い處が起れば、外の空氣は必ず此不平均を平均せやうと其處へ向つて壓し進んで來る、これが即ち「自然の目的は平均にあり」といふ大法則の實現だ。さて湯を飲まうとする時は、皆様各自の身体で吟味すれば分る通り、（知らず識らずやつて居ることだが）乾度先づ口をすぼめ、肺を膨ませて口と氣管の中の空氣を肺の方へ引く。すると前にした喞筒の說明と同じ譯で、湯の面を壓して居る外の空氣が平均の規則によつて湯を口の中へ壓し入れる。これ丈のもの。子供が乳を吸ふのも、茶漬すラ／＼と搔き込むのも同じ道理。さて湯は口へ入つた。引かれる空氣に續いて肺の中へ入つては大變。これにはちやんと夫丈の用意がある。口を開いて鏡で奥を見れば直ぐに合點が行く通り、氣道に蓋があつて、物が來ると見れば早速に門を閉ぢてしまふ。どうかして此作用が甘く行かぬと咽る。咽るといふことは、氣管へ入つた物を拂ひ出す自然の作用で、咳嗽と同じこと、肺の筋肉が肺を壓し締めて、其中の空氣を勢強く外へ彈き出す、言はゞ空氣鐵砲の道理。食物が氣管へ紛れ込んでも、直ぐ如此追ひ出されるから差支は無いものゝ、何せ苦しいのみか、見苦しいものだから、食事は緩り落付いてやるべきもの。

口の内の物を嚥み下す作用は、一つには口を閉め、口（食道）をすぼめ、其中の空氣を濃く、壓力を大くして、後ろから食物を推させると同時に、胃の方を開かせ、其中の空氣を薄く、壓力を小くして引込ませると云ふこと、及び一つには、食物の重みと、食道の收縮力とで、之を胃の中へ送り込むといふことになるのだ。

△智識は‖新運動の活物なり、道德は萬世不易の定則なり
これはボツクルといふ學者の言です。智は移り動き、德は變ぜず。

△美婦人は大抵醜男子の手に歸す
西洋の諺ですが誠に世間の實狀を穿ち得たものです。

一日醫者

糸左近

左に揭ぐる諸病は、到底素人療法の出來るものでは無いが、これに就いて餘り多くの質問があるから、此處に貴女方のお心得までに、述ぶるのである。

▲卵巢囊腫　俗に之を「チヤウマン」といつてゐる。

〔原因〕東西の學者が、色々と、自分だけでは斯うであると、論じてゐる人もあるけれど、未だそれが輿論とならぬ位疑はしい原因であるから、素人方には知る必要は無い。

〔病狀〕初めの中は、下腹が張るやうな感覺がし、次第に便秘、或は小便が出難くなり、或は下肢が痛み、或は下肢が痲痺れて其の上浮腫を催し、脚氣で無いかと思つてゐると、骨盤の上部に、移動性の腫瘍が手に觸るゝやうになる、斯うなれば誰にでも卵巢囊腫で無いかとの疑ひが起る、それより段々腹部が大きく張つて、恰かも妊娠者の如くになり、尙進めば靜脈大いに張つて腹部益々大きく布袋の腹も遠く及ばぬやうになる、事茲に至れば、胃、腸、子宮、肺臟、心臟など悉く壓迫を受け、呼吸困難、或は嘔吐を催し、食欲次第に減り、全身衰弱所謂脹滿の太り死になるのである。

〔療法〕これは卵巢を截り取るより外に仕方は無い、病の進まぬ中に截り除けば、四分の三即ち百人に對して七十五人までは生命を全うするものである、然るに彼是時を移し、愈々布袋腹になれば、穿刺術とて臍の下に「トレーカル」といふ器械を刺し、水を取る法もあれど、これで治つたといふのは殆んど無い、唯中には七十六回も水を取つて、滋養食品ばかりで身を固め、二十八歳より七十七歳まで殆んど五十年の間、面白からぬ月日を送つたといふ人もあると獨逸の書物に書いてある位である。

偖本病に就いて大いに素人方の注意すべき事がある。それは何かといふに醫者の診斷である、或る婦人が下腹に何か腫瘍の如き物が手に觸るゝより早速醫者の診察を請へば、これは卵巢囊腫で、日を經るに從ひ、遂

に眼痛になるから、早く入院して截れといふ、然らば仰せに從ひませうと、直様手術を受けたれば、豈圖らんや卵巢囊腫でも何でも無い、唯魔醉劑を嗅いて腹を切られ損といふことだけに止まり、それから折角切つた腹を縫つて其の腫瘍の上に、水銀軟膏を貼つておいたら、數日にして跡方も無く治つたといふ馬鹿々々しき話もある、又或る子無き妻君が漸次腹部の膨るゝより、これは定めし妊娠ならんと思ひながらも、兎に角甲醫者に診て貰つた所が、卵巢囊腫との診斷、尙疑がはしく思うて乙醫者の許に往けば、妊娠目出度〳〵と請け合ふ、何うか子を一人欲しやと祈つてゐたのであるから天の賜物と此の方に從うた、成程日を經るに從うて胎兒の動くやうにも感せられ愈々妊娠に相違無しやれ赤飯をふかせ、やれ神酒を上げよと、親族一同大騷ぎで、月の到るを待ちに待てども生れず一年經てども尙見えず、二年經てども尙見えず千年萬年經つたとてといふやうなるより、丙大醫の判斷を請へば、大醫は莞爾と笑ひ、「これは意識妊娠といふもので、子を欲しやと渇望してゐる人に往々あるものである。」といはれてイヤハヤ狐に魅されたやうな始末。この外妊娠と思ひの外卵巢囊腫であつたり、卵巢囊腫が妊娠であつたりすることもあるから、婦人科專門大醫の診斷を受けて何事も處置せねばならぬ、返す〳〵も大手術を受けようといふ人は、大いに注意せねばならぬ、が併し大醫の診斷を受けながら尙躊躇して時を誤つてはならぬ。

▲子宮脫出

〔原因〕劇しく腹部を壓したり、或は難產後、或は老年の爲などである。

〔病狀〕これには全脫と不全脫との種類はあるが、兎に角子宮が垂れて出るのである。昔の未開の世には子宮脫失の人を見世物にして、此の通り人間の腑から茄子が下つてゐるなど、殘酷にも病苦の人を群集の中に曝したとは、聞くも忌はしき話である、其の俄かに出るのは劇しき痛みを發し、それがために氣絶する者があるけれど、漸次に出るのは下腹重く、腰痛み、何

と無く苦しいなアと思ひつゝ日を送る中、歩行時に一物が股間に垂れて出るやうな感覺がし、續いて小便が出難くなつたり便秘がしたり、起つたり座つたりに甚だ困難してゐる揚句、遂に半脱或は全脱となるのである。初めの中は仰に臥てをれば自然と納るけれど、斯樣なことが屢々ある毎に納まら無くなり、之を治療せざれば生涯脱出を以て終る人がある、嗚呼此の世を果無しと思ふであらう。

〔療法〕これも初期の中に專門名醫の整復術を乞へば必ず全治するものである。されど衰弱したる老婦や或は手術を好まぬ者は「マイエル氏軟護謨環」といふ器械を挿み勞働せぬやうにしてをれば輕きはそれにて全治し、重きは生涯これを挿んで可成運動せぬやうに愼しむのである、この器械は幾個も求めおき、四五週間毎に取換へ大いに洗ひ淨めねばならぬ、さうせぬと臭氣が伴うて、遂に膣炎といふ他病を發すものである下等社會に子宮脫出の多いのは產後口を經ずして勞働に取り掛るものが多いからである。故に何人も三週間は蓐の中に平らかに臥てゐて、便通を調へ、精神を愉快にし、三週後術七八十日の間



は平時の生活に復せぬこそあらまほしけれ。

▲子宮轉位

〔原因〕今爰に子宮轉位といふは、前屈、前轉、後屈、後轉を總稱したのである、前屈は先天或は産後或は腹膜炎或は劇しき腹壓で、前轉は他の子宮病が源となるのが多い。後屈、後轉は何れも膀胱が膨れたり劇しい腹壓を受けたり及び他の子宮病からなる。

〔病狀〕何れも月經が困難になり、且つ其の際劇しい痛みを發し、小便が出難くなり、屢ゝ腰痛を感じ、或は出血することなどあるものである。斯の子宮轉位症の人は必ず姙娠せぬと斷言しても可い、されど不姙娠の婦人は必ずしも子宮轉位してをるとは限られぬ、間違つてはならぬ。

〔療法〕これも大家の手術を請うて、早く完全なる子宮になし、人世の義務を遂げねばならぬ。子無き人は或は子宮轉位ではあるまいかと、一應名醫の診察を受くることは必要である、轉位を整へて始めて姙娠したる例も多くあることである、或る人は日本婦人にして、身の丈五尺を越え、しかも筋肉能く肥えたる者は大抵子を生まずといふけれど、これも當にはならぬ、現に余の知つてゐる女は丈五尺三寸餘で、頗る太つて立派な體格なれど十四人の兒を生んだものもある。抑々不姙娠の原因はこれを確定することは出來ぬ、十年間伴れ添うてゐたる夫婦が子無き故を以て相離れ、男は新に妻を迎へ、女も亦異夫に嫁し、何れも子を設けたる實話もある。斯樣な次第であるから、人爲的に子を生むことの出來ぬものである、然るに新聞の廣告などに子をもつ保證藥などゝ掲げてあるが、實に人を欺くの甚しきものと謂はねばならぬ。

▲生殖器閉塞

これを說く前に嘗て私に當て、憐れなる質問書を贈られたる方が三四人ある、今その中の一つの文を御紹介申すことの決して不必要ではないと信ずるのである。

前略　妾は固より美しき容貌にも候はねば、又歌人にもあらず候へども、唯一つ小野小町姫に似たることこれあり候。十五歳までは何の事も無く無邪氣に日を送り候へども、十五歳の暮つ方より、毎月下旬に

到り候へば、大凡五日間は局部に一方ならぬ痛みをおこし、其の困難は何とも拙き筆には形容致し兼候先生何卒この不幸なる女を御救ひ下され候はずや。

〔原因〕先天と他の潰瘍との二通りあるが、主に前者である、前者に亦處女膜閉塞、膣閉塞、子宮閉塞の三種あつて、後者にまた膣閉塞子宮閉塞の二種あるものである。



〔病　狀〕何種類の閉塞に拘らず、前の手紙の文章にある通り、幼少の折は何の故障も無く、何も知らずに日を送つてゐるが、春機發動期になつて月經が催す頃になると、其の月經の出處が無いから、言はゞ經血が溜つて痛みをおこし、非常なる困難をするのである。

〔療法〕昔ならば『花の色は移りにけりな徒らに我が身世に經るながめせしまに。』などゝ、人世を味氣無く思はねばならぬかも知れぬけれど、醫術進歩の今日に於ては、生殖器の閉塞位を治すは、何の造作も無いことで、専門の大醫ならば、僅かに五六週間の手術を以て天晴一人前の婦人となすのである、廣き世の中には到底治らぬものと諦めて其の不幸を怨らんでゐる方も澤山あらうから一言こゝに辨じておくのである、醫者は何の何某は斯うであると、他人に洩せば法律上の罪人になるものであるから醫者には何事も秘めずに早く治療を受けて人世の幸福を全くし玉へ。

▲分娩失神

〔原因〕言ふまでも無く、分娩の爲に腦貧血を發するのである。

〔病　狀〕皮膚蒼白くなり、唇の色は土色を呈はし、四肢は冷くなり、脈は劇しく搏ち、耳鳴り、眩暈を發し氣は次第に遠くなつて、遂に人事不省となるのである

〔療法〕これは誰でも心得ておかねばならぬ、殊に姙婦のある家族は前以て藥などを備へておくは人たるものの道であらう。斯る場合は固より醫者を招くに相違無い、されど其の醫者が來るまでの瞬間が命脈の關する所、是に於て「一日醫者」の讀者は一方には醫者を迎へに人を走らせ、自らは大聲を揚げて失神者の名を呼びながら、頭を低く下げ平に臥さしめ、顏面には冷水を吹き、依的兒を嗅がしめ、少量の葡萄酒を飲しむ、失神者は嗚呼夢のやうであつたと語る時しも亦醫者の車は玄關にガラ〱と響く、『來た序でに一寸脈を診ませう。』位で難無く濟み、家は和氣藹々喜び笑ふ聲は四邊に響くのである。

▲産褥熱

〔原因〕産褥熱黴菌で、この黴菌が創口より入るのである、これに二種あつて、甲は産褥時の分泌物が變敗して病毒となるを自家感染と云ひ、乙は他より毒物が直接に創口に傳ふので、之を外部感染といふ、兎に角この黴菌に就いて、色々の議論もあるが煩はしければ略しておかう。

〔病　狀〕俄かに惡寒を催し、ガタ〱戰慄ひ、脈は劇しく搏ち、熱は急に三十九度乃至四十度以上にも昇り續いて嘔吐を發し、或は下利し、これより殆ど失神者の如くに眠り惡臭ある汚露を漏し、乳汁の分泌は固より止み、續いて神經痛を發し、大いに悶へ苦しみ、次第に衰弱するものである。

〔療法〕病室や衣服、夜具、蒲團には悉く消毒を行ひ勉めて空氣の流通を善くし、消化し易き滋養の食物を與へ、便通のあるやう注意し、石炭酸水を以て膣門内を洗ひ、咖啡や葡萄酒を與へて興奮せしむるやうに導き

鹽酸規尼涅　〇、五

をオプラットに包み朝夕二回服ましめ、その他　規那煎　四、〇を温湯百瓦(半合)にて十五分間煎じ、その煎じ詰つた丈水を入れ、白糖適宜を加へて一日三回に分けて服むのが可い。

斯の様に療法を述べてみるとはいふもの丶、これは仲仲の重病で専門の醫者すらも治し難いものであるから素人療法を施さる丶ものでは、斷然無い、故に唯醫學思想を養成する目的までに記したものである。

家政のくさぐさ

食物と胃の腑

胃は人體萬事の基たり、富を得んが爲めには如何なる困難も堪ゆる人多き世の中に富を得るの最大條件たる胃腑の健全を度外に置くは不思儀の至りなり、啻に富を得るの一事のみにあらず、凡そ何事にまれ、其成功の要訣は胃を健全にするにあり、胃腑健全なれば他の諸機關も随つて健全なるべく、全身自から病なきに至らん、健康の身體には自から健全の精神の宿る習ひなれば其の事業に成功するも又怪しむに足らず。世には精神の身體に及ぼす影響の大なるを知りて胃腑の精神に及ぼす影響の大なるには全く氣付かざる人多し。嘆すべし。

胃腑の健全を圖るには主として飲食及び運動の注意を怠るべからず、吾人今外國の衛生雜誌より食物衛生に關する諸件を拔萃して参考に供すべし。

近世の人は其の飲食に關して五種に分てり、曰くヒステリー、曰く好事家、曰く節儉家、曰く大食家、曰く要愼家、是れなり而して彼のヒステリー家は病人なれば別に論ずるまでもなし、好事家の中には今は稀なる美食家をも含みて、すべて口腹の慾に從ひて全身の健康などには少しも頓着せざる人なり。

又普通節儉家といふは社會に其數頗る多く、且つ又頗る肝要なる階級たり、若し彼等にして肉體上の要求を、精神上の要求と平等の位地に置かば、社會の最好人物

は多くはこの階級に屬すべきも、彼等は往々精神の爲めに肉體を犧牲として其の結果は精神肉體を合せ害するなり。

大食家は其の自己を害すること節儉家よりも甚し、こは何人も其知人間に有する世間ありうちの人物なり、玆に之が極端の例二件を引くべし。

ロンドンの或勞働者は某家丁年の祝宴に招かれて食卓に就きしに、佳肴珍羞山なす計に盛られたり、彼は日ごろの食慾を滿足せしむるは此の時なりと考へけん、詰め込み／＼て毎半時に戸外に出で、指を喉中にさし入れて、胃腑に入りたる食物を吐き、更に卓に就きて他の珍味を貪るの餘地を爲したりといふ、また或の觀察者は某貴人の饗宴に招かれしとき、貴婦人たちの大食に驚き、其の記事を認めたるうちに下の如き一節あり、曰く一の貴婦人は先づ鹽漬の鮭をたうべ、次に牛肉の大切、鳩のパイ、蝦の膾、鷄の一脚など、したゝかにものして、さてイチゴ、乳酪を喫し一休みす、少頃にして余は再びかの婦人の茶を飮み菓子を喫し居るを見、最早看飽きて散歩に出掛けしが、歸つて見れば件の婦人はまたもや鹽漬の鮭をたうべつゝ、更に餘念なかりき、余は其の後の手際を見果たさずして立ち去りぬ、云々、かゝる大食の結果として起る病症は各人自から自己を支配すべきものならざるべからず、されど吾人が心づきたる注意を述ぶるも決して無用の業にはあらず。

まづ食事は四時間乃至五時間を隔つべきを正當なる方則となす、されど非常に骨の折るゝ働らきを成したる場合に限り少許の間食を爲すもよし、朝飯はなるべく實のある食事を爲すを要す、茶及び珈琲は蛋白質の消化を妨ぐる事多し、殊に西洋にて用ゐらるゝものは、品質善良ならざるが多し、之れに代ふるに苦味のビール一椀を傾くるを可とす。小晝飯にはビーフチー（牛肉茶）の一杯に燒パンの一塊、或は卷パンとバタ之れに牛乳の一杯などよかるべし。而して晝飯は靜かに喫するを可とす、且つ一日の重なる食事として心意上、肉體上の滿足を來すべきものならざるべからず。消化

一方よりいはゞ幾品の食物よりは一品の方よろしからんも、吾人は幾品も變りたる品を喜ぶなり。又ソツプ一匙程にてよし、又魚肉はバタ、ソースを掛けずして食すべし。

流行社會には習慣となり居れど、消化に意を用ふる人の避くべきは晝食の間に氷を喫する事なり、晝食に既に幾品の皿を盡したる後は一塊の氷を喫する誠に心地よく感ずれども是大なる心得違なり、胃中に氷を投ずれば直ちに胃の消化を中止して再び働かざるに至る、氷は元來口中を爽やかにする好品なれば適時の時に喫するを妨げず、午後五時の茶の代用を成さば尤も妙なり。彼の米國人が晩餐の間に



氷を喫するも、晝飯後に氷を喫すると其有害は同じ。

飲料は各人その嗜好を異すれば猥りに嗜好を云々すべきにあらざれど、まづ晝餐間の飲料は普通の香竄葡萄酒の一ピント（二合六勺餘）にて十分なり、アルコールは食慾を刺激するの効あり、又過多の食慾に對してはそれを減殺するの効あれば少量を飲用するを妨げず、就寢前に飲料を要する人はビフチー（牛肉茶）の一杯を啜るを可とす。

之を要するに學術、商業、工藝等に成効し、又精神的修養を圖らんとするには、まづ胃腑の健全を圖らざるべからず、既に疾病に罹らば醫師に就くべき事勿論なれども單に加減の不快

なる如き場合には、患者自から之を治療すべし。食事に注意し、身體を清潔にし、適宜の運動をなさば、多くは快癒の効を見るべし。胃腑の健康は實に萬事の基たり。

以上の諸說、歐洲人の爲めに立論するものなれば其飲食に關する注意の如き之を一々我國に適用し難しとするも其の大意は頗る參考に供すべきものあり、胃の健全は決して等閑に附すべきにあらざるなり。

齒牙の養生

△乳齒の保護　乳齒は生後七八ヶ月より、凡そ三十ヶ月にして調ひ、又六歳頃より十二三歳の間に永久齒との交換を終るべき者なり、されど其乳齒の期間に一度齲齒は罹れば、大いに身體の發育を妨たげ、爲めに種種の疾患を誘起するのみならず、交換期に至るも、乳齒腐蝕の爲め、永久齒をして正しき位置に發生せしむる事能はずして、亂排せしむる憂あり、若し永久齒亂排すれば、天賦の美を傷うのみならず、掃除を充分になす事能はざるが故に、永久齒も隨て、齲齒等に罹り易し、故に乳齒の時に於て、能く注意し、掃除を怠らず、傍ら時々齒科醫の診察を請け、若し齲齒あらば、速かに治療を加へ、又永久齒との交換期迫れば、相當の手術を受け、終生の不幸を避しむるは、此れ親たるの義務にして、日常能く注意せざるべからず。

元來齲齒は社會生活程度の高まると共にその步調を同ふする者の如く、近來益々此病の多きを見るに至る、然るに世人は往々此れを看るに局處の疾患なりとして意に留ず、輕々に看過するの習慣あり、抑も齲齒は、胃腸直接の關係物にして、隨て身體の健康を害し、大いに壽命を妨ぐるの疾患をなすものなり、誠に怖る可らず、依て此れが豫防法は種々ありと雖、先づ掃除の完全と食物の撰擇等を以て主なる者とす、而してその除掃は每朝、起床後は勿論、每食後、齒刷子を精密に使用し、齒間に食物の殘留のなからしむるにあり、此れ第一の要にして第二は食物中過度の硬固物の咀嚼

を避け、以て琺瑯質を損せざらしむるにあり、然れども吾人の食物中には啻に柔軟なる物質而已を以て、充分なる營養を得ものに非らず、故に硬固の食物も滋養ある物は、時として食すべきの必用なきにあらず、されば能く過度の硬固物のみを避け、能く注意して用ゆれば、琺瑯質を損せざるのみならず、歯牙並に歯牙を抱圍せる骨をして健固ならしむるの効力あり、若し又不幸にして、齲歯發生せる時は、速かに歯科醫に就き、相當の治療を請ざるべからず、齲歯の爲に續發する恐るべき疾患は實に多し、故に豫じめ防ぎて、大事に及ばざる樣注意ありたし。



△歯石の掃除　歯石は唾液中の一物質の沈澱物なるが故に、如何に歯刷子にて清潔に掃除を爲る人と雖も歯石は必ず附着するものなり、而して其歯石の害たる、啻に口内の汚臭に止まらずして、歯齦を充血せしめ、或は退縮せしめ、自然に歯牙をして動搖せしむ、又歯石の爲に一の誘發病あり、此病は齦緣より膿を漏し、或は次第に動搖せしめ、歯牙脱落の憂を速ならしむ、故に歯石除去は、必ず一年二回以上歯科醫に就きて爲さゞる可からず、歯石除去は前述の害を豫防するのみならず、歯牙全體の檢

査を受ると同くして、未だ自覺せざる疾患潜伏するも、醫師の注意を受れば初期に治療を爲す事を得るが故に、大事に及ばずして終生の幸福を得に至る、依て齒石除去の事は何人も能く記臆して必ず實行すべきものなり。

△齒刷子と齒磨粉　齒刷子は毛製と護謨製の二種あれど、毛製を用べし、毛製中又た種々の品あるも、毛は軟硬中性巾を撰び、總て品質の善良なる物を使用すべし、其使用法は少量の齒磨粉を附け、外側は總て齒の横に用ひ、齒の内側は縦に用る事能はざるが故に用ひ能く内外並に咀嚼面を注意して使用すべし、又た齒磨粉は充分注意すべし、粗惡の品を用ゆる時は、齒牙を損ずる事甚だし、若し齒磨粉の撰定に困しまば齒科醫の教を受くべし、齒は老年に向へば脱落するを當然の如く思ふる者多し、此れ誤解の甚しきものにして、人生百年の壽を保てば百年の齒を保つ者にして、齒牙の生に先んじて脱落するは保護の害を得ざる結果也と知るべし。

凍瘡の豫防

冬季は一般に凍瘡に惱むもの多く、而も一旦之を患ふるときは氣候の變遷を待つにあらざれば容易に治し難きものにて、就中頑是なき小兒抔のこれに罹れるは見るもいぢらしきものなるが、小兒のこれに罹り易きは全く皮膚軟かにして、外氣の寒熱に對する抵抗力の弱きに依る譯なれば、勉めて外氣の激變に逢ふことなきやう保護すると同時に、毎夜就褥前入湯せしむるか、或は手足を湯にて温ためしむるを良とす、されど不幸にして之に罹りたるときは、その甚しからざるに先ち次の治療法を用ゆべし。即ち左記處方により調劑したるものを湯上り後、又は就寢前、局部に塗りつけ。置けば、翌朝までには大抵腫を引かしめ得るものにてかくすること連日なれば、遂に治癒するに至るべし、この代價は他の藥品に比すれば稍不廉にして、實價二十錢許を要すれば、藥局に調劑を托するときは五十錢餘を支拂はざるべからず、尙醫家の藥局に調劑を請ふ

場合にはその許を得て少許のアルカリを混用せば、功能一層大なるべし、

薄荷脳五グラム　オレフ油九グラム　ザロール九グラム　ヲノリン十八グラム

小兒の抱寝

初生兒から二三歳位迄は多く母親が抱寝をするのであるが其抱寝に就て二三の注意がある。

分娩後は産婦自身の疲勞恢復を計る爲め自然の作用として非常に睡眠氣を催すもので、初産婦も經産婦も寢房でない者も睡眠氣を催すもの故此時に於ては注意せねばならぬ。



小兒に乳を哺ませるには起り直り坐つて哺ませるやうに仕度い、又抱寝しながら哺ませるとしても右の脇に抱いて居て左の乳を哺ませると母親の體軀が半ば小兒の方へ傾くゆゑ甚危險であるから右の脇へ抱いて居る時は右の乳房左の脇へ抱て居る時は左の乳房を哺ませるやうにすれば幾分か危險が尠ない然しながら成るべく寢て居て哺ませぬやうしたい。

今一つは小兒を抱寢をするに就て母親の息が小兒の顔へ當らぬやうにすること、何故なれば人の呼吸は、吸ふ息で身體に必要な空氣中の酸素を吸ひ呼く息で害ある炭素を吹き出すのであるから、多量の

炭酸を含んで居る息を小兒に吸はせるのは非常に害があるから之は初生兒のみならず總て子供を抱寢をする時、又は子共同士寢かした時、成可其方向を替て互に呼く息を嗅ぎ合はぬやう注意を仕度い。

沐浴と掃除

沐浴して常に身體を清潔にする事を務むるは我國古來より上下に通じたる美風にして、身體の清潔に注意するの深きこと我國人の如きは比類なし、この事は世界萬國の人に對して十分に誇るに足るべし。

沐浴は身體を清潔にするが上に、如何なる効用ありやと云ふに、人の身體は新陳代謝の運爲暫くも休まざるものにて、體内の不用物は常に體外に向て滲出するが故に、力めて洗浄せざれば垢膩は皮膚の面に付着して氣孔を塞ぎ、蒸發氣の通路を妨ぐるが上に、垢膩は有害の成分を有して、傳染病毒感染の媒介を爲すに至る實に恐るべきの至りなり、故に沐浴を怠るの結果は、種々の傳染病に罹るの患は免るべからざることゝ知るべし、彼の勞働、遠足若くは勉强したる後、沐浴を取りて血液の循環盛んに、神經の機能の敏活となるの愉快は、誰人も實驗のことならん、されど温浴に尤も忌むべきは熱湯を好むの習慣なり、過度の熱湯に浴するは大害と知るべし。

日々家の内外に多く生ずるものは塵埃にして、之を適當に處分するは、一家の衛生上より見るも、品位上より眺むるも必要缺くべからざるものとす、塵積もりて山となるの諺にもれず、庭園の塵埃、忽ち積もりて山を爲すのみならず、少し掃除を怠れば、戸障子の骨、などには塵埃堆を爲し、床の間の板敷などには、指もて字を書してあり〳〵と辨ずるに至る。

此の如き不潔なる住居にては、不知不識の間に呼吸より、吸入する所の塵埃少からざることとなるべく、又之に依りて人の健康を害することも少からざることとなるべし。

塵埃に屬するもの丶中に、全く捨つべきものと捨つべ

からざるものとの差別あれば、能く之を分ちて食物の殘渣、下駄草履の廢物、鑵詰の殘片、玩具の破片などは、宅地の隅に餘地あらば時々に燒捨つるをよしとす又紙屑、布片など幾分の代價あるものは、屋隅に藏し置きて、時に賣拂ふを要す、汚れ垢付きたるものを其儘に葛籠簞笥などに入置は、心なき所作なれば、能く洗濯して後に藏するか又は能く太陽に乾かし塵埃を叩出して藏するを宜しとす。

汚れ垢付きたる儘、簞笥などに入置けば、數年の後に至りても、若し其ものに病毒あるものなれば、其毒に感ずるの恐れあり、嘗て猩紅熱にて死せる小兒の衣類を親の不注意より其儘納め置き、翌年末に出して他の小兒に着せしめせに、直ちに同病に侵されたる事あり恐るべきの至りなり。

一體の餘りに人の注意を喚起せざる處に注意し見れば一人一家の注意、不注意と潔不潔は、自ら分るものなり人體にして爪、歯などの清潔なるは、其人の清潔を好むを知るべく、一家にして兩便所の清潔なるを見ば主婦たる人の清潔に注意するの度の深きはこれにて察せられ、是を以て他に押すに多く誤らざるもの丶如し。

行火爐の害

冬期の寒さを防ぎ、室内を温むる爲に用ふる器械は種種あつて、火鉢、圍爐裡、炬燵、行火爐、懷爐、湯婆の外、近頃は種々の暖爐等が出來て、夫れ〳〵其使用法を異にして居るが、こゝには唯夜間寢る時の寒さを凌ぐ爲め、一般に多くの家で用ひ居る炬燵と、行火爐の事を申そう殊に婦人は冷へ性と稱へて、自分のみならず、小兒を抱て此の炬燵に寢たり、行火爐を入れて眠つたりして、夜半になると暑くなつて夜具を剝ぎ、腕を出し一所に寢て居る小兒は又一層暑くなつて身體を乘り出し、甚しきに至つては全く蒲團の外へ轉げ出たのを母親は知ず遂には身體が氷の如くに成つて居る事がある、此時に嚔が出ると即ち感冒を引くのであるから、折角暖まる爲に炬燵に寢行火爐を入れても、其

炬燵や行火爐の爲めに却つて感冒を引てはなんにもならない、さてこの風邪は春冬の二期が最もかゝり易くて、通例外氣の急變即ち時候が今日暖かで明日は寒く寒暖計に於ても僅に一日を隔てゝ十度以上二十度も昇降するやうな時に侵さるので、鼻より侵さるゝを鼻カタル、咽喉を侵さるゝを喉咽カタル氣管支を侵さるゝのを氣管支カタルと言つて、其侵される部分によつて同じ感冒でも名が異うのであるが、兎に角感冒からして種々な病を起すとすれば、感冒を豫防するのは總ての病を豫防する原と考て、肺の弱き人なぞは感冒を防ぐのが肝要である然るに其感冒を防ぐに就ては只身體を温にする事のみを勸め、衣服の厚着をするとか懐爐を持とか、あんかを入れて寢るとか、只管温暖にするのみを感冒の豫防と心得て居るのは大なる誤りで之れが爲に偶々火の氣を離れると忽ち風を引くのである、殊に人間は絶へず暖かにして居ると却つて皮膚に粟を生ずる等のことがある、これは既に感冒の初期であるから寒夜あんかを入れて眠り、夜半に暑くなつて夜具を剝ぎ、膊げ出して寒くなり、こゝに始めて目を覺すやうな事は、最も害があるから、寒夜の折に寢につく前に夜具の内をあんかで温めて置いて寢る時之を出すのが良い、又湯婆なれば通宵入れても害がないから湯婆の無い時はビールの空瓶を火にかざして能く温めてから沸湯を内れ、栓をし布片に包んで湯婆とするのは輕便である、猶感冒の豫防に効のあるのは全身の冷水拭法であるが、これは暑中から行らなければ實行しがたいのである、偖其法は毎朝水で手拭を絞り、顔頸、胸、背、手、足を摩擦的に拭ふので、年中之を行れば皮膚の抵抗力を增すから、感冒を豫防するのみならず、健康を維持する最良法である尤も小兒には行ひ難いものであるからこれは只顔面、頸部のみを拭ふて置くが良い。

感冒の注意

今日此頃の如く寒天に向ひますと乾度流行し、其折々

に口やかましく注意され、人もよく之を承知して居ながら、矢張醫師を忙殺せしめて居るのは流行性寒冐です、さて此病に罹り易い體はどんなのかと云ふと、此病は畢竟温度の差異から生ずるのであるから若し身體が冷ゆれば冷へた丈、其部に血液が多く流れて平温度の平均を失はない樣にすればよろしい、人體の組織は自然其補充機關が備つはて居るのです、例へば寒さに遭ふて毛穴が塞がると、鳥肌といふた樣に毛穴が膨れるのもその爲めで、一層寒氣が増して來ると手足がガタ／＼震ひ出し、自然と運動する爲めに熱が起つて來る、それ故手足が寒さに遭へば眞赤になる、所が皮膚の弱い人は此反應が遲鈍で、或は全く起らない、それから感じの强い人が最も多く此病に罹ります、老人や、發育の未だ充分ならざる小兒は即ちそれであります、よく身體を鍛へると申す通り、身體が適宜に發達し相當の運動をなし、或は皮膚を清淨にし抵抗力を强くして置くならば、容易に風邪には罹らぬ、また罹つても鼻カタル位で濟んでしまうのです、處が世の中には自分から此弱點を求むる人があります、例へばもう本フランネルの襯衣を着る頃でないのに、これを脫なかつたり、或は襟卷を離なしたとのない樣な人は實に其人であつて、折角寒暑に堪へる事の出來る樣に造られて居る身體を自分で弱め、一寸肌を露はせば直くゴホン／＼を始めるのであります。小兒に關しては親達が大に責任がある、觀る處によると世の親達の多くは衣服さへ多く着せればそれでよいと思つて居るが、これは大なる間違です、斯樣な風であると身體が重くつて運動が出來ぬ、また皮膚を弱めまする、それのみならず、一般の風を見ると身體の上部は中々注意するが下部には左程注意を拂ふてゐない、これまた大なる缺點であります、次に口や鼻即ち直接氣管に關係ある處に注意が足らぬ、寒風がヒユー／＼吹く日外出させるに綿入よ帽子よと大騷するが、此寒風が口鼻より入るとに氣のつかぬ人が多い樣であります、是等も亦た此流行症に罹る原因なのであります。

寒冐に犯され易き日はどうかといふに寒さの爲めであ

るといふことは無論のことですが、其次は風です、我國で一般に「かせ」と申すのも多分此爲めでありませうさて其第三は濕氣です、寒風が烈しく吹く日でも案外に犯されないが、雨が加はるとか、霙や雹が降ると最も犯され易い、今日此頃の樣な時候や、春頃に多いのですから充分に注意せられたいものです。次に、寒冒に犯され易き場合は寒風に吹かれ身を劇く樣に寒くあつても、活動して居る間は割合に犯されませんが一旦此活動を中止した後は極めて危險です、殊に汗が出る程に勞働した後は恐しいのです、それから注意せねばならないのは、人力車、滊車、電車などに乘つた時、或は隙漏る雨風に遭ふたりする時です、其折に衣服が雨にでも濡れて居るなれば、早速に脫き更へなくてはなりませぬ小兒の「おしめ」の如き母親は充分の注意を拂はなくてはならぬ、萬一にも濡れて居るのに其儘に眠らして置くなどのことがない樣にしなくてはなりませぬ、それから夜間就寢中が一番犯され易いです、窓が少し開いて居るのや、障子の破れて居るのに氣が着かなかつたりした場合即ち風が吹き入り、或は外に雨が降る時にそれを知らずに眠つて居るならば、翌朝になると急に咳が出たり、頭が重かつたり、發熱することは間々あることですが、これは餘り注意されて居りませぬ、さて此寒冒に對する注意、醫療方法、小兒のそれなどに就きましては、嘗て申たことが御座ひますから爰には述べませぬ、兎に角に平生皮膚を丈夫にすることに注意なさいませ、序に此寒冒は萬病の原因といはれて居ることに就て一寸申述べて置きます。

寒冒は病氣直接の原因にあらずして謂はゞ導火線となるのであります。大抵の人は窒扶斯でも、實布垤利亞乃至赤痢や痲疹迄が、寒冒から始まるものだと心得て居ますが、それは少々違ひます、元來窒扶斯でも、赤痢でも皆それ／＼黴菌があつて、それが傳染するので寒冒に罹つて居つた人は、比體的傳染し易いとが、ペンキ塗の家が眞先に燃へ始めると云ふ樣な次第であります、然し廣義に解釋すれば、寒冒は萬病の原因だと云ふとも出來ませうが、實際は斯樣だとの事で御座ます。

ヂフテリヤの注意

ヂフテリアが昔の馬脾風である事は、都に住む人は勿論、心得居れるが如し、是と同時に此病氣に罹りし小兒には、血清療法ほど効能ある治療法なき事も大抵の親達は知り來れるが如し、一體十年前頃には、切開術によりて小兒の命を取止め得たりとて、世人は醫術の進歩に舌を捲きたるものなるが、八年以前北里博士が血清療法を發明せしより、殆ど百發百中、是で治らぬ患者はなき有樣となり、天下の醫師靡然として此療法を用ひ居り、現に其筋にては町村役場に血清藥を備へ付けしめ居れり、併し親たちが此る妙療法あればとて其最愛の子をば一時にても危險の下に暴露すべきに非ず現に手後れとなりし時は此血清藥を用ひてただに其藥の効驗を著はすに至らで、締切るゝもの尠なからず斯る場合には其患者の咽喉を切開して、わづかに其處より呼吸を通はしめ、其間に藥の効驗を現はさしむるなり、しかも時に由ると此切開術さへ其効なき事あり、其効を奏すとも親の不注意により身體髮膚を毀傷せしめ、生れも付ぬ傷をつくるに至るは恐るべき事なり。

且つ頃日の如く風烈しく寒氣激しき時には、小兒の感冒に罹る者多く、延いて此病氣に罹る者いと多かるべし、かゝる忌な氣候は初冬の日和癖とも云べきにて、此處暫らくは度々斯る事のある者と覺悟せねばならず。

風邪は萬病の基といへど此ヂフテリアは殊に風邪が基なる故、世の親たる者切に子供をして風邪を感かせぬ樣大なる注意をなさゞるべからず、然かも人間は病の器なれば、一旦感いてしまつた上は、何分重らせぬ工風して必らず醫師の手にかくべし。

猶此病ひの前兆とも見るべきはコン〳〵と狐の如き咳をなす者あり、聲の嗄るゝ者あり、咽が痛いと訴ふる者あり、熱の出る者あり、かゝる際には必らず早速醫師の許に連れ行き治療を乞はざるべからず、勿論咳をする者必らずしもヂフテリアに非ず、熱の高まる者亦此病と極らず中には肺炎なるもあれど、素人目には、る者でなし。

寒時の衛生

▲燒傷の藥

時候から燒傷の用心をなし置くと必要なり。特に小兒のある家にては救急の手當尤も必要なり、火傷をなしたる時は早く其處を水に冷やし、其隙に石灰に熱湯を濺ぎて、その上澄の水を取り、水油（胡麻油を最上とす）を入れてかき混せ．稠厚の液汁となりたるものを傷所へ塗り、木綿を以て被ふべし、もし痛甚だしきときは水に冷やせば痛去るものなりもし又水泡を生じたる時には針にて潰し然る後藥を塗るべし冬は一日に一回、夏は二回水にてあらひ、藥を更ゆれば二三日にして醫すべし。

▲小兒の百日咳

百日咳は冬季より春季へかけて小供に罹り易すき病なり、この病は危險なるものにあらざれど、咳入ること甚だしき時は顏赤く疳出で甚だしきは眼中より血にじみ出づることありて、見るに忍びざるものなり、其治療法はなるべく體を温かくし時々灌腸して大便の通をよくし、小兒丸にても與へ、氣長く保養せしむべし。

▲リウマチスの用心

寒氣の増すに隨がひて一層の注意を要するはリウマチスを患ふる人々の上なり、その痛みは一たびこれを病みたる人の能く知る如く、骨々節々だるきが如く重きが如き、熱するが如く冷ゆるが如く、外部より撫でたればとて骨の痛みの、ゆるみ難く、隨分に困難なるものなり、之が最良の治療法は患部を冷氣に觸れしめざる樣フランネル若しくは木綿の切れにて能く包み、ソーダ或はポッタースを水に溶解して服藥し、且つ患部を甚だしく摩擦すべし、又ヨジウムチンキを患部に塗るも多少の功あるものなり。

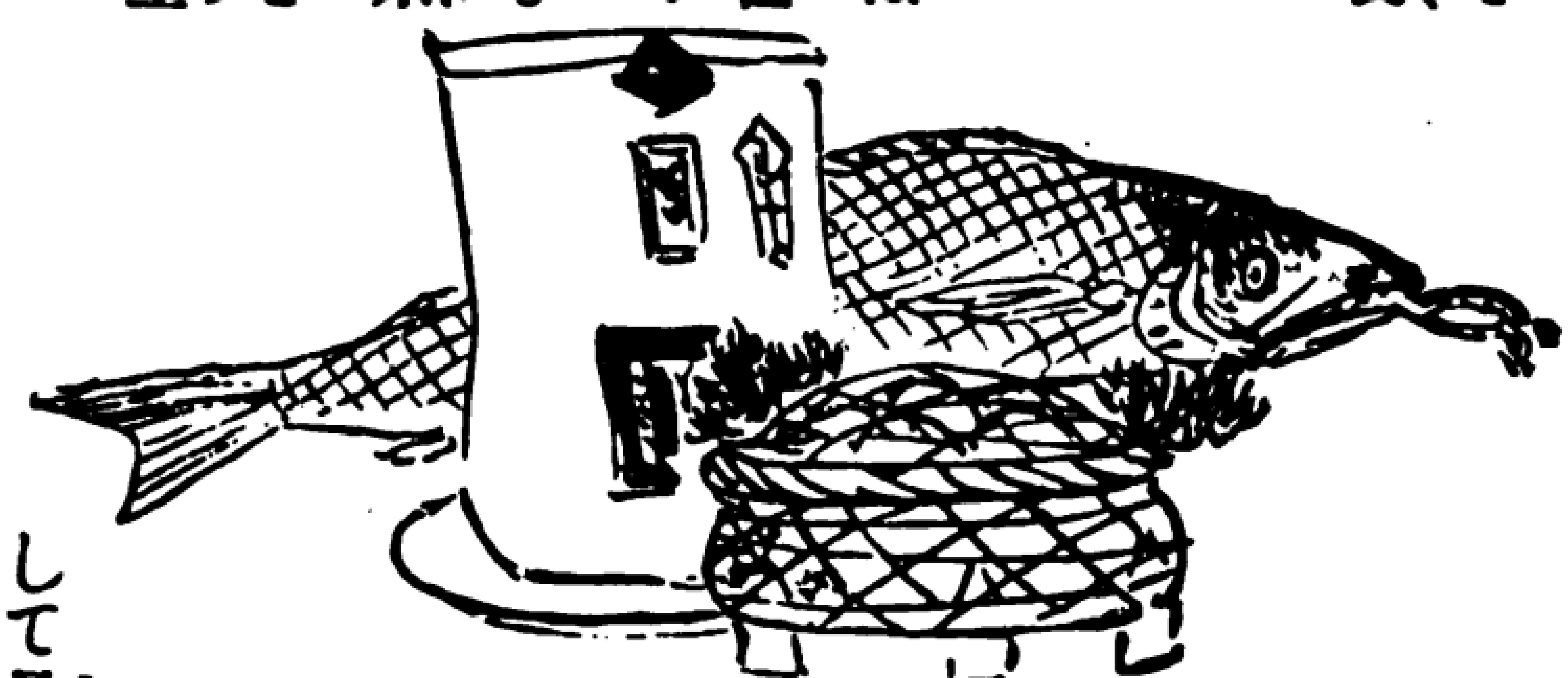
▲熱病

熱病の兆は口内の乾燥と脈搏の急速と、舌の白くなると、目の中のうるみたると、及び四體の熱し、呼吸困るしきとに由りて之を知るを得べし、何種の熱病にても熱を病める患者は、特に空氣の流通の好き處を擇ら

びて臥さしめ、又時々布を温き湯に濕して體を拭ふべし、食物は固形物を禁し、米の上湯、葛湯牛乳レモナーデ、及び燒パンを水に濕して用ゆべし、水分多き菓物は少しは用ひて可なれども、肉類の如き刺激物は醫者の免しを受くる迄は決して食すべからず。

△頭痛

頭痛に二種あり、一は胃より來るものと、他は神系痛となり、胃より來りたるものは一ゲレン計りの瀉利鹽を服用せば大方は醫すべし、尤もその間燒きパン、ビスケット、米の上湯、等の如き輕くして消化の能きものを用ひ、なるべく散歩を勉むべし、神系痛とは時に頭の半分の痛む等のことあるを云ふ、こは濃厚なる茶を飲用し、靜に一室に安坐するによりて醫することあり。



女學校以外の女子教育

女子教育の目的は婦人の智能を開發するの目的なりとは理窟上の話なれども、偖て實際となりては矢張り人の妻母たるべき資格を養ふの外なしかく定りたらば如何にして其資格を養はんか女學校に入りて正式に教を受くる女學生に就ては元より斯る事をいふの必要なし、要は唯家庭に於て學ぶ女子の資格に就てのみ、先づ第一に讀み書きを學ばすは勿論の事、日本の歷史一通りは學ばせたし、是れ何年何月何天皇崩したり云ふ事にあらず、即ち神武天皇以來、源平、藤原氏の盛衰の如き殊に歷史上の沿革などの大事件を敎ゆべし、西洋の歷史もパーレー萬國史位の大事記を學ばすべし、而して是は理論的歷史ならで、事實に基き歷史上の人物を識認せしむべし。

書簡は成るべく巧に書く樣學ぶべし、書簡の優美なる

は其人の品格を上るもの也、書躰文躰の事一通り終らば人身性理の一通りを聞かせ、之に次ぎて簡易治療法及び看護法を學ぶべし、裁縫は勿論の事、植物學と理化學の一端とを學ばせたし、日本地理も學ぶべし、是れ植物理化は小兒を敎育する時に方りて大に兒童の知見を開くに益あればなり、小兒を携へて野行するとき一つの蟲に出逢ひ、小兒に其足の數、其目の働きなどを說明せば如何に面白からん、小兒が一本の草を見つけて携へ來るとき、其葉の生活の理由を說明しきかさば如何に小兒の好奇心を鼓舞すべき、婦人は外出せすして世界の狹きものなれば、之を補はんは地理及び面白く書きたる旅行日記、航海日記に超へたるものはあらず。

此外に縫箔とか擬花とか、レース製造とか、一種の職業的技藝を學ぶべし、是れ婦人をして自ら恃むの氣象と實務的の習慣を生ぜしむるの益ある也、必らずしも目下の役に立つ立ぬを問はざるなり、茶の湯、生花の如き優美閑雅にして婦人の遊藝としては適當ならんなれど日々多忙の家庭にはいかゞのものならんこれ彼の骨董品と同じく滅亡の禍神の入り込みたる家に相應はしきものなり、又和歌を作れと云ふはよき事なから他の事をすまして暇あらば學ぶもよし、暇なくば敎へざるも可なり。

此外暇あらば大人、豪傑、名婦の傳を讀むべし、是れ其氣象を高くすると共に小兒を敎育するの敎草ともなるべし、數學は利息算位までは巧みに日用の便となるまで學ぶべし、數學の心得ある婦人は家政に等閑ならぬものなり、之れより以上は其人の境遇によりていろいろあれど先づ普通人の妻たるものは、少なくとも此位の敎育なかるべからず。

漬物の季節

△澤庵の漬方

これは冬に漬て來年中貯へ置くものなり、京坂地方の大家には必はず漬物藏あり、中土間四方に棚を設け、

二階は雑物の置場とし、下に漬物味噌醤油等を貯藏するなり。普通の家にては藏とまでは至らぬも漬物部屋の設けなきはあらず、されど東京は大概商人より、其時々に買ふが故に漬物部屋も別に設けたるは稀にて物置小屋を利用して掃除屋などの持ち來るを桶買する風習なれば漬物の事などを研究したる人はなきが如し。されど大勢の家には手製すれば、大に經濟上得策なれば試むとならばまづ第一番に置場を吟味して北向の日光の當らざる、夏にても冷氣ある所に小屋を設けて入れ置くべきなり、若し四方の内一方にても日光の當る事あれば漬物の味を變ずればなり。(漬物小屋は必らず三方を壁とすべし、自から冷氣なり)

さて大根を乾かす事に等差あり、まづ

▲一月頃に口を開けるものは、皮に皺を生じたる生枯のもの。

▲二月分は猶一層枯れたるもの。



▲三四月袷の出づる頃までのは、弓形なりに曲げ得らるゝもの。

▲暑氣に向ふ頃までのは輪にして折れざるもの。

▲暑中に至るは二折にして片手に持つも別條なきもの、又

▲暑を越して秋に至るものは、結び得らるまで十分枯れしなびたるもの。

然れども東京にては兎角置場乾場十分ならぬ家多ければ一年中の用意はせずとも、春には菜漬を手傳はせ、夏は瓜、茄子の一夜づけもあれば、澤庵は若づけのみにても然るべきなり、普通漬用干大根とて賣るものは、若漬に適するもの、弓形以上は別に宅にて干すにあらざればある事なし。

○漬け法

凡そ四斗樽一本をつけるには糠七升、鹽三升なれば、甘口なり、是より糠を減じ、鹽を増すほど鹹口となる、風味を善くせんとならば甘口とすべし、久しく貯へんとならば其月數に應じて鹹くすべし。暑

を越すものは鹽七、糠三とするなり。まづ始めに大盥、大取鉢、何にても大なる器にて糠と鹽とを混合して桶の傍に置き、まづ底にまぜかへせし糠を布團の如く敷きて、大根をならべ、少し無理に押つめる樣にし、丸き所へ長きを並ぶなれば、いづれすき間は出來るなれど成可く透間のなき樣に大小を取ませ、又た一ッ二ッは切てもよし、さて其上に又糠をふりかけ、押ならして此度は橫に大根を並べ置く、入れ違ひ／＼に詰めては糠をふりかけ、盛り上るまでにして、押蓋をして、強く壓石を置く、大なる石よりも女にても持ち得らるる程のものを幾個も重ねる方便利なり。若し石不足なれば何にても重量のものを利用すべし。又注意すべきは始め大根を買ふ時、穴のなきを撰ぶべきなり。見たるのみにて知り得らるゝものならねば、二三本を試みに中央より切りて少しにても鬆あらば取替さすべし、切たる丈の代を拂へばよし、煮て惣菜となせば損にもならず。又數桶を漬るには一二の番號を桶につけて一より口を開くべし。

△菜漬の仕方

三河島菜にても京菜（俗に水菜京都にては壬生菜）にても洗ひたるなりと八百屋はいふとも、必らず一々根の所を四つ割十文字に切開いて、一應吟味洗ひせざれば、土砂を含み、又は蚯蚓の潛み居る事あり、しづくの滴るべき處へ載せ置き、大概滴の止みたる時漬るなり。鹽は凡そ四斗桶一本に二升。多きも二升五合を過ぎず、漬法は大根同樣、並べては鹽をふるのみ、唯撒り樣は大根の糠は一面に隱るゝほどにし、菜の方はパラ／＼と鹽をふりまくのみ、仕舞ひ口になりて、竹の皮を桶のぐるりに挿みながらすれば、餘程盛り上げらるゝものなり。さて竹の皮をぐるりより着せて押蓋をし、重石をかけ一兩日を經れば水上り、菜の量減たらばその上へ入足、再び盛上げて重しを置く、澤庵ほどの重量ならでもよし。

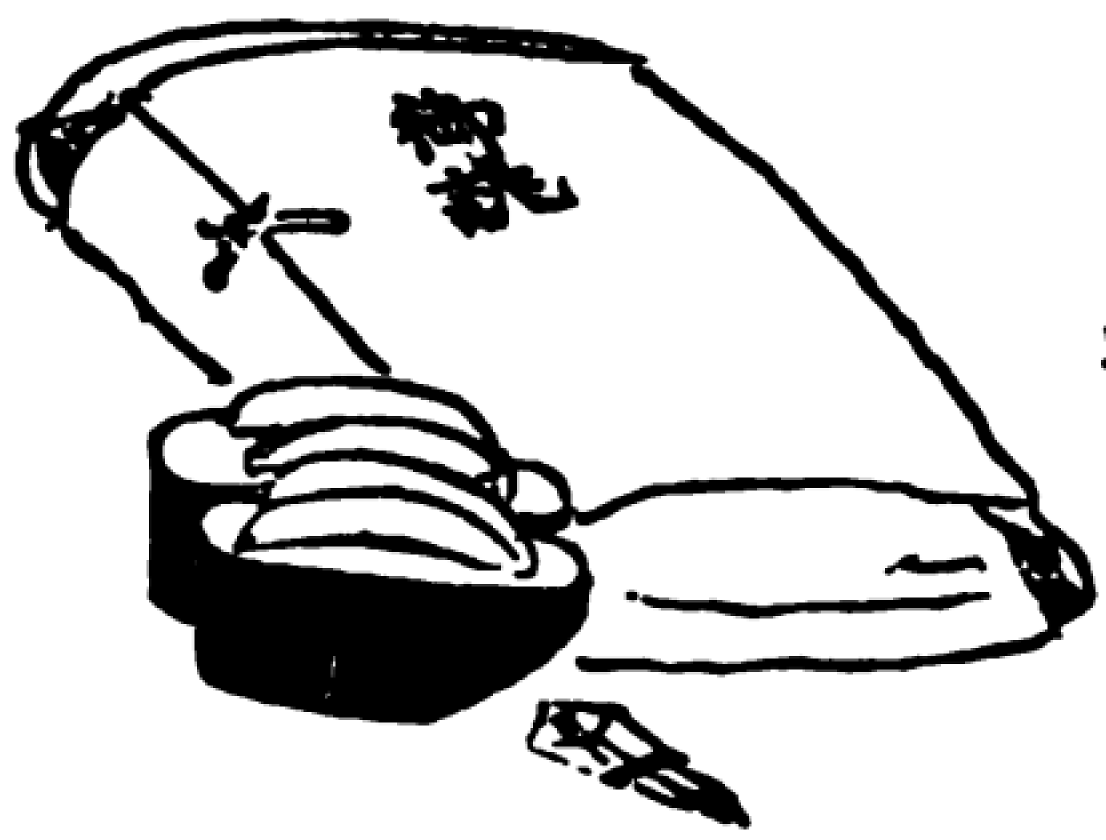
△切漬の仕方

大根を薄く半月、短冊、いろ／＼の形にきざみ、葉も又枯れたると虫くひを除き去りて、細かにきざみ（凡

そ二三分）まぜかへして桶の中に凡そ一二寸の厚さに入れ、均らして鹽をパラ〳〵と撒りそゝぎ、又始の如く入れては鹽ふり、終りに押蓋にて重石を置く、冬は凡そ十間ばかりにても口開けらるべし。其鹽をふるは薄霜の降りたる如くす、故に又薄霜づけともいふ、香氣ありて酒の肴にも至極よきものなり。若し猶上等にせんと思はゞ、糀を少々混ぜれば美味となる、是も竹の皮にてぐるりを覆ひて透より塵の入らざる樣に注意し、桶にたまる水は終まで捨つべからず、總じて菜類は何にてもこの水が大切なり。

△長漬

大根の葉を切離さず、其儘つける故に長漬といふ、糠を用ゐず、鹽のみにて漬方分量は菜漬に同じ、これは大根を乾かさず、洗ひたる水のしづく止みたるまでにてよし、故に菜と同樣水の上る日數も一ヶ月ばかりにて漬かる、香氣強くして甘し。根は輪切に葉は細かく刻みて醬油をかけて食す、初め枯葉虫葉をよく吟味し、



取り棄て、桶に入るには葉を折り挽めて漬るなり、又是れ水を棄つる勿れ。

△蕪の丸漬

葉の付きたる儘陰干にして、其葉萎れて後束髪の如く巻きかため、根を上に葉を押へて日光に乾かす事、一日、さてこれを糠づけとす、漬法鹽糠の分量、すべて澤庵に等し、久しく貯ふるは干す事も長く、鹽も多くするなり。（酸味を嫌ふ人には適せず、好む口には至極よし。）

簡易西洋料理

▲野菜スープ

蕪菁、百合根、玉葱、馬鈴薯、慈姑等（皮あるものは皮を剝ぎ、根あるものは根を取りすべて全體のまゝ）其他青豌豆、蠶豆、獨活、胡蘿蔔、凡て何品にても五種位づゝを鍋（水を八分目程盛る）に入れ、野菜と共に干蝦を少し入れ、二時間程も煮立たし、勿論鹽氣は

蝦より出づれど尚ほ適宜に鹽を加ふべし、此のスープは牛、鷄のスープを好まざる病人には、最も宜し。

▲鳥のカツレツ

鷄の皮を剝ぎ骨を離し、一人前づゝ小さき骨を付け、鹽と胡椒をふりかけ、麥粉をつけ、玉子をつけて後ち、パン粉をつけ、ヘット油にて揚げるなり、皿に盛り芹又は赤大根を添へて出すべし。

▲蕪菁の蒸煮

大蕪二本を皮をむき、之を骰子の目に刻み置きて、スチウ鍋の中に大匙一杯の牛酪を溶かし、その中に蕪を入れ振りながら、火の上に五六分間かけたる後、肉汁二合を注し、適宜に鹽、胡椒、饂飩粉を加へて、凡そ二十分間焦付かざる様たは〳〵と蒸煮にすべし。

▲牛のスチウ

牛の肋骨の處を一寸位に切り、水煮にし、玉胡椒、ニクヅク（干かためたる香味に用ゆる木の實なり藥店にあり）を一緒に入れて、三十分を經て芋、小蕪、葱を入れ、煮えたる處へ牛乳を入れ、尚ほ麥粉を水にて溶きて入れ、鹽にて味つけ皿に盛りて出すべし。

▲かますの煮付

大なる魳二三尾を形の通りに拵らへ、よく洗ひ淨めて、魚鍋には十分水を注れ、食鹽少許和し、此の中に魚を入れ、文火にて煮ること二十分乃至二十五分間の後、溶バタと菌ソースとを、その皿に添へて出すべし、但し切身にせずして全身のまゝ煮るべし。

▲魚の蒸煮

鯛、鱸、鯔、其他何魚にても、脊を開にし、腹の外部に穴あらば糸にて縫ひ合せ、鷄卵を一ツ位に松茸、新ぎくを細に刻み交合せて、魚の腹部の中へ流し込み、開きたる魚を打合せ、魚の脊の方を高くする爲（是は玉子のこぼれざる用心なり）一寸大根の切口で基をして皿に載せて蒸すなり、蒸上りたる時、牛乳にバタを入れて煮立てたる汁をかけて食すべし。

▲淺蜊のカレー

淺蜊の剝身を水にてよく洗ひ、湯でゝ煮汁より引上げ置き、葱を細に刻み、牛の油にて煎りつけ、胡蘿蔔、

じやが芋、椎茸をも細かに刻み、前に剝身を湯でたる煮汁にて野菜類を先に煮て、柔かになりたる時、剝身と葱を交せ、麥粉を水にて溶かし、汁の中へ入れ、鹽と砂糖にて加減し、つぶし麥の飯をたき温き飯を皿に盛り、其上にカレーを懸けて食すべし、但し是はピックル(漬物)を添へて食すれば味尤も可なり。

△パンケーキ

麥の粉を乳にて溶かし、玉子を入れ(粉百目につき玉子二個、乳一合の割)イスパタ(パンをふくらすソーダの如き粉なり)を小匙に一杯位入れてよく交せ、フライ鍋にてオムレツの樣に燒く、砂糖は燒けたる後あたゝかなるうちに、ざら目砂糖をかけるなり。

△蒸菓子プリン

西洋さうめん(日本製にてもよし)の湯で上げたる物をプリン皿に入れ、(皿にはバタを引き置くべし)玉子をときて牛乳に交せたるものを右のさうめんの上に入れ其の上にニクヅクを卸して、ふりかけて燒くなり、十二人前につき砂糖中匙九杯、玉子三四個位の割にすべし。



天麩羅の拵へ樣

(一)材料、は伊勢海老、芝海老、車ゑび、あなご、はせ、きす、ぎんぽ、貝の柱等とす、海老は殊の外人の喜ぶものなるが、その調理法は、外殻を剝くまへに水にて洗ひ、さて腹から指を入れ脊へかけてむき、脊腸は魚串にてよく拔きとるべし、大海老ならば一個、中ならば二箇を腹と腹とを合せ尾をその儘につけ置くなり、魚類は骨をとり置き、この材料は皿へ並べ用意し置くべし。

(二)衣は食味としては日本の上等のうどん粉の方がよろしけれども見えをよく白く揚げるには、メリケン粉がよし、いづれも毛ずいのうにて篩ふべし。玉子一個を

とき水を茶碗に三杯ほど加へ、同茶碗にまへの篩ひし粉八九杯を入れ、ざつとかき廻すべし、このざつと掻き廻す事を忘るべからず、あまりよく掻きませれば衣にねばり生じて風味を損ず。

(三)油は上等ならばオレーフ油に豚油を等分に入れ、又ホルト、又は伊豆產のつばき油、かやの油等よろしけれど、さる好みにも及ばじ、普通本胡麻油上等を選み用ふればよし、油鍋は底の厚き方よし、薄ければ危險でもあり、又衣に色のつく事あり、さて油は火にかけて後、泡の立ち煙の立つ時を見てあげはじむ。

(四)あげ方　はその油の煙の立つ時、前の材料へ衣をつけ、鍋の邊隅より追々に入るべし、この時火加減の注意大切なり、即ち材料を油へ入るとき、七輪の口をふさぎ置き材料を入れて後その口を開き、火氣を強くし、二三回箸にてかへし火の通りしを度に上げる。但し魚類をあげるまへ少しく野菜を揚げるがよし。しかるときは初めの油のつよき香を野菜に吸取り魚類をあげて輕くなるなり。

(五)注意、一は揚げ終りて鍋を卸せし時は、生油を少しつぎ足し置く、かくすれば再度その油を用ふるとき色がつかず、二は煮油へは火のうつり易き恐れあり、ゆへに揚げものにかゝるときは、先づ傍へ青葉の野菜をそなへ置くべし、萬一火うつらば、うろたへずこの青葉を油鍋中へ投げ入れゝば火鎭まるなり。

(六)汁、天ぷらの汁は鰹節の煮だしを杓子三杯に醤油一杯、味淋煮きり半杯弱加へ煮かへすべし、あまたるくとも又からくとも濃味にすぎてわるく、藥味は卸大根、柚子、卸生薑等を添ふ。

▲かき揚の仕様

海老はぼつ〳〵切にして、三ツ葉、うど、防風等を五分位に切り、海老とまぜ、各々人數だけ銘々皿に盛わけ置くべし。

衣は玉子一個に茶呑茶碗に水一杯、うどん粉同二杯より三杯をいれ、ざつとかき回し(極々ざつとがよし)この衣を小丼に小さき金杓子にて一杯取わけ、まへのもりわけし材料一人分を入れ、さて油は前記の通り煮立ち

しを見て、七輪の口をふさぎ置き、鍋の片はしよりこの材料を流し込む、此時鍋中へ衣の細き屑はしる、これは手早く灰ふるひにて、その流し入れし材料のうへへのせ、かためる樣に灰ふるひにて裏がへし、どちらにても形よき方を上へむけ、皿へもりて侑む、すべて天ぷらは、引揚ぎはに火をよくきかすやうにすべし、ぬる火にて引揚る時は油きれずしてわるし、魚類も海老同樣細かにきりませるなり。

かき揚のしたじは、まへよりは尙ほ薄き方輕くしてよし、烏賊はうす皮をむきて揚ぐべし、足はあげぬがよし、あまりあげすぎると跳る恐れあり、あげすぎざる樣に注意すべく、蛤、あさりは一度湯煮にして揚るなり、これも跳るゆゑあげすぎぬがよし、且つ油鍋ちかく身體をよすべからず、油のはねる恐れあればなり。

▲牡蠣のフライ

牡蠣は水氣あれば揚にくきものなり、それゆへまづうどん粉の中へころがし置き、さて玉子の黄身をときこれへまぶして後パン粉をつけて揚げる、魚のフライも同樣なり、からし、胡せうを添へて侑む、魚は小骨をよくとる樣注意すべし。

▲精進揚の仕方

うどん粉へ玉子と水と少々入れ、これは天ぷらとちがひよく／＼掻まぜる、衣にねばりの付く方がよし、又濃き方がよし、まぜし後少しおきて用ふれば愈々足がつよくしてよし、いくら精進揚にても玉子は少し加へる方油のきれよしと知るべし、揚方天麩羅と同じ。

▲豆腐揚出し

常の豆腐を算木に切り、布をたゝみて其上へのせ水をすはせ少し程たちて後、うどん粉にくるみ揚げてよし、又衣なしにてもよし、卸大根、生姜を添ふ、豆腐にはうどん粉より葛の粉がよろし。

▲ソーダビスケット

五勺計りのうどん粉に小匙一杯の鹽と同量のバタを入れ、別に茶碗に微温湯を入れて小サジ一杯のソーダを溶し右のうどん粉の混和物と混せ捏上たれば早くストーブにて燒くべし。

くさ〴〵

我が見し家庭

庭　芝　萊

いくその家庭を訪問し、感ずべく又た範とすべき事柄を見聞きせし儘、左に之を紹介すべし。

◎森田博士の家庭

森田博士は我が舊師にして、はや故人となれり。博士は熊本の人、幼にして熊本英學校に入り、彼の有名なるキャプテン、ゼンス氏の薫陶を受け、次で京都同志社に新島先生に師事し、後航して北米のエール大學に遊ばれ、ラッド博士の下に哲學を學び、ドクトル、オフ、フヰロソヒーの學位を得て歸朝し、永眠さるゝ迄同志社に敎鞭を執られ、遂に其弟子に棺を舁かるゝに至りしなり。

さて博士の敎場に立つや、嚴として犯すべからず、口さがなきものは私に稱して「閻魔樣」となしき。されど一旦

▲其家庭に訪るゝや、敎場に於ける嚴格なる風は見るを得ず、恰も同輩に對するが如く、叮重の言葉と溫顔を以て迎へ、必ず引いて室に入らしむるを常とせり、令室も二孃一男も其席に列し、歡談續出し、客をして歸るを忘れしめき、此の如くなれば敎へ子の多くは「敎場に於ける先生は夏の如く、家庭に於ける先生は春の如し」と申しき、さてまた先生は哲學の如き形巳上の學に身を委ねたる人なれば、家事の如きは意に解せられざるべしと思はるれど仲々左にあらず、今其一二を云へば、長女忍子に

▲ハイオリンを學ばして、夕餐後一室に會して一家團欒し、他處の見る目もうらやまるゝ計り、且つ子女には節儉と吝嗇の別を敎へまた、實際に示し給へば、二孃は決して奢りがましきことなく、性質怜悧にして世の褒物なりき、殊に我等をして奇しと迄に思はしめしは、先生が少年小女の集會に列し、彼等の歌ひ語りなどする樣をいたくも喜び給しとなり、同志社看病

學校講堂の集會にも嘗て先生の出席を見ざるはなかりしと、あゝこれ先生の先生たる所にして、また好箇の敎授たる所なるが、殊に欽ずべきは先生の令室にして、今令聞の一を記さんに先生は勉强家にして手に書を放ち給ふが如きこと稀なるに、令室もよく之を諒し、日々の▲新聞紙の如きは、朝に之を一讀し、食事中其記されし新しき事柄を話して、先生をして新聞紙を手にするの要なからしめ、また先生の殊に嫌はるゝ汚はしき記事の如き一も耳に入れらるゝが如きことなかりしと云ふ、而して子女の敎育は、全く自身の責任に歸し、家政の大小と共に一も先生を煩はすことなく、先生をして一意專進其專門の學に忠ならしめられき。



先生沒後京都に住して二孃を育て（長男は不幸先生の沒後二ヶ月許にして父の跡を追ひぬ）家事に盡し居らるゝと云ふ。

◎湯淺家の家庭

湯淺氏は上州安中の豪家にして主を次郎と呼び嘗て議員として財政事務に精通し當路者の恐るゝ所となりし人なるが、今は京都に住し安中の家政は二男三郎氏に全托せらる、令弟は吉郎と呼ばれ哲學士にしてヘブルユー語に精通し、長く同志社に敎鞭を執られしが、今は京都大學圖書館長たり、長男一郎氏は東京にありて洋畫の名手なるは人も知れるが如し、さて氏の家庭も亦た羨むべきもの少からず、中にも▲家庭文學會の如き其一なり、聞くが如くんば

同家にては毎月一回家族を會し、氏夫妻もそれに交はりて文藝會を開き、或は歌ひ或は樂を奏して一夜の歡を盡さるゝと云ふ、其面白さ其美はしさ、げに新時代の家庭なりき、夫妻此の如くなれば子女はよく親み、親の命はよく順ひ、大なる家族ながら少しも騷しきを見ずと。序に子女の名を記さんに一郎氏を始とし、にい三郎、四郎、五郎、ろく、しち、八郎、くめ、十郎、かずよ、十一郎其他一にすべて計數によれる由、而して

▲**衣服食物**　等の注意嚴密にして、深く衞生を重じ、間食の如きも濫りにせしめず、衣服は淸潔を主とする等、萬事整然として一の規定に隨ひつゝありと云ふ。

◎デフォレスト氏の家庭

デ氏は米國人にして、來朝以後既に二十餘年、嘗て仙臺東山學院に教鞭を執りて好教授の聞へありしが、校廢されて後は宗教の教師として今猶ほ同地に滯在せり。氏は殊の外日本贔負にして日露戰役に際して「米國人は何故に日本に同情を表するか」といふ小冊子を著はし軍隊に配布せられたりき。氏は

▲**同情心**　に深く、人ありて氏に賴るものあれば氏は必ず之を扶助し、必ずしも眞疑を追窮せず。或る時の事なりき、氏は某より欺かれて金錢を與へしが、後に之を語るに及び、傍者に告げて曰く「欺かるゝものは欺く者より幸なり」と語りき。これ蓋し欺かるゝ者は一面に其性情の正直なるを示したるを云へるなり而して氏の令閨の如き、家庭教育の注意驚くべきものあり、或日仙臺より程遠き田舍より一翁來り氏の宅に一泊せしに、その折此翁は氏の少女に語るに

▲**お化け**　を以てせしに、少女は深く之を怖れ、折々「お化け來る」と云ひつゝ母にすがるを見し令閨は大に驚き、直に使を此一翁に送つて已が家に迎へ二週間許り止宿せしめ、充分の待遇をなし、且つ請ふにお化けてふもののなきことを、語らしめ、子女の充分に了解するに至りて多數の禮物を送り數日の勞を謝したりと云ふ、これ令室自身語りてお化の存在を非定するを得るも、かくては充分なることもなし、態々嘗て告し者

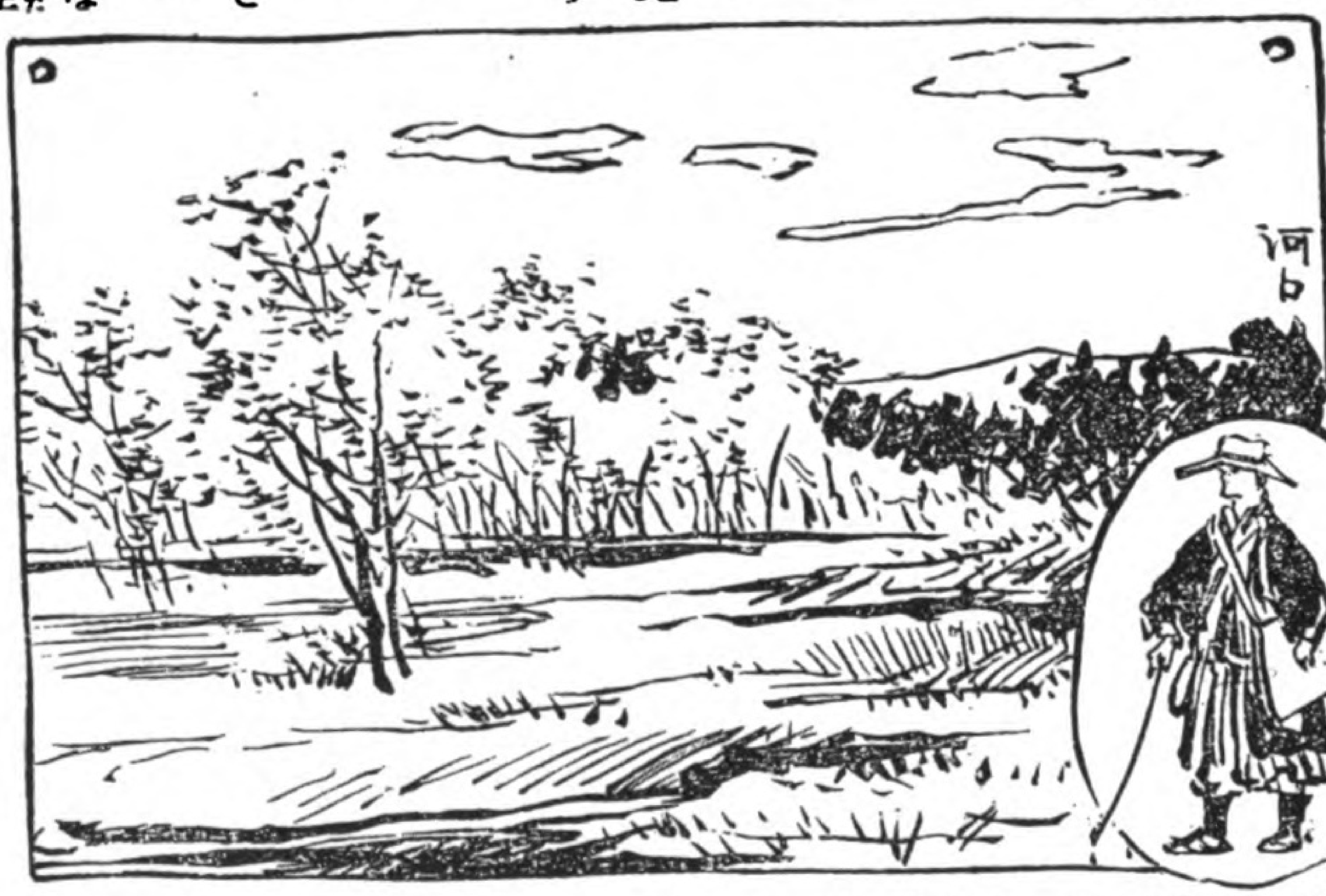
を迎へ、其者よりして語らしめぬと、以て其子女の教育に如何に深き注意を採りつゝあるかを察するを得るなるべし。これ外人の事に屬すと雖とも、外國の花とりて以て我家庭の範とすべからずや。

◎一車夫の母

眞珠は大厦の床にのみならず、却つて人知れぬ野山に發見さるゝが如く、人の美譚も亦た陋巷に見るとなきにあらず、今語らんとする一車夫の母の如きも其一なり。

車夫姓名を、竹田政吉と云ひ、昨年の春迄は芝白金に住みしが、今はいつれに移れるか、尋ぬれども未だ定かならざるぞ遺憾なり。

數ふれば二た年餘り以前のとなりき。余は所用ありて、白銀に至



り、夜更けて歸宅せし折、辻に客待せし車夫の車に乘りぬ、彼は極めて親切にしてまた速かなりければ、豫定の賃錢に更に五錢を增して與へしに、政吉は之を受けずして曰く「好意は喜び受くべきも、豫定の外は一錢たりとも得るを欲せず」と、之を聞ける余は之を奇とし其何故なるを問ひしに、彼曰く「これ▲母の命なり、我が母は常に語りて曰く中途如何なる事ありとするも、豫定以外の賃銀は決して受くる勿れ、車夫は云ふ迄もなく賤き業なれども、一の職業として更に耻る所なし、然れども萬一人の憐みを請ふ如きことあらば、これ一種の乞食なり余はこれを好

ます、萬一汝にして一夜客を得るなく遂に食料を買ふを得ざるも母は喜んで食を絶つべければと訓ゆ、此の如きが故に今好意を受するを得ず」と、余は之を聴きて大に感ずる所あり四五日して後其居を訪問し親しく語りしが、彼は元宇都宮の藩士なりしも、不幸遂に今日の境遇に至りし由、昔氣質なる此婦人はかく困難しつゝも心は汚れず、猶高潔なる心事を有すとはまたしほらしからずや。

米國の苦學女生

私は十月五日の小學世界を拜見しましたが、其内に米國の苦學生と云ふ記事の中に宿屋の女中がお客の心附を合計すると一ヶ月に七八十弗に上ると云ふヿゝ子守が洗濯賃を合せて二十弗にも成るやうな事がありました、私は此の記事を嘘とは申しませぬがザト棒大の記事と思ひます紐育よりは桑港の方が賃金がよい方ですけれども此所を中心として太平洋沿岸五萬人の日本男女間、女中奉公して七八十弗を取つておる人の有とは聞きませぬ、極めて正確な賃金を申しますなればスクウルガーアルで英語の出來ぬ時分か一週一弗から一弗半が上等です男子で二弗五十錢取る人は教育もあり家庭の用向等の充分辨ずる人です取り分け冬分はアラスカや田舍から歸つて來た青年が冬期だけは無給金でもよいなど競爭が始まりますから大恐慌を來たすヿがあります、萬一澤山の給金を取つてをる婦人があれば屹度醜業婦か何かであります、ですけれども婦人の方は仕事の口も澤山な上に仕事も樂だし小遣や衣服授業料などには不自由はないから正則に英語の稽古をする方音樂に志ある方は日本で學ぶよりは何程よいか知れぬ日本でなまかじりの稽古するより、グランマスクーウルからやる積もりでドシ〳〵渡米なさるヿを同胞姉妹に望みます、此方では學校も整頓しておるのみならず大學などへも婦人が澤山まゐりますから心強く存じます私は軍人の未亡人の御年の若い方や、何にかで思ふやうにならぬ方は渡米なさる方がよいと思ひます、渡米者の資格の第一は身體の健康と意志の鞏固、それでよいのです、近頃は渡米案内など申すツマラヌ本が出來て米國へ來れば黃金が撒き散されて有やうに思ふて來た方が失望して發狂するのもあります、婦人で刺繡の出來る方があればそれこそ七八十弗も取れませう。

男子でスクールボーイを務めておる方には日本の學士の肩書ある人もありますから少しも恥しひことはありませぬ、中にも日本の名前が六かしひと云ふて勝手な名前をつけておる方があります、例へば、コチノヒト、アナタ、オマヘサン、ダンナサマ、などつけてありますから時としては向ふの奥樣が自分の内のボーイをコチノヒト、とかオマヘサンとかアナタとか呼んでおるのを、日本人が側から聞きますと、實に可笑しくてお腹を抱へる樣なヿがあります此間も或白人の妻君が私の内のボーイの名はコチノヒトと申ますが日本で何と云ふ意味ですかと問ひましたから其人は何心なくそれは妻君が亭主を呼ぶ時の言葉ですと申しましたれば、ミセスは非常に立腹して急いで宅へ歸ると直に、コチノヒトに暇を出しました、或る地方では大將とか、御前とか云ふ素晴しい名前をつけたボーイがあるそうです。

在米　大久保和歌子

衛生顧問

注意！！ 髭毛「ニキビ」「ソバカス」赤鼻などに就いては女學世界第四卷第十三號同第十四號の顔の話(中)(下)に頗る詳しく述べてありますからこれに關する問は略しました。衛生顧問の法を實行して功能のあつた方は知らせて頂きたい。

(問)私事或る本を讀んで居りましたら、皮を美しくする別法として、硫黄一匙に糖蜜を加へて飲めば、功ありと書いてありましたが如何でせうか。(愛讀女)

(答)之を二三日續けて服めば必ず下痢します、倘幾日も續ければ身體衰へて食欲減り一方ならぬ害あることは受合です、併し痔のある人の便秘には功がある位なものです、其の書物は何といふ本かは知らぬけれど、實に人を欺く大罪者の著はしたものと謂はねばならぬ、且つ一匙とは如何にも漠然たる數へである、匙にも大小色々あつて、其の盛方にも様々であるから實に危險千萬なことである、返す〲も斯様な事を書いて素人方を喜ばせようと思ふ奴の心は實に惡い。

(問)冬瓜の汁を顔につければ、面色白くなると、或る書物に書いてありますが、本當でせうか、且つ冬瓜とは東京言葉で何と申しますか、東京には無い物でせうか。(江戸子女)

(答)東京では冬瓜と申しまして、青物屋には澤山賣つてゐます、これは私も嘗て書物の名は忘れたが、楊貴妃の秘傳として書いてあつたことを覺えてゐます、果して効あるか否やは知りませぬが、害のあることでは斷然無くて、多少艶がよくなるかも知れませぬ、試みたいと思ひなさるなら、行つて御覽なさい。

(問)美顔法といふものは果してあるものでせうか、若しあるものならば、天下の人の爲に詳しく書いて頂きたい、何程人が喜ぶかも知れませぬ、何卒〲。(藪中の印度生)

(答)失望して下さるなよ、美顔法とか美人法とかいふ書物はあります、讀んでみたこともある、併しこれ等は皆本心に愧ぢて書いたものに相違ありませぬ、考へて御覽なさい、天が與へた顔を人が何うされますものか、目が小さいとて大きくもされねば、口が大きいと

て縫ふことも出來ず、不具で無くば大いに喜んでゐるが可い、されど面皰、雀斑の如き病的ならば治して美しくもなります、色の白い黑いは人種に依つても違へば、性來の色素の配合にも依ります、佛蘭西は華美を好む國でありますから、婦人は色を白くしようと思うて、彼の毒藥の亞砒酸を服むさうです、これは毎々述べた通り、變質劑で薄弱なる者が服めば蒼白い色が赤みを帶びて强壯になるし、色の黑い健康者が服めば段段蒼白くなつて、望みは逹せらるゝ變りに、身體一般に貧血になり、從つて薄弱になります、斯樣な次第であるから、色白藥は皆身體を貧血にして、色を白くせんとする危險劑と謂はねばなりませぬ。私の思ふには精神を美麗高尚に持てば、心身關係の道理で何となく其人の容貌も美しく氣高くなると思ひます、彼の女郎や藝妓は如何に素人風に作つても一見賣女であることが分り、さうして色が白くても目鼻立が善くても卑しく且つ醜く見えます。昔し加賀の千代女を太つてゐるとて、御殿女中が笑つたれば、「一抱へありても柳は柳かな。」と詠んだ、所が百萬石侯は數百の美女をさておいて、彼女を得まく欲しく思はれたさうだが、彼女は毅然として犯されなかつたとのこと、余が敬愛する女學世界の愛讀者よ、貴女方よ、姉妹逹よ、色黑く、筋骨逞ましく、力秀で、腦力强く、それで花よりも美しい情にならうと思召さぬか、とさて〳〵長い答を書きました。

(問)一、十九歳の女子大食もせず、便通も一日置位にあり、それで下腹いつも張るは如何なる原因に候や、二、一瓦とは何程の事に候や、(東京の女學世界愛讀者)

(答)一、は漠然たる問で分り難いが、兎に角便通が一日置では病的なり、正當は一日に一回づゝ無ければならぬ、されば(蘆薈丁幾二瓦、重曹三瓦、白糖適宜、水百瓦(半合程)を一日三回に分服)を毎月一週間宛服んで御覽なさい。二、は一匁の大凡四分ノ一即ち二分六厘六毛六六六……である。

(問)私は外に病はありませぬが、時々ピロリ—のあたりが痛くて物が言はれませぬ治療法を敎へて頂きた

し。(廿一歳有夫女)

(答)ピロリとは何の事か分らず、されど物が言へぬとあるからには唇かも知らぬ、果して唇ならば逆せの爲でせう、今一應詳しく書かれたし、來月答へませう。

(問)私事夏以來牛乳を飲みてをりますが、飲みにくき故砂糖を入れます差支無きものに候や。(日本橋吉田)

(答)差支無し却ってよし。

(問)私事昨年一月出產致してより尤も心配事もありますが世の中がいやになり死にたく、泣いてばかりゐます、泣けば三日位は泣き通します治療法ありますまいか。(泣き女)

(答)其の心配になるべき事柄を除く工夫をして早く病院に入院して治療をなさるがよし、若し入院出來ぬ事情のあるならば御近邊の醫者に診察を請うて至急に治療をなさらぬと宜しくありませぬ。

(問)幼き時から毎年シモヤケにて難義いたします何卒療法を敎へ賜りたし。(神戸の女)

(答)苛性加里一瓦、屈利設林三十瓦、アルコール五十瓦水百瓦をよくませて浴後に塗ければ大いに功あり、浴後で無くもよし。

(問)一、サンダー體力養成法とは如何なるものか且つそれを書いた書物ありませうか。二、七歳になる男兒の斷えず涎を出すを治する方法無きものに候や(無學生)

(答)一、鐵啞鈴を以て體操するのである、鐵啞鈴は其人の體力性質にも依るけれど、初めは極めて輕きものより用ゐ初め、しかもこれを爲す時間は少くし、段々と重きを用ゐ、時間も次第に增すのである、これは學校にてする體操と左程の違ひは無いが、其の重量ある鐵を以て漸次にその量を增すから、これが爲に筋肉の新陳代謝を促し身長體重を增すのである、併しこれを爲すには滋養の食物を取ることが必要である、尙其の仕方を記すには少くも十頁を費さねばならぬから、糸左近著衛生講話(神田今川小路一丁目五番地金刺芳流堂書店發行)中に詳しく書いてあるから御覽なさい。二、硼酸二瓦を溫湯百瓦(半合)に溶かしこれを口內に屢々塗るが可い。

(問)月經時に湯に入りて宜敷きや。(東京のお照女)

(答)害あり、若し害無しとした所で、入浴する氣になられませうか、本心に訴へて御覽なさい。

(問)(一)泥酔中云々(二)姙娠する方法(三)〇〇〇何の感じもなく云々(四)姙娠中は如何なる食物を撰みて宜きか。(五)小兒に乳汁を與ふるは何時間毎が宜しきか。(崎陽女史)

(答)(一)(三)の問は如何にも女學世界讀者の價値を瀆すものと謂はねばならぬから答へず。(二)の方法といふものは別に無し、あるといふは噓である。(四)淡泊としたる滋養品例へば鯛、鱚、鰈、豆腐など最も妙なり(五)小兒の年月に依る、即ち一日に七八度位より三四度に到つて止む。

(問)出產後六ヶ月以內の姙娠は宜しく無し云々中略醫書生理書などに出處あらば敎へて下さい(山口縣愛讀者)

(答)第四卷第十三號を今一度讀まれたし、東洋人の弊として孔子の書物何々何枚の中に斯う書いてある、或は何經 何卷 に釋迦が斯々述べたと言へば、令ひ議論が有つてもグーの音も出さずに終る如き風あり、醫書には澤山書いてあるが、醫書にあるから余は宜しく無いと言つたので無い、能く天即ち自然の理を自らの心に自問自答して見玉へ、出產後六ヶ月以內に姙娠すれば乳汁の分泌は止む、止めば其の乳兒は乳母或は牛羊の乳汁を以て代用せねばならぬ、これでも天の道でせうか、七ヶ月になれば乳汁無くても育つものである、嗚呼六ヶ月以內に妊娠する者は何うしても子の愛を知らざる人である、これでも醫書に依らねば承知できませぬか。但し出產後其の生兒の死亡したる等はこの限りに非ざることあるべし。

(問)不潔なる衣服を其の儘着用すれば小動物即ち虱の如き者生ず、無より有を生ずる其理如何。(靜岡貞子)

(答)これは動物學の問題である、私は敢て知らずとにもあらねど、或は專門學者の笑を招くやも計り難ければ斯道の人に尋ねられたし。

(問)脊の高くなる法無きか、御敎へを乞ふ面白半分ではありませぬ。(田舍娘)

(答)斯樣な事が自由に出來るものならば、甚だ都合の

宜しいことなれど、恐らく思ふ通りにはまゐりますまい、併し相當の滋養食品を取り、彼のサンダー體力養成法でも行はゞ筋肉發達し從つて身長も高くなるでせう、答者の知つてゐる人は三十二歳であるが一昨年かな右法を實行して一日も休まず今日に及びければ、寸五分ばかり高くなつたと言つてゐるが、併し私が最初計つて見たので無いから保證は出來ぬ、兎に角中年から角力を稽古して横縱大きくなるは事實らしい、サンダー氏の自傳にも大きくなると書いてある、何れにしても惡いことで無いから熱心に稽古して御覽なさい

(問)一、腋臭は一生なほらぬ病でせうか。二、ほくろの療法を問ふ。三、月經は何歳よりあるが普通でせうか。(山城の實岡女)

(答)一、なほらぬとは限られませぬ、この療法は衛生顧問にて毎月幾法も書きましたが。二、は第四卷第十四號の顔の話に詳しくある。三、は我が國では早きと遲きと平均すれば十五歳でせう、併し北海道と臺灣では其の早か遲いの差はあります、概して暖國の人は早いものである。

(問)二才の女兒過つて額に長さ三分巾七八厘の劍痕つき候が、なほる法あらば敎へを乞ふ。(津市きみ女)

(答)深きにも依るけれど、これより發育の盛んなる時であるから七八歳頃までに自然と治らうと思ひます、併し尚外科醫に就いて御相談して下さい。

(問)一、女子滿十七歳以上になれば、最早自然と身長高くなりませぬか。二、月經時々ありませぬけれど、身體は强壯でありますが打すておきて害なきや(月野ちか女)

(答)一、大抵は高くなりませぬけれど、中には十七歳頃までに低い方で、それより二十二三歳までに、中々高くなる人もあります、故に本邦では二十歳までと思へば可いでせう。二、生理上から言へば害ある譯ですが、實驗上に依れば差支無いやうです。

(問)一、十五歳の女月經一週間以上あり其の療法。二、其の女が十五歳の男と結婚差支無きか。三、何歳にて姙娠致しますか。(青森縣弘前市の間度女)

(答)一、は月經過多症でせう、月經五月目位から陰部

に氷嚢をあて、腰には温罨をあて〻御覧なさい。二、女も二三年早し、男は如何に身體發育してゐても二十歳を越えねば後日の害あり。三、月經あるやうになれば何時妊娠せぬとも限られず。

(問)當年廿歳の女十歳前後の頃より非常に便秘し、遂に近頃では少しく脫肛の兆あり其の療法如何。(草々女)

(答)便秘病でせう。毎日一回づ〻倔里設林の灌腸をするがよい、之をなすにはリスリン灌腸器と倔里設林とを買ひ求め、自身にて行ふべし。

(問)生來低鼻の人ゴムにて鼻をつぐといふ何れにて致し候や。(東京赤阪由婦子)

(答)耳鼻咽喉科專門の名醫金杉英五郎氏(神田駿河臺)に賴まれよ。

(問)妊娠の始めは如何なる徴候に候や(北山の麓に住む愛讀者)

(答)妊娠三四ヶ月までは、產科專門の名醫も外診と內診と兩方を行うて、漸く判斷する位困難なものである故に今疑徵とも申すべきものを云へば、月經閉止、嘔心、全身何となく倦む、食欲減る、精神鬱々する、動悸が高ぶる、乳首が少し色が附いたかと思はる〻などである。これ以上は醫者で無くては分らぬ。

(問)一、時々腦がキユー〳〵として痛む。二、鼻つまり呼吸苦し。三、答辭を讀むなどの氣をはる時に音聲吃る。四、聲を善くする法、右何れも良くする方法を問ふ。(薪火ヲ放チ樫ノ木ヲ燒ク園ノ女)

(答)一、キユー〳〵とはシク〳〵或はチク〳〵といふやうな形容詞でせう、然れば腦神經の故障でせうから御地の醫者と御相談の上、フエナセチン○、七を朝夕二回宛服んで御覧なさい神經痛に仲々効がある。二、鼻加太兒でせう、この療法は第四卷第十三號の顔の話中に書いてある。三、精神を寬大にもつ樣に修養すべし。四、發聲器に異常の無くて、唯美音になりたいとの希望ならば、衛生顧問の範圍外である。

(問)書物さへ讀めば、眠りを催し、暗記が出來ぬので困つてゐます、何とかなほす方法ありますまいか(歌島生)

(答)過勞にならぬこと、大食せぬこと、衣服室內の溫暖に過ぎぬこと、夜分熟眠すること、新鮮なる空氣を

度々吸ふこと、心配せぬこと、身體を清潔にすることと房事に注意すること、精神を立てゝゐること、良き茶或は珈琲を適度に飲むこと、其の餘は診察せねば何とも申し難し。

（問）一、腦充血の豫防法及び豫防藥を問ふ。二、霜やけの藥は如何。（信濃松代生）

（答）一、酒、茶、珈琲、酢、唐辛などの腦を刺戟するものは一切嚴禁し、又、腦を使はぬやう即ち心配事などは大いに避け、常に便秘の無きやうに注意し、安眠法を計るべし、それには就寢前の入浴最も妙である。豫防藥としては、毎月一週間程宛便通藥として、（人工加兒々斯泉鹽十五瓦水百瓦中合を一日三回分服）を實行することは可い。二、は前問に在り。

（問）乳汁の分泌過多にて痛苦を感ずる儘、搾り捨てをりしが衛生上如何。（備後のK、Q、女）

（答）差支無し、哺乳器を以て搾り取るがよし。

（問）一、強く笑ひますと、咳嗽が出て苦しくなります二、妹が三年前に痳疹に罹り、それより全身にニキビ様のもの出まして困ります。右二つの療法を問ふ。（紀伊みのる子）

（答）一、誰でも強く笑へばその通りです心配に及ばず二、時々米のとぎ汁を沸して入浴させ、酸化亞鉛を全身に撒いてお上げなさい。

（問）「エリテーマ」の如きもの出來五年來治らず、何か單簡なる治療法なきか。（諏訪美津丸）

（答）姑息法なれど、局部を蛭に吸はせ「イヒチオール」を塗つて御覧なさい。

（問）當年十七歳常に月經不順なり、何とか善き藥を教へて下さらば何んなに嬉しいでせう。（香澄とし子外數十人）

（答）原因にもよるけれど、兎に角月經のあるべき一週間程前から、一週間續けて、毎日朝夕、日本藥局法の蘆薈莂剌巴丸三丸宛のんで御覧なさい。

（問）薔薇水といふ藥は何處の藥屋にもありませうか。（すみれ女史）（答）然り。

（問）長毛顔面に生じ甚だ困ります、拔き取る藥及び方法あらば「一日醫者」の欄にて詳しく教へて下さりませ

ぬか。（筑前の石井キン）

（答）この間は不毛症に亜いで頗る多くあるから「一日醫者」の欄に掲ぐることにします。

（問）脚氣病にて歩行困難なり常用の藥數へて下さい醫師の藥も服みあきましたから。（千葉市原の一少女）

（答）藥を敎へて下さいといつて、藥をのみあきたからとは可笑しな問と言はねばならぬ、答者も矢張醫師ですから、素人の方にお聞きなさい、併しこれは戯言ですが、兎に角遠く〳〵轉地療養大必要〳〵〳〵。

（問）毎晩夢を見ますが、何とか癒る方法の無いものでせうか。（北の炭山にて満月女）

（答）夢を見るといふは熟睡せぬ故なり、即ち寢る時に色々雜多なことを思ふからである。故に能く運動して食物を消化させ、規律ある勉强をなし、規律ある精神の使ひ方を講じ、寢る時は何事も思はず鼾聲雷の如くに寢れば必ず夢を見ぬものである。

（問）常に胃弱の有る者で、不活潑きはまる性質ですが何とか勇敢なる氣性になれますまいか。（攝津湯川通郡愛讀者）

（答）古びた諺ではあるが、强健なる精神は强健なる身體に宿るといふことを知り玉はざるか、この諺を能く味つて身體の强健を計られたならば、從つて爽適なる精神も出ようかと思はれます、それにしては第一胃を治療せねばならぬ。胃の弱き方は消化のし易き滋養の食物を取り、適度に運動し、內服藥としては（含糖百弗聖三瓦、マルチ子〇、三。右三包に分け一日三回分服）を數月乃至數年用ゐられたならば必ず得る所あらうと信じてゐます。

先月以來質問の多きこと千三百餘通に昇りまして、悉く答へんには此の雜誌全體を埋めねばなりませぬ、ぢやと言つて答へねば、怨み玉ふ方も定めし多からん、されどそれは或は「一日醫者」或は「生理衛生」の話、或はこの顧問欄で、追々御滿足を得らるる樣に致しませうかと暫くの御辛抱あらんことを乞ふ。

衛生顧問は來春より一層有益に一層實際的に致しますから御遠慮なく續々と御質問あらんことを乞ふ

攝生法談話會

小島蓬城

今年八十八歳になつて、尙ほ身が健全で氣の旺なことは、若いものでも及ばぬ八木老人は、自身の實驗から得た攝生の爲方に就いて、今日も大勢の人々に話すのである。

「乃公のな、若い頃から師匠として來た豪い人があつてな、先頃九十九で逝去つたが。其人は、死ぬが死ぬまで、顏から軀から艷々として、氣の若いことも實に恐入つたものであつたがの、乃公の尙だ若い頃であつた、何でも初冬の、急に寒うなつた時、風邪を引いて、勢の無い顏をして其人の許へ行つたら、つくづくと乃公を看て、「汝、如何かしたのか」と申されたから、「ハイ、風邪を引きまして」と答へると、「汝も風邪を引く樣なことか、精神をば一層確乎と爲なさい、精神さへ確乎して居れば風邪など決して引く譯のものでない」と申されたが、爾後、乃公もだんだん經驗を積むに、風邪ばかりでない、大概の病氣は心から發生る樣ぢや。諸君もな、長命がしたいと思ふなら、精神を悠然と、又確乎と持つ樣にするが可いぢや」

思つた事を思つた樣に、遠慮なく言ふ村子孃といふのが、

「だつてをかしいではありませんか。精神が如何あつても、此の皮膚が寒さを感ずれば風邪を引く筈ですもの、老人の有仰るのは昔流のことなのよ。」

老人は白い眉毛の長いのを風に靡かせて、

「ハツハツ、昔でも今でも人の身體に變化は無いぢや。あゝと、風邪を引く理由は如何やらぢやつたの、遠山。」

老人の甥、遠川醫學士、

「身體の或る部分が寒冷に冒されるので、感冒に罹ると、其の局部に向つて血液が潮流しますから、其所の粘膜に紅潮を呈しまして、腫起るのですが、其の局部々々に應じて、噴嚔、咳嗽、咽喉の乾燥する樣な感覺、咽喉の疼痛、嗄聲、羞明という光線に耐へぬ樣な感覺、頭痛其他の症候があつて、腫起たところには多くの粘液を分泌致します。」

村子孃は又醫學士にも向つて、

「粘液の分泌つて如何するのです。」

醫學士は微笑しながら、

「粘液の分泌ですか、咽喉の燥乾感覺の時には必ず其所へ痰が粘り着いたやうになつたり、又鼻孔から鼻液が出たりする、あれが即ち粘液の分泌ですが、感冒の初期から、熱い最中頃の鼻液は水又は漿の樣なもので、末期から猶後のは粘液、膿液の樣なものです。」

考への深い松子孃といふが、

「風邪は萬病の原とか申しますが、實際に左樣でございませうか。」

と、自身等の知識に遠い老人の話よりは、まづ知識に近いところから聞き度がる。醫學士はいと眞面目に、

「然うです、假例ば關節レウマチス、筋レウマチス、即ち俗にいふ風毒、腰痛、疼痛性神經病などは感冒から引續いて起り、感冒の初期に起る頭痛が慢性になれば腦の機能を弱めることもあります。感冒から消化器即ち胃、腸、食道などの病を惹起し、呼吸器即ち肺、氣管などの病を惹起すこともあります。」

松子孃は何か思ひ出したやうに、

「では、あの肺炎や氣管支炎は多く風邪から來るのでございますか。」

「左樣、感冒から引續いて起ることもありますが、彼の急性肺炎、盒

性氣管支炎などは詰り肺や氣管が直接に感冒に罹つたので、極めて寒い時に口で以つて呼吸すると往々さういふことがありますが、寒い時でなくても、其時の事情に依つては無いとも限りません。」

松子孃、尙だ腑に落ちぬ面持にて、

「それでは、寒い時に如何して呼吸すれば宜のですか。」

「口を閉ぢて、鼻で呼吸するです、鼻孔の中には空氣中の塵埃を取つたり、寒い空氣を溫めたりする裝置がしてありますから。ヘイ、無論只溫めるのみではありません、空氣中の塵埃をも取るのです、乾風の吹く時に、富士見町の壕端や霞ヶ關などは別して塵埃が烈しいですネ、あゝいふ塲合に、知らず〳〵口を閉ぢるのは自然の衛生法に適つて居るのであります。」松子孃は又、

「肺や氣管が風邪を引くから肺炎や氣管支炎だと有仰ましたネ。では咽喉や鼻の惡いのは咽喉や鼻が風邪を引いた譯でござりますか。」

「あゝさうです。が、多くは背部とか腰部とか、凡て身躰の他の部分が感冒に罹つて、反射的に咽喉や鼻へ來るのです。」

「反射的とは?。」

「交感神經の作用です。手近い例を言ふと、便祕の時に逆上したり、膝に腫物が出來て高股に熱を持つたりするのも皆反射的なのですが、肺經の直接に通じて居ない、設例ば脊髓神經の系統にある腰部などの感冒が、何故に又如何にして腦神經の系統內にある鼻などへ反射して來るかそれは未だ明らかに判らないので、只、其事があるからあるとして置くより仕方が無いのです。」

八木老人は銀髯を掀髯りながら、

「遠山、風邪を引いてからの事はそれで分つたが、寒さに觸れると何故風邪を引くのか、其所の道理は如何なものだ。」

「何故とは?。」

「乃公の實驗からいふなら、極めて寒い朝に薄着をして歩いても風邪を引かない、二三日經つてから、頃日寒かつたからと新らしい衣服を重ねなどして、却つて風邪を引くことがあるやうだが。」

醫學士は暫し沈思して、

「伯父樣の有仰る樣な塲合は兎に角として、感冒には氣候の外に何か原因があらうといふのですか、或は電氣の作用だといふ人もあつても、矢張り慥ならぬので、結局感冒の原因は病理上明に判らないのです。尤も、實驗上濡れた衣服を其儘に着て居つた塲合に感冒に罹ることが多いものですから、衣服が濡れたらば可及的早く着換へろとか。厚着に過ぎる塲合には、皮膚の外氣に對する抵抗力を弱めますから、着物の暖過ぐる樣なことは避けさせたり。室を密閉して、僅の隙から吹入る風邪をも恐れるやうでは矢張り抵抗力を弱うしますから、寒中には尙更、朝每に室を明け放ちて空氣を通し、一方には室內の空氣を交換して新しくすると共に、皮膚が寒氣に耐へる習慣性を養ふを、感冒に罹らないに必要な注意としてあるです。」「其所ぢや。」と老人は膝を乘り出して、

「今の人は兎角理屈だけ利口に知つて居つても、其の理屈を守る精神を養ふ道を修めないのだから、立派な衛生學の博士が多病で、夭死するやうなこともあるのぢや。佛敎では、此の身躰を地水火風の四大が凝つて成つて居るといふか、これは今から見ても當らないことでは無いぢやて。まづ血を見なさい、殆んど全然水ぢや。それから筋、俗に肉といふ奴も百分の七十までは水ぢや。凡て人の身躰の百分の、五十餘までは水ぢやから、これが水ぢや。」

昔流の事ばかりいふ老人と思の外、生理上の分量の事を言ひ出したから村子は勿論、松子孃も其他の人々も、案外といふ面持で老人の面を看る。

「風といふは空氣の事だ。人間の體内に空氣が無かつたら死んで仕舞ふ。人が呼吸をするから體内へ空氣が入るのでなくて、體内に空氣が入用ぢやから自然に呼吸する譯になるのだ。普通の人は肺で呼吸するものだと思うて居るが、肺でする呼吸は外呼吸といふので、心臓から出た靜脈血の循環といふて、肺臓の周圍を循環る時に身體に大毒な炭酸を呼出して必要な酸素の多い新しい空氣を吸入れて一旦心臓に返り、動脈に出てから、大循環といふて身體中を循環る時に、筋肉などは血液から酸素を吸入れて、炭酸を血液の方へ呼出すのを内呼吸といふぢやが、若し、人が呼吸を止めて居ると、筋肉の組織などでは炭酸が澤山出來て酸素が入用になるから、自然と延髓の呼吸中樞といふ所を催促して呼吸せねばならぬ様にするのだ。これで空氣、佛教でいふ風の身にある道理も分つたらう。」

八木老人がいよ〳〵綱に生理のことを説き出したので、聴く者は、古い事ばかりで無うて新しい知識をも充分修めて居ることを感心して、ますます老人のいふことを信用する。

「火は言ふまでも無い温ぢや。温が無かつたらば人は死んで仕舞ふ。それから身體中にある凡ての、石灰だとか、鐵だとか、いろ〳〵の物質は皆地上にあるもの故、これを地といふのだ。恰度漬物を漬るに、鹽が少し足りないでも腐るやうなもので、此の四大の調子が狂へば病氣になるのだが、其の調子を旨く整へて行くのが氣であるから、氣さへ整然として居れば、大概の病氣には罹るものでない。」

「氣つて、如何なものでございますか。」と村子嬢が又尋れる。

「サア、如何なものとての、手で作つて見せる譯には行かぬが、心力といふて心の力ぢやて。」

「心の力つて解りませんわ。」

「ハツハツ、解るまいが、心の體や心の力の事を説くは純正哲學といつて、高尚な學問でする事ぢやがな、和女方は只、氣といふ力があると思へば可いのぢや。」

「伯父様、氣の事は可いですが、佛教の四大説なんか、今頃後れて居るですよ、一口に地ぢやと有仰る物質にもいろ〳〵あつて、中には至極大切なものもありますから。」

「でも何ぢやらう、温や空氣が無くては五分も持たない、水が全くなくては半日も持たないが、他の物の、或は成分が無いとて三日も持たぬといふことは無いわ。」と又老人は膝を進めて、

「そこで諸君、心の體を整然と腹に收めて、氣を確乎と持つて居ると常に血の循環が調つて活潑ぢやから、寒氣に逢つて風邪を引く様なことはない。随つて毎時〳〵身體が健全で、身體が健全であれば頭の心持もよく、頭の心持がよければ、常に樂しくて、詰らぬことに關らず、氣も血の循環も活潑で、食慾を調へ、消化を能くし、少し位の黴菌が體内へ入つても殺して仕舞ふ。」

と一層聲に力を籠めて、「それには調息といふ良いことがある。調息とは呼吸を整へることで、生理上から言ふと呼吸は體内の炭酸の量に關係するから、新しい空氣の流通のよい所に、身體を靜にして居れば、體内に酸素が餘つて、一方には動く時程に炭酸が出來ぬから、自然と呼吸の數が少くなるのぢやが、それで急に動きかけて又息を忙しくするのは、何の事はない食事をむらにするやうなものであるから、常に中位に息を調ふるが宜しい、息を調ふるは今いふ如き利益の外、血の循環をも中位に保つ効能があり、自分で自分を忘れないといふ精神上の大利益がある。

設例へば、浴後などに、横になつてゞも居ると、好い心持ちに眠くなる夏暑い所を歩いて來て、急に風通しの良い涼しい所に休んだ時なども

うぢや。風邪を引くは斯ういふ時に多いもので、知識のある人は此の道理は知つて居ながら、自分で自分を忘れるから、所謂醫者の不養生をすることにもなるのぢや。自分で自分を忘れなければ、斯ういふ時に好い心持を貪り盡さないで、自分で災を防ぐことが出來る、物心相關といふて、心と物質との關係に就いては深い道理のあるもので、精神的攝生の道も段々種々あるが、今日はこれだけにして置きます。何れにしても調息は心を修めると身體を健康にすると二つの大効能がある、眞に無病で長命がしたいと思ふならば、まづ茲から初めるが宜しい。氣を修めずに病氣に罹ると藥を服む、それは鐵瓶や銅瓶を使ふに、アゲることも爲ないで、前日の水を翌日まで入れたなりにして置いたり。唐銅火鉢に灰を入れたなりに藏つて置いたり、平素の取扱に注意をしないで、損じたり毀うなつたりすると錺屋の手にかけるやうなものぢや、損じたるは錺屋の手にかけるは當然であらうが、其物を長く善く持つは平素の注意が大切ぢや、先刻達山の言うた、感冒から消化器病を續發するといふのも、一つは藥といふ胃腸の喜ばないものを入れるからぢや、健康に長命がしたかつたらば、諸君、乃公の言ふやうにしてごらんなさい。」

入木老人の説は合理だと、達山醫學士も言ひ添へた。松子嬢、村子嬢も成程と合點した。其他の人々も感心した。大には意思の強くなる方法や根氣の續く樣になることなどを聞きに來やうといふので、皆々歸去つた。

▲養生訓

養生の術は先づ心氣を養ふべし、心を和かにし、氣を平かにし、怒と慾とをおさへ、うれひ思ひをすくなくし、心を苦しめず、氣をそこなわず、是、心氣を養ふ要道なり、又臥す事を好むべからず、久しく睡り臥せば、氣滯りてめぐらず、飮食未だ消化せざるに早く臥しねぶれば、食氣ふさがりて、甚だ元氣をそこなふいましむべし、

家庭教師の資格

若溪女史

西洋の中等以上の家庭では大概家庭教師を雇ふて子女の教養をそれに一任するの風であるが、日本ではまだそれを要するほどの家庭は世間に澤山にない。けれど世の進むと共に段々主婦の取るべき仕事が多くなつて自然家庭教師を必要とするやうになるであらう。

今日家庭教師を必要とする家は富豪、華族の如き上流社會、其他特別なる生活の爲めに主婦の繁忙なる家庭若しくは不幸にして生母のなき家の子女、或は子女の多數にして手の屆かざる家庭、又は主婦たる人の病身にして子女の監督教養の十二分ならざる家、其他種々なる事情の爲めに家庭教師を要するのである。

家庭教師といふものは、母親に代つて其の家の子女を教へ育てるのであるから、其の責任は極めて重い、隨つてその人物即ち資格の撰擇に就ては大に注意せねばならぬ。其の撰擇の條件は島津家の御雇で模範的家庭教

師の稱ある英國人ミス、ハーヴオルト女史の考へられた事柄は尤も用意周到のものである故、左にその條項を記して世の母親たる人幷に家庭敎師志望の諸君の御參考までに、

△境遇の變化せし人　家庭敎師に成る人が贅澤な家に育つた人なれば頗る優等なる敎育も受けて居らうし又實際其身に才藝もありませう。併し斯く贅澤な家庭に於て育つた婦人が、俄かに、或る事情のために、自身生活の都合上、已むを得ず敎師となつたならば、其者の家庭敎師として、不適當なることは、貧賤に育つて困難をしつゞけた所の婦人が家庭敎師たる資格を有つて居らぬのと同し事である。

固より富裕な家庭に育つた婦人は、今迄安樂な生活をして居つて、何事にも不自由を感ずることなく、多數の朋友を有つて居つて樂しく遊び、又交際社會にも出入して、自分の一身に取つて、寸毫の責任と云ふものもなく、又其家に在つては、只あらゆる愉快を盡して居つたのである。

併し斯う云ふ家庭に育つた婦人は、自分の氣儘一杯にして、愉快な生活を爲して居ることとの出來得る間は、身體も益々强健であつて、從つて、其精神も益々快活である、併しながら極く規則の正しい生活の覊束と、境遇の激變とは、其人が曾つて有つて居つた所の敎師たるの資格を減少するものである。

△父母の强制による人　次は幼年の頃から、其父母に獨立の必要なることを常に敎へられて居つた爲めに、成長してから敎師となる婦人もあらう。併し斯う云ふ風に育てられた婦人は、如何程優等な卒業證書を有つて居るにもせよ、家庭敎師としては不適當である。何故なれば、此婦人が敎師となつたのは、只兩親の强制によつて已むを得ず成つたので、決して自分の志から出たのでもなく、且つ別に何等の必要あつて奉職するのでもなく、つまり親から無理に强ひられて爲るのであるから、

△徒然の爲よりなりし人　次は神經質であつて、物事に感じ易く、只ぶら〱と家に居つては、却つて健康

を保つことの出來ないやうな婦人がある。而うして其生計は不自由なく安樂な身分であると、醫師は此婦人に勸めて何か業を取つた方が健康のために宜しからうなど丶云はれて敎師に成る人もある、それも又不適當である。

以上の如く巳むを得ず敎師となつた人に、幼稚なる子弟の敎育を一任することは、其弊害尠なくないことである。

▲天成の敎育家　然らば完全なる家庭敎師を選擇するにはどうしたら宜いか、第一に敎師となる婦人が眞に敎育事業を好んでするのであるかどうかと云ふ事を見極める事が肝要である、家庭敎師たる人の、第一番の主要なる資格は、其人が、生れながらにして敎師たるの資格を俱備して居るのである。

▲好より成る人　且つ其婦人は、眞から自分で敎育事業を好むが爲めに敎師となつた人でなければ成らぬ。又其敎育事業を以て、自己の義務として居るやうな婦人でなければ成らぬ。此等の資格を備へて居る婦人であれば、縱ひ其敎養に就ては、多少不備な點があつても、之れを補ふことが確かに出來得る。何故なれば、自分の今迄受けた所の敎育は、よし不完全にもせよ、之れを補はんが爲めに非常に勉强して、其敎育を委任された子弟のために、新智識を得ることが、必ず多い

眞に自分から敎育の任に當ることを好んで敎師となつた婦人は、縱ひ今迄は安樂にして贅澤な生活をして居つたものが、一朝事變のあつた爲めに、位地を變ずるやうな事があつても、夫れがために自分の意志を變更するやうなことはない。却つて其境遇の變化に由つて今まで覺ることの出來なかつた事を覺り得て、一層敎育のために力を盡し、毫も既往の榮華を羨むやうなこともせず、却つて、其處を得たるを自覺するであらう。

▲熱心なる人　同じ素養があつて、敎師となる婦人でも、自ら好んで身を敎育に委ぬる者と、又或る事情に强制せられて巳むを得ず敎師となつたものとの間に非常なる差違のあることは、今申すまでも無い。して見れば、其適任たると、不適任たるとは火よりも明断か

である、單に、素養があると云ふ許りでは、如何程完全な教育を受けて居る人でも、其教育の方法が動もすると、機械的に流れ易い弊害がある、斯う云ふ風にして教育された家庭教師をして其弊に陷らしめないやうにするにはどうしたら宜いか、これは教育事業を好愛するの心を抱かせる事が一番である。

▲身體强壯の人　之れにも自ら度合のあるもので、私はこれまでに度々燃ゆるが如き熱心と、好愛心とを以て教育に從事して居る人を目擊したが、私は斯う云ふ人に逢ふ毎に、何時も此人の體力は迚も長くは續くまいと云ふ事を想像します。要するに、教師たるべきものは、體力の强健にして、活潑でなければ充分の効を奏することが出來ぬ。夫れ故教師として好結果を收めやうとするには、勤めて身體を健かに保つことを心懸けるのが第一。神經過敏にして、動もすれば頭痛に陷り易いやうな婦人は、教師として不適任者である。少なくも樣々の屋外運動と、遊戲とに堪へ得る健康を具へて居らんければ成らぬ博物學などに付て多くの智識を持つて居るもの、又は、天地の自然を愛好する心に富んで居る教師は必ず幼年なる子弟のために、多大なる利益を與ふることがある。何故なれば、斯う云ふ教師の薫陶を受ける小兒は、課業時間の外に、嬉戲の間に於ても、知らず識らず新智識を得ることが出來る。

▲趣味多き人　一寸野外に散步しても、目に觸れる色色の草や木や花や實などに就て、說明をして聞かせたり。又家には色々な動物を飼養して、其の鳴聲を聞かせ、その遊ぶさまを見、自然に活物を愛撫するの念を養はしめることが出來る、斯樣なことは、一寸考へると、差して効も無いやうだが、却々然うでない。これによりて子弟の目を娛ましめるのみならず、總てのものに就ての觀察力を養ふ利益がある、故に家庭教師となるものは、是非共普通一般の課程の外に、或る趣味を有つて居らなければならぬ成年の男子に於いても、或る嗜好を有つて居るものは、之れを持つて居らぬ人に比較して大に幸福である。又學生でも、特別なる趣味を有つて居る人は、他の趣味を持たぬ學生に比較べ

ると遙かに學術が進歩して、且つ自分自身に取ッても愉快なものである。例之ば、蝶だとか、或は種々の鳥類の卵とか、又は、各國の印紙のやうなものや、若しくは、貨幣等を集て樂むことは、大變に學生の智識の發達を助けるものである。夫れ故家庭教師のみならず直接に子弟に接近する人は、常に斯う云ふ趣味を子弟の頭惱に染み込ませることが肝要である、又家庭教師を撰擇するに當つて最も心を用ふべきことは、其の身分を能く知ることである、家庭教師たるべき婦人は、良分と、教育と兩つながら淑女たるの品性を備へたものでなければ成らぬ。苟しくも、他人の子供を指導し訓戒するには、偏頗の念を去つて、自分の職分の大切なることを確認し、飽くまでも自分の身を愼み、能く困難に堪へ、充分信用するに足るべき人物でなければならぬ。而うして猶一つ肝要なことは、自分の預つたところの子弟に對して自己の勢力を占むる前に、先づ其の子弟から信任を得ることが第一である。而うして其の子弟をして、此の教師は、吾が家族の一人であると云ふ感念を抱かしめることとである。

△猶一ツの資格、多辯を愼んで餘り輕々しく物事を語らず、又其家に起ッたことは、どんなことでも必ず秘密を守つて一切口外せぬことが肝要である、家庭教師たるものは自身が、其家の人から、信用を受けて居る通に、自分に委任せられた其家の子弟をも能く信用して、一點の疑心を其の間に挿むことの無いやうにしなければ成らぬ。又其委任された子弟のためには出來得る丈利益を與ふることを心掛けて、怠らず研究して居らなければ成らぬ。又如何なる塲合にも嫉妬の心を起してはならぬ、故に晝夜共に委任された子弟と一所に生活して、彼等のために一身を抛つて、眞から之を愛撫して、縱ひ其家に新來の人があつて、自分より其人の方が多く子弟に愛好せらるゝやうな樣子があッても決して怨嗟、悲嘆ことは致しませぬ。總て幼稚なる小供は、皆新しい目馴れない人には心を傾け易いもので、所謂新しもの好きと云ふのは小供の癖である、然う云ふ塲合にも、家庭教師が、嫉妬の心を起さずして能く自分の執るべき道を執つて、方針を誤らずにさへ居れば、段々と月日の經過に從つて、子弟の愛情は自然と其教御の方に歸するものである。



支那 史上の婦人（下）

大町桂月

◉光武皇帝が女を娶らば、まさに陰麗華を得べしと言ひたるは、その色を愛せし也。色は問はず、妻を娶らば、陣仲子の妻のやうな人を得たきもの也。楚王、仲子の賢を聞き、之を聘して、宰相となさむとて、使者をやる。仲子、妻に謂つて曰く『王、われを以て宰相となし給はむとす。今日、相とならば、明日は駟を結び、騎を連ね、食、前に方丈ならむ。御身之を可なりとは思はざる乎。』妻曰く『夫子、賤しき業をとれど徒手遊食にはあらず。琴を左にし、書を右にす。樂亦其中にあり。駟を結び、騎を連ぬとも、安んずる所は膝を容るゝに過ぎず。食、前に方丈なるも、甘んずる所は、一肉に過ぎず。今、膝を容るゝの安と一肉の味とをすてゝ、楚國の憂をいだきて、なほ可なりとし給ふ乎。』仲子、終に使者に謝し、妻と共に逃れて、園丁となりて、貧しき生活を送れり。女子は十人が十人まで、富貴を喜び、命に安んずる能はず。仲子の妻の如く、わけの分りたるは、類稀なりといふべし。

◉支那の國家の滅亡の裡面には、常に婦人あれど、興國の裡面にも、亦女子あり。夏の塗山に於ける、殷の有莘に於ける、周の太姒に於けるが如き、これ也。また賢人の母は、みな賢也。孟子の母の如きは、餘りに有名なれば、説かず。周室の三母とて、賢母三代相つゞけり。以て賢母の代表者となるべし。三母とは、太姜、太任、太似也。太姜は、太王の妃にて、王季を生めり。太任は、王季の妃にて、文王を生めり。太似は、文王の妃にて、武王、周公を生めり。支那にては胎敎といふことをやかましく云へり。婦人、子をはらめば、寢るにも、坐するにも、立つにも、歩くにも、

行儀よくし、邪味を食はず。割いて正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を見ず、耳に淫聲を聞かず、夜は則ち盲人をして詩を誦し、正事を言はしむ。かくすれば、生るゝ子、形容端正、才德必ず人に過ぐ。これを胎教と稱す。太任は、よく胎教を守りたる人にて、便所にて、文王を生みたるくらゐに、安産したりき。この外、賢人の母、必ず賢なる例多けれども、わづらはしければ、一々記さす。

●繼母の模範とも云ふべきは、芒卯の後妻、即ち芒慈の母也。その子三人、前妻の子五人、都合八人の子を世話したる人なるが、その繼子、みな繼母を愛せず繼母之を遇すると、非常に丁寧なれども、なほ愛せず衣服飲食など、實子の方は粗末にして、繼子を優遇すれども、なほ愛せず。かゝる程に、前妻の中子、魏王の命を犯して、罪、死に當る。繼母大に心配して、朝夕勤勞して、その罪を救ふ。魏王大に感じ、繼母にめんじて、その子を赦せり。これより繼子もみな繼母に親附し、その德に化して、みな賢人となれり。

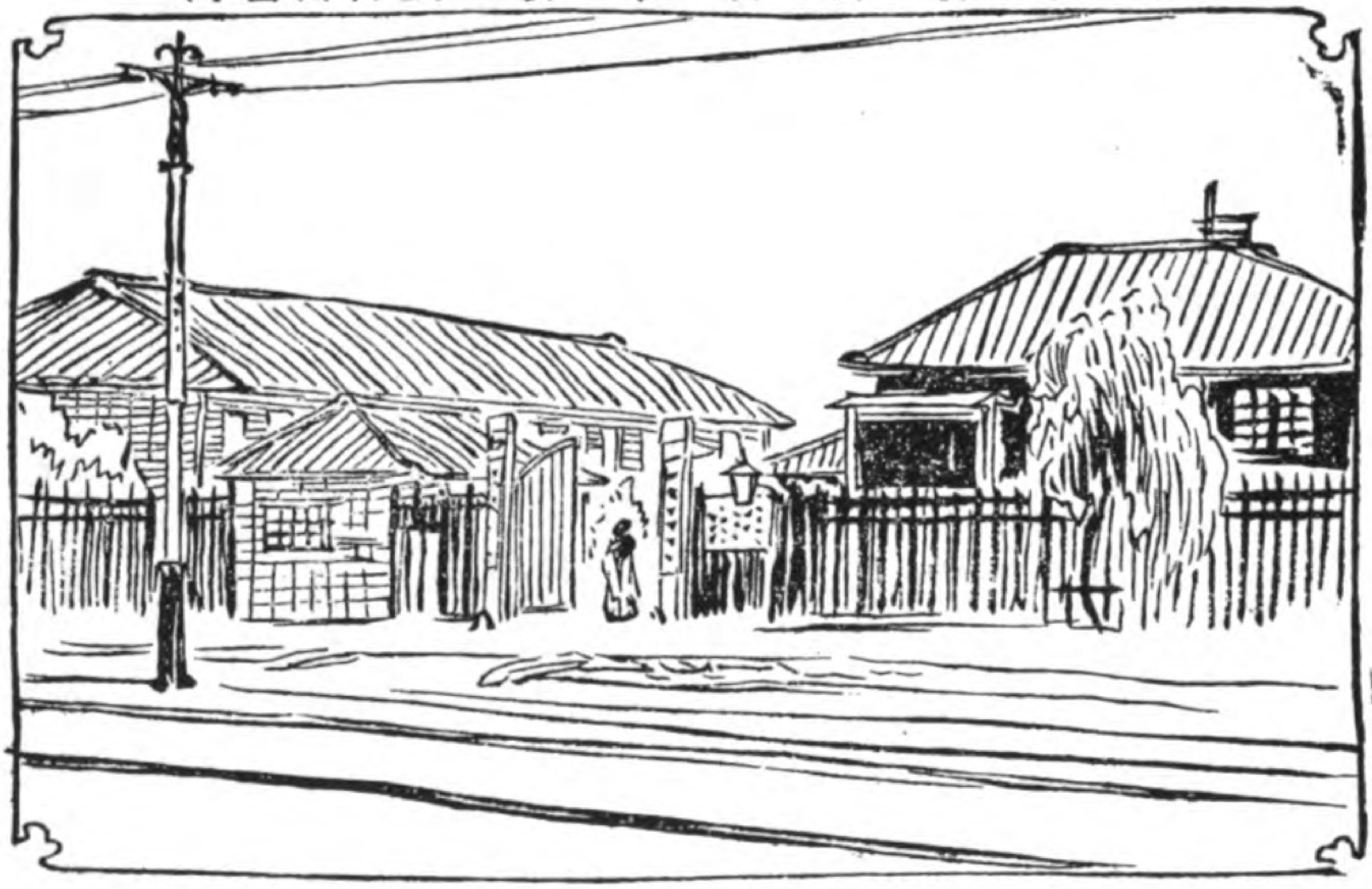
●漢の元帝は、絶世の美人、王昭君を失ひたれど、なほ馮昭儀、傅昭儀の二美人を得たり。帝、或時、猛獸の鬪ふを見物す。熊、圈を脫して、殿に上る。傅昭儀をはじめ、宮女百官みな、驚き走る。馮昭儀ひとり帝の前に出で、熊に當りて立つ。身を殺して、帝をすくはむとする也。帝その壯烈に感じて、益々寵愛せり嗚呼、これ愛の極、忠の極、かねてまた勇の極也。元帝ならざるも、誰か斯る婦人を愛せざらむや。

●綠珠は、眞珠三斛にかへられて、石崇に買はれたる美人也。美にして艶、よく笛を吹けり。孫秀、人をやりて、之を求めしむ。崇時に金谷の別莊に在り、凉臺に上り、淸流に臨み、美人星の如く、側に侍す。使者至る。崇、婢妾數十人を出して曰く、『どれなりとも擇ばれよ。』使者曰く、『綠珠を得來れよと也。いづれが綠珠なるにや。』崇怒つて曰く、『綠珠は、わが愛する所也。與ふべからず。』秀怒り、詔を矯めて、來り捕ふ。崇正に樓上に宴す。綠珠に謂つて曰く、『われ汝の爲めに罪を得たり』とて長嘆す。『さらば、われ當に君の前

に死すべし』とて、身を樓下に投じて死せり。ついで、崇も殺されたり。

◉支那にて、子なき妻は、七去の中に數へられたり。無理な話し也。孔子の父は、前妻を出せり。孔子の子伯魚も、妻を出せり。孔子の孫の子思も亦妻を出せり。孔氏三世、妻を出すとて有名也。

◉支那の天子は、後宮に多くの美人を集むるならはしありき「後宮佳麗三千人」とは、必ずしも誇張の言に非ず。晋の武帝の如きは、その數、一萬人に及べり。呂不韋は、臣下の身分なれども、なほ一萬の婢妾を蓄へたりき。我朝の采女は、これを眞



東京技藝女學校（三田四國町）

似したるものなるべし。

◉宋の高太后、哲宗の幼なるを輔けて、王安石の新法を罷めよく國を治めたり。稱して、女中の堯舜といふ。同じく政治の才あれども、武后の如きは、姦雄にして、高太后の如きは、聖賢也。

◉最も記臆のよかりしは、蔡文姬也。蔡邕の女也。夫死して子なくして、家に歸りけるが、漢末の亂、胡騎に捕へ行かれたり。魏の武帝、蔡邕と舊故あり贖うて歸り、更に董祀に嫁せしむ。武帝、その家の典籍を問へば、曰く、『亡父、われに四千餘卷をのこされしが、今存するもの、わづかに四百餘篇也』とて、

記臆せるまゝに、皆之を記すに、一字も誤りなかりき

●班固、漢書を著はし、未だ成らずして死せり。その妹、曹昭、詔をうけて、之を完成せり。更に召されて、宮に入り、后妃、諸貴人の師となれり。號して、曹大家といふ。支那有數の才女也。

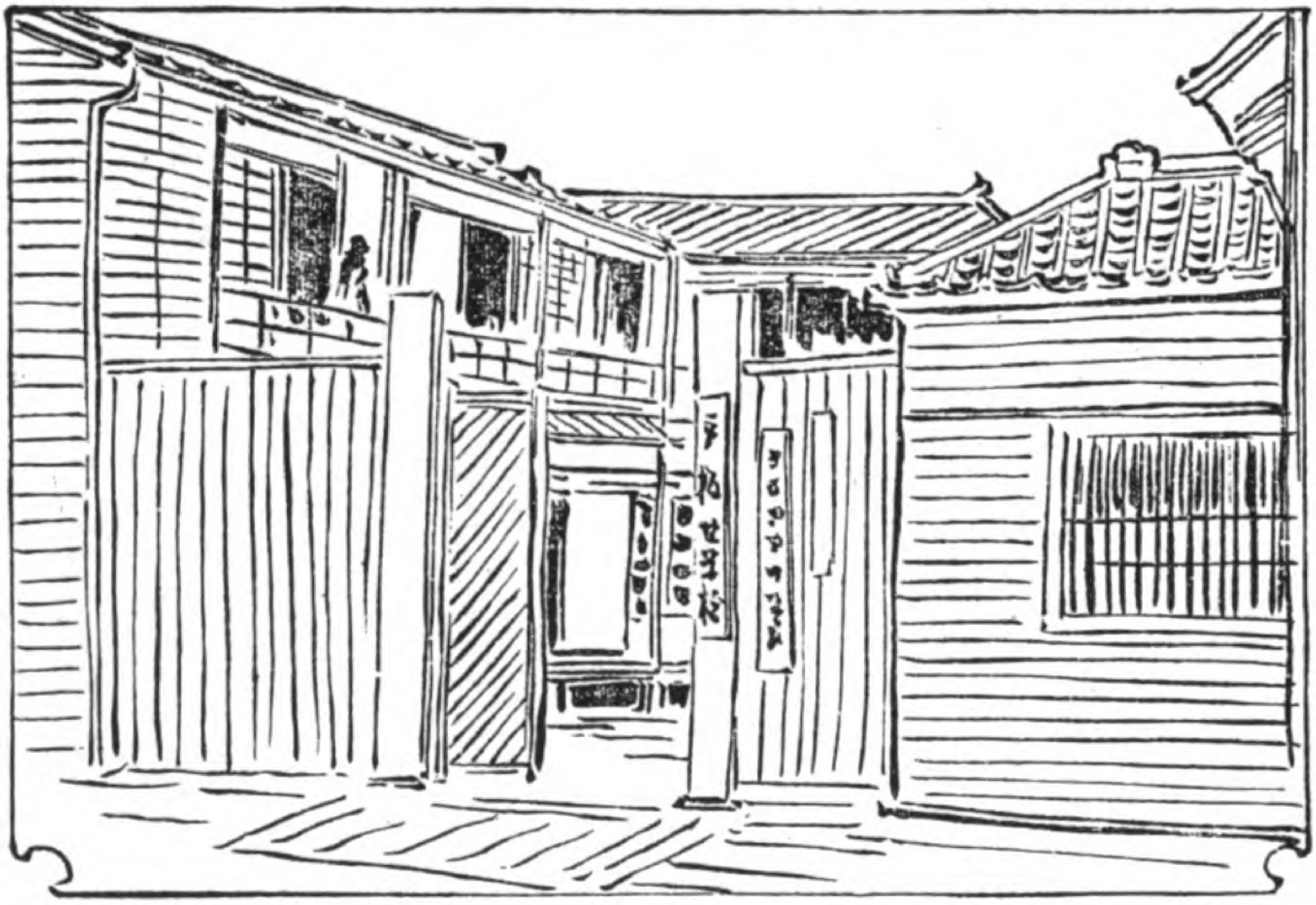
●花蕊夫人は、有名なる美人なるが、その詩に曰く
君王城上竪二降旗一、妾任二深閨一那得レ知、十四萬人齊解レ甲、也無二一箇是男兒一、
美人なほよくこの沈痛の語を吐きたる乎。

●齊の閔王、宿瘤を得て、國を興したりしが、その死後、不幸にして燕に破られ、終に殺されたり。其子法章、姓名を變じ、莒にゆきて、その太史の家の庸夫となれり。太史敫の娘、賢也。その常人にあらざることを看破し、憐んでひそかに衣食を給し、之と通じけるが、法章、後、王となりて、襄王と稱し、娘は后となれり。法章死して子の建立ちしが、後よく之を輔けて、國を治め、四十餘年間は、兵を受けざりき。或時秦の昭王、使者をやりて、后に玉連環を贈りて曰く『齊、智者多しと聞くが、この環を解き得るや、否や。』玉連環は兩環相貫く。今で言へば、智惠の輪みたやうなるものにて、この玉連環は、解きうべきものにあらざるも、秦王わざと之を贈り、解かむとて苦考するを慰みにせむとせし也。后、群臣に示す。群臣みな解くこと能はず。后乃ち椎を以て之をうちくだき、秦の使に謝して曰く、『この通りに解きたり。』后の智決人の意表に出づ。この后の爲めに、齊國の榮えしも、偶然にあらず。

●魯の漆室といふ處に、女子あり。女盛りを過ぎて未だ人に嫁せず。穆公の時に方り、君老い、太子幼也女、一日、柱に倚りて、溜息をつく。隣婦曰く、『何がそのやうに悲しきぞ。嫁入の出來ぬを悲めるにや』。『嫁入などは、どうでもよし。われは魯の君老いて太子の幼なるを憂ふる也。』隣婦笑つて曰く、『それは、魯の大夫の憂ふべき所也。婦女子の知つた事に非ず。』『いなとよ、昔、晉の客、我家にやどり、馬を園中につなぎけるが、その馬逸して我菜を踏み、我をして、

終歳、菜を食ふこと能はざらしめたり、隣女、人と共に出奔し、その家、我兄をやとひて、之を追はしめけるに、大雨に水あふれて、我兄溺死し我をして兄なきやうにならしめたり。世に、「河潤九里、漸洳三百歩」といふ語あり。魯國に患あれば、君臣父子皆その辱を被り、禍、衆庶に及ぶ、女子とても、之をのがるべきに非ず。』その後、果して魯に内亂あり。外冦あり。男子は戰に出で、婦人は轉輸に苦めり。女子がたゞ夫の機嫌をとれば可也。家をとゝなふれば可也とのみ思ふやうにては國家眞に強大なる能はざるべし。女子が、この漆室の女の如きに至れば、女子教育の能事畢はれりといふべし。

戸板女學校（三田四國町）



◉以上、薄命なる女、美人醜婦、姦婦、毒婦、女中の堯舜、賢婦、才女、妬忌なる女操を守りて王にも屈せざる女夫をはげましたる女、よく姑に事へたる女、よく織子を育てたる女、死を以て夫につくしたる女、國を亡したる女など、三十餘人、ほゞ支那史上の女性を代表するに足るべしと信ず。善惡美醜、混同して普通女子の道徳の爲めに古の烈女の傳を說く者と其選を異にす。心をとゞめて見なば、餘師、自から其中にあるべき也。

大慈善家

ブルデットコーツ夫人の逸事

今の社會に於て苟くも一事業をなさんとするものは大に金錢を要するのである、金錢なくては如何なる英才の人でも事業を完全になし遂ぐる事が出來ない。

世には金錢を貯蓄する事を罪惡の樣に考へ、又金錢を目して罪惡視するものがある、けれどもかゝる議論をする人は、所謂固陋な宗教家に多いのであつて、苟も二十世紀に於ける眞の宗教家、眞の道德家にはコンナ議論をするものは一人もないのである。

諸姉ヨ、金錢は決して罪惡でないのみならず、社會有用の一つで、其用を得れば社會の公益を増進し、天才の人、品性の人をして、其使命を全ふせしむるものである、で、金錢には決して罪惡といふ性質を持つて居ない、善惡は皆これを使用する人にあるので、其人によりて如何樣にもなるのである、其人の品性によりて金錢は善惡の性質を持つ樣になるので、そこで始めて社會を墮落さしたり、其人を蹉跌したり、社會を向上せしめたり、其人をして益々尊ましむるのである、故に金錢は意なし只其人にありと云ふ次第である。

で、人はよろしく其財を散じ、利用するに當つては英國の慈善家コーツ夫人を摸範とすべきである、この婦人はよく金錢を利用した人で、彼が一生の間に社會的事業のために散じた金額は二千萬弗の上に出づる相である。

コーツ夫人は、英國の志士フランシス、ブルデット氏の第三番目の娘で、母は倫敦の大銀行家トーマス、コーツ氏の娘ソヒヤ孃である、ブルデット夫妻の性質は、よく調和されて其子女の上に顯れ、意志の強き温情のコーツ夫人をつくりあげた、而してコーツ銀行の持主となつたのは、夫人の年二十三に達した時である夫人はキャーリスル、ウエストミンスターの地に二大敎會堂の建設を手始めに、多くの社會的事業に手を下して、行路難る人々の上に恵の露を降らした、然しそ

れを一々書き盡す事は出來ないから、たゞ其重なるもの二三をこゝに。

何處の都會でも、其都會が繁榮するにつれて、地價は高くなり、生活上の費用も嵩んで來るもので、差當り困るのが、勞働者、小商人、小官吏の人々である始めは可なりの家に住み、可なりの衣食をしてゐたものが一朝生活費の增した爲め是非なく、住み慣れた家使ひ慣した家財の數多を、賣代として長屋に立退ねばならぬ仕義となつて來る、若しもこの長屋が立派なもので空氣の流通もよく、光線の具合もよいならば、別に苦情を申立つる必要はないけれども、世にこの長屋程不潔な不道德なものはないのである、一度此等の長屋を見舞ふものなら、何とも云へぬ感に打れる、また其の不衞生な點、不道德の點を見て驚くであらう、多くの人の中には此等の氣の毒なる人に同情を寄せて長屋改良を謀んとする者もないではないが、其人は志あつても資本などない爲に、唯それ等貧民に同情を表するといふだけで實行が伴ない誠に殘念の至りである。



和洋裁縫專門學院（青山）

處がコーッ夫人、一朝可憐な貧民の住ふて居る長屋を見てから、大に其の人々に同情を寄せ、其の慈悲心は遂に資を投じて改良長屋を建つるまでに至ッた。夫人の同情は我が地に空氣も光線も二つながら、よろしき改良長屋を造りあげ、聽て多くの貧しい家族が其處に移住して、夫人の德を稱へるといふ次第にまで運ば

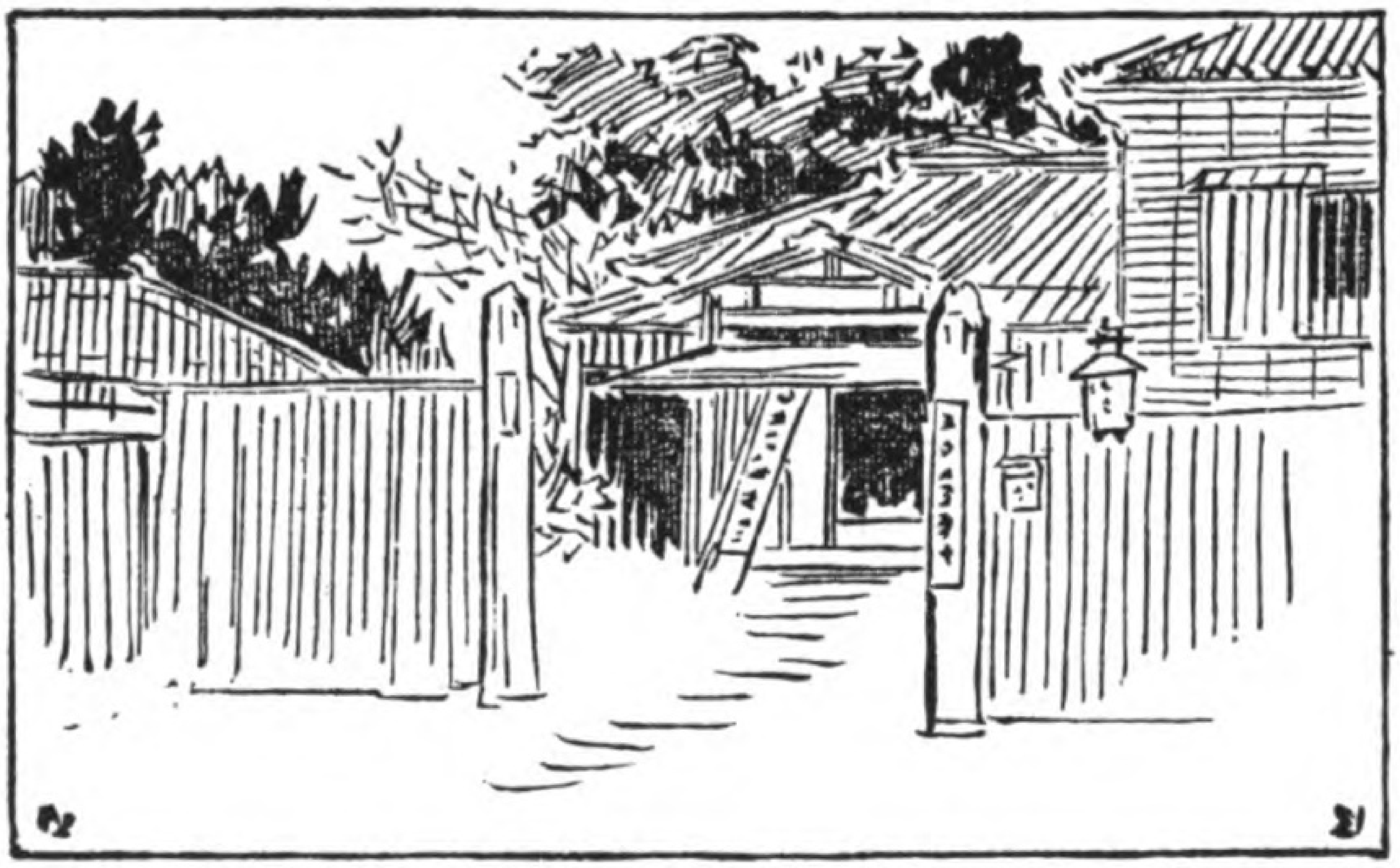
れた、けれども夫人は其長屋を無代で貸したのではない普通の如く家賃を課した、然し其家賃といふものは普通の借家に比較すれば、ズット廉價いのであつた、其家賃は始めは廉價いが、中途から俄に高く引き上げるといふ法でなく、永久の据附けで如何なる事があつても家賃はあげず、たゞ一旦住んだ人は永久に住んで貰いたいのが、夫人の希望であつた、スルト世間では夫人の行爲に就いて云々するものがある、それ程貧民を思つてわざ〳〵奇麗な長屋を建てる位の事故、イッソ家賃なしにすれば、貧民は猶更よろこぶであらうと、例の東洋流の慈善、即ち希望のない慈善の方法から、割り出してトヤカク論ずるものがあるけれどもコーッ夫人の建てた長屋を無賃にせず廉價い家賃で貸したといふ事は、夫人の夫人たる處で、夫人の偉い所を示してゐるのである、この考があつてこそ活きた慈善は行はれたのである、何故なれば夫人は貧民の懶惰安逸を防がんために、豫防の一策として斯く取計つたのである、實に貧民といふものは仕様のないもので境遇の結果として前途の事など考へてゐるものはメッタにない悲しい事には日本でも歐米でも貧民は其日暮しが多いなるだけ樂して、なるだけ御馳走を食はふといふ横着極まつた考を持つてゐるものが十中八九であるから家賃の無代といふ事は本人の爲にならず、却て彼等を益々懶惰に導く原因となるのであるとの遠慮ある考へからである、夫人は實にこの點を熟考したのでる。

　コーッ夫人は、貧民長屋を建築して、世の不幸なる人に、多大の便利を與へた許りでなく、また百萬弗を出して、貧民長屋の最寄に市場を設けた、この市場といふは種々なる日用品を極めて廉價に、否むしろ原價で販賣するのであつた、家賃が低廉くて家の奇麗な長屋を得たところの貧民は、またこの日用品に就ての恩惠を得たのである、然し夫人は斯くして衣食住の便利を與へた許りでなく、又衣食住の基本たる敎育、手藝の方にも意を用ゐたのである、倫敦で有名な貧民窟ホスピタルフヰールドに裁縫專修學校を設けて、多數の貧婦を集めて裁縫を敎ゆると共に、それ等の人に職

業を供給し、所謂慈善に依頼せず自活する事を得せしめたのである、夫人はまたその學校の別科として看護學を教授し、徒手遊食する數多貧婦の中から看護婦を養成して貧民の病者を看護せしむると共に、或は醫師藥劑をも彼等に供給したのである。

其他海軍志願の少年に多額の奬學金を補助し、邊鄙なる田舍の少年少女が一生明盲にて終らんことを悲み恐れ、わざ〳〵巡回教師を派して國のため、其人のために教育の普及を圖つたのである、又時としては夫人躬ら市中の夜學校を參觀し、それそれ時に應じて寄附金を贈つて、學事を奬勵してゐたのである。

嘗て商業不景氣のため非常なる貧困の境遇にあつて、餓死か犯罪かの一つより撰ぶべきなきある人々を補助してクインスランドに移住させた事もある、此等貧民はクインスランドで成功した後、夫人に對して救命の禮を云つて寄越した、これのみならず夫人に對する社會の感謝の多かつたのはその社會に盡した慈善の數知れない證據である、實に夫人は貧民の友であつて、よく金錢を利用し、活慈善をなした人である。



愛國女學校（麹町區元園町）

戰國の賢婦人

古城生

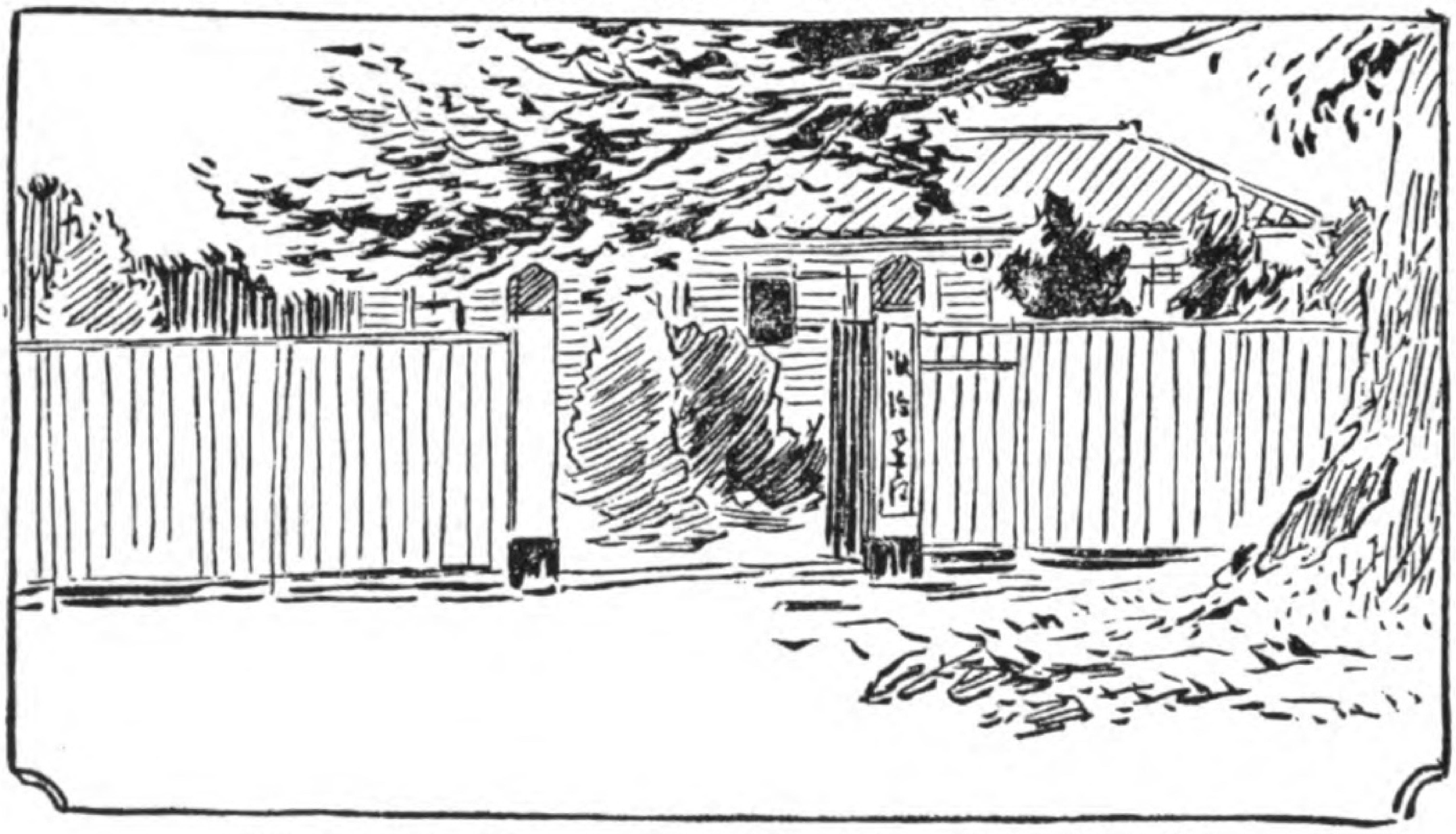
片倉景綱の姉の話

獨眼龍伊達政宗の英略を想ふものは必ず片倉小十郎景綱の其の背後にあるを認むるなるべし、片倉景綱の政宗に於ける猶ほ直江兼續の上杉景勝に於けるが如く、

島左近の石田三成に於けるが如かりき、彼の伊達氏に於けるや實に參謀長にして外務大臣を兼ねしものなりき、只政宗の英姿當時に冠絶せしが故に彼の影法師は餘り著るしく認められざりしのみ、若し政宗をして疎豪上杉景勝の如く、雄才石田三成の如きものならしめば彼は本尊よりも輝く髣髴として當時の舞臺に顯はれ出でたりしや殆ど疑ふべくもあらざるなり。

然らば景綱は果して何人ぞ、果して如何なる人ぞ、彼は伊達家の家臣として東奥に人となりたる東北健兒なりき、勇武固より三軍に將たるに足りしなり、然れども彼が精透切實なる眼光識力は單に旗を捲き兵を斬る馬上の雄たるに甘んせしめざりき、彼は早くも東北の地の僻地に存在して遂に中央舞臺に參加するの不利なるを看破せり、而して當時の中央舞臺は近畿東海の間に存するが故に、智勇辨力を發揮せんと欲せば當に上國に出でざるべからざるの形勢を看破したりき、即ち彼は蓬矢四方を射て天下に志ある一個草澤の英雄なりき、亦焉んぞ永く鄕關に雌服して僻陬に老ゆるに堪ゆべけんや、彼は織田信長と豐臣秀吉の成功を夢みつゝ脾肉の嘆自ら禁ずる能はず、蹶然起ちて上國に奔らんとし、一夜其志を以て彼を幼時より撫育敎養したる姉阿仙に明しぬ、以爲らく阿仙亦決して尋常女流にあらず、我が志を聞かば必ず皷舞激勵せんと、阿仙は默して彼の云ふべき丈けを云はしめぬ、而して聞き終りて淚を流して罵りて曰く咄這の犬武士め、そんな腐つた根性は何處より得來りたるぞ、幼孩汝を育て上げたる此姉は假初にも汝の如きさもしき者は持つたとなかりしに、何で其樣な見下げた男に成り果てたるかと、滿口の風霜先づ彼が膽を破り、因て諄々として說て曰く士に尊ぶ所は節義にあり、進退出處苟もすべからず汝は伊達家の世臣にあらずや、而して今故なく他人の國に走りて二君に仕へんとするか、貞女は二夫に見えずと云へり、苟も一度び節を破らば才學美貌ありと雖も其婦女たる所以のもの幾許もなきを以てのみ、今汝成丁の男兒、一身百體成らざるなし、而して世間婦女子の守る所を守るに難んじ妄りに貳を二君に

委せんとするは何ぞや、嗚呼汝惑へり、他日若し幸に業成りて天下侯伯の班に列するを得るも士道を以て議せられなば汝何の顏を以て人に見えんとするか、且つ夫れ主君の地は東奧に偏僻すと雖も人多く食給る、亦一方の寄に任じて海内に重きを爲すに足る、況んや英武雄略當世亦稀に見るの名將たるに於てをや、汝如此の主君を捨て丶上國に奔り抑も何人に仕へんと欲するか、今天下亂れたりと雖も世亦戰に倦むや久し、海内日ならずして必ず治まらん、恐らくは汝が智勇辨力を嘗試するの機を得ざらんのみ、夫れ上國は久しく中央舞臺たり、一能一藝なるもの之に向つて奔注せしもの一日の故に



淑徳女學校（傳通院側）

あらず、而して今俄に新參浮浪の身を以て冒進せんと欲す、智者の爲す所にあらざるなり、設ひ幸に驥足を伸ばすを得て智勇辨力互に相角するを得るも、久しく從ふもの丶功勳を積むあれば新進の身を以て之を凌がんと眞に難し、是れまた宜しく勘ふべきなり、且つ汝の上國に奔る眞乎に天下に覇たらんとするにあるか、若し只聲華形勢の盛なるものに從つて榮名を取らんとするにあらば、其他人の頤使に任する所以に於ては所謂五十歩百歩にあらずや、同じく他人の驅使する所となりて而して永く節を失ふの汚名を招ぐ是れ實に策の愚なるものなり、想ふに汝年少雄取に鋭なり、今の上國に奔らんと

欲するもの恐らくは一城一國に主たるを得て名を天下の候伯に列せんとするにあらん、是れ或は男兒の本懐たるが如きも抑も一を知りて二を知らざるの見のみ、一城一國に主となりて妻妾に誇らんよりは何ぞ百里雄藩の重臣となりて、以て直に天下に應酬せんとはせざると言々句々準を節義に取りて深く利害を參較す、小十郎深く巳れの淺見を羞ぢ之より一意伊達氏の彊土を拓くを以て事とせりと云ふ。

阿仙は蓋し婦人にして英雄を兼ねたるものなるが如し彼は深く天下の形勢に察して久しく亂れたる世の將に大に治まらんとするの機微を看取し、地理僻遠にして聲息動もすれば硬塞せんとする東北の或は世潮に後るるとあるべきを慮り、夙に武士を養ふて上國に來往せしめたりしと云ふ、片倉小十郎が伊達氏の參謀長にして外務大臣を兼ぬるに至りたるは、實に阿仙の播げる種を收穫せし所以のもの寧ろ多きに居る、彼をして後顧の慮りなく士を四方に遊ばしめたるは即ち阿仙經營の力に出でたればなり、小田原陣の事最も此間の消息を明にするものなるが故に一言以て之に及ばん、

初め豐臣秀吉の北條氏を征して小田原に至るや、大に勢形を張りて東奥を定めんとし積年の苦戰漸く會津を併せ得たる伊達政宗を招く、蓋し其恣に疆土を擴げたるを責めんとするなり當時伊達氏の家臣多くは上國の形勢に明ならず、秀吉の命に應じて遽に行くを耻辱とし、或は亦政宗にして行かば會津の地は必ず沒收せらるべきを測り、寧ろ四境を堅めて豐臣氏の大軍を引受け城を枕にして潔く討死せんと云ふものあり、群議匈々として決せず殊に政宗の伯父にして戰功最も多きに居る伊達成實の主戰說を主持せしが故に大勢亦漸く之に傾く、政宗依つて一度び群議を散じ夜に入りて片倉小十郎を招く、小十郎曰く天下の事蠅を追ふが如し、從つて追へば來る、如かず姑らく秀吉の命ずる所に從ひ蒼蠅の盡くるの日を待たんには、今日屈するは他日に伸ひる所以なり、主君夫れ急に決せよ、必ず群言に聞く勿れと、政宗吾念も亦汝の如しと稱し乃ち小田原に秀吉に從ひ以て後來六十二萬封疆の地と爲せし

と云ふ、是を以て之を見るに片倉は戰陣の勇よりも帷幄の謀を以て優るものなり、而して其の謀計に必ず誤らざるは亦只上國の形勢に通ずるに出づ、然らば即ち伊達氏の封土を開きしもの、小十郎をして出處を過らしめず、且つ常に上國の形勢の審にすべきを諭し自ら後方勤務者となりて士を四方に放ちたる阿仙其人の功なりと云ふも亦可なり、設ひ彼をして其英雄策士的の事業を爲さゝらしむるも、節義の尊ぶべく出處の重んずべきを諭し年少の小十郎をして士道を誤ることなからしめし用意に至りては、亦實に武士道の精髓に得る所ある女性なりと云ふべし。（完）

郷人談

報德生

△村の先生

關東の或る僻邑の事であるが、其處に某先生と呼ばれた人があつた。もと藩の士人であつたが、此の村の醫師の遺女へ入婿に成り、明治六年小學校が建てられた時から教師として、爾來三十年間村の子弟の教育に盡砕し、門下に若干の人物を出した。

彼は必ずしも學問該博の人ではなかつた。有爲活潑の人でもなかつた。唯彼は一片の稜々たる武士的眞骨頭があつて、謹嚴方正を以て身を持し、獻身的精神に富で居て、之に接するものをして自づと肅然と容を改めさせる慨があつた。

而して彼が如何なる人物で、如何に獻身的精神に富み、如何に其職務に忠實で、如何に其職務の爲に戰死した乎と云ふことは、彼が最後の卒業式に臨だ一話を見て、之を察するに難くないのである。

彼が長逝したのは明治三十年であるが、彼は是より先に久しく重い疾病で居た。そうして病を努めて教鞭を振つて居た。所が、其疾は次第に進で、最早容易ならぬものに成つたので、彼は終を涙を振つて若干日の間缺勤を致し、以て其身の靜養をした。然し時が丁度

學期の終に際して居たので、彼が教育の結果を見るべき兒女の卒業式は日ならずして來た。底で彼は人の苦諫をも斥けて、病を力めつゝ卒業式に臨むだのである。

彼は其長身を杖に支へつゝ、十數町を歩して校舍に上つた。そして手づから終業證を取て生徒へ授け、極めて簡短であつたが、極めて高尚な、極めて有力な言々句々殆ど神の語であるかと思はれる樣な一場の演說をして式を終へた。是時彼が蒼白い額には、苦痛の深痕を刻し、時々其濃い一字形の眉を皺める際に無量の深悲を語る樣ではあつたが、其容姿は殆と見上げるはかりに神々しく見えたと云ふことである。

其れから彼は生徒の散じ去るのを待つて、再び杖にすがつて歸途に就いた。同く卒業式に臨んだ一村老は彼の歸途を危ぶんで、之を送り、其漸く歩み難むのを見て扶掖して進んだ。然し彼は自ら其の心配すべき程ではないと云ふことを切言し、強て謝して村老に別れた。村老は彼が強て謝するので一旦は手を分つたものの何となく心掛りに成る所から、再び引返して見へ隱れに彼の後をつけて行くと、忽ち彼の姿が見えなく成つた。仍て急いで行つて見た所が、あはれ彼は既に地上へ倒れて居た。驚いて之を喚び、人を促して程遠からぬ人家へ舁ぎ入れ、色々に介抱をしたが、然し彼は終に起たなんだ。彼は實に此の卒業式を最後の卒業式にして、三十年來彼を見出さない事のなかつた校舍に、復た彼を見出すことのない樣に成つたのである。

△曾祖母

吾れの一知人は嘗て自ら其曾祖母に關して其記臆を吾輩に話した。其言ふ所は實に左の通りである。

私の家は或る片田舍の農家で、勿論豐かな暮しではなかつたが、又貧いと云ふ程でもなかつた。若干の田畑を耕し、若干の山林を所有し、年々何程かの養蠶をして、先づ平和に世を送つて居た。

私の稚ない頃は、父母の外に、祖母があり、曾祖母があり、妹があつて、一家六人であつたが、祖母は間

もなく歿したので、餘り多くの記憶を留めて居ない。唯曾祖母の方は、私が八九歳に成るまで生きて居られたので、斯人に關しては今に色々の記憶を存して居る。

曾祖母は餘程私を愛して居たと云ふことであるが、私も大分斯人が好きであつた。私の稚い頃曾祖母が引請けて守りをして呉れたので、私も自然斯の人に懷き、春の日の暖かい野邊に、草を摘んだり、寢ころんだりして斯の人と共に遊び暮した。然し段々長するに從つて斯の人と野遊びをするだけは餘り好まない樣に成つた。其れは外ではない、曾祖母は此の頃既に八十八九歳の老婆であつたから、至つて健康ではあつたが、兎に角歩行が極めて遲い。其故私があちらこちらと駈けり廻はると、甚だ危ぶながつて、色々の事を言ふて之を止めた。そうして成る丈靜に手を引いて歩かうとした。是が私の曾祖母と外出するのを嫌ふ理由であつた。其れで遊びに出やうと云ふ時は、何時も母が私に言ふた。

お婆あさんは大層年を取つて入らつしやるのだから、お前はお婆さんを遊ばせてお上げ。そうしてお婆さんが轉ぶといけないから、御手を引いて上げなければいけないよ。

と、斯ふ言ふた。底で私はお婆さんを遊ばせる積りで遊ばせて貰つたのである。然し、門を出る時までは手を引いて出たが、庭へ出れば、花が咲いたり、蝶が飛んだりして居るので、最早手を引くことなどは忘れて勝手に駈り廻る、曾祖母が危ぶないと云ふて止める、聽かずに走る、そうして轉ぶ、啼く、母が出て來る。斯う云ふことが、何時も繰返される順序であつた。

が、曾祖母に對して、甚だ好きな原由が猶一つあつ



東京女子英語學校　（神田錦町）

て、此は其後までも繼續して居た。其好きな原由と云ふのは外ではない昔譚であつた。

曾祖母は歩行が困難に成つてからは多く爐邊に居て初は糸を紡ぎなどして居たが、後には多く麻を績まれた。そうして相手に私を呼んで、色々の昔譚をして聽かせ、私が喜ぶのを見て、其れを何よりの樂みにして居た。

私も其譚が何より好きで、毎日幾度となく譚聽きに爐邊へ往つた。其譚と云ふのは多く簡單な御伽話であつたが、中には多少入組んだものもあり、或は繼子いぢりの話などもあつた。其中で私は淺次郎と云ふ繼子が大分難儀をする話が一番可哀相に感せられ、其話をする度毎に私は涙を流すのを禁じ得なかつた。然し男が泣くのは耻かしい事であると始終教へられて居たので、涙が眼へ溜つてもこらへ〳〵て居て、こらへきれない時に成ると「又烟い」と曰つて、之を拂つた。今でも善く覺えて居る。

ではあるが、此の淺次郎の話が一番好きで、曾祖母の顔を見ると、何時も「お婆さん、淺次郎を話して」と曰つた。今から考へて見ると、此等の譚は、私か後年の嗜好を作つた上に大分の關係を有つて居た乎の樣に思はれるが。其れは扨置いて、此の譚の爲に、私は甚だ曾祖母が好きであつたのである。

元來此の曾祖母は、何う云ふ人であつた乎と云ふと私は稚い時の事であるから、今御話をした事位より外は、何も記臆して居ない。然し、其後母などが人に話すのを耳にしたことが一二はある。其等を總合して見ると、大略斯うであつたらしい。

此の曾祖母は、名を四方女と曰つて、隣村の名主の家の娘であるが、我が家へ嫁いで、一人の男の子と二人の娘とを生み、早く夫に別れた。其夫と云ふのは中〳〵の利れ者で、庄屋が人民を苦めるのを憤つて、自ら江戸へ出て訴訟をして、遂に庄屋を退職させたことなどがあると云ふことで、今に其書いたものがあるが、如何にも條理整然論法森嚴なもので、其人か想像される。而して此の人の妻たる曾祖母も、曾祖父に耻ぢな

い女丈夫であつたらしい。彼女の娘は私か子供の頃まで二人共に生きて居た其中末の娘は六十内外のお婆さんであつたが、非常な大きい人で、若い時は躰量が十八貫目あつたと云つて、笑つて居た。母などの語る所に據ると、曾祖母は此の人よりも寧ろ大きい位であつたと云ふことである。然し私か記臆して居る頃は、最早普通の人より小さい位に成つて居た。

而して此の曾祖母は早く夫を喪ひ、女の手一つで三人の子供を育て、娘は夫々嫁に遣り、子は嫁を迎へて先づ是れから漸く安心じやと云ふ時に成つて、其子は歿した。そうして其子には別に子供もない、底で親類の方から私の母を子供の時分に貰ひ受けて、又之を育て私の母が長じて後に我の父を養子にされた。其間の長い歲月は勿論寡居したのである



成美女學校　（飯田町）

而して其寡居の初の頃は、或は其婦人ばかりであるのを侮つて、其所有地の境界標を變更し、以て其地の一部を奪はうとしたものもあつたが、曾祖母は之を發見すると、直ぐに其者を呼び付けて叱責致し、即日に之を復舊させたと云ふことである。

此の通りであるから、彼は幾十年も寡居して居たが儼然と一家の地歩を保つて人の後指を指すのも許さなかつた、其間の苦心と云ふものは決して尋常でなかつたもの歟『後家を立て通すには、人の知らない所に、人一倍の苦勢がある、』と話したことを私の母が常々私に語つた。

又母か私に語るには、曾祖母は常に

『百文の錢は崩すな

五十文あらば百文にして置け。』

と言はれた。『其意味は前のは、百文と纏まつて居る錢

を小錢に取替へて置くと人情としてつい消費し易いものであるから、之を小錢にして置いては成らないと、節儉の要道を示したのであり、後のは、五十文のはした錢があらは、無理にも働いて百文にして、之を一大錢に取替へて置けと、勤勉の要道を示したのじや。」と母は言ふた。

曾祖母は此の樣な自分の經驗から得た平易な金言を大分語つたらしかつたが、私は稚い頃で多く之を記臆して居ない、又母からも稚ない頃聞いたことがあるが其後始終旅にばかり居るので之を聞き直す機會がない唯曾祖母が非常な高年に至るまで、糸を紡いたり、麻を績んたり、雜巾を縫ふたりして居て、眼が見へないので、度々若いものを呼で糸を針に透させ、非常に忙しい時など度々呼ばれるので、母人などが「其樣の事は成さらずとも可いから。」と言ふと、曾祖母は何時も「たゞ居ては、天道樣に濟まない。」と曰はれたことを記臆して居る。又九十以上に成られ、多少老耄をしてから、用事があつて尋ねて來る人などを「斯の日の短かいのに、迂濶して歩いて居ると云ふ事が有ものか。」と叱つたり、「此晝中何に來たのじや、早く歸つて働け。」とか「そう度々人の家へ來るものではない。」とか曰つて叱つたりして、母などが大層氣の毒がつたことを記臆して居る。

曾祖母は、若い時は餘程多病の人で、年々必ず或る溫泉へ行かれたと云ふことであるが、四十五十頃から幾十年の間殆ど風を引いたことさへなかつた。そうして九十三の夏に成り、睡る樣に歿せられた。當時の事は、私も明に記臆して居る。私は其頃非常な腕白者で、一人の友達と河原を駈け廻り、藪の中に大きな自然薯があつたのを、眞黒に成つて掘つて居た。所が人が來て「直に家へ歸れ」と云ふ、「いや歸らない」と曰つた所が「お婆さんが大變じやから歸れ」と云つた。「お婆さんが」と聞いて、掘りかけた自然薯を引きちぎつたまゝ駈けつて來て、見ると、曾祖母の枕元で父やら母やら親戚の誰やらが、何か密々話して居た。そうして私が歸つても「よく歸つた」とも言なかつた。（完）

珍書解説

通俗源氏物語　若紫（下）

水原翠香

（前號「耳にも懸けず」よりつゞく）

源「將御目醒させむ、かゝる朝霧を知らで寐るものかとて、何心もなく、熟睡し在るを、渾と抱き賜へば、夢心に宮の御迎におはしたると覺したり。

源「宮の御使にて參りたりと、宣ふに驚き呆れて、恐しと歎み賜ふを、知らず㒵に抱きて出賜へば、少納言驚きて、こは奈何爲させ賜ふと、支ゆるを。

「爰にては、常にも參られねば、心易き處にと、兼ても申つるを、宮へ渡り賜ひては、况て如何はせむとて、俄に御迎へに參し也、少納言御供に參れかし。

少「只今は尤便なく社、明日宮の御迎あらば、何とか申べき。

源「諸人々は後にてもとて、御車寄させて、輕らかに乘せ賜へば、若君は少納言よ〳〵と、呼難れば、爲方なくて、俄に衣着更て、忙しく宵に縫つる御衣ども包も敢ず引提て乘ぬ、殘れる人々は、果々敷もなければ、皆呆れて爲術知らず、二條院は近ければ、明くならぬ先に着く、西對に寄せて卸賜ふ、少納言猶夢の心持して、如何爲侍るべきと惑ふを、

源「そは心任也、正身は渡しつれば、歸らむとならば、送らせむと宣ふに、是非なくて卸たれど、心不安堵、宮の思し宣はむ事を始、此末奈に成賜はむと爲らむ、右之左之、信慾人々に、早く遅れ賜へる故にこそと、泪の涌出るを、流石に事の始に、忌はしと念じ居たり、此方は常住賜はぬ方なれば、何も置かれず、惟光に命じて、物品運ばせ賜ふ、東の對より、御帳御衾召寄て、御寐るに、若君少納言と寐むと難るさま、最稚びたり、今は然は爲ぬ物ぞと諭し、且慰め給へば、侘し氣に泣乍臥賜へり、乳人は慘惻さに、傍近く侍て慰め居たり、明ゆく儘に見渡せば、殿造の樣は更也、

庭の砂も玉を敷たる樣にて、目も輝く斗、我身彷き心持すれど、此方は疎き客人などの參る折の席なれば、女は一人も侍らず、男のみ簾外に侍ふ、斯人迎へ賜へりと聽て、誰ならむと私語合へり、日高く起給ひて、御手水御粥等、此方へ奉る人なくて歹かめり、然べき人々、夕告て迎へさせむ、先東對に童女召に遣はす、少き限り特別にと有ければ、最可愛氣なる、四人參れり、君は臥てお在るを、起して、女は心和らかに人の言に從ふぞよき、御遊敵參りたればとて、種々の玩弄物、及面白き畫多く取寄てみせ、稚心に附べき事共を爲て、我も幼くなりて、共に遊び賜ふ、鈍色（尼公の喪中なれば也）の歡たる御衣の儘、何心もなく打笑給へるが、甚しう美しきに、自も打笑まれて、漸々御心安堵たれば、東の對に渡り賜へる間に、立出て庭を覗給へば、樹木池の形、霜枯の前栽繪の如く面白きに、見馴ぬ四位五位聟の、出入仕奉る樣、實有趣所哉と覺す、御屛風の畫を見ながら、慰めてお在るも果敢や、二三日は參内も爲給はず、唯此稚人を懷け語らひ、手習書など書すさび見せ給ふ中に、紫の紙に武藏野といへば托たれぬと、墨附美敷書て、傍に少しちいさくて（紫の一本故に武藏野の艸は皆がらあはれとぞ思ふ）

源「ねはみねば憐とぞ思ふ武藏野の露別わぶる艸の庵を
チサナケレバ本トウノチギリヘセ子ドフサツホノ
ユカリトオモヘバ
イマカラカザリナクカアイクオモハル

と書添て、源「將、君もかき給へとて、硯捫やり給へば
サア

紫「まだ能はかゝずとて、見上給へるが、何心なく美しければ、打含笑て、宜からずとも無下にかゝぬは惡し、敎むかしと宣へば、傍向て書賜ふ、手容の幼氣なるも可愛し、書損ひつと、耻て隱し給ふを、しひて採て見賜へば、

紫「托つべき故を知らねば覺束な 奈何艸の縁なるらむ
カコツナドナセテスカアメシコハアカラヌイツメイ
ドウシメユカリガアルノデスカ

尤若けれど生先みえて、太やかに書賜へり、故尼君に似たるは、其手を習ひ賜へるならむ、今樣の手本習はさば、能書べしと認賜ふ、雛の舍建續け等して、諸共

に遊び乍、無此上物思ひの紛はし也けり。

京極の家には、彼朝引返し使やりて、少納言より切に口鉗て、唯少納言が行方も知らず、將で藏したりと申さするに、宮渡り賜ひたれど甲斐なし、故尼君も、我方へ渡すを、甚く嫌ひ賜ひしかば、乳人の差過たる心より、然失跡つるなめり、若聞出たらば、疾く告よと宣ふのみ、僧都の方尋ね給へど、知る可も非ず、惜かりし美兒をと、悲しく覺す、北方も母君を耻憎み給ひしが、夫も失せて今は我心に任せむと覺し、事違へるを、口惜と覺しけり。

殘りし人々、漸二條院に參集ひぬ、御敵手の童兒共、珍らかに今様御光景に、思ふ事なく遊び合へり、君は男君のお不在、淋き夕暮等ぞ、尼君を思出て泣も爲給へど、父宮をば特に思出す、元來疎くのみ習ひ給へれば、今は唯此後の親を、甚じく睦ひ周纒て、外より御入あれば、走出迎へて、怡び語らひ、夜は御懐に眠りて、些も耻しとも覺足らず、去方に甚う可愛、生心有て何呉とむづかしき筋に成ぬれば、我心にも違ふ節も出來やと心置かれ、人も怨がちに存外の事も自然に出來るを、是は然る煩ひもなくて、有與翫弄也、女兒等將、斯斗に成ぬれば、心置かず擧動共に起臥などは爲まじきを、尤異様たる、册種也と覺しけり

若紫巻畢

藤壺の一件は、元より作物話にて事實有まじきは勿論也式部程の才女の脚色なれど、掛巻も畏き九重の上にさる浮雲を覆ひ奉りしは、如何しても恐多く、尤忌憚る可事なるを、當時淫風盛の世なりし故に然迄にも思はざりしなるべきも、いかに物語なればとて、今は萬國交際世界の日本として、昔の一島國樂天地とは大に異なれるに、猶如斯事を女子の耳目に觸しめむは、忍難き處也、雖然此一件を全然脫却しては、此物語の筋通らずなるを奈何、爰に於か止を不得、嗚呼がましくも短才を憚らず、些趣を書替たるもの也、和學者達、木に竹をつぎたる拙は笑ひ賜ふとも、吾意の有所を亮察あらば幸甚、式部が爲の罪人か、將辨護者歟は讀者判官の明斷にあらむのみ、改たる筋左の如し

藤壺の姙は元より帝の御種なる事勿論なるを、源氏の思餘に切なるに、藤壺も又、有間敷事とは覺し乍も其人柄は兼て憎からず覺しける、双方の感情より、偶然互に同夢を見賜ひしのみ、然るを此頃は、夢を信ずる習慣は是に限らず、他にも例多けれは、各自心の鬼に責られて、秘密に祈禱等も爲させ賜ひし也、藤壺元來桐壺御息所に似給へれば、其皇子亦兄たる源氏に似たりとて、何の奇怪かあらむ、然れは人々皆、當然として啓怪訝人もなきを、唯兩人のみ、心中に鬼怕て苦慮し賜へる迷信の甚しき物とみるべし

注　解

法華三昧　晨朝の行事也、三昧は梵語にて、正受又は正定の儀也と云々　懺法とは六根の罪を懺悔する也

優曇華　僧の歌に似合しく讀めり三千年に一度花開て必轉輪王出世すとの佛説に寄て源氏を轉輪王に見立て稱せる也故に時有て開かむ云々源氏卑下の詞なり

松の戸ほそ　樞平日鎖固たるを稀に開て此貴人を拜奉る　と也序に云初心の歌に柴の戸ほそ等覺いふ事なれど樞は固く鎖意にて只戸の事に非ざるは此歌にて明に知るべし

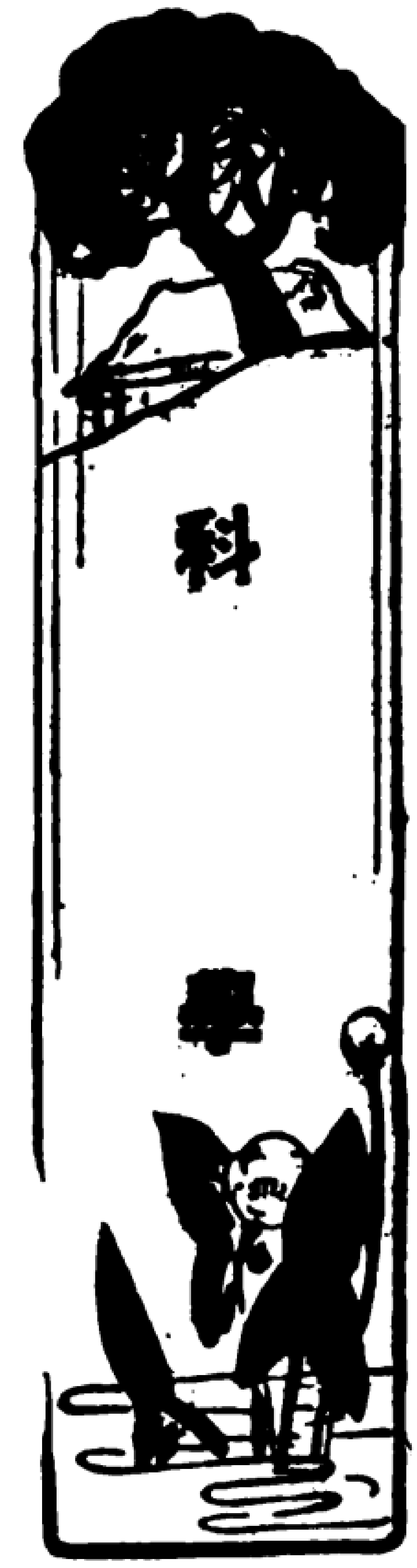
獨鈷　加持爲るに用る佛具にて夫を守護と爲事佛家の法也

豊浦寺　催馬樂の葛城也曰葛城の寺の前なるや豊浦の寺の西なるや二既「えの柴井に白玉沈くや眞白玉をしとんどとしとんどー入音仄也寺にて似合の唱歌を取出たり

訪はぬに憂物「君をいかで思はむ人に忘られて訪はぬは憂き物と知らせん源氏常に我を夜枯勝に爲賜ひ乍我訪はぬを咎給ふそれよ訪はぬは憂物と知り給へりやと也稀の一言に如斯言質を取が淺間しく不興也

あづまを背掻て　和琴也又別に東調とて秘曲有常陸哥を謠ふと云ふ菅掻五拍子片掻三拍子などあり

常陸哥　ひたちには田をこそ作れ誰をかね山を越野をこえ君が來まさる」此段昔より例の秘事等むつかしくいへど此頃源氏常陸宮へ參り賜へる事末摘花の密に有されば ふと其事を思ひて唱ひ賜へるとみて可然



熱と氷の說明

女子大學講師　高田濱子

熱は、此宇宙間到る所に存在する、一種の力「エネルギー」である、そこで此熱といふものは凡ての物体の中に、含まれて居るが、唯其含む量に多少の差あるといふことを心得て居て戴きたい、又之を自然に委せて置けば、相互に其熱を交換し合つて終には双方同じ位の溫度に平均するといふ事をも心得て居て戴たい。

扨でよく沸騰たお茶を土瓶に入れて、食卓の上に置きますと直に冷めます、別けてお寒い時分だと、さあ御飯とて、家族の食卓にお着きなさる、少時間も、容赦なく冷へて了りますから、此茶は微溫湯だよなどゝ下婢に劍突喰れて、モー一度火にかけねばならぬ樣なことになる、つまり其高い土瓶の溫度が、次第に其熱を周圍の冷い空氣に與て了ふからで、つまり多き方から少なき方へ分けて與るのである。

◉熱は物体を膨脹せしむ。熱が或物体に働き掛るとその働き掛けられた物体即ち熱せられた物体はすべて膨脹致します、——膨脹といふのは物体がヌクレて容積が大きくなる事を言ふのです——で、此の膨脹に因ていろ〳〵と面白い現象が起る、例へば一升桝でも、一尺度でも、夏と冬とでは其量其長さにくるひが出來るのである、又夏時計が遲くなる、其は溫度が高くなるから、振子が自然長くなる、長くなれば夫の「長き振子は短かき振子よりも、振動時間太なり」と云ふ法則に基いて遲れ勝になるのである、又コップに熱湯を注ぎますと、破はれることがある是は其內側が熱湯の爲めに急に熱せられて膨脹致さうとするからである、けれど玻璃は熱に對して不良導体であるから、急に膨脹せぬので遂に吾から破れて了ふ。併し其お湯を注ぐ

前に、銀の匙をコップに入れて置くと、破はれないのは、銀は非常に熱をよく導いて、其熱氣を奪ひ去るからである。

それから燃えて居る、ランプのホヤに冷き風が當つたり、或はぬれた手で持つと破れるのも同じ道理で、つまり全体が膨脹して居る處へ俄に一分部丈冷へて收縮するから、破れるのだ。

車輪に鐵たがを、嵌めますに眞赤になるまで熱して置いて後、嵌めますのは、鐵が膨脹して大きくなるから嵌りやすく、又冷へて收縮するから、後が四合と極るからです。

ストーブに火が盛に燃えて居る時に、一種の音がいたす、又急に之を消すと、同じ音がするのも熱の爲めに膨脹してストーブの分子が、互にすれ合つたり、又急に冷へて縮まるからです。

古い家に、打つてある釘は、大抵ぐら／＼に爲つて、拔きよいのは、夏に膨脹しては、冬に收縮すると云ふ具合で、幾星霜も積けて居る中には、釘の孔が大きくがた／＼になるからである、ピヤノの調子が冷室よりも暖室の方が低いといふのも、同じ原因によるのです。

此樣に金屬は熱の爲めに、膨脹しますが、木材も亦た延びるのです、けれど木は縱よりも重に横に擴がる。

▲水は冷て其の容積益々大なり。　一般に物は熱せらるゝと、膨脹し、冷へて固体となると、其容積が減ずるけれど或物質は液体から、固体になる時に、其容量が反對に增す、水が其好適例である、水は、三十八度八分の時が、一番密度の高い時で、夫れより冷るに從ひ段々容量が增えて、三十二度即ち氷點になると其容積の九分の一程も大きくなるが、水に此奇性あるは、生物の生活上に最も大切である、何故と申せば、動物の多くは零度以下の寒冷に堪へられぬから、若し水に此奇性がないとすると、溫度の下るに從ひ河でも池でも、湖水でも、冷き部分が段々下底に沈んで、遂には全水悉く氷結し、夫の洋々たる大海も、忽ち變じて一團の大氷塊となり、灼々たる夏日の炎熱も、之を熔解するは唯表面のみに止まる樣な譯になる、故に、

其中に生息する、魚介の類は、勿論他の動物と雖ども皆氷塊中に閉塞されて凍死するより外はありませぬ。然るに水には此奇性が賦與せられてゐるから、池の水が氷結する時には、容積が九分の一も大きくなり、其故氷が、水の表面から結び始めると、從て之が蓋の樣に成つて、外氣の寒さをも下の水に通じない、且つ水は熱の不良導体ですから、氷の下の魚は、左のみ寒さも感せず無事に寒中池底に生活する事が出來る。

▲水の凝固する時膨脹する力。之は實に非常なものです、曾てカナダで嚴寒零度以下十九度にもなる頃、鐵製の(ボンベル)球中(直經十三寸厚サ二寸)に水を盛つて堅く螺旋を施して密閉し、之を戸外に出すと、其瞬間水は忽ち凝結し或は螺旋を放擲して、中から尺餘の氷柱が、恰も栗の芽の樣に突出したもあれば、或は其球を二個に破裂し中より飛出した氷塊は板狀をなして其傍に横はるのを見た、是で其凝固する時の膨脹力の如何に大なるかが分る。

昨年の冬溫度が二十度前後にも下つた時分、諸處の水道の鐵管が破裂した、之も管中の水が凝結する時、容積が增大したからです又た水瓶や手水鉢に嚴寒の夜水を入れて置くと、時々破れるのも同じ道理。此樣に水が氷になる時容積が增すなら、何故沸騰する時の樣に上へ增して、溢れ出ぬかといふが、之は氷は水の表面から張り詰めて、之が堅く結ぶと中々堅固で、瓶や鉢を破る方が却て容易であるからです、瓦岩石等が能く冬に龜裂が入るのも其中に含まれて居る水分の凝結して凍裂するからである。さらば實に水の凝結は、能く巨砲を粉碎し、磐石をも潰裂する恐るべき力を持て居るのです、又暖き時に地に吸收した水が地中で氷ると、夫の美事な霜柱の樣に地の分子と分子を裂き分け、地面を柔軟かにし、且つ其分子間に空氣露雨其他植物に必要な瓦斯の浸入を易くする樣にしますから之が爲め春季耕作に非常な便宜を與へます。實に是等の事を思ふと造化の妙を稱讃せざるを得ぬ次第です。

▲熱と膨脹の關係。凡て物體は熱を受けると變化を來す、併し物體によつて、同じ熱量でも、其結果が大に

異ふ、即ち石とか、木とか、鐵の樣な物は、變化の度が極僅少で餘程注意して見なければ分らぬが、水、酒、水銀の樣な液體は、餘程變化が著しい、空氣か他の瓦斯體になると、猶は更ら甚しい、併し幾許形は大きくなつても、重量には變りない、物が熱せられても冷へても、其重量は同じ事です、設令ば終日ストーブに温まり、或は炬燵に入つて居りましても、人體が重くならぬのを見ても、熱には重量がないと、云ふことが分る。

▲寒暖計の構造。　物體が熱を受けて膨脹する度即熱量を計る器械を寒暖計といふ、普通の寒暖計は、細き玻璃管で其の端が、球形になつて居る、で其球と管の中を通つて居る細孔の幾分に、水銀を盛り、扨て其餘りの部分は空氣を除いて眞空にする、そこで其一端の口を閉ぢ、夫れより水銀球を氷水の中に入れ、水銀の下りし極點に印を附けます、之が即ち氷點です、夫れから之を沸騰して居る湯の中に入れると、湯の熱は、玻璃管を通じて水銀を昇らせ、或る一定の高さ迄達しさせる、是丈の熱では夫れより高く昇らせる事が出來ない、之を湯の沸騰點といふ、而して此沸騰點と、氷點の間を、百八十に小別して其を一度とする、寒暖計の中の水銀を、百八十度昇らせるに入用な熱は氷點の水を、沸騰點に達せしむる熱量と同じ事で、水は百八十度の熱を受けて沸騰せしむることが出來る。又沸騰點の水一升と、氷點の水一升を、混せまして二升の温湯を得、之に寒暖計を入れて九十目の印に迄、水銀が達すれば、其水は九十度の熱を含むといはれる。此樣に如何なる液體でも、其中に寒暖計を入れて、熱量を計る事が出來ます。

▲寒暖計の種類。　我々が普通用ふる華氏の寒暖計は氷點以下三十二度の目盛があつて、其極度が零度としてある、華氏は寒冷の極度を、知るが必要と思ひ、雪と鹽との混合物中に、寒暖計を入れて水銀の下り盡すを待ち、そこに印をつけて零度とし、そこより氷點に至る間を上部と同じ割合に、分つて、氷點以下三十二度を得たので御在ます、華氏は是が寒冷の極度と思つ

たが、現今では、猶ほ百五十度も低い溫度が知られて居る、華氏の寒暖計は、此の樣に氷點以下が、三十二度あるから、以上の百八十度と合せて、零點から沸騰點迄が二百十二度になつて居る、それから攝氏のは、氷點が零度、沸騰點が百度、列氏のは氷點が零度、沸騰點が八十度になつて居る。

▲家庭に寒暖計を用ふるの要。　家庭內に於ける、種々の現象を研究する上からして物の溫度を知るといふ事は、毎日毎時種々面白い結果を持來すもので、別けても家族の健康を維持する上に於て、非常に必要故、各家庭には、必ず寒暖計を備へ置いて、正確なる溫度を知る習慣をつけたい。

人の感覺は、大に欺かれ易いものの故、今迄百三十度位の湯の中に、手を入れて居つた者が、急に六十度の微溫湯に、手を入れると、冷く感じるが、それと反對に氷水の中から、今の微溫湯に入れますと、今度は非常に溫かく感じます、又同溫でも鐵と毛布とを、兩手で觸れると鐵に觸れた手は、非常に冷く、毛布を握りたる手は、其程冷く感せぬ、是は鐵は熱の良導體であるため、手から急に熱を奪ひ去るから非常に冷く感じる、又毛布の方は不導體故、左のみ熱を手より取らぬ故、從て感覺が鈍い、此大切な熱の事を、善い加減の當推量や判斷に委せることは宜しくありません、どうかくるひのない正確の寒暖計を用ゆるやうにして戴きたい、そして、可成は硝子丈取り外しが出來、液體の中へでも、入れられるのがよろしい、併し熱き物に入れる時には、段々熱して行かぬと破れる、夫れでなくとも餘程丁寧に取扱はねばならぬ、勿論家庭用には、沸騰點以上のものはいらないが、あまり安價の品を求める時には狂ふ事がある、併し其異うのも僅か一二度位で、大した差はない、茲に主婦の心得として溫度表を掲げて置く。

居室の溫度	65—68
人身最低溫度(亞細亞コレラの時)	67
普通體溫	98
人身高溫度(破傷風の時)	110
溫　浴	110—130
燐の發火し或はマッチを摩擦發火する時	120
茶珈琲等の飲まるゝ溫度	130—140
バタの熔解する時	130—140
蛋白質の凝固する時	140
蠟の熔解する時	155
牛乳の沸騰するは	199
牛の脂肪の熔解するは	100
豚の脂肪の熔解するは	100
硫黃の熔解するは	226
砂糖の熔解するは	320
普通の火の熱は	1000

冬期日用科學

自然兒

▲土瓶の破れる理　夜の内に清水を汲み、土瓶の中に一ぱい入れて置き、翌朝になつて見ましたら、土瓶は何時の間にか碎けて、只土瓶の形をした氷の塊が、未だ少しも解けずに殘つて居りました、水が寒冷に逢ふて氷となりますると、其容積が非常に膨らんで來ます既に水が氷の如き固體に變形すれば、無暗に土瓶の外へ流れ出る譯には參りません、さうかと云ふて狹い場所に居る事は、元より出來ないのですから、遂に土瓶が氷に負けて、碎かれて仕舞ひます、手洗鉢は其形が多くは朝顔花の樣に、上の方が開いて居りますから、氷は只思ふまゝに膨脹しますし、鐵瓶の力は氷の膨脹力に打ち勝ちますから、決して碎かれません、夫れで寒夜には土瓶の水を捨てゝ置いて、翌朝新鮮のものを汲むのが一番上策であります。

▲結氷の利用法　氷は元來流動體の水が、其形を變じて、固形體になつたもので、即ち華氏の三十三度以下の酷寒に逢ひて、起るべき現象でありまして、手洗鉢の氷が、いたく膨脹して、恰も瘤みた樣になつて居るのは、寒朝屢々見かける處であります。

抑も氷の膨脹力は、非常でありまして、到底人類の力では及ばない程で、例へば人力ではよく破碎することの出來ない樣な大岩石でも易々と破り飛ばすことが有ります、岩石の破れ目に浸入した水が、寒期に氷結しまするど、こゝでも又容積を膨脹させる結果、石の堅きも岩の丈夫さも、氷の力には勝つことが出來ないのであります。

露領浦鹽斯德には、最早氷が港面を鎖して仕舞ひますから、一時日本海を橫行した彼のグロンボイやロシヤなどゝ云ふ軍艦も、其爲此處で立往生をしなければなりますまい。

我日本の港灣には、氷で困る樣な處はないのみか、函館の五稜郭などからは、毎年純良な氷を產し、夏時

家庭の驅熱を助け、或は生肉を永く貯へ、或は熱病患者の苦悶を救ふなど、多くの功用が御座います。

▲氷下の魚類は死なぬ理　厚層の氷が、池一面に張り詰めて仕舞へば、其中の魚は死ぬかと思ひの外、一向平氣で鰭を振つて居ります元來、氷が張る時には、高く水面に浮び、次第次第に上の方に向つて張りますから、寒冷の度が水底にまで押し及ぼして、池水全體が氷と化する樣なことは、先づないので、丁度雪に包まれた麥が、却つて雪の爲めに地面が温になり凍結しないと同一理で、氷下の魚は案外温な生活をして居ります、けれども其罅陶敷さは又格別と見へまして、氷に割目でも出來て、天日を拜し得べき樣な事があれば、魚は喜んで茲に集まり、以て新鮮な空氣を吸入致します、北海道根室地方では、海上一面氷となりますから、其上に小さな缺孔を穿ち、コマイと云ふ魚を釣ることが、冬の仕事の一つださうです。



婦人の手藝（一）

▲水の沸騰する順序　玻璃製の水瓶に水を入れて、之を火の上に掛け、暫らく見て居りますると、次第に水が温むにつれて、小さな湯の玉は、水瓶の底から、沸く沸と生れて出ます、此の湯玉は、最初水瓶の底に止まつて居りまするが、間もなくスル／＼と上の方に向つて立ち上ります、一体ならは水面まで行つて、パッと消へるのが普通ですのに、この湯玉は大抵中途まで上つて、夫れでみんな消へて仕舞ひます、其内に水の温度が加はるにつれ、湯玉は初じめて水面にまで達し、こゝに白い蒸氣を洩らして

消えます、かゝる內に火力加はり、熱度も又昂まりますると、小さかつた湯玉は、急に大きくなつて、水瓶の底から水面に沸々然として躍り狂ふので、之が即ち水の沸騰であります、初め小さく底から生れ出た湯玉は、なぜ中途で消えたでせう、之は底の方にて熱くて水は蒸氣となることが出來ましても、上部はまた寒冷ですから、水瓶を拔け出やうとする其途中で、再び元の水に舞ひ戾つたのですが、瓶內の水が次第に熱度を進めると共に、湯玉は其形までか大きくなり、勇んで空中に昇ることが出來るのであります。

▲鐵瓶面の凹凸の理　啻に人の顏ばかりでなく、總じて、あばた面の凹凸は、見苦しいものでは御座いますが、茲に鐵瓶の裏面などは、標致よき滑な面よりも、却つてあばたの凹凸の方が、遙かに經濟上德用であります、なぜ凹凸の方がよいかと申しますと、凹凸は其面積に於いて滑なものよりも、多く熱を受けられますから、湯の沸き方は從つて早いのであります。

▲釜蓋はなぜ厚いか　御飯を炊きまするお釜の蓋は、お汁を煮る鍋の蓋に比較して、大に厚いのは、如何なる譯で御座いませう、釜蓋は厚くて重いから、釜の口に堅く載せられまするど、釜中の蒸氣は外へ逃げて出ることは出來ません、ですから釜の中の熱度は、實際沸騰點よりも遙かに高くなりますから、無論御飯はよく煮られます、若し之に反して鍋蓋の樣な薄い蓋を致せば、蒸氣は遠慮なくドシ／＼出て行きますから、御飯は焦げて仕舞つても、まだ心のある不味いものしか出來ないのであります。又高山の絕頂などでは、平地よりも空氣が稀薄で、從つて其壓力も又乏しいものですから、水は沸騰點に達しないで、早くも沸騰する樣な譯で、御飯はいつも半熟の物ばかりです。

▲油と水の沸騰點　揚物をするとて、胡麻油を鍋に入れ、火の上に掛けて置きまして、まだ其油が沸騰しない內に、揚げ物の種を鍋の中に入れまするど、忽ちフツ／＼と沸騰を催すのは、厨房で屢々見る處ですが、之は揚げ物の種に附いて居りました水が、鍋の中の熱度に堪え兼ねて、沸騰するのであります、元來沸騰は

各流動物の本質に依りて、夫れ〳〵多少の相違があります、即ち水の沸騰點を百十二度として、石油は百八十五度、酒精は百七十八度、又水銀などは六百六十度の高熱にかけて、初じめて沸騰致します。

▲寒氣と食品　冬の寒い日に、脂肪質の多い肉類や揚げ物を食べれば一時体が暖くなり且つ、其味も非常に美味です、故に牛肉屋や天麩羅店が、夏期には閑散で、冬期になつてから繁忙を極めるのです、總じて脂肪質の食品は炭素に富みて居ますから、体温を保つことが出來て、冬期の食品として頗る功用があるのですが、玆に數杯の冷酒を仰いで、身体を温めやうとするは、大きな間違を云はねばなりません、元來酒は決して体温を保つべき性質の物でなく、たゞ一時に体中の血液を外皮に向つて注射する樣な譯のものですから、其血液が威勢よく運動して居る間こそ少々暖かく思はれますが、之は久しく保つことが出來ないばかりか、却つて醒めた後は一層寒さを感じますから、とう〳〵風邪に罹る樣な事になります。



婦人の手藝（二）

▲木炭の爆發する理　今木炭を採つて、之を火鉢に入れますると、カチ〳〵と音がしてひゞの入る樣な音を立てるのも有れば、パチリ〳〵と飛んで、灰を立たせる物もあります、之は木炭の間に入つて居た空氣が、急に高熱に逢ひ逼路を失ひ、まご〳〵して居る内に、熱の爲めに膨脹して、遂に木炭を破り、之を跳ね飛ばすのであります、お正月の左義長に、門松と一緒によく青竹を燒くことがありますが、青竹の節の中にあつた空氣は、火氣に堪え得ませんで、遂に其節を拔い

て、非常なる破裂をさせるのも、全く之と同じ理で御座います。

▲冬の夜の鐘の聲　毎年々の暮の大三十日の夜には、除夜の鐘と申して、百八の號鐘を打ち鳴らしますが、其聲は常に増して、一層高く、一層強く耳に響いて來るかの樣な感じが致しますのも、啻に氣の勢ばかりではありますまい、寒氣凜烈なる夜は、空氣稠密にして音響の傳達は、之が爲に一層强められる譯です、尤も此音響の傳達は、氣体よりも固体の物は其度が一層强くありますから、例へば停車場で汽車を待ち合すとき遠方を走つて居る列車の響が、まだ耳に達しない程の時でも、耳を軌道附近の地上に附けて見れば、汽車の響は、忽ち解るものです。

▲炭火の氣の動搖　火鉢に多くの炭火を起し、二人で之を圍みながら話でもして居る時に、不圖對手の人の顏を見れば、チラ〳〵として絶えず動いて居ります、對手の人が自分を見ても、矢張り動いて居る樣に見えるのでせうが、之は決して自分で動くのではなくて、炭火の氣が動搖ぐからであります、抑も炭火の熱に催されて、輕くなつた處の空氣は、他の熱しない處の濃密な空氣と、新陳代謝しやうとして、濃淡粗密、互に入り亂れて來往するさへありまするに、前面から反射して來る處の光線は、この兩樣の空氣に觸れて、種々に屈折して人の網膜に映じますから、只正直に坐つて居る人でも、一度この火氣を透して見れば、始終ガタガタと、身慄をして居る樣に思はれます。

▲蜜柑の皮と石鹸球　雨溜の水だまりに、子供の捨てて置きました、蜜柑の皮を見付け、之を下駄の歯で踏み躁りますれば、丁度石油を水面に流したと、同じ樣な五色を呈します、又石鹸球を吹く時、はじめ其形の小さい時は、夫れ程でもありませんが、だん〳〵大きくなつて空中へ舞ひ上りますと、非常に美しい五彩を放ちます。蜜柑の皮の油と云ひ、石油と云ひ、又石鹸球と云ひ、なぜこの樣な美しい色を放つかと云ひまするに、油が水面に落ちますれば、直に開展して非常に薄い所の、透明な膜が出來ます、この透明な膜に太陽

の光線が當れば、一部の光は其表面で反射しますが、他は屈折して七色の虹彩を現はします、殊に石鹸球の薄皮に於ては、屈折に屈折を重ねますから、虹彩が一層美しい譯です。

▲洋燈の生命は人と同じ　洋燈の油壺の上にある金具には、細かな孔が一面に開けてあります、この孔からは、酸素の多い新らしい空氣が入り、火屋の頭からは、熱した處の輕い空氣が抜けて出ます、この輕い空氣は、洋燈の爲には不用な物です、だから洋燈は物こそ言ひませんが、人間と同じ運命に屬するので、今若し金具の孔から入る酸素の料が少なくなれば、炭酸瓦斯は油烟となりて火屋を曇らせまするし、火も又消えて仕舞ひますが、此時は人間の生命の絕ゆる時です。



婦人の手藝（三）

▲伯勞の惡戯　年の暮近くなりまして、お庭の植木の枯枝に、蜘蛛の巣などを拂ひ落してやる時、屢々蛙や小魚や、蟷螂蜥蜴などの類が、木の枝の尖や股などに刺し貫れて、その儘死屍を曝露して居るのを見ますが之は皆伯勞の惡戯で、俗に伯勞の礫刑と申します、伯勞は雀よりも少し大きい樣な小鳥の癖に、その性が肉食ですから、口嘴は劍の如くに鋭くあります、さて伯勞は何の爲に、こんな殘酷のことを致しまするか、或は冬期の食物にする考だらうと云ふ說もありますが、そんな深智のある鳥ではありませんから、多分は面白半分に、かゝる惡戯を敢てして喜ぶのだらうと云ふ事

ですが、夫れとも枝にさす時は、やがて又捕つて食べやうとするのを、其まゝ忘れて仕舞ふのかも知れないです。

▲氷辷と摩擦の理　冬の日鏡の様に張り詰めた池の氷面に向つて、小石を抛ちまするると、クル〳〵と廻つて何處までも飛んで行きます、又私等が其氷の上を駆けますと、クル〳〵と辷つて眞に面白いものですが、一體此氷面は甚だ圓滑なもの故、石や靴などゝの摩擦力の弱いからです、摩擦とは物體と物體とが相接して、圓滑に辷らうとするのに抵抗する力で、板戸の走りの悪いのや、工場の器械の運轉の鈍いなどは、即ち摩擦の強い譯ですが、かゝる場合には石墨又は油類に仲裁を頼めば、板戸の軌も圓滑になり、器械の運轉も自由になるのであります。（完）

◎東洋女學校の創立

村上專精、和田鼎(文學士)、村上龍英(文學士)の三氏は東洋女學校なるものを創立せんとて昨年來奔走中なりしが來年四月中に開校の都合となるべく場處は小石川原町百三十番地にて敷地は二千五百坪にて校舍は二階建て三百五十坪なりと云ふ

日用科學 石油の話

NS生

我々が平常ランプに點じて光りを得る石油は、どんな處ろから出で、如何に製造されるものであるかを極めて通俗に記載して見ませう。

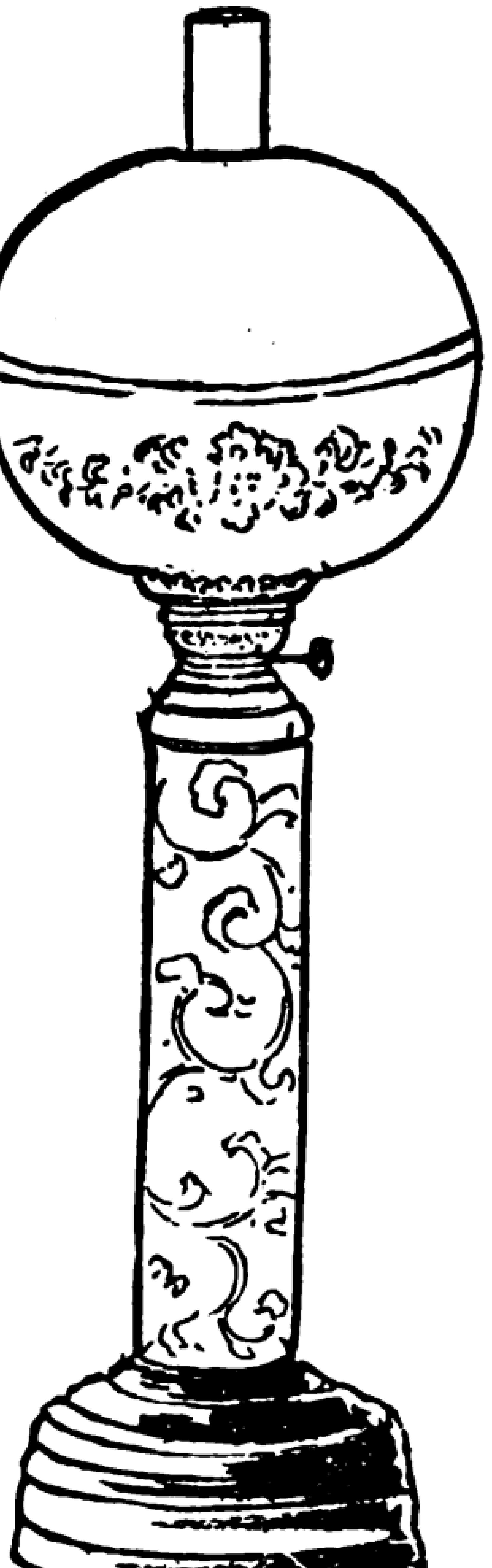
現今文明の世界で一般に用ひられる光燈は、まづ電氣燈、瓦斯燈、石油燈の三種であります、其中で電氣燈瓦斯燈は、之れをつけるのに機械を要し、又大仕掛で大製造所がなくては引合ませんから、大きな軍艦とか、又は廣い町とか、市の外には之を用ゆる事が出來ません、けれども石油燈は僅かに一個の「ランプ」さへあれば如何なる山の奥の一軒屋でも之を使用する事が出來る、其上光が割合に明くる、經費も極めて廉價で上るといふので、今では世界一般に用ゐられてゐるのはこの石油です。

日本でも僅か二三十年前の昔は種油を用ひて薄暗い行

燈をつけて居ましたなれど、維新以來石油燈の方が、便利であるといふ事を知つて今日の盛行を見るに至りました。

△石油の原質

然らばこの石油といふものは一体何であるか、元より一種の鑛物性の油には相違ないが、全体何から出來たものであるかといふと、これは學者の說が種々あつて或は石炭の如く古い昔しの植物の化成した汁だといふ說もありますが、今日では先づこの世界に人間の棲息する以前に、猶生活して居つた動物が、地下に埋つて居てその軀躰から出た脂肪の化成したものであるといふ說が、一般に信ぜられて居るのです、この事についても詳しい御話や、或は又この石油



がどんな地層に含まれて居るか、など丶いふことについても、種々六ケしき說があるのですが、そんなことは略して玆には唯前說に隨つて石油は地下に埋れた前世紀の動物の脂肪で地中を流れて居るものとして置きませう、併しその油を取ればそれが直に石油といふもので吾々のランプに入られるかといふと、ソウではない、地下から得たこの粗油を精製して石油にするまでには中々手數が掛るのである。

まづ石油を始め地中から汲みあげた時は餘程汚ない褐色を帶びた黒き液で、丁度、古代の女が齒を染めるのに用ゐた鐵漿のやうなもので且ついろ〳〵の雜物を含んで居る、通例之れを原油と申してあるが、この汚ない黒液からどうして彼の透明なる奇麗な石油が出來る

のであらうか。まづその製法の順序として石油井戸の事から申しませう。

△石油の井層

石油を汲み取るには地下に穴を掘らねばならぬ、むかし機械の發明のなかつた時は鍬の先で掘つたものであるが、段々と進歩して今では立派な鑿井器械を据つける樣になりました。

尤も石油坑層の附近になれば自然と瓦斯も出るこれは人体に非常な害を成すものであるからこの油層を掘るのは隨分危險だそうです、又、世界第一の石油產地として聞へた露西亞の高架索地方には時々石油坑が湧き溢れて數十尺の噴水を成して、地の底から噴き出す樣な事があつた、時としては其地方一面大きな石油の湖水を造つたといふ事であります。

△汲み上げの方法

さてこれから汲上げの方法をお話し致そう、石油を掘る人は種々と地味を研究して、石油のありそうな處ろを見定めて、そこに櫓を建てるのです、その櫓は高さ十間以上で頂上に滑車を設き、櫓下の隅には大きな綱を卷く物があつて、これに麻綱を卷付けて、その一端が滑車を繞て下に垂れて、丁度櫓の中心になる地下に來るのである、これに徑五寸もある長さ六尺位の圓錐が結びつけられ、この圓錐で土を掘るのであるが、錐を上下して岩石を突壞る動力は櫓から少しく離れた所に蒸汽機關が据付けられて、その力を以て綱を引いたり、延ばしたりするのである、掘て行くに從ひ重量の圓錐が落下する勢を增すことが出來る、そしてこの錐で幾尺か掘ると水を混じて地盤を柔かくしては又掘る或る程度まで掘れば今回は錐を引上げて綱の端に圓筒形のポンプをつけてこれを穴に卸すのである、ソレでこのポンプによりて掘り込んだ土と水を揚げる、先づ斯ういふ順序で段々と穴を掘進み終に油の流れてゐる土底の脉に達するのであるが、その深さは大概二百間から三百間までが通例である、油層近くなると上方から落る土や水を止めるためにその穴に鐵管を挿入れる最初に八寸徑のものを入れ夫から六寸、四寸、終には

二寸のパイプとなる、この時には鐵管も油層に達して居るから、愈々出油があるとこゝにポプンを据付る、このポンプは普通の井戸に用ゆる水揚ポンプと同樣である、これを動かすには即ち前に圓錐を上下するために備へた蒸氣機關を使用するのである、而してポンプによりて汲上げられた油は鐵管を通じて櫓の外の適當の位置に設けられた大桶の中に流込むやうに出來てゐるのである、そしてこの出た油が原油であるがこの原油にはいろ〳〵の種類があつて或は赤土色もあれば、黑褐色もあり又紫の汚れたやうな色を成したものもある。

△貯油所

鐵管を通じて地下から汲みあげられた原油は櫓の外の大桶に流れ込んで、それから又更に鐵管によつて鑛場貯油槽(タンク)に運ばれるのである。するとこゝには諸所の油井から來るものが一所に集つて居つて、大な桶が幾千となく列んで居る、その中に黑い原油が湛へて居る、丁度染屋の紺壺の大なのを見るやうであるが仕掛けは寧ろ酒の造石場のやうである、この原油溜り場に諸方からの原油が集つて一杯になると先づ桶の底にある栓を拔く、さうするとその溜つて居る間に油は輕いから上に浮んで、水や少許の土の沈澱して居るのが流れ出て仕舞のである、水が排泄せられてから、更に製油所に送る鐵管の口をあげて、これをポンプの力で製油所の油槽に送るのであるが原油の採汲場所と製油所とは餘程距つて居るがその間に鐵管が布設されて居つて、輸送は極めて容易である、コレが流動体であるから誠に世話のない



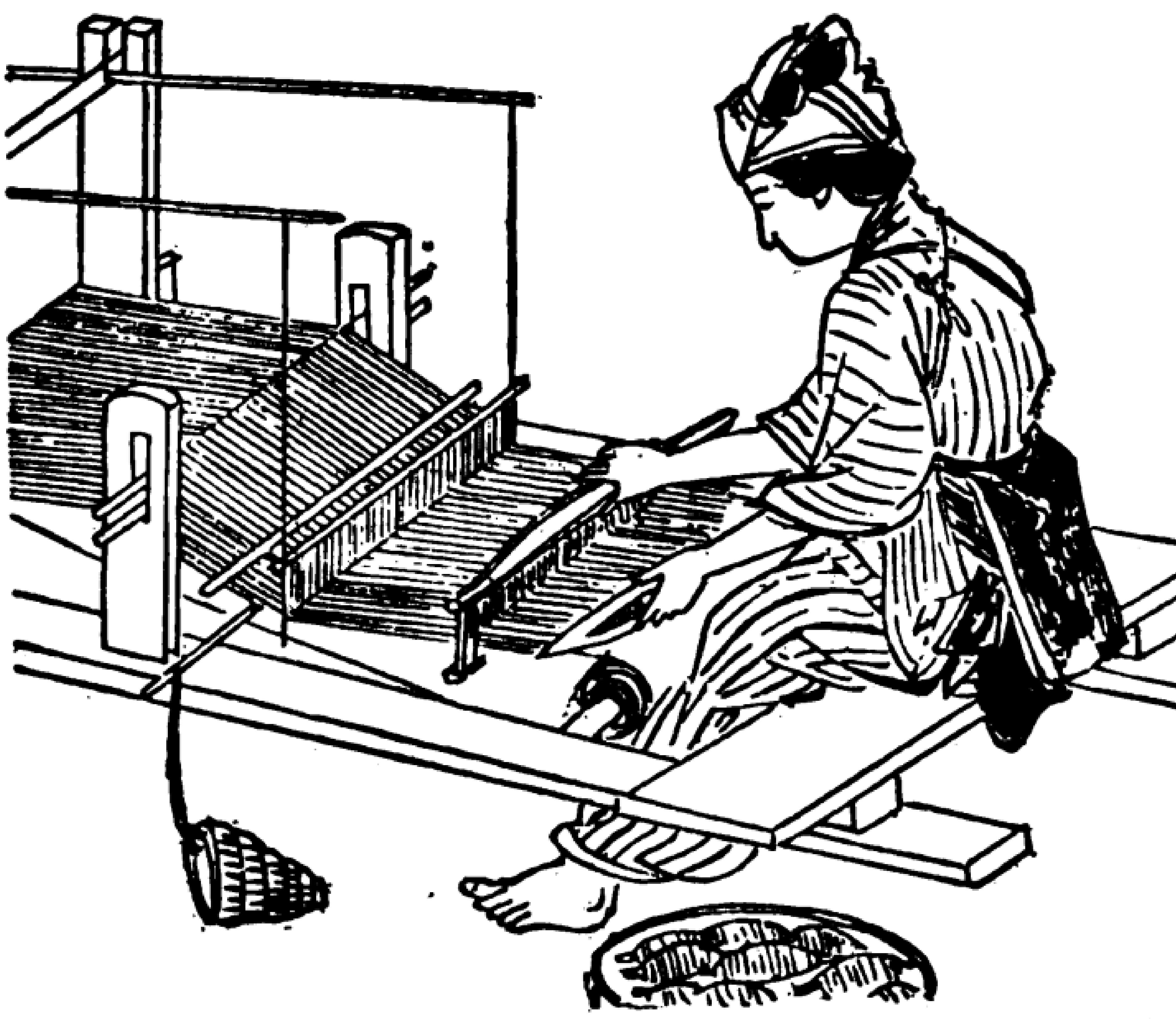
婦人の手藝(四)

とで昔は人の背や馬に荷はせたのであるが今日では實に樂なものである。越後では東山と長岡の間、西山と柏崎の間七八里の處ろ鑛塲と製油所の間が皆な鐵管によりて連絡がついて居るのであります。

△製油の方法

鑛塲から鐵管で輸られた原油は皆製油所のタンクに集まるのである、そしてこの原油を我々が日常使用する處ろの石油に精製するのである、その方法を説明するには科學的智識を要するので中々容易ではないが、まづ一と口にいへば原油を一度蒸溜釜にかけて熱するのである、その釜といふのは大概四五百石も入るやうな大罐であつて、ポンプで原油を其の中に入れ、下より火を焚いて原油を煮るやうな裝置になつてゐる、一体原油に熱氣を加へて蒸發させる時は、原油の最も揮發し易いものが先に蒸溜して受器に止る、これが揮發油である、その次に蒸溜して來るものが燈油で、通例ランプに燈すものである、最後に蒸溜するものが、所謂重油である、この三種の區別は比重計を用ひて分けるのである、即ち最も低い温度で蒸發するものが揮發油となり、次の高い温度で蒸發するものが燈油、此次が重油終に釜に附着する滓の固凝せしものが炭となるこれを「ピッチ」といふ「ピッチ」は石炭から得らるゝ骸炭と同じものである、サテこの一度蒸汽となつた油は鐵管を通じて水桶の中を通る、水桶には絶えず新らしい水が注入されて、鐵管内を通るそして油の蒸汽になつたものを冷却する、この水桶の上の方は水の流れ出るやうになつて居つて、熱くなつた水はその口から外に流れ出て、下から新しい冷水が這入つて來る仕掛になつて居る、故に蒸發した油は水桶中の鐵管を通る内に冷却されて元の流動体に戻つて油類仕分塲に流れて出る樣になる、こゝには常に流れ出る油の比重を計る者が居つて揮發油、燈油及び重油等を仕分けるのである、さて何れの器械にしても最初の火熱で先づ蒸發したのが揮發油となつて流れて來る、コレは透明無色で極めて輕い油である、次のが燈油で石油となるもの、又次が輕油といふて普通の燈火用にはならぬもので火

は附くことはつくが油煙の多い油である、これは殺虫の爲に田畑に注ぎ、若くは緣日の植木屋などのカンテラに燭す油となるのである、その次が重油といふてそのまゝ燃料にも用ゐれば、又これを精製して各種の機械油の原料にもする、元來原油の質が上等であれば燈油が澤山取れるが、劣等の時は專ら輕油と重油のみがとれるのである、越後の原油は百石につき四十八萬乃至二十八石が燈油となり、餘は輕油重油である、又他の地方には百石の內八十石も石油のとれるのがあるが、これは極めて少いまづ普通の所で、原油百石の內から、揮發油が一石、即ち百分の一とれるそれから上等の燈油が凡十石、並の燈油か三十石、其次の油煙澤山の輕油が五石、重油か五十石から六十石位取れるの勘定になつて居る。



婦人の手藝（五）

△揮發油の効用

蒸餾して得た揮發油はどんな事の用に立つかといふのに之を精製して理化學、工藝用の藥品に供し、又は醫藥として用ゆるのである、理化學用には他の水「アルコホル」等に解け難き藥を解すに用ゐ、工業用には「ペンキ」、「ゴム」、樹脂「ワニス」等を解し又羊毛を洗ふ爲めに使用する、醫藥としては多くは外科の手術の時に局部の麻醉藥に用ひ、即ち局部に揮發油を塗れば直ぐ揮發して、其際に其局部の熱を奪ひ、殆ど零度以下の過度にするから、其局部は感覺を失ふのである、勿論之に用ゆるものは揮發油の中でも、最も比重の輕き揮發の最も速なるものを撰ばねばならぬ

又揮發油が揮發する際に、熱を奪ひ去ることを利用し人造氷を製造する、又米國等の揮發油の價の安い國では、之から瓦斯を造つて燈用に供するのです。又重油の効用をいへば其中には石蠟(一種の蠟)を含で居るから、再び之を蒸餾して其中で揮發し易い部分を取り去り、殘りの比重の重き油を強く冷却して、其中から石蠟を結晶させる、後之を搾りて液狀の油を去り再三精製して白き塊となし、能く精製したる純白の石蠟は、主に蠟蠋の製造に用ひ、稍粗製のものは「マッチ」製造の原料とする、石蠟を去りたる殘りの重油は更に精製して機械油に用ひ、「ピッチ」は多少の鋸屑を混せて煉り固め、壓縮して煉火のやうな形に爲して燃料に使用し、又は多少の粘土と混せ合せて土間等に塗りて濕氣を防ぐの用に供するのである。この如く科學の發明と其の應用で廢物を種々なる役に立つるのであります。

△石油の成分

石油の化學的成分は何であるかと、一言ていへば炭素と水素との化合物である、精しく申せば一個の化合躰ではなく、多くの炭素と水素との化合躰(炭化水素)の混合物である、其中で炭素の少い化合躰の方が速に揮發する、即ち揮發油の如きは炭素の少い化合躰の集つたもので、重油は最も炭素の數の多い化合躰の集つたるものである、石蠟の如きは、重油の中でも最も炭素の多きものである、燈油は炭素の數より云へば中間に位する化合躰の混合物である、序に申上るが、我國で用ふる舶來石油は大抵露西亞か亞米利加の石油ですが露油の方が米油より價いが安い、大抵一箱に付て三四十錢方も安價である、夫れと云ふは露油は「ランプ」に燈用して米油より其光が暗いからです、之れは何故かと云ふに、露油の中に含で居る炭素の數は、米油の中にあるより割合に多いから、從て燃へ難く、故にかく暗い譯である。

△石油成生の二說

石油成生の原因に就きましては前にも一寸申した通り種々學者の間に議論が厶いまして、未た一定しません

が、要するに次の二説に外ならんやうです、即ち一説は地球の表面より水が地中に滲み入り地に高熱の所で炭素に出遇ひ、化學作用を起して水の中の水素と其所に在る炭素と化合して炭化水素化合躰を生じ、此れが石油となると云ふ説でムいます、も一つの説は古代の動物又は植物が地下に埋められ時を經るに從つて上より増々強き壓力を受け從て熱度を増して終に自然に有機質が分離蒸餾せられて石油が出來たものであると申ます、此説を主張する學者は實際に動植物質のものを蒸餾して石油に類する油を製したと云ふ事です、又此外に此説を證明する事實が澤山ありまして、今では此説を信ずる人の方が多いやうです。

野菜の効用

倫敦のコーヴエントガーデンと云へば、世界第一の青物市場にして、有らゆる野菜物は此の處に蒐集せらるゝが、其中にて割烹に使用する蔬菜を分かたば二種となるべし、即ち一は豌豆、サヤカ豢、キヤベージ、蕪、大根、胡蘿蔔等の如き人體の温度を保もち、體肉の構築を作るに必要なる食物にして、他は葱、小松菜、京菜、等の如き消化器を助すけ、料理の種類を增し、食慾を起さしむるものなり。倘ほ細別して之が種類によりて分かたんに、

第一根菜、蕪、大根の類。第二球根、玉葱、韮薑類。第三新芽及莖、塘蒿、獨活類。第四葉菜、萓、菠薐草の類。第五花菜類。第六嘗菜、蓮根、慈姑の類　第七果實、茄子、胡瓜、豆類。

すべて野菜は血液を清良ならしむるの功あるものにて久しく野菜を食せざれば種々の皮膚病を起すといふ。

植物の中何か尤も滋養に富めるやと問へば蛋白質なり蛋白質は豌豆ザヤカ豢其他種々の豆類等の中に含みて人體の肉を組織するに必要なれどたゞ其の澱粉質に及ばざるは消化の度の惡しき故なり、農夫の如き粗き仕事するものは消化力強きが故に豆類を多量に食すれば非常の滋養となれど、都會の人の如き運動の不充分なるもの多量に用ゆれば害あり、尤も豆類も若かき中に食せば消化し易し。

江湖

日本服の特色

小式部

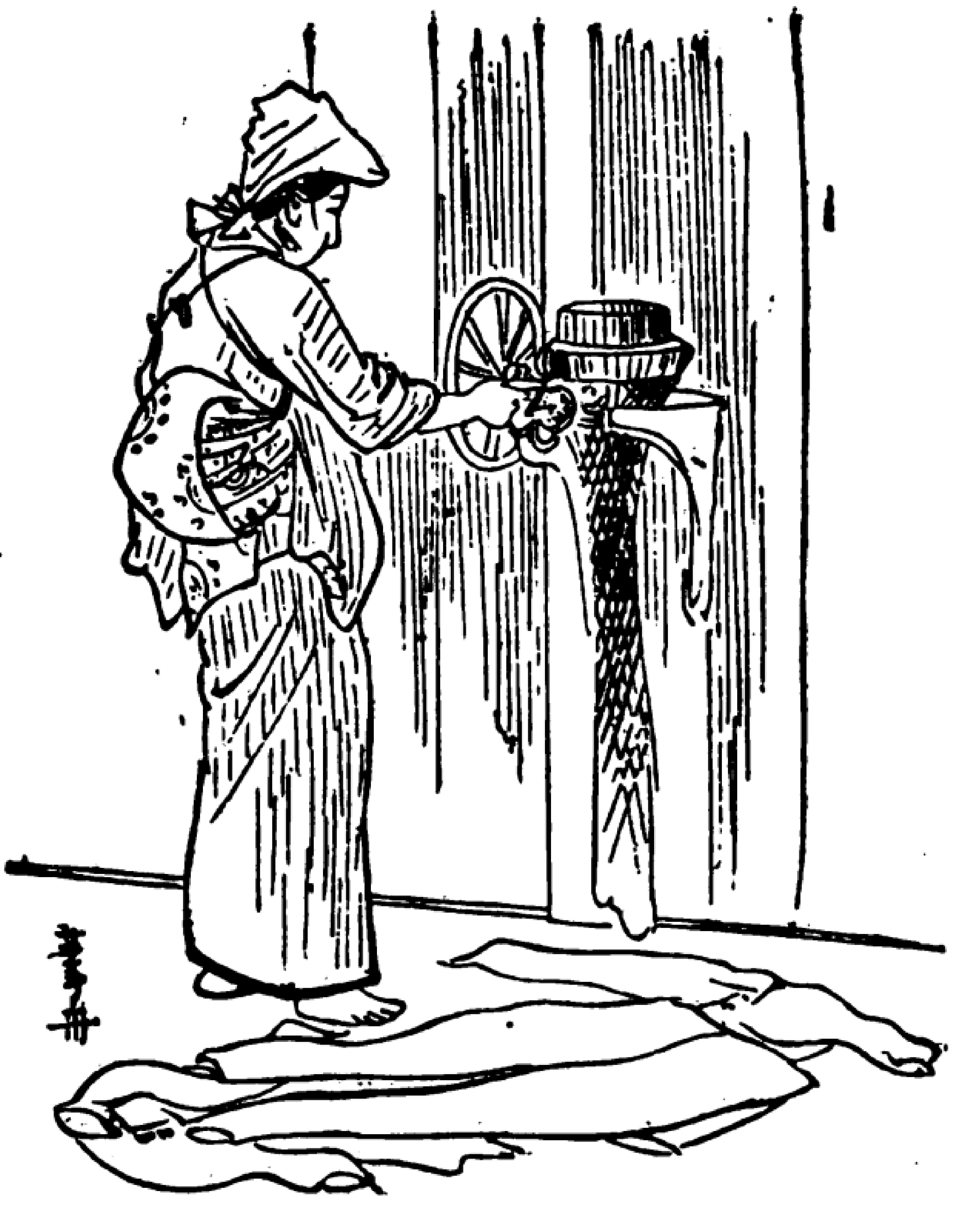
△意匠――西洋の着物と、支那の着物と、日本のと比較して、どれが一番意匠に富んで居るかといふに、日本の衣服が一番意匠を凝らす部分が豊富であると思ひます。まづ西洋の女服を見ると、胴より上に着る物と胴から下に着ける袴（裾の開いたもの）と二枚丈で下着はこの二ツの爲めに掩はれて仕舞ふから別段立派にする必要はない、上さい立派ならば下へは白木綿を着て居ても構はないといふ有様です、支那服も又それと同樣であるが日本服になると大に趣を異にしてゐます、第一に上衣、第二に下着、それから胴着、襦袢、帶、羽織、それから被布、また、他にもいろ〳〵ありませう、それから又夜具の方になつて參ると西洋では模樣を如何といふ事はないのに、日本では、寢卷坐布團に至るまで各自に意匠がある、こういふ工合に種類が多くて、それ〳〵配合を研究する故、意匠を凝らす部分が極めて豊富である。

△模樣――外國の衣服は大槪模樣を織たものと、地質一面に色をつけた所謂無地物とこの二種類から成立つてゐる然るに日本では裾模樣とか友禪とか、或は山水の景色、花鳥などを染拔いて着物につけて居る、これは西洋ではまづ見ない處ろで、全く日本衣服の特色でせう。

△色――元來衣服は色と模樣と地質との三つから成立つてゐる、而して外國ではこの三ツの中何が一番重なるものかといふに、無論色である、ですから、西洋の流行は只色の流行といつてよい、模樣に就ては日本の如くあまり氣に留めない樣である、地質に至つては全く無關係で殆んど流行の部には加はらないのである。然るに日本はこれが餘程混み入つてゐる、まづ地質を縮緬にしやうか、羽二重にしやうか、又其模樣を如何

つけやうか、そして其の總體の地色を何色にしやうかとこの三様の調和を保つ事を始終心掛けてゐる、日本の婦人がこの調和について氣を綿密に用ふる事は西洋人などの知らぬ處である。

△年齢——支那や西洋には年齢によつて流行の相違が少い、タトエば今支那で洋灰色が流行すると三歳の小兒でも、五十歳の老人でも共にこれを着る、又西洋でも廿歳の人と三十五歳の人と別に色を變へなくてはならぬといふ事はない。靑ならば靑、赤ならば赤と一ツ色が流行してゐると年齢の進つてゐる人に普及して居る然るに日本では十五の娘と、二十歳の婦人とが同じ色を着た時には、忽ち派手だとか、不釣合だとかいふ事になる、其れ故同じ色を用ふるといふ年齢の間が五年とは通用しないのである、外國では殆んど一から十まで通用する、日本ではその範圍が極めて狹いから今此の色が流行してゐるからといつて年寄も若い者も誰れも用ふるといふ譯には行かない、つまり年齢によつて各自別な色が流行してゐるから、西洋から見ると大變に混み入つてゐるのである。



婦人の手業（六）

△飾——西洋でも支那でも衣服の内に金銀珠玉を附て飾を助けてゐる、就中支那などはこれが甚だしく寶石類を縫ひ込んで衣服を立派にするのであるが、日本では全くそんな事はない、唯純粋に衣物の上に顯はれた模様と色合で美しく見せる、これも日本の一特色で外國よりも高尚な所ではあるまいか。

△西洋模様の應用――社會が進歩して織物に西洋模様を應用する事が流行出したが、併しこれぞ日本の衣服に應用するのは失敗でせう。第一日本と西洋とは根本的に服制が違つてゐる、先方は模様よりも色を主とする、且つこの模様も規則正しく出來て、彼方に三角があればこちらにも三角があるといふ風で日本のやうに「いびつ」な不規則な處に面白味があるといふ事が缺けてゐる、それ故桐生とか足利とか重に輸出物をする處では西洋模様を織り出して西洋繪の具までも用ひますが、日本人の眼に見て面白くない、ですからどうしても日本服には日本固有の模様を利用するより外に仕方はない、當世社會のあらゆる方面には大分西洋の影響を蒙つて頸に寶石入のゴム櫛をさすとか指にダイヤモンドの石を嵌めるとか、その外修飾の上に一方ならず外國の感化を受けてゐるけれども、呉服屋丈はまだあまりその影響を蒙らないといふ事です。尤も一時は西洋風を眞似て女の襟に菊を染め出せば其の匂ひの處に金剛石を入れるといふ事が流行しましたが、直ぐに廢れて仕舞ひました。

△日本の將來――男子の服裝は西洋服が便利で仕事をするにも、式場へ出るにもそれ〳〵の洋服にした方が至極便宜であらうと思ひますが、婦人服丈は西洋風に化するといふ事は今後三十年か五十年の間になからうと思ひます。世間ではやれ服裝の改良とか、何とか、いろ〳〵喧ましい議論もあるやうですが、着物の變化は、いくら大豪傑が出て來たからとて一朝にして變化する事は出來ません、勿論久しい年限の間には少しづつ部分の變化はありませうが一時に日本服全體の形を改めて仕舞ふといふ事はまづないといつてよろしい。第一これは社會一般の生活（仕居）と伴なはなければならぬ問題で、タトヱ紳士紳商の輩が洋館を新築した處ろでそれは外面の體裁上から來たもので平常は矢張り日本造りの家に住ふてゐる、又一人二人の上流社會で是れを造つた處が社會全般少くもその交際範圍が洋風の生活にならぬ以上は衣服もこれに伴ふて改まる譯には行きません、男子の洋服もつまり事務を執る時

の常服て、家へ歸れば、元の日本服に着かへる事になるのです。

△京阪と東京——京阪地方では染の方に金を出すけれども模樣は松竹梅なんぞの樣な野暮なものが多い、東京のやうに意氣で、垢拔のしたものとはどうしても較べ物にはならぬ、藝者でも京阪は三枚襲ねといふ事を申合せて禁じて居る、つまり費用を惜しむからの事で東京ではその束縛がないから隨つておもひ／＼の事をやる、又新潟は東北地方で人の遊び場所になつてゐるが、婦人は非常に着飾る處で、其の着物も京都の眞似をしてゐる、それはむかし東京より京都の方へ交通が便利であつた所爲である、タトエば藝者が一ツ席上で紋付を三度も着かへて出る、又帶でも二本同じ物が來ると二本ながら買ひ潰して他の者に買はせないといふ贅澤をする處ろである。」


婦人の手藝（七）

△流行の根元——以前は社會一般の美術心が幼稚であつたから、流行といへば大概花柳社會が根元で藝者などから流行せたものであつたが、今日では社會の好尚が進歩して花柳社會などを眼中に置かなくなつたのは、流行の進歩といつてよいのです。されば上流社會で自然に古い繪卷物や掛物などから考へて、斯ういふ霞にこういふ遠山をなど〻考案を立て、呉服屋へ注文するやうになつたのは、畢竟、世の中に美術論が發達して來たからで、主人が蒔繪の硯箱を買へば主婦がその模樣を着物に染めさせて見たいといふやうになりました。

△勤儉論者――世の中には勤儉論者が多くて、呉服屋が進歩して衣服が贅澤になると國家が滅亡でもするやうにいふてゐる、これは成程一理ある論ですけれども、文明といふものを目的として論ずると世の中は日月を逐ふて次第に美の境に入らねはならぬ、むかし日本が鎖國を唱へて外國と交際をしない時には、内で儉約して物を殘すのが得策であつたかも知れないけれども今日は西洋諸國と交際を開いて取引も頗る頻繁である、殊に日本は美術國と稱へられて美術品、工藝品を外國へ賣出すのであるから其意匠のおもしろい物を拵らへて多くの財を取るといふ事になれば、よし内で多少の錢を費やしても多く費して多く取れば結局德であるから、勤儉論者が心配するほどでもありません。試に世界流行の中心とも言はるゝ巴里の樣子を見るのに、まづこの流行の移り變りは大變に劇しい、それから衣服などの贅澤な事は日本の及ぶ處でない、故に世界各國で高貴なもの、美麗なものといへば多く巴里へ注文する事になつてゐる、先年魯國皇帝の即位式のあつた時、參列する人々は必らず巴里の仕立屋に着物を拵へさして參列したので、日本から派遣された山縣大將などもそうであつた、詰り自分が善い物を拵らへて善い物を着ればこそ、世界へ對して善い物を賣る道理です、勤儉論もよいが、破れた着物を着、麥飯を喰つて世界へ賣る物だけ、意匠考案の立派なものを作れといふのは言ふべくして行はれぬ話です、論より證據野蠻國の赤裸の國では決して精巧の美術品の出來る譯はない。

△美術の影響――或る英國の紳士は私立の美術館を拵らへて、日本の美術を澤山集めてゐる、其人の言に自分はまだ日本の國へ參つた事はないけれども日本に對して大變尊敬を表し、日本國の文明であり進歩してゐる國であるといふ事は、自分の所持してゐる美術品によつて知る事が出來るからである、又米國では下女でも絹を着てゐる者がある、これは衣食住の度の高まつたのであるから決して美いものを着たからといつて直ぐに國が亡びる樣に思つて嘆息する事はありません。

以上は三井呉服店理事高橋氏の談話を筆記したるものなり

婦人と半襟

婦人が其服裝を整へ容姿を飾るに當りては半襟の色合なり、模様なりに注意すると最も肝要なるは玆に云ふ迄もなき事なり、縱令衣服は時々の流行物を撰むとするも、半襟にして之に伴はざる時は折角の服裝も甚だ見榮えのなきものとなるべし、依りて現今流行の色合及模様等を左に紹介せん（以下毎日新聞の記事に由る）

▲オリーブ　一名柳茶とも稱する色が昨年以來の流行なるが、此色合にも今は多少の變り色を生じて一樣ならず、是れ需用者たる婦人の年齡なり、人柄なりに適する樣にと、染色上工夫を凝らせし結果に出でたるものにして、即ち若向のオリーブ色は稍黃色がゝり、年增向は稍黑味を帶びて所謂サビの掛りたるものにしたる抔數種あるなり、然れども實際其色合の詳細に至りては到底說明すると能はざれば、須らく實物に就て撰擇せらるべし。

▲新カーキー　之は本年夏季軍服の染色に用ひられたるカーキー色を、オリーブに配合したるものにして、オリーブの淡色とも云ふべき色合なるが、時節柄大に持囃さるゝものゝ如く、此新カーキーを案出したる竹川町の襟治商店にては戰捷紀念のチキタイにも矢張此染色を用ひたるに、頗る好評を得たりと云ふ。

▲其他の流行色　古代葡萄、紫紺、新褐色、錆松葉等を始め種々あるが、中には染色上變化を生じて何色とも名け難きもの尠からず、其中にも流行色はオリーブ掛りたるものにして強て之に名くればオリーブ茶、オーリブ鼠とでも稱すべき色合なり。

▲色合と年齡　半襟は衣服の色合と配合を擇まざるべからざるは勿論、先づ第一に年齡に相應する色合を吟味するを要す、如何にオリーブ色が流行なればとて十四五の少女や、五十六十の老婆には適せざると云ふまでもなし、偖半襟の染色にして十五六歲精々十七歲位迄の少女に適するものを云へば、是は相變らず紅色なり、元來半襟の染色に時々の流行あるは重に廿歲前後より三十歲迄の婦人に於て之を見る、又粹向には極

めて適當と見ゆる染色も、上品向としては甚だ不適當なるものあり、其一例を擧ぐれば新褐色絞り模樣の半襟の如きは粹筋の年增には可なれども、中流以上の奥樣には甚だ不適當にして、却て品格を傷くるの嫌ひあらん。

▲流行の模樣　半襟にも時局當込の模樣種々ありて、昨今は此種のものが流行界に勢力を有する由なるが、其模樣を見るに浪に軍艦を極淡泊と白上りにしたるものもあれど、斯る露骨なる時局模樣は僅かに一二種あるのみにて、他は一見時局模樣とは知れざるもの多し、即ち菊花は日本を利かせ、朝日に脆き露芝をあしらひて露國の戰敗の意を寓し、或は蜻蜓の露芝に留まりたるの圖又は菊花散らしの中に、濃淡の金鵄勳章を二ッ許りあしらひたる模樣など、頗る面白きものあり、其他の模樣も多くは例の草花類なるが、槪して極淡泊としたるものが近年の流行なり。

▲品質と價格　需用の多きを普通の縮緬とし之に次ぐは百合縮緬、鶉縮緬等なるが此中にも百合縮緬と稱するものは山繭入りにして格子縞を爲せるが、今回樣治商店にては更に熨斗目形を案出し是をオリーブ色に染め、草藤の圖を白上り模樣としたるは頗る好評なりと直段は染模樣物三四十錢以上二圓前後縫模樣物五六十錢以上五圓位、絞模樣物五六十錢より一圓五六十錢

〇婦人用の名刺

婦人向きの名刺には從來着色石版畫、浮出し印刷等の小形のもの行はれたるが近來は頓と流行せず、婦人用も男子と同じく普通の名刺にして中には緣金等もあり、時代の思潮の漸次高尚に進む結果なるべき歟昨今は又小形に六號明朝若しくは淸朝五號等のサッパリとしたるものが流行せり。

▲日本女子美術學校　昨冬より島田友春氏によつて經營せられたる芝公園の日本女子美術學校の事は嘗て本誌に紹介したる所なるが、こたび島崎海軍少將夫人とく子氏が同校に校長として推擧せらるゝ事となり、組織を改め、規模を擴張したれば、是より一層の發展を見るとなる可し、因に云ふ、同校は女子に普通及び高等の技藝學術を授くるを以て目的とし、學科を日本畫、西洋畫、刺繡、造花、編物、裁縫等に分け、別に割烹、挿花、茶の湯、袋物等の撰科を置き、修業年限は普通科二年、高等科二年、研究一ヶ年として目下生徒募集中なり、尚ほ軍人軍屬其他公共の爲めに斃れたる遺族者には授業料の全部を免除する規定あり、實技を修めんと欲する女子の爲めに最良の學校なるを認む。



泰西逸話

左川生

榮華を厭ふ母

富貴と權勢を希ふは古今東西おしなべての人情、若し我が可愛兒を將來少しにても好き身分にならせ得べき機會あらば、喜こんで之を得ようとするが先づ世の常の親心で、此富貴と權勢を得させんとする熱望から、却つて其子の眞の幸福を犧牲にするやうなことになつた例は、古來少からぬことであるが、茲に露國の一婦人にして、其子が人間最高の尊き地位に擧げらるゝのを嫌うて、必死となつて之を拒んだといふ例がある。

十六世紀の初期の事で、チョースキ帝の死後、帝位が空しくなつて居た時に、露國の貴族等は合議の末、フェドル、イワノビック帝の母方の近い血統の人を帝位に据ゑやうと云ふことに決し、先づ其血統に當る少年のミカエル、ロマノフと其母とを、莫斯科に招いた。是此母子に取りては實に意外の光榮で、尋常ならば二人とも狂喜すべき筈であるが、彼れ等は更に喜べる色なく、其招きに應せないばかりか、母は宮廷に在る其兄セルメテフに手紙を送つて、ロマノフはまだ年少で、斯かる大切な責任を果すことは到底出來得べきでないから、彼れを帝位に擧ぐることには反對してくれよと相談した。

されど其間も選擧會議は進行して、終にロマノフはいよ〳〵帝王と定まり、其旨を此新帝に傳ふるために、當時ロマノフ母子の棲んで居たコスツロマの地に、宮廷から數名の使臣を遣はした。其時母は我が子に紹介する前に、內分にて彼れ等と面談を願ひ、先づ使臣等

を伴れて寺院に趣き、我子ロマノフより外に、もつと相應しい人を帝王に擧げてくれよと云ふことを涙ながらに歎願したが、斯かる重大な事の一旦審議の上決定せられた上は、今更動かし得べき譯でないから、使節は飽くまでも之を拒み、斯く選定になつた以上は決して其決議を變更することは出來ぬ旨を答へた。

茲に至つては最早如何ともしがたいので、母も終に諦め、使節等に向つて『さらばもはや仕方がありませぬ妾は我子の保護敎育を卿だちに願ひ置きて、得心せずはなりますまい。彼れは國民を治めると云ふやうな困難しき術は、露も敎へられてあらぬものを、卿達が選びたて丶、强いて帝王に頂かうとせらる丶こと故、此後若し彼れか行爲、卿達の豫期に外る丶ことがあつても、それは卿達が自から招くところ故、上帝に對する責任は卿達に在る筈、妾に於ては上帝に對し、國家に對し我子に對して十分義務を盡した』と語つた。

斯くて終に位に登つた少年こそは、即ち露國當朝の太祖にあたるロマノフ皇帝其人である。若し當時此人が位に即かなかつたら、露國の現皇帝はニコラス二世ではなかつた筈である。

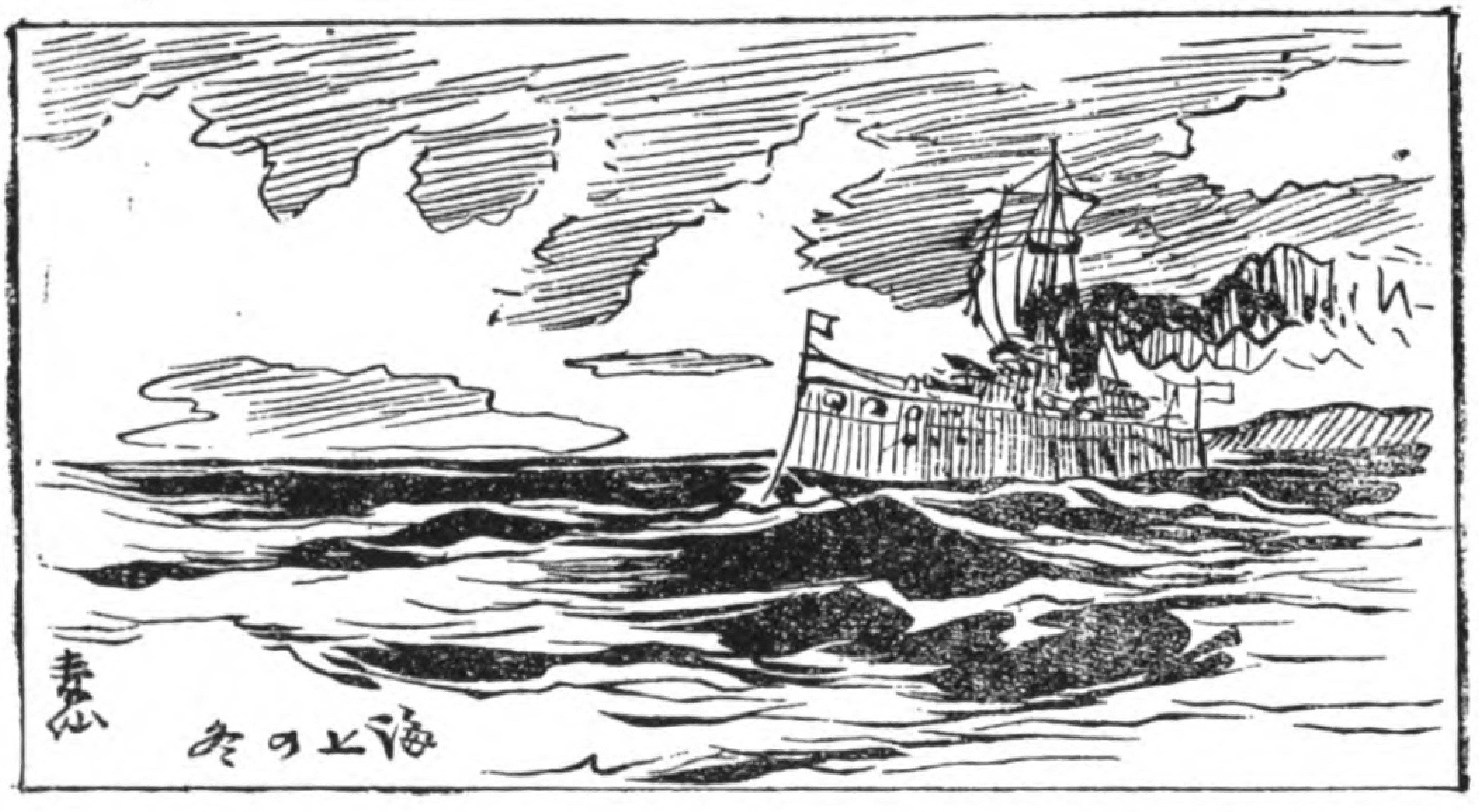
路易十六世の訣別

佛國路易十六世王の一族ほど、悲慘の境遇に沈んだ家庭は世に其ためし希れであらう。路易王は豪毅果斷の英資こそ欠けたれ、仁德のなき君ではなかつたが、累代虐政の後を受けて、王家は民衆の怨府となつて居た場合で、即位後久しからずして世は革命の亂となり、王の一門は革命黨の爲めに幽閉せられたが、其幽閉の間、一族は啻其身の束縛せられ、革命黨の爲めに何時如何なる殘虐に逢ふやも知れぬといふ心配ばかりでなく、始終卑賤極まれる暴徒等の嘲弄を受け、心優しき王妃マリー、アントアネツト。エリサベス夫人はじめまだ世に慣れぬ二人の小兒（王子と王女）の耳にまで、いとも忌しい罵詈の聲は絶えず聞えて、心を痛ましむる種を添へた。

家庭間の眞情の最もよく現はる丶は艱難に沈んだ時で

結婚以來今日まで多年の間、其妃を唯小兒のやうに待遇うて居た路易十六世王は、今此不幸に沈んで妻子の愛情が世に唯一つの慰籍となつた。此王族の不幸に沈んでより終始側に仕へた忠實なる待者クレリーと云ふ人が、王が終に革命黨の爲めに死罪の宣告を與へられた時、一族と最後の訣別の樣を記して居る。

『……八時半の頃に戸は開かれ、第一に王妃は手に王子を引き伴れて出て來られ、ロヤール夫人、エリサベス夫人が後に隨はれた。一同王の玉体に寄り縋られて、暫らくの間は一語もなく、唯歎息と嘘欷の聲の折々聞ゆるのみであつだ。王妃は陛下の室へ行きたさうにせられたが、王は支へられて、「否、



其處の一室へ行かう、其處より外では卿達に逢はれない」とて、一同其室へ這入られたから、自分は外から硝子戸を締めた。王は椅子に倚られ、妃と王子とロヤール夫人とは、横と前とより縋りかゝられて、折々抱き締められた。これが一時間餘も續いた、其間何んにも聞えはしなかつたが、王が一言云はるゝ度に、妃と王子との歎きと驚きはいや増して、王は餘儀なく暫らく休止んでは話をせらるゝ樣子が見られ、一同此時始めて、王が死罪の宣告を受けられた事を知られた樣子。

十時十五分に王が第一に起上られ一同後に隨はれたので自分は戸を開けた。妃は王の右の手を把られ、

王と妃と各〻其片手に王子の手を握らせられ、ロヤール夫人エリサベス夫人も側より玉体に手をかけられ、かくて一同は心も破るゝやうに哭泣せられ、入口の方に五六歩進まれた。軈て王は「明朝八時に復來て會はう」と云はれると、妃は「何故七時ではおはさぬか」と問はれた。王は「好し、それでは七時に………おさらば！」と云はれたが、其「おさらば」の詞にさも悲哀が籠つて居たので、一同覺えず又もや歔欷の聲を發ち、ロヤール夫人は王の足元に氣絶して倒れたので自分は之を引起してエリサベス夫人を扶けて介抱した。王は何時まで愁歎を見ても果てもないので、今一度一同を抱き締めて後、「おさらば！おさらば！」と云つて自身の室へ歸られた。

跡に妃と王女、王子はそれ〴〵其室に歸られ、自分は猶もロヤール夫人を介抱しやうとしたが、市役人が來て支へ、自分を内へ追込んだ。室の戸は皆閉ぢられてあつたれど、王妃と王女の哭き叫ばれる聲は、暫らく二階で聞えて居た。王は塔の上の一室なる僧の側へ歸られたのであつた。

翌朝の七時になつて、王は其室より出で來られて自分を呼ばれ、窓口の側の小暗い處へ伴れ込まれて云はるゝには、「卿此璽章を王子に、此指輪を妃に與へこれを手放すは我が苦痛であつたことを妃に語り聞かせくれよ、又此小包は我が一門の毛髪殘らず入れあるもの、これをも妃に渡しくれよ。又妃と小供等と妹とに傳へてくれよ、我は今朝彼等一同に會見うと約束はして置いたれど、會はゞ又如何に歎きを増すことならんと思ひ、一同の者に此苦痛を見せぬために故意と會はずに刑場に行く、懐かしき者等と今一度抱き抱かれずに行くことの、我身に取りて如何に苦痛であつたかと云ふことを傳へくれよ。」此時王は涙を拭はれていとも悲しげなる語氣で「最後の別辭を一同へ傳へてくれ、卿にきつと賴むぞよ」と云はれた。」

斯くて路易王は狂民歡呼の聲の裏に、空しく斷頭臺の露と消えたが、王妃は此本意なき死別の悲歎に長く憂

目を見るには及ばなかつた。王の死後程もなく、妃も亦同じく死罪の宣告を受けて、同じ斷頭臺の上に引揚げられ、王の跡を追うて冥府の人となつたのである。

慈仁の獨帝――獄內の美人

獨逸皇帝ジヨーセフ二世（一八三〇年死）は慈仁の君として知られた人である、皇帝或時タスカニー大公を隨へて維也納市の或病院を見に行つた時、且ある薄暗い隅に小さな戸口のあるのを見て、帝は何心なく其戸を開き見よと命ぜられたところ、病院の者等は、それを開けるのをさも厭がるかのやうに暫らく躊躇して後にやつと開けたので、皇帝は不審に思はれ、早速內に這入ると、其所から下へ路が付いて牢屋のやうな室があつて、茲にまだうら若い美しい婦人が襤褸を纏うて藁の上に臥て居るのであつた。

慈悲深き皇帝は此有様にいたく驚きて憐れを催し、早速其婦人に事由を問糺されると、婦人は久しき憂き艱難にもまだ奪ひ去れぬ尊とき姿勢で身の上を物語た。

「妾は人の家內たる身分でござりまして、陛下の御民の一人でござりますが、身に何の罪咎もありませぬに茲で久しく耻と憂き目を忍んで居る者でござります。元を申し上げますれば、妾が廿歲の頃ピー男爵に想はれまして終に結婚致し、三人の小供を擧げました……其子は今如何にして居りますやら更に存じませぬ……妾が此室へ入れられます前には、夫はモラビヤの地に棲み、其地で他の婦人と結婚しましたが、妾は少しも怨言は申しませんでした。されど其婦人は疑ひ深く、妾が在りてはいつも心の邪魔となるより、夫に勸めて妾を入牢させるやうにしましたので、妾は或夜縛られて此室に閉ぢ込められ、それから最早五六年も此有樣で茲で過して居ります。此憐れな有樣を御覽ありてはお情深き陛下は定めし妾の桎梏を釋かしめ給ふことでありませうが、陛下、妾には前に申せし通り三人の息子がありますれば、若し夫の忌はしき行爲が世に知られては、此小供等も耻をうけることになりませう。されば何うぞ、子等の爲めに夫の罪を糺さずに置き給は

れ。猶一つの御願ひは、何所かの尼院の養育院に妾を入れられ、妾が乳を飲ませて育てました子供等を復此胸に引添へることの出來るやうお取り計らひ下されたうござります。」

皇帝は此話を聞いていたく憐憫を催され、早速其願意を容れ、又其三人の小供等の所在を直ぐに取調べさせて伴れ寄せ、帝自から監督して養育をすることにせられた。猶之に止まらず、帝は件のビー男爵の後妻を無期禁獄に處し、又男爵をも罰して、其所有財産は沒收して悉く三人の子へ與へられた。

同―內儀の僥倖

玆に今一つ同皇帝の、婦人に關する面白き逸話がある帝或時オステンドの港を自由港としての公表式に臨む爲めに同港に旅行の途中、帝は儀杖を離れて獨り馬上で遙かに先きへ進んで居られたが、且ある小舍の戶口に立つて居る服裝卑しき女の顏色にひどく失望落膽の樣子が見えるのがふと目に止つて、早速馬を下りて、件の女の前に進み、何氣なく語りよつて、其憂ひの原因を尋ねられた。今日玆を皇帝か通られるといふことは前から知れては居ず、又皇帝が唯獨りで通られるといふは思ひがけもないから、女は唯高貴の人とは見たれど、其人物が皇帝陛下であらうとは夢にも知らず、腹の立つて居る場合とて、問はるゝ儘に委細を打ちあけ今日はオステンドの港に行幸があつて、それを拜觀に自分をも伴れて行つてくれよと、折入つて夫に相談して居たが、夫はそれを肯入れずに、今しがた自分を跡に殘して獨りでオステンドへ出かけたばかりであるといふ事由を語り、夫の不人情をひどく惡口して、夫は元他國人であるから、迚も自分程陛下に對する忠愛の情はないと云ひ、自分は祖先以來五百年も此同じ土地に棲んで、帝王へ忠愛の情の厚いことは代々名高いところで、自分も其心を受け繼いで居るからは、縱令どんな苦勞をしても、陛下のお顏が拜まれるなら、直ぐに忘られてしまふであらうといふやうな事を語つた。

皇帝はつく〳〵聽かれて、此賤しい女の熱心にいたく

心を動かされ、早速隠袋から我が肖像畫の周圍に金剛石を鏤ばめて華美やかに飾つた、御自用の立派なる嗅烟草の匣を取り出して右の婦人に與へられ、夫の不人情故に、皇帝陛下の實物を見ることが出來なかつたとしても、其忠義の眞心に對する褒美として、皇帝の肖像だけは貰はれるのだと云はれた。

女は不審の思ひしながら其匣を受け取り、肖像畫を一見すると、其畫が極めて精密に似て居たので、今の今まで我心底を打ち開けて何氣なく話しをして居たは、其お姿を拜觀したさに自分が殆んど發狂しさうになつて居た皇帝陛下其人であつたと云ふことに忽ち氣がついて、夢心地で大地に跪き、あらん限りの敬愛の情を表した。皇帝は女に夫の名と、オステンドの市中で何處の邊を探したら發見りさうなかを問ひ、それが濟むと直ぐに出發せられ、右の男を探し出して早速獄に投ずるやうに命を下して一人の使者を先づオステンドへ發せられた。

彼の男はそんな事とは夢にも知らず、オステンドへ着いて、行幸を拜觀しようと待ち搆へて居る處へ、突然と役人が來て捕縛したので、頻りに何の嫌疑であるかを尋ねるけれども、事由は少しも聞かされず、其儘獄屋へ投げ込まれた。されど獄内では極めて鄭重な取扱ひを受け、三日の後に放免せられたが、獄を出た時は丁度帝皇はオステンドの市から出發せられた場合で、其お姿を拜觀するには、遙々維也納府まで跡を追うて行かねば出來ないのであつた。

折角行幸を拜觀のために出て來ながら、陛下がオステンドへ來られた當時は獄へ入れられ間もなく許されはしたれど、何の嫌疑で捕はれたのやらすべて判らず、失望やら心配やらで、家に歸ると、妻が嗅烟草匣一條の話に始めて我入獄の理由がわかり、玆に大安心してすげなく跡に遺した妻が、却つて運よく拜した皇帝のお姿を自分は能う拜まなかつた殘念さも、其安心で慰め得られたとのこと。

（完）

寒國の生活

藤葉女史

暖國の人が幾許想像しても實地に來て見ない以上は解らぬものは寒國の冬の有樣であります、見聞の廣き皆樣方は早く巳に御聞き及びかも知れませんが、此頃の冬の物語り草にもと貴重なる餘白を拜借しました。

寒國殊に北海道は次第に人口の增加するに從つて十年昔の寒さと今年の寒さとは、大變に違ふやうになりました、夫は何故かと云へば土地が次第に開けて高い森も切り倒され、沼の樣な處もだん／＼開通されて空氣の模樣やら、蒸發氣の樣子などが次第に變つて來るのが主なる源因であります、夫故昔て私が居た時分の冬の有樣と、今とでは大分變つて居るでしよう先づ私の居た時分には雪はいつも六尺の塀を沒して屋根にも三尺や四尺は積ると云ふ仕末、夫が爲に其重みで家が甚だしくゆがみ夫でなくても戶障子が工合よく開閉せられなくなります、暖くなれば次第に溶け出しては又寒氣の爲に凝つて氷柱となり、これが大きくなると屋根から下まで達して恰も氷の柱を立てた樣で、實に壯快であります、太さは直徑二三寸から一尺以上に成る事もあります、ですから凡てのものは凍つてがち／＼になります、以前には醬油やあぶらの如き液物を買に行くのに、皆笊を以て出懸たと云ふ事ですが、今日では眞逆夫程ではないでせうが、糠味噌や澤庵漬が皆氷つて、中々手で出す事は出來ないから鉈か鉞で碎て出すのであります、夫故澤庵でも菜漬でも嚙むと中から氷がじやり／＼と出て來て齒の弱い人などは浸みて痛くて迚も食べられませんから止を得ずお湯で洗ふか或は笊の樣な物に入れて火の側に置くのであります、一層甚だしきは吾人が赤く燒けた火箸を知らずに持つてピッタリと皮に付て剝ける事がある樣で、若し極く冷たい時に濡れた手で金物類を持つと夫が皮に付て離れなくなつて、驚いて急に取ろうとすると、皮がむけて血が出ます、丁度溫度の極く登つた時の皮膚に對す

る働きも極く下がつた時の働きも同じ樣なものであります、夫からこんな日に外に出ると鬚の生へて居る人は鬚の先からつらゝが下つて居る上の睫毛と下の睫毛とが瞬する度に何だか兩方がクッ附き合ふ樣な氣がする、なぜかと思へば口から出る息がだん〳〵上に行つて丁度睫毛にふれて其處で凍るからであります、併し斯樣に寒いから何處へ行くと云ふ樂しみもなく、退屈かと云ふと又然うでもありません、寒ければ寒い樣に室內での遊びが盛で、石炭は何と云ふても安いから大抵の家にはストーブをどん〳〵燃して居れば外は目も鼻も開けない程の吹雪でも其苦しみを忘られて正月などはかるた會など盛に催される、狹い間の事故從つ



雪

て知り合いも多く十人十五人はすぐ寄り合つて遊ぶ事が出來るのであります、カルタも一分位の厚さの木を拵へて夫に各自に當てするのだから手などに當ると中々痛い。

戶外の遊戲ではスケートを履いて雪や氷の上を辷るのが男の兒に取つての唯一の樂しみで、隨分愉快な事であります、札幌には特に體育會で氷辷りの會が催される。其會に私も一度行つた事がありますが、廣い〳〵夏ならば水青々と物凄い、池の凍つて鏡の樣になつた上で行はれるのであります、見なれて居れば何ともありませんが初めて見た時などは實にひや〳〵と手に汗を握る位、其上で競爭とか其他種々のゲームが催される、一番終りに廣い氷の

上に一匹の豚が放されました、今迄狹い處に入れられて困つて居たのが、俄に廣い處に出されて嬉しくてタマラズあちらこちら跳ね廻つて居ると頓て一聲の合圖の下に一組の兒童が手に〳〵獲物を以て豚を目かけて打込で來ました、斯樣な事は活潑なる男の兒には面白いで有りましようが、性來優しかるべき女性に取つては愉快と云ふよりも憐憫の情が勝て來て豚が其重い體を働かせて一生懸命に辷りながら泣きつゝ逃げ廻る樣果は腰の骨など折られて打倒れつゝも猶よろ〳〵と逃れんとする、その可憐なる口より血を吐きて終に立ち得ずなりしなど、孱弱き女性の感情を刺戟する事非常にして、娛樂として見るに忍びない樣に思ひました、夫は兎に角斯る事に依つて少年の勇氣は益々盛になりて七ッ八ッより以上の子供は甚だしい吹雪の外は殆ど家に居る事はなく、皆戶外に出て氷辷りに永き冬の間を送つて猶あき足らない樣であります、併し冬の內とて決して面白い事ばかりではありません、今迄はあんなに良い天氣で有たのにと思ふ間に、俄に吹雪になつて驚く事がいくらも有ります、故に旅人などが之を知らないで、往々生命を危くする事があります、何時の頃でしたか札幌の直近くの山鼻村と云ふ處に屯田兵の屯所が有つて其處から三人の兵士が、公用を帶ひて三四里ある琴仁村と云ふ處に行きました、處が初めは極く良い天氣で愉快に軍歌など歌ひながらづん〳〵進で行きましたが、やがて人家も離れて寂しい野原にさし掛りました處、俄に今迄宜かつた天氣が一變して激しい風と共に見る〳〵吹雪となつて目も鼻も開かれない樣になりました、併し兵士には餘り珍らしくもない事ですから別段驚きもせず困つた事になつて來たと喞ちつゝ一塊になつて猶も進で行きますと、雪は益々猛烈を極めて容赦なく暴威を振ひ、次第に道も埋もれてドコが道やら畑やら別らなくなりました、其處で三人は方向も分らぬ野中に何所を當ともなく、進まれるだけは進まうと勇氣を皷して行きはしたが、何處迄行ても目指す處へは出られずして、其中に腹は空て來るし寒さは寒し、遂に三人は其處に立往生をしてしまいま

した、處が初めの內は少し休で又出掛けるつもりでありましたが、雪は見る見る五寸となり一尺となつて、道でもない野中に三人の兵隊は夜の暗黑と寒さと空腹とに降參して、終に進む事も退く事も出來ずに雪の中に踞つてしまいました、で、雪は其夜一晚少しの休みなく降りしきつて今は積た雪を振り拂ふ力さへ無くなつた兵士を悉く覆てしまいました其處で彼等は最早運を天にまかして覺悟をきめだん〳〵と下の方に穴を堀て行つて草の根などを食して辛くも命をつないで居りましたが、其內の二人は相前後して終に堪へ切れなくなつて死亡ました、後の一人も今は全く食物盡き果てゝ、只死を待つより外に詮方なき境遇に至りましたが、其內には自分の手足の寒さに凍へて腐



つた所などを毟り取つて、そんなもの迄食べて、猶辛く命をつないで居ました、兵營では三人が何時迄經つても歸つて來ないので、四方に手を廻して探させましたが、飛でもない所に行つて居るのですから見付かる筈もなく、空しく行衞不明となつて死だものと思ふてしまいました、其內に次第に氣候も暖くなつて、上の雪が解け出して來ました所、早くも烏が見付けて其近所に集つて頻に鳴き初めましたのを、通り掛つた人が何かと思つて行つて見ると、外套着た兵士が三人倒れて居るので、夫から太騷ぎになつて直樣堀り出して見た所、二人は疾に死で居たが、一人はまだ虫の息がありましたので、種々と手當を施しましたが、何分にも手足共に腐れて用をなさず、長い間食

物もない所で寒氣に當てられたのと、一時に安心して、心の緩だのとで二日許りして之も終に亡なつたそうです斯の如く雪の爲に、或は崩雪の爲に命を落す事は、珍らしく有りません。

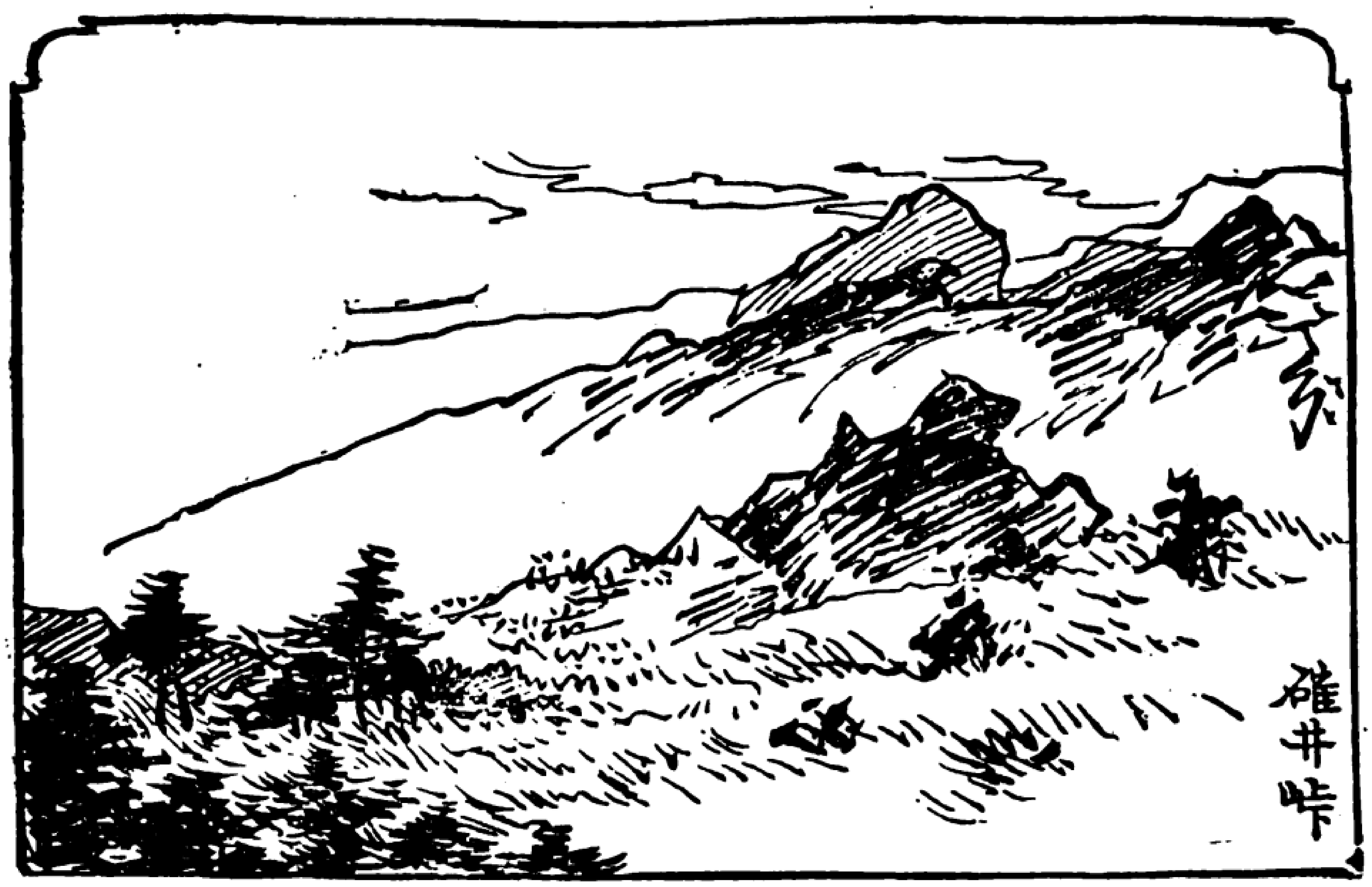
夫から又今一つ愉快な事は、狼狩です內地人の初めて入り込だ頃には山野に狼が澤山居たとの事で、二十年許前は一面に人類を沒する程の茅原で有つて其所に或日草を刈りに行きました所が日も次第に夕ぐれになつたので大急ぎで刈つて居ると、つい一二間先の草原でがさ〳〵と云ふ間もなく物凄い聲で狼が鳴きましたので、此方は腰も拔さん許りに驚いて、鎌も草も打捨て青くなつて家に逃げ歸りました。斯く人家に近き所でも澤山に居た頃でありますから、雪の朝天氣の晴朗なる折を見計つて、狼狩に出づるものが多く先其準備を聞きますと一頭だての馬橇に一匹の豚を乘せ、凡四五人の人が各自に鐵砲を以て又別に薙或は草を以て豚の如き形に造りたるものを橇のあとに引ずりながら、次第に狼の居そうな場所に行て、いきなり豚の尻を打つのであります、よく豚はひどい目に逢ひますが、豚は吃驚して死聲を出して叫びます其聲が冬の朝の靜けさを破つて物凄く木だまに響きますと、今迄血に渴して居た狼共は彼所此所より聲を便りに押寄て來まして、先橇のあとに引ずつて行くのを眞の豚かと思つて夫を喰ふと群つて來ます所を人々は必死になつて打つのであります、これは元より極く冒險な事で、狼の數が餘りに多ければ、中々四五人で打倒し、追ひ退ける事は出來ませんから、團體を組でやる事であります、併し狼は獰惡な獸物でありますから、虛死して居て、往々人を欺す事があります、玉傷を受けて倒れて死だと思つて、近寄つて行た處を急に跳ね退きて、咽喉などに飛ひ付かれて不慮の横死を遂げるものもあると云ふ事ですから、死だと思つてから一時間位は其まゝにして置てゝなければ手を付けないのだそうです、其他には兎狩なども爲ますが、餘り寒くなつてはまあ家の内に引込んで居る方が多いです。

（完）

露西亞の風俗

天風生

▲一體露西亞といふ國は、一方から見れば野蠻の國の樣にも見え、又一方から見ると、大に文明開化の國の樣にも見える。何事につけても、極端から極端でとかくトンチンカンなことが多い。これはその政體が然らしむるのであらう併し孰かと云へば露西亞人は野蠻人に近い、かのキシチフの虐殺事件や、近くは、滿洲で婦人に暴行を加へた事實について考へて見ても明にわかる、しかし又一方には、トルストイ伯の樣な偉人、文學界、思想界の巨人として雷名世界に鳴り渡つて居る大偉人がある。



▲露國の樣な、あんな專制主義な又あんな强慾主義な國に、トルストイの樣な、世界的思想を皷吹する、博愛平等主義な人の生れた事は、一寸考へると、甚だ奇觀の樣ではあるが、しかし、これは、つまり露國の專制主義、固陋主義、貪慾主義なるに對しては、一の反動として生れたのに違ひない。露國は何事によらずこんな風で、その步調のそろはぬことが甚だ多い。

▲露國の婦人は、この數年前までは、日本のある時代と同じ樣に、むやみに男子に押へつけられてゐて、一向氣焰の上らなかつた方であるが、この頃では、その反動として、大に活動し始めた樣である。尤もこれは近年歐州の自由主義を

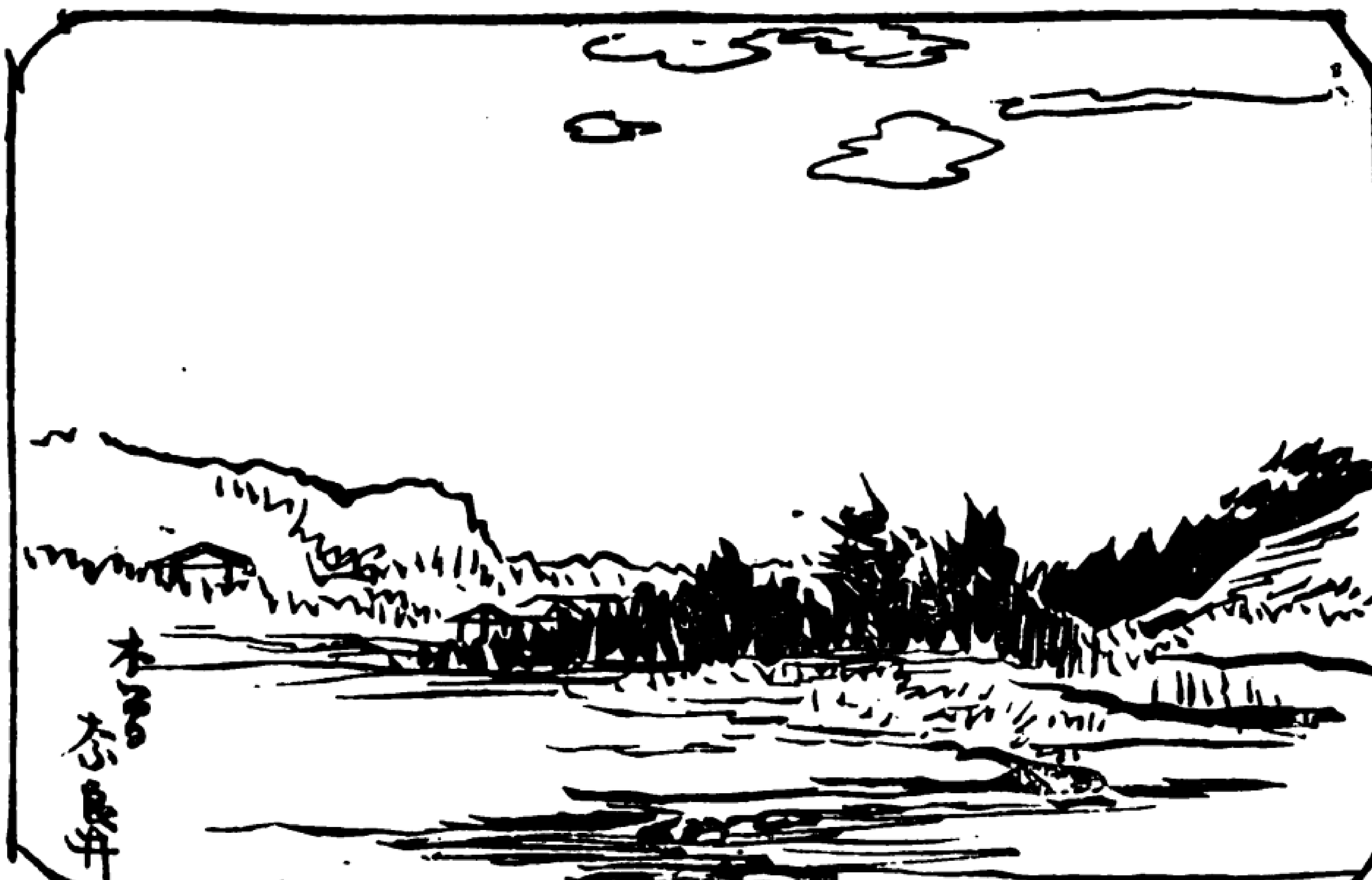
唱導した結果であらうが、女子敎育が盛んになつた結果である、現今、露國には、女子が中等程度の敎育をうける學校は、その數が凡そ三百五十ばかりある。勿論、その名稱は、いろ〳〵になつてをるけれど。高等敎育をうける學校は、十數年前までは全くなかつたのであるのに、今日では女子が自由に大學にも入る樣になつたのである。

▲英國へ漫遊したものが露西亞へ往つたら萬事國情の違うに驚くだらう、英吉利では社會の階級が、上流、中流、下流の三段に分れて、其中で何の階級が一番社會に勢力があるかと云ふに中流の國民である、且つ中流社會の生活をして居る者が尤も多數を占めて居るのみならず、國民は勤勉で眞摯で、獨立の氣象に富んで居るが露國の情態を見たら、夫れこそ不規律な秩序のないのに驚くであらう、殊に社會の階級も上流と下流の二ツに分れ、中流社會の國民は至つて尠なく、殆んど無いと云つても宜しい程である、而して上流の者は非常な勢力があつて、階級の低い下流の者は更に頭が上らないといふ有樣です。

▲上流社會の者は大概大地主で、土地を澤山持つて居るが、下流社會の者は夫れに對する小作人が多い、尤もカザリン二世の時奴隷開放の英斷を實行され、之れ迄土地と共に賣買された小作人も、玆に始めて自由の國民となつたが、之れは露國にしては、頗る異例と云ても宜い程の大斷行であつた、で上流社會の者は土地も澤山持つて居るし、金もある富豪家であるが、是等の國民は何んな生活をして居るかと云ふに、夫れは實に奢つたものです、冬は避寒の爲め以太利や佛蘭西へ家族を率いて旅行する、之れは丁度日本で避暑に行くやうなものだが、此旅行は頗る奢りを極めるのである、中に尤も好んで旅行するは、佛蘭西で、佳美を極めた佛蘭西料理を食べたものでなければ、上流社會の交際が出來ぬと云ふ程である故に、佛蘭西でも有名なホテルでは何時も露西亞の貴族が上等の花客になつて居るには驚くではないか、暖な氣候になると孰れも自國へ歸つて、互に避寒の模樣などを語り合ひ、何國

へ往つて何んな華美な奢りをしたなど、云ふお互の自慢咄である。

▲斯んな有様故、上流社會の家庭では多く佛蘭西のコックを雇つて庖厨をまかなはせる程である、夫から夏になると自分の所有せる土地の中で、川沿の涼しい場所を選び、其處へ別莊を建て、悠々自適爲すこともなく遊んで居る、大地主となれば一人で日本の半分位の土地は持つて居るから、夏などは好自由の所へ家を建てるのだ、併し近來は何れも是等の上流社會が我勝ちに奢侈を競ふので、頗る贅澤に走り、財政に困しみ、土地を賣つて西比利亞へ移住する者が多い、何せよ露國は關稅の頗る高い國故、外國の裝飾品などを買出



して贅澤を仕たら實に際限なく金が懸るのである且つ是等の贅澤品は仲々內地で巧妙な物を作ることが出來ない、所謂美術が發達して居ないから、勢ひ外國品を仰ぐようになるのである。

▲上流社會の狀態に引換へ、下流社會の有樣と云つたら見るも憫れな次第である、佛蘭西料理や、舶來の裝飾品などは夢にも思はぬことで、住居と云つたら日本の下等社會よりも猶一層汚ない破屋であるが、寒氣の強い國だけ防寒の戸締等は中々行屆いて、日本風の構造とは全然違つて居る、食物の如きは燕麥で製らへた黑色の麵麭で、一寸鹽氣の味が付いて居て、稀に一片位たべれば旨い味もする

が至つて粗製な品だ、副食物などは別に用ゐず、無造作な事には水でも飲んで置た位のもの、夫れで三食を濟して居る、斯んな有様で生活して居る代りには實に懶惰で職業は少しも勵まない、大な体格でゴロゴロ寢てばかり居るのである。

▲斯んな風に怠惰癖は一般に國民の頭に染み渡つて居るから、祭典日などは一年の四分の一位あつて、爾うして祭典だと云と例の「オーッカ」(穀物から取つた燒酎)を飲んで悠氣に騒いで、當日ばかりではない明日も、明後日もと云ふような譯で、昏酔して居る、夫れ故工塲を持つて居るものは使つて居る勞働者の出勤が不規律で、今日は出勤かと思ふと明日は休むと云ふやうな譯、少しも當にならないので、常に多勢の勞働者を雇つて置き表面は驚くべきほど大勢のやうだが、實際出勤して居るものは半數位、殊に祭典の翌日とか、又其翌日の如きも殆んど休業の姿で、之れが常例になつて居る故、工塲の持主は受合つた丈の仕事が期日に出來上らず、隨分迷惑を感じるそうだ、夫れで尙異樣に感じるは、斯る大工塲の多くは、其持主が露西亞人でなく、獨乙人とか英吉利人とか佛蘭西人であるとは不思議な譯ではないか、併し夫れは露西亞人の眼から見れば、少しも不思議でない、露人の性質が斯る規律的の事務を取るのに、尤も不適當なばかりでなく、不勝な怠惰癖のため斯ういふ事業は自分から嫌うのである。

▲獨乙は隣邦ではあるし、極く勤勉な國民であるから露西亞人が斯る懶惰者である故、續々移住する人が多い、獨乙では生活するに困難でも、露西亞へ移住せば樂に生活して往ける計りでなく、勤勉だから、寧ろ財産家となり地主となれるので、近來は獨乙に接せる露境は獨乙移住民の爲め益々侵食される計り、尤も之れは露國へ歸化するのであるが、勤勉家と怠惰者との仕事だから忽ち露人は獨國人に頭をおさへられ、却つて露國人が獨乙人に使はれるが、夫で一向平氣で使役を甘んじて居る、去れど獨乙人をば馬鹿にして「ニーメス」と云つて嘲弄する「ニーメス」とは聾と云ふ意味であるが、其譯は獨乙の歸化人は彼んなに一生懸命に働

くが少とも言葉も通じない癖に、夫れで吾々露西亞人を使う抔とは生意氣千萬な譯だ」と云ふ意氣組である。

▲さて彼得堡に平生馬車が五萬計ある、此は冬に入ると皆橇に變るのだ、馭者は綿服で着流の上に細帶を締てゐる、其風頗る東洋風である、勿論無學文盲なるとは其の相貌に現はれて居る、で彼等には書た物を出して道でも問ふと一切判らない、然し音で現はすと不思議にも了解が早い、西歐羅巴では少し音が異ると不通であるのに、此處では片言混に露語を呻るか、但しは手眞似でもすれば、彼馭者は乍ち會得する、尤も此は外國人の事で有る。



▲橇は熊の皮を上に張り又熊の皮を膝懸にして居る、二人乘となつて居るけれども頗る狹隘である、で二人乘ると肩から上半分は車から溢て危險いふ計りなく、女などは男から抱るやうにして遣る。又自用の橇がある、此は普通のよりは丈が高く、二頭若くは三頭の馬を附けてゐる。露人は雪の日此に乘つて見物に出懸ける。其時は四五人連で、馬の數も殖され且つ馬に鈴をつけ飾を爲すのである。行先は多く海岸で三鞭酒など拔て一同愉快に遊び暮すのである。

▲入浴は西歐羅巴に反して盛である、從つて浴場も中々立派だ。此は廣大なる混浴で上等下等に別れてゐる、又た特別室もある。露西

亞人は普通家族を引連れて土曜日に入浴するとになつてゐる。下等の方は通常料金十錢。で露西亞人は仲々清潔好である、勿論これは支那人などに比較して。

▲宮殿の如きも大道に沿ふて建つてゐる、前後左右が皆公道といつて宜しい。そして皇帝の御留守中は何人と雖も拜觀を許さる。先裏門を入つて少し行くと、護衛士官の詰所がある。拜觀を願ふ者は此處へ住所氏名を通じて切付を申受くる。若し外國人なれば一枚の旅行劵を示せば、容易に此を貰ふ事が出來る。此の切符は一枚あれば、五人、十人、人數に制限はない。此を持つて表門に行き横の小門から入ると其處に數十人の案内者が立つてゐる、其の頭立つたのに切符を渡すと直に案内して與れる。拜者觀の内には土百姓も居れば御孃も居る。露人は十人許宛一組になつて案内者が一人付く、外國人なれば一人に一人。案内者は宮中限なく見せる、縱ひ皇帝の寢室でも憚りなく案内される。此が壓制の強い國柄としての常態で有らふか、實に難有い寛で有る。そして宮殿の輪奐たる莊厳なるは驚くべきもので、到底獨逸などの及ぶ所でない。

▲露西亞は寒國であるから家の構造が他の歐州諸國とは違つてゐる、まづ家に入るには必ず二重の入口を經ねばならぬ、言ひ換れば二重の戶が有る譯で、此は無論防寒の爲であるから、立付には皮を箝め、下には綿又は切類を敷き、少の隙隙をも免さない。室内にはペチカ(暖爐)の設備がある、此は外部が鐵で、中には煉瓦を以て火氣の通る穴が通して有る、其の穴は幾度か上下して遂に外部へ達してゐるが、此は無論火氣を長く保つ爲めの構造で、一度焚物が火となつて了へば、外部の空を塞いで暖氣の逃れ散じないやうにしてある。されば午前十一時頃一度焚けば夜まで十分で、若し寒氣が強ければ夜更けて又た焚く事もある。

●●●●●●●●

▲口繪のあやまり　前號「家庭十二ケ月」の口繪に掲げたる秀方子の揮毫は、筆意雄健、淸風颯爽の概ありて、頗る好評を以て迎へられたるが、生憎にも標題の綠陰とあるべきを山茶花と誤り植えたる事、いといたう僻かぬ心地こそすれ、讀者幸に之を諒せよ。

婦人の職業

婦人に何か適當な仕事を授けて遣るといふことは誠によいことで、其中で呉服店の手代の代りなどは、婦人の仕事としては、最も似合はしい事ですから、ドゥか三井計りで無く、其他の店でも婦人を使ふ様になつたら宜しかろうと思ひます。今までの呉服店では御承知の通り男子ばかり使ふて居ますが、其の理由を聞きますと、御客様が御婦人ばかり、それを婦人で待遇ふと、先方で買物をするに、何か面白くなく思はろゝから、故意と男子ばかり用ゐて居るなど言ふ人もありますが、これまでゞも、小間物屋の店などでは、矢ツ張り婦人の御客ばかりだが、店には娘などが坐つて居る所が多い。そうしますと、婦人の客を婦人で待遇ふのが、先方の氣受けが好く無いと云ふのは間違で、ツマリ習慣の上から婦人を使はなかつたに過ぎませぬ。

「エーそうですよ、呉服物などの取扱ひは、男子よりは婦人の方が注意深くて、出入れにも、また仕立の注文を聞くにも、能く似合ひます。裁縫といふ仕事が、男子と婦人との何方に適當して居ますと考へれば、呉服物などの取扱は、男子よりも却て婦人の方が適當だといふ。何に致せ婦人とても、遊んで計り居る筈の者で無く、何か身體に相應した仕事をするが宜いとなれば、他の勞働業などは弱い婦人には似合ひませんから、婦人で間に合ふ仕事は婦人にさせるが宜しい。米國や英國などへ往て見ますと、婦人は皆な感心に働らいて、商店で簿記などもして居ます。客に對して商品の取扱ひもして居ます。

それから呉服店で婦人を使ふとなりまして、着物は如何なる體裁が宜しい、目的が二ツになります。立派な絹物で着物を拵へて、それを店員に着せて、見本の代りと致し、此の柄で仕立てますと斯ふ云ふ風に見事に出來上りますといふ様に、實物を御客に見せるが目的の一とつで、得客の應接や、見本の出入れ、注文の書き留めなど、敏捷く立ち働らくに便利といふことも一とつの目的で御座いませう。それで、二たつの目的を一所にしますことが困難いならば、手代の仕事は矢ツ張り手代として立働らくに便利な着物を扱ひます外はあるまい。

一體店の召使ひに綺羅びやかな衣裳を着せて置きますと、それよりも劣つた品物を買はふとする御客は、それこそ氣恥かしくて、見た計りで買はずに歸り、或は見にも往かぬ様になる傾向があろうと思ひます。成程巴里などの洋服店へ往て見ますと、婦人の店員が、それは甚だ立派な着物を着て居りまして、其の着物が見本の代りにもなつて居ます。で、私なども、其店に往くと、店の人が立派な爲に、據ころ無く最初宜い加減な物を買ふて濟ます積りなのが、ツイあちらへ連れて往かれて既過に頼んで一層好い品を選む様になつたこともあります。此れは彼地では、如何なる高貴の人々も、自から馬車で買ひに往くのですから、成るたけ店の人を立派に着飾らせて、見本にするも宜しう御座いますが、東京などでは、上流の方々は、仲々呉服店に行きませんで、大抵は自宅へ用聞きを呼んで注文します。餘程活潑な奥様で無ければ、自身で出懸けて行く方は少ない。それ故ドゥも御客の多數が店の召使ひよりも粗末な物を買ふ様な次第ですと、見本の代用として餘り立派な服裝を店の女にさせますのは、宜しくない。(某紳商夫人談)

時事彙報

○兩皇孫殿下の御近況

廸宮淳宮兩皇孫殿下には是迄御養育主任川村伯御預り申して同邸に在しませしが既に伯の逝去後と云ひ殊には御教育時代ともならせらるゝを以て、此際悉く御所組織に改め、川村家は一切手を引き奉り、總て東宮御用掛に於て掌ることとなり、供奉の人々も夫々任命ありたり、尙ほ兩殿下には暫時葉山御用邸に成らせられ、來春暖和の候を俟ちて青山なる東宮御所内に新御殿落成の上御歸啓遊ばさるゝ由、誠に慶賀し奉るべき御事にこそ、尙ほ御近況に就て承る所によれば

御食事　は毎日同種類の物を差上ぐるが如き事の無きやう、注意を加へ、又主として淡泊なる物を供へまつる事に力めらるゝより、肉類の如きは殊更に未だ獸肉を用ひずして魚肉の新鮮なるを撰び、牛乳も一日五百グラム乃至六百グラムを供へ其の他は麵包、御飯等にて副食物としては野菜類も差上げらるゝよし又侍醫の意見に基き、廸宮殿下は御降誕の翌年二月頃より淳宮殿下は同く五月頃より斷然人乳を廢させ給ひぬと承る。目下兩殿下が

毎日の御日課　を承るに朝は大抵六時前後に於て御起床遊ばされ、七時に御食事、十時半に御晝食、十二時より二時迄御晝寢、二時に御八ツ、午後五時御入浴五時半夕御飯を召させ給ふよし、而して其前后に於ては出來得る限り、庭園に出御、戶外の御運動を取らせ給ふなりと。殿下の好ませ給ふ

玩具　は素より數多く在さるれども、其尤も御意に叶ひしは日本在來の達磨、護謨製動物等にして其他は人工を用ゐたるものよりは寧ろ天然物なる、草花、石木類及び鷄、犬、猫等の如きものゝを好ませ給ふよし洩れ承る。又近頃の御遊戯としては多く軍事の御遊びにして兩殿下共甲斐〴〵しく木馬に跨らせ給ひて「進め進め」、「右へ左へ」などの玉はせ給ふ御樣の健氣なる流石軍國の皇孫の御擧動と拜し奉るもの、思はず感

淚に咽ぶ事さへ尠からずと。斯れば兩殿下の御發育は日に增し御健にならせ給ひ、今日にては迪宮殿下は三貫三百八十五匁、淳宮殿下は三貫七十五匁の御體量なりと

○各宮妃殿下の御詠

兩內親王殿下及び各宮妃殿下が、大日本歌道奬勵會の忠烈歌集編纂の擧を聞召されて、仝會に下し賜りたる御歌

常宮昌子內親王殿下

出征の兵士をみて

勇みたつますらたけをゝ見る度に
つゝかなかれと祈りこそすれ

周宮房子內親王殿下

出征の將卒を思ひ遣りて

浦安のくにをはなれていくさひと
ゆきにふすらむもろこしか原

閑院宮妃智恵子殿下

日露戰爭につきて

ふないくさかちつゝきたる御いくさは
くかにもあたをうちや盡さむ

山階宮妃常子殿下

折にふれたる

朝夕にかみにむかいてみいくさの
かつことをのみ祈るころかな

久邇宮妃俔子殿下

廣瀨中佐の勇ましき戰死を聞きて

ものゝふのみちにちりにし櫻はな
いつの世までも香に匂ふらん

賀陽宮妃好子殿下

折にふれたる

いくさ人つるきいよ／＼とき磨き
しこのしこくさかり盡してよ

伏見宮妃經子殿下

折にふれたる

とつ國の海路はるかにひゝくらし
わかみいくさのかちときの聲

梨本宮妃伊都子殿下

繃帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女なからもくにのため
なしえむかきり勉めてしかな

後室北白川宮富子殿下

赤十字社にて繃帶をまきける時

白布にあかきこゝろをまきこめて
つなきとめはや人のたまの緒

後室華頂宮郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすもの〳〵ふの
つよきこゝろぞ尊とかりける

久邇宮俔子殿下

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も
家おもふなといましめにけん

○九條男爵の婚儀

十一月は一陽來復の節とて、一に祝ひ月とも稱せられ小兒等が七五三の祝儀、乃至嫁取聟取なども、多くは當月に行はるゝ例なるが、爰に九條家にては、道實公の四男にて、先に別家せられたる良政男(二十一)は、現に法科大學に入學中なれども、旣に年齡も長せらるゝより、然るべき緣邊を尋ねらるゝ折柄、鷹司公爵此事を聞かせられ、幸ひ鍋島直大侯には茂子とて今年廿歲の令孃あり、華族女學校を卒業し、梨本宮妃殿下と御姉妹と云ひ、良政男とは年齡も相當せるより、親しく媒妁の勞を取らんと、兩家へ此旨申入れ、芽出度結納を取交したるは、過つる春の頃なりしが、爾來良政男には西大久保に一家を搆へて、結婚の準備中なりしも外國との亂起りて、世は物騷がしき折柄なれば、暫く差控へつゝありしに、畏き邊りにて、婚儀をなすとも憚りあらじとの御意を承はり、愈々今月二日と云ふに結婚の大禮を擧ぐることとなりぬ、聟君なる良政男は爵位服を着けられ、嫁君の茂子は裝束司高田茂の仕立たるうちしきの禮服に打扮ち、式場には椅子、テーブル等を用ひ、京都風と洋式を混じたるも珍らしく、鷹司公は羽織袴の打扮にて、媒妁として其席に列り、料理は御所御出入奥八郞兵衛の調進なれど、時節柄とて古式を略し、又九條家の臣として禮法に通せる、美術家藤井祐敬氏は當日萬端禮式を行へりと云ふ、婚儀の翌日は、初參内の筈なりしも、天長節の事とて、更に四

日に參内することとなり、聟君嫁君打揃ふて洋裝に打扮ち、退出後靑山御所へも參内し、本家なる九條家へ歸館の後、洋食の晩餐を饗け、斯くて西大久保の邸へ歸られたり扨て此の婚禮の取極まるや、鍋島家より去月廿九日、手廻りの道具、約三十荷の人足は、舊幕の頃諸侯の人入をなせし有馬屋に托し、抱茗荷の定紋を染拔きたる被皮を着せしめ、箱根の山越しなどに謠へる雲助歌を謠ひ、鍋島家の庭内を廻り、列を正して九條男の西大久保の邸へ運びたるは、昔の樣も偲ばれて、何となう床しかりき。（讀賣新聞）

▲北白川宮女王御歸嫁　北白川宮満子女殿下には去月十四日を以て甘露寺伯爵令息受長氏へ御歸嫁遊ばされたるが、今其の御模樣を承るに當日午後一時紀尾井町御邸御出門、麻生同宮家令高原家扶其他侍女を隨へ近衛騎兵一分隊、警部二騎の儀仗にて千駄ヶ谷なる同伯爵邸に成らせられ御結婚の式を行はせられたりと右に付き　聖上皇后兩陛下よりは内舍人を遣はされ御祝儀として左の通り御下賜相成りたりと

一鮮鯛　一折
一御樽　一荷
　右成久王殿下へ
一紅白縮緬　二匹
　右満子女王殿下へ

▲御歌會始御題　來明治三十八年御歌會御題は「新年山」と仰出されたる由詠進手續並に期限等は左の如しと
　料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ゆ詠進は一月十日までに
　宮内省御歌所に差出すべし但し一人一首に限る

▲東洋婦人會第一年會　同會は十一月廿日午後一時より永田町なる鍋島侯爵邸内に於て鍋島侯爵長岡子爵司會の下に開會せらる、先づ會長鍋島侯爵夫人の辭あり次で特別賛助員巖本善治氏の會計報告大隈伯爵の演説並に淸國公使楊樞氏の演説及祝詞の朗讀次で横濱大同校女敎師潘雲巖女史の簡短なる挨拶あり、次に下田歌子女史の挨拶あり終て高折周一、巖本捷治氏のヴアイオリン・ピヤノの彈奏一曲は幼な兒の參スコツトランド遊獵の夕、鶴龜（和洋調和樂）ありたり右式終るや庭内を散歩し茶菓の饗應あり更に圖内にて懇親會立食の饗應あり夕景散會したるが當日式場に參列したる内外人合せて四百餘名

▲婦人矯風會の慰問袋　婦人矯風會にては十一月十九日午後六時より神田靑年會館に於て曾て本誌にも記したる彼の慰問袋に關する報告會を開き先づ島田三郎山根正兩氏の賛助演説、スマート孃の戰爭と禁酒に關する演説に續いて會頭矢島楫子は慰問袋に就て其希望を述べ夫より報告に移りて大關和子は本會が過日來廣く世間に向て募集せし袋の總數は實に一萬九千百五十個の多きに達して非常の好成績を得たる旨を報告し夫より二三の協議ありて散會したるよし聞く所に依れば本會の美擧が九重雲深き畏き邊の叡聞に達するや皇后陛下には態々其袋を取寄せさせられ恐れ多くも玉手にお取上げありて大に御嘉賞あらせられし由にて此程も宮中の女官御道具係山田しげ子吳服の局小野道尾子より同會に五百餘個の慰問袋の寄贈あり殊に其袋の中には眞綿、小刀、鋏等に至るまで遠征者に取つて重寳の品々を入れありたるよし難有き事といふべし。

▲學士夫人懇話會　帝國大學出身の學士博士等の間に標題の如き會合あり同會は去る二十九年の創設に係り初め會員は重に工學士、工學博士の夫人なりしが後ち更に理、農等の學士、博士夫人の加入するもの多く會員二百餘名の如きに達し、本年に入りては征露の師起りたるよ

り夫人退し顧問となりて同會の振興を企て五十嵐松子、藤田君子、大竹眞子、近藤かをる子、渡邊幸子、中村しん子、笠井梅野、江直千里、片山照子、有賀長子、吉井たい子、三宅たき子、瀧たみ子、下瀬勝千代、森山糸子、岩田圓子、船越艶子等十七名固く團結し先づ其の第一着手として戰役に關する慈善事業の爲め各自より一圓宛醵集して愛國婦人會に寄贈し更に十七名より總計四十圓を出し毛布を買ひ入れて寄贈し尚ほ毎月第三木曜日の常集會には會費の外必ず一圓宛を出し會員の多少に關はらず其金は悉く愛國婦人會の献同會に寄贈する筈なりと要するに毎月第三木曜日には各夫人が定めの場處に集まりて談話會を開き春季と秋季には遠足乃至かるた會などを催し家族を同道して樂みとすると同時に國家の爲めに大に活動する目的にて當時幹事は法學博士有賀長雄氏夫人長子、工學士吉井氏夫人壽子、工學博士笠井氏夫人梅野子等なりと。

▲海事協會婦人部の成立　海國たる我日本の婦人が海事に親むの急要を認め海事協會にては先般華族會館に婦人有志者を招き相談の結果此際同會婦人部委員を設け專ら同會の大事業たる義勇艦隊建設の助成に努むることゝなり既に婦人部委員として相當の盡力を引受けられたる諸氏へは總裁宮殿下より夫々委員を囑託せられ其他の婦人へも依頼中にて決定次第委員總會を開き諸般の打合を爲す筈なりと。

▲京都婦人慈善教會　は西派門徒婦人の組織せるものにして今回の戰爭に就ては恤兵金五百圓を獻納し患者用として繃帶卷數千卷赤十字社看護婦用として白木綿上草履百六十足を寄贈せり又た京都市中の出征軍人家族にして家計困難のものゝため本年五月より毎月金一圓づゝ贈與しつゝあるが去る十月分の寄贈高は二百七十二圓なりといふ

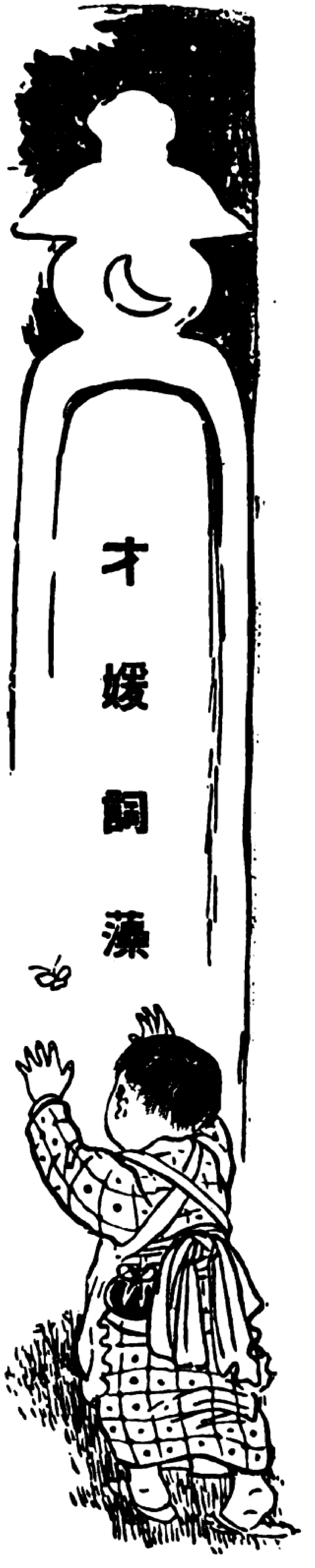
▲常磐會　は東派門徒婦人の組織せるものにして、婦德を涵養するを目的となしその仕事としては尋常小學を卒業したるのみにて高等の教育を受くる能はざる女子の爲無謝儀にて學科及び技藝を教授するにあり戰爭には關係なき會なれども軍國婦人の本分として報効の誠を盡さんとて會員申合せて京都停車場に出張し出征者に扇子雜誌等を贈り又た大阪豫備病院を慰問して數十株の盆栽を贈りしことあり又た京都市中の出征家族の困難を救濟せんため見舞として一軒に付き白米一斗金五十錢宛を贈りたりと因に云ふ、會長、大谷壽子は大谷家の連枝大谷勝尊師(操光院)の夫人にして年齡三十前後、夙に華族女學校にあり新教育を受けたる丈ありて寺院には珍らしき女丈夫、萬事平民的にして虛假の風なく自ら會員を督勵して熱心事に當り少しもその勞を厭はずと、

▲築地本願寺門徒の靴下寄贈　築地本願寺の令女教會及び婦人教會發企となり多くの靴下を調へて恤兵に供せんとの計畫あり寄附申込手續は左の如しと云ふ

一、靴下一足の代價は金廿五錢▲一、寄附金申込は族籍宿所姓名を明記し東京々橋區築地本願寺事務所宛の事▲一、地方の方は郵便爲替にて御送金を乞ふ▲一、寄附金は直に十五銀行へ預け滿期の日に恤兵部へ納め現品として戰地へ送附すべし▲一、第一期募集締切期限は本年十二月二十日とす

▲愛國婦人會の圖書閲覽所開設　愛國婦人會にては麴町牛ヶ淵公園の同會內に婦人圖書閲覽所なるものを設け一般女子の入場を許すと云ふ、同所規則左の如し。

一、本所は毎日左の時間を以て開閉す
　開所　午前九時　閉所　午後四時
二、滿十五歲以上の婦人は何人にても本所の圖書を隨意閲覽する事を得
三、閲覽料は無料とす
四、圖書は隨意書架より把て閲覽すべし閲覽終りたるときは必ず舊位置に復すべきものとす但し一時に三册を超ゆべからず
五、閲覽室に於ては一切音讀、談話、喫烟を禁ず
六、話所の圖書は一切室外に持出す事を許さず
七、圖書を故意に點汚、毀損、其他不法行爲ある者は情狀により相當の制裁を加ふ事ある可し
八、閲覽室の監督は閲覽者相互の權限并に義務に屬す
九、本所は圖書の寄贈を受く



尾上柴舟君選

《天》枯野　　　岩代若松　城南里子

かり三羽夕べの雲に消え去りて
　沙河の大野ら日は石に入る

評曰。滿目荒涼たる沙河のほとり、彼我對陣して、いまだ動かず、大活動起らむとして、まづ、大靜寂あるところ、寫し出して、妙甚し。

《地》枯野　　　上毛　なでし子

枯尾花さわぐ野末に行くれて
　狸に似たる法師に逢ひぬ

評曰。行き暮れたる薄原やあしの法師にあひけむ女心、そも、いかなりし。四五、道破眞に追れり。

《人》枯野　　　大阪　田中しゆん子

命をうけて面をつゝむ支那笠や
　霜の枯野をたゞ北へ行く

評曰。昨夜本國よりうけたるところのもの、敵情偵察にやあらむ。鐵橋破壞にやあらむ。霜曉荒の野を過ぎる勇士の前途、そもいかならむ。

秀逸

〃〃〃○煤拂　　　靜岡縣師範學校內　牧笛子

煤拂ふ表具の裏にをさなさの
　すさびに書きし圖や四角や

〃〃〃○枯野　　　和歌山市畑屋敷橫丁　吉田節

まだらなる血潮の色やさむからん
　沙河のきゝべの粱の高原

〃〃〃○枯野　　　岡山市上の町石原ツル方　森野峯子

黃昏を物の怪おほき枯野道
　足はやむれば風おひてくる

、、、○枯野　新潟縣栃尾町　瀧木の里　内藤ゆき子

木がらしに吹きのこされて月一つ

、、、○枯野　香川縣仲多度郡吉野村　有信せき

枯野の末に低うかゝるよ
野の石が狸とかたる夜は更けて

、、、○枯野　山梨縣東山梨郡八幡　加藤文子

枯野十里の月すさましき
御軍にゆく子のかげの地に伸びて

、、、○煤拂　同人

枯野に落つる夕日冷たき
煤拂ふ人のさゝめき面白し

、、、○枯野　牛込鶴卷町八〇千安方　中島まさと

小春日和の山家ひと村
名も知らぬ木の實草の實美しう

、、、○かれ野　宮城縣柴田郡槻木町　渡邊しげ子

枯野なか〳〵興多きかな
そばのみの黒きがおちて風さむき

、、、○枯野　三重縣松阪町新町　中谷加代子

枯野をひくうとぶは何鳥
彈丸をり〳〵空をぬひゆくもろこしの
枯野にすごし片破の月

、、、○枯野　下野栃木町萬丁山本元吉方　達江

兄君が遺骨かゝへて枯野原

、、、○枯野　伊勢國三重郡楠村　岸田春子

歸る夕の木枯しの風
小夜あらし寒き野末を脊の君は

、、、○枯野　甲斐國東山梨郡八幡村窪田由紀衛方　窪田俊子

すゝみますらむ守りますらむ
霜に殘る熊の足あとふみつゝも

、、、○煤拂　同人

たどる枯野の朝寒きかな
箔はげし羅漢を椽にうちならべ

、、、○枯野　大阪府堺市材木町西二丁目二十七番地　松谷八重子

老僧一人煤拂ひする
七草は七色ながらうら枯れて

、、、○煤拂　伊豆國湯ヶ島房區市山百合の家　蜻蛉女

秋にいなれし虫の音ほそき
畜みたるいばらに小桶かむせ置きて
離家煤掃くしもべをかしも

ヽヽヽ○煤拂　兵庫縣柏原町　友常秋江
又しても背子偲ばする煤拂ひ
動かぬ箪笥其儘にして

ヽヽヽ○枯野　越後　長岡しま子
やつれたる尾花が袖に月落ちて
武藏大野らしもましろなり

ヽヽヽ○枯野　靜岡縣伊豆國湯ヶ島局區　古見あきつ
朧に起す前原三里萱枯れて
大島山の煙亂るゝ

ヽヽヽ○枯野　福岡縣小倉市西鍛冶町木下内　粉綾子
藥買ふてひとり行く夜を枯野原
啼く野狐の聲も寂しや

ヽヽヽ○枯野　石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子
狼の遠ほえ送る夕風に
薄わなゝく冬枯の野邊

ヽヽヽ○枯野　千葉縣印旛郡中郷村　和田泉仙子
軍ありし冬の野三里霜さえて
身を吹く風の力ある哉

ヽヽヽ○枯野　備前　もと子
昆やく煙は岡にたなびきて

沙河の枯野に三日月淡し

ヽヽヽ○煤拂　河内北河内郡山田村　竹内敬子
病む姉の目をさまさむがつらければ
煤拂ふ手のはかどらぬかな

ヽヽヽ○煤拂　東京小石川水道町　渡邊すみ子
なき友のむかしの文の出でしより
なみだにをへしすゝはらひかな

ヽヽヽ○枯野　東京牛込中町十番地　田上小金
敗軍の砲車曳きゆく枯野原
三日の月影西に落ちたり

ヽヽヽ○枯野　山梨縣東山梨郡松里村　小林まつ
傳書鳩とほくまひゆく影消えて
十里の枯野只風の聲

ヽヽヽ○枯野　越後國長岡千平町　武薫子
流れたる血潮氷りて枯野原
戰の跡を月さえ渡る

ヽヽヽ○枯野　東京芝公園二十一號番外三吉植方　草間愛子
はかなくも浮きては消ゆる
浮雲や枯野の末に思みだるゝ

ヽヽヽ○枯野

袖たれてつはなぬきしも夢なれや
木枯むせふ野邊のあさぢふ　和歌山市南蒿五兵衛町四、九　木本歌代

、、、〇枯野　越前三國町　藤野つね子
わびしげに狐なくなり冬の野の
かれふの霜の深き夜の空

、、、〇枯野　長門豊浦郡長府土肥山　内藤はつ子
雪まじり北風すさぶ枯野原
露營のゆめぞ亂れがちなり

、、、〇都歳暮　熊本　大久保みよ子
こむ春をまつのかざりに雪ふりて
みやこしつけき年のくれかな

、、、〇煤拂　石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子
亡き人のかたみ數々あらはれて
涙とめえぬ煤拂かな

、、、〇枯野　大和五條町岡本久太郎方　岡本きくゑ子
枯野原遠灯ながめて夕ぐれを
やせ馬曳けばこがらしのふく

、、、〇枯野

なき母ときてはめでにし野に來れば
木枯すさび暮の鐘なる　大阪市東區清水谷西之町五七二番屋敷　波多きく子

、、、〇枯野　信濃　露子
三日月のかげも冷たき枯野原に
結びかぬらむ益良夫が夢

、、、〇煤拂　本郷駒込千駄木町五十七　安井とみ
征きし子のいさを賞へつゝ鎗のちり
拂ふ翁のひげ白きかな

佳調

（枯野、煤拂、都歳暮）

● 君と二人菫つみにし野はかれて虫の音細う嵐ふくなり　愛知　吉田オ子

● 荒野ゆく馬子か小笠も夕つく日かたふきかちに木枯のふく　東京　高宮安子

● 霜さむく風なまくさき枯野原厩白う月さえわたる　水戸　榊春子

● 大づゝや小づゝの響遠くなりてみぞれを誘ふ風なまぐさき　羽前　小林いわ

● 乙女子は羽に手まりのまうけしてみやこの春をまちわたるらむ　名古屋　原田學子

● 岐阜　岩岡吉子
かちときをよろこぶ聲におくられて鄕の年もくれて行くらむ
● 備前　もと子
狐のこゑもきこえて枯野原月ものすごし木がらしのかぜ
● 新潟　美嘉子
狐火もたり〳〵みえて枯野原一人ゆく夜をあられたばしる
● 愛知　森井せき子
片破れの月影冴えて兒狐のなく音淋しき嵯峨の枯野路
● 名古屋　ますみ
砲の音遠くきこえて滿州の枯野二十里物影もなし
● 佐世保　梅原きち子
沈みゆく夕日の影を眺めつゝ枯野の暮を只一人泣く
● 熊本　安田文子
目にさわる物はなけれど冬の野は目にあまるまで淋しかりけり
● 伊豫　西岡奈都喜
枯野原落ち行く敵の影きえて木がらしさむく日はくれんとす
● 東京　西岡古代子
鐘の音のひとつ〳〵に日は落ちてあらしに暮るゝ冬の野邊かな
● 東京　四元むめ子
ふと出でし振分髮のうつしゑに煤拂ふ身のさてなつかしき
● 岐阜　石田文子
うらかれし尾花が末に富士見えて夕日色なき武さし野の原
● 同人
わだ人のむくろ三つ四つほの見えて枯野が原の風なまぐさき
● 宇都宮　牛田さだ子
けさ見れば冬野の末の小笹原それだに色の殘らざりけり
● 岐阜　久子
父も兄もともに召されし年の暮手ならぬ馬具の手入せはしも
● 長野　婦野益子
なつかしき君が小笛のねも絶えて枯野の原の夕べ悲しも
● 長野　みす子
歸り行く馬子のひなうた遠くきえて夕月寒し冬枯野道
● 東京　米窪たれ子
泣く子をばすかしすかして馬子が妻枯野に遲き背子待ちわぶる
● 伊豫　高橋かめよ
狩人の鳥追ひたつる聲のして枯野の原は風ふきすさぶ
● 東京　松原とみ子
夢のごとたてる枯木に月ふけて十里の枯野たゞ風のこゑ
● 奈良　松石くり子
家每に煤うち拂ふ音はして小春日和の風あたゝかき
● 越後　坪井わい
旅人の捨てしわらじに霜見えて吉野一里は蟲のねもなし
● 東京　佐久間千代
ふりそでに秘藏のひなを包みつゝ小庭の隅に煤よけて立つ
● 稲谷　規矩子
荒鷲のつばさの風に霧晴れて十里の枯野唯霜の色
● 酒田　池田はる
斥候の身をかくすべき陰もなし十里枯野の冬のよの月
● 長崎　松本ふゆ
夜もすがら都大路の物の音餅搗なかぎりの今年なるらむ

● 美濃　山田愛子

御車の轟ちしらせの鈴の音に都の大路としはくれゆく

● 和歌山　森紫尾

風あれて霰たばしる枯野原小鴨手にしてゆくは誰が子ぞ

● 河内　竹内敬子

凩のすさふ枯野の夕まぐれ藥買ひにと行く少女哀れ

● 熊本　宮川千代子

めせ／＼と注連かざりうろうなゐらが呼び聲たかき年の暮かな

● 熊本　宮川千代子

友とちとすみれつみにし野はくれて夕月寒くきつれなくなり

● 松江　岸崎石子

行きかよふ車の響いそがしく都の大路年くれむとそ

● 山口　東かをる

枯野原大滿洲はたそがれて征衣に重う雪降りかゝろ

● 波津子

世の塵はのがれおほせし霜ながら拂ひつくさぬ煤もありけり

● 靜岡　美子

ものゝふがむすびし小草かれはてゝおく霜白し遼陽の野邊

● 伊賀　菊山かれ

花のつゆわけしきのふの影もなし嵐に暮るゝ宮城野の原

● 和歌　木本歌代

玉敷の都の大路ぞ賑はしき送りむかふる年のいそぎに

● 越後　土田ます

夕日影匂ふ木立もかげやせて鴫が音もなし冬枯の野邊

● 岐阜　豐谷秀子

雪をかきて舞ひし荒鷲みえずなりて雲霧ひくし冬枯の野邊

● 東京　島村豐子

雪にあけて雪に暮れゆく枯野原つき影淒く狐なくなり

● 近江　加門てる

吹き荒ぶ風やみてほの／＼とかれ野の朝は霜にあけゆく

● 美作　美泡子

紅葉ちり虫の音たえし枯野原稚子と送るよ君の門出を

● 伊豆　向非秀

わけかれし夏もありしを神無月かれたる草に霰ふるなり

● 石見　宮内登美子

一村の時雨はすぎてちる雲に立つ虹低し冬枯の野邊

● 横濱　寺田生子

枯はてゝ草のしとれもなき野邊によを明すらん武夫のとも

● 岐阜　倚島成子

小鳥追ふもずの鳴く音もかれはてゝ野原淋しく冬はきにけり

● 岐阜　懇みつ子

旅人の後ろにほゆる野良犬の聲ものすごき枯野原かな

● 熊本　豐子

砧の音はしばしとだえし遼東の枯野をてらす片破の月

● 廣島　鈴木八重子

霜かれし冬野の原のなみなへし一花殘る色もめつらし

● 信州　田中みつ

征く人を送る大旗いく流れ枯野の風にうちなびくみゆ

● 美作　安藤仙子

紅葉ちり霜白き夜を遼陽の枯野に居ます君今いかに

● 伊豆　百合の家
牛かひに問道問ふ山伏の一群くるゝ枯野闇路

● 東京　山河かづ子
一とせのちりもあくたもこと〳〵くはらひて祝ふ玉はゝきかな

● 岩代　齋藤ちか子
野に山に敵拂ふ太刀執りますを煤を香木何いとふべき

● 岩代　菅野和子
ものすごし十里の枯野血に染みてしゝむらあさる狼の聲

● 三重　杉田よし子
いとせめて鎌とる手はよきてふけ枯野の風のたゞに冷き

● 駿河　山本儉子
狼の屍せゝる聲のして月物すごき枯野はらかな

● 伊豆　内田文子
古寺の庫裡に住み居て數へ子と今年此冬また煤拂ふ

● 群馬　小澤よし子
枯野行く騎兵の群れの遠くなりて遼河の岸はみぞれに暮るゝ

● 陸前　赤井みつえ
うらかれし千草八千草血に染みて沙河の荒野に風の吹く

● 東京　吉川ひで
一年の塵を拂ひて安らけくいぬるこの夜の心地よき哉

● 大坂　俵文子
新年をむかへんためとをさな子もおのが手箱の煤拂する

● 山城　今村しやう子
冬枯れし裾ゞか原に風絶ゐてふじ深にたそがれてゆく

● 東京　佐藤ふぢ子
都人あしをそらにてはしるかなやがて迎へん年の支度に

● 東京　伊藤りへ子
お正月近しと云ひておとなしく坊も手傳ふ煤拂哉

● 岡山　行森甚
ほこ積て都にいづる小くるまのめくりも早き年のくれかな

● 大阪　大道若葉
事しげき年のくれとてみやこ路はから車さへ見られざりけり

● 岐阜　坪内清枝
冬枯の武藏大野の枯尾花尾花につゞく雪のふじの根

● 長野　安孫子美都
遼東の枯野二十里霜みえて千騎聲なし水氷る夕

● 山城　加藤しう
おく霜に千草かれ野の朝ぼらけ銃肩にして人のゆくみゆ

● 山口　しま子
軍止みて敵たばしる遼陽の枯野に高し日の大御旗

● 津市　永田加須尾
敵虜のうしろ姿に夕日さして十里の枯野只風の聲

● 和歌山　森紫尾
み軍に夫はめされてこの冬は我子とふたり煤はらひする

● 駿河　瀧野波子
傷を負ひて歸る枯野の風さむう擔架の上に星の飛ぶ見る

● 石見　宮内登美子
武者一騎木の葉の如く行く見えて十里の枯野風吹きすさぶ

● 周防　堀龍子
傷負ひし武夫ひとり月に泣きて風なまぐさき枯野寂かな

● 長門　福山とよ子
家二軒ともしび見ゆる枯野原狐の聲に夜は更けて行く
● 長門　永富芳子
すみれつみつはなぬきつゝ遊びにし野邊も色なく霜枯にけり
● 京都　林戸多美子
賣買に人をとゞむる都路も暮れ行く歳はとまらざりけり
● 埼玉　松本しげ
夕鳥ゆくへにまよふ枯野原木立疎に千草黄はみぬ
● 越中　奥田あや子
八千草の枯れて淋しき那須の原殺生石に霜ましろなり
● 和歌山　高内さくら
もろこしの枯野にすさふ朝嵐ことしばかりは心してふけ
● 山口　葉村露子
枯尾花そよかす風の身に滲みて里遠き野に霰たばしる
● 島根　小泉花子
荒駒のいななき遠く夜ふけて十里の枯野月おちかゝる
● 東京　高宮安子
ゆけど〳〵ゆけと果なしおく霜に枯れにかれたるもろこしが原
● 三河　蘆子
旅僧の小かさやれ笠見えずなりぬ吹雪にくるゝ枯野細道
● 遠江　田宮さゑ子
積りたるすゝは拂ひぬむらぎもの心のちりを如何にしてまし
● 信濃　高松蝶子
霜寒き枯野の末に月落ちて軍馬いなゝく遼陽の原
● 長門　杉山きくの子

狐の落葉ふむ音きこえきて三日月すごき枯野原かな
● 周防　貞弘八千代
雲まよひ夕日しづみて時雨ふる枯野細道僧一人行く
● 津市　安藤君子
一筋の電線遠くたそがれて雪雲ひくし冬枯の野邊
● 赤坂　藤みさほ
君北におはせば月になく雁にあゝ堪へぬ身や夜の枯野原
● 尾道　野田なほ子
家の内の塵ばかりかは慾りの心の塵もはらひすてでは
● 橫濱　三島洋子
けふといへば都も鄙も暮て行く年のいとなみ暇なくして
● きみ子
ちりをたにすえしと思ふ人皆のけふのこゝろを心ともかな
● 東京　飯塚すみ
足はやくゆきかふ人のさま見てもゆきてかへらぬ年ぞしらるゝ
● 東京　加藤やす
妹もお正月をば樂しみに緋だすきかけてすゝはらひする
● 山形　竹内かれ子
檜はらふ風につけても思ふかな人馬ゆきなやむ滿州の野を
● 伊豆　古見留子
くさ〴〵の神々佛菜畑に移しまつりて煤拂ふかな
● 岡山　小山松枝
こん年をむかへんとての煤はらひ心のちりもともにはかばや
● 伊豫　勝田秀子
おほかみの嘯きすごう風さえて枯野の夕へあられふるなり

熊本　安田文子

● やちまたをてらす炬火はなやかに春まつ家の賑はしきかな　東京　小萩

● みいくさに子らはめされて老人の孫もろともに煤拂ひする　前橋　宮内りき子

● 煤拂はらひ塞せど猶のこる心の塵をはきつくさばや　京都　白石かめ尾

● 風つよき枯野の原に里の子ははなじろましていくさごとする　石見　宮内登美子

● 暇はてし枯野の原の霜の上にさえ行く月の影ぞ身にしむ　甲州　花籬喜美子

● 冬枯の野路の夕をさすらへば友なき雁ぞ鳴き渡るなる　東京　一條はな子

● 果てもなき枯野の原を行く人の小笠に低し三日月の影　大阪　濱島松枝

● 小夜更けて勇士五百の夢包む枯野の原に霰たばしる　長門　田村喜代子

● 一條の小川は見ねて武藏野は千草殘らず冬枯れにけり　滋賀　田中とみ子

● 霜かれの野路たどり行く虚無僧の編笠さむく夕日さすなり　東京　かすみ

● 軸の怪のいづといふなる一本の月の枯野の銀杏木高き　越後　金子とせ

● 春まつと松たてわたし都べは年のくれさへゆたけかりけり　新潟　ゆき子

● 雲がりの塗笠遠く日は落ちてかれ野の末に虹うすう立つ　長門　船越ゆり

● 八千草は只一色に霜枯れて秋の名殘りは見るよしもなし　越後　須藤曾和

● 一年の煤は拂へど一年の心の塵は拂ひかねつも　山口　佐藤梅子

● 月落ちて胡笳も絶えにし滿洲の枯野わけ行く大和武夫　筑前　木村こま

● 事しけき春のまふけに都人をしみもあへぬとしの暮かな　博多　太田とも

● すが〳〵しあなすが〳〵し神棚の煤もはらひぬあかしもあげぬ　靜岡　上田新子

● 百萬の敵をひかねし皇國とは見ねぬ都の年の暮かな　安藝　松阪梅子

● 見出せしなつかしの文にそゞろにも昔こひしきすゝはらひ哉　京都　松田菊子

● たゝみうつ音こゝちよの煤拂翁はひとり孫まもりつゝ　橫濱　丹羽はる子

● あられ降りて夕日沈みぬかれのはら道ゆく人は我のみにして　豐前　岡田すみ

● 里とほみたどる枯野の夕まぐれたどり果つれば月出にけり　兵庫　塩子女史

● かれの原行手をいそぐ旅人のうしろにすごき狐の聲　長崎　朝野登美子

● 虫の音も千草ゝいつか枯すゝきなびかぬ野邊を月照らすなり

● 長門　永富八重子

満洲の平野二千里霜枯れて日の旗のみぞ色まさりける
● 信濃　小出春江

煤掃きの調度と共になき父の寫眞出して母なき給ふ
● 大坂　小山ふく子

姉妹はあかきたすきに袖あげてはゝをたすけてすゝはらいする
● 讃岐　樽田政子

見渡せば尾花が袖もうら枯れて月影寒き冬の野邊かな
● 越後　荻野てる子

もろ共に煤拂すと幼子は茜のたすきに頬かむりして
● 京都　三の宮つゆ子

はした女の居間も清めて上下のへたてはおかぬ煤はらひかな
● 駿河　龍野なみ子

遠富士を雲にまかせて一刷毛の枯野三里は夕榮の領
● 三重　岸田ちゑ子

鐵騎二千進みゆく影見ゐずなりてふぶきにくるゝ遼東の原
● 三重　山崎初子

朝な夕な枯れ行く野邊を見やりてはせこ思ふらむ一人居る君
● 河内　竹内敬子

甲冑の塵を拂ひて遠き軍のいさをし語るひげ白き翁
● 伊勢　増木さゐ子

地藏尊一人まします枯野原雪雲たれて日はくれかゝる
● 名古屋　見田すみれ

おほかたの秋の千草は枯れはてゝ淋しき野邊に月ほのしろき
● 兵庫　柳田俊子

としわかき兄の姿見ゐずなりて枯野十里を木枯のふく
● 大坂　近藤元子

霜白き枯野の末に月さゐてかなたの森にきつねなくなり
● 岩代　永戸初子

吹きすさぶ枯野が原に只一人夕日をあびて僧のたゝずむ
● 仙臺　根立かつ子

ゆふ風のそよく尾花も霜枯れて三日月さむしみや城野の原
● 岡山　安藤仙子

よそながら君が柩を送り來て夢やすかれと枯野にたちぬ
● 三重　龜井鶴登子

血に染みて草も枯れにし遼東の荒野の原を捕虜引かれ行く
● 和歌山　谷井清子

霜さむく枯野よこきる荒駒のたてかみみたす夕嵐かな
● 奈良　稲村うめ

こゝちよやつもりし煤を打拂ひ春をまつてふ物も立てけり
● 北越　嶺月子

煤拂に出すだるまをよろこびし坊や世になし時はきつれど
● 大阪　岡千代子

ふみに見る昔の跡の松古りて夢悲しむか枯野ふく風
● 東京　濱中久子

見渡せば尾花が袖も霜かれて殘る色なき武藏野の原
● 豊前　阿川みよ子

煤は掃きぬいざや飾らんとつ國に劍取ります君がうつしゑ
● 東京　齋藤柳

馬子ゆきて旅僧ゆきて黄昏るゝ十里の枯野雪ふりかゝる

●東京　星の郷子

一年の煤は拂ひぬ若き身の去年の罪さへ清めてしかな

●和歌山　木本歌代

こん春のいとなみしげき都路は暮れ行く年もをしまざるらん

●岩代　ゆき子

風老いて蟲の音絶ねて草枯れて月のみのよと野はなりにけり

●美濃　田中庭子

宵の君と菫摘みしは昨日にて枯野を守る今日の淋しさ

●宇都宮　廣瀬滋子

枯野原見るにつけても思ふかな蟲軍人の夜のさむさを

●奈良　保田照子

来て見ればいづこはてとも白露の枯野にあはし三日月のかげ

●伊勢　五井よし子

物凄きつゝのとゞろき今たへて枯野五十里雪にくれゆく

●駿河　菊池武子

武夫が露營の夢や如何ならむ霜枯さむき満州の原

●東京　諸町すゞ子

なほざりの心のちりはいかにせむ世の人なみに煤ははらへど

●東京　岡田鶴子

三日月の光も凄き枯野道霜の夕を孤ゆくみゆ

●東京　美枝子

月は今雲にのまれし遼東の枯野をしのふますらをのむれ

●播磨　木村まさ子

聴けて開くる華の都にも行く年留むるすべのなき哉

●備後　榊原英子

蟲の音も千草の花も夢の中に枯れてさびしき冬の野邊かな

●伊賀　服部かつ子

家の内の煤はくまなく拂へどもはらひかねても積る年かな

●備中　武邊靜枝

世のちりもしばしよそなる心地せり文箱文机煤拂して

●宮城　片桐きよ子

牧の子が草笛の音にたそがるゝ湖のひむがし枯野となりぬ

●秋田　河野峯子

戦友のかばねたづねてただ一人枯野さまよふ武夫やたれ

●越後　土田ます

枚を銜む鐵騎三百月にゆく枯野の末に嵐ふくなり

●大阪　尾崎榮子

起出てうつらふ野べにきて　みれば草のかれはに霜の花さく

●博多　太田とも

ものすごき野火はいつしかきえはてゝ櫨の枯木に烏なくなり

●土佐　兒島てい子

冬くれば野守が庵もあらはれて草の枯葉に霜の花さく

●備後　石岡[illegible]子

千草皆枯れたる野邊に見いでけり一花咲ける大和撫子

●駿州　大宮たけ子

木の葉落ち草枯れふせる満州の荒野にさゆる冬の夜の月

●東京　三橋愛子

一とせの營み終へて家毎に春待ちぬべき煤拂の音

●熊本　岡島かず子

ひとり子の晴着になげく親もあるをさすが都のとしの暮かな

●年をまつ心やおなじうらたなのふるやの梅もうちはらふなり　熊本　安田文子

●鶴の音さえわたる蘆も枯れて霜の花さく瀧州の野邊　大阪　小泉慶子

●見渡せばはてしも知れぬ枯野原富士のみ雪のたゞ白くして　京都　木田たつ子

●やせし人影たゝずむ影みえて夕月寒き枯野原かな　越後　水原歌子

●一塵の心のちりもはらはれてにおほふ春をまつぞたのしき　東京　前田ゆり子

●木がらしのたえま／＼に聞ゆなり戰線十里かちときの聲　靜岡　太田美子

●まいをふくむ決死の騎兵今行ぬ霜消草枯れし野路を　長門　藤田幾子

●旅雁の尾花がくれに行く見えて木枯寒く日はくれんとす　因幡　名越咲子

●うらかれし野邊にあされるむら鳥の聲さへ寒き冬の朝風　越後　杉本しん

●枯のこる松のみどりも見えずしてゆけどはてなきつくしのゝ原　東京　高宮安子

●征矢負へる若武者一騎落ちて行く月の枯野に風の吹く　埼玉　小峰矢須子

●霜の花咲けるを見んと枯尾花まれかぬ野邊に我は來にけり　福島　種子

新年和歌兼題

富士山（〆切十二月十五日）

爐邊新年（披露一月五日）

對陣

◎賞品、天、地、人、の外秀逸三十種に呈す

出征軍人留主宅日記（〆切十二月十五日）

寫生文

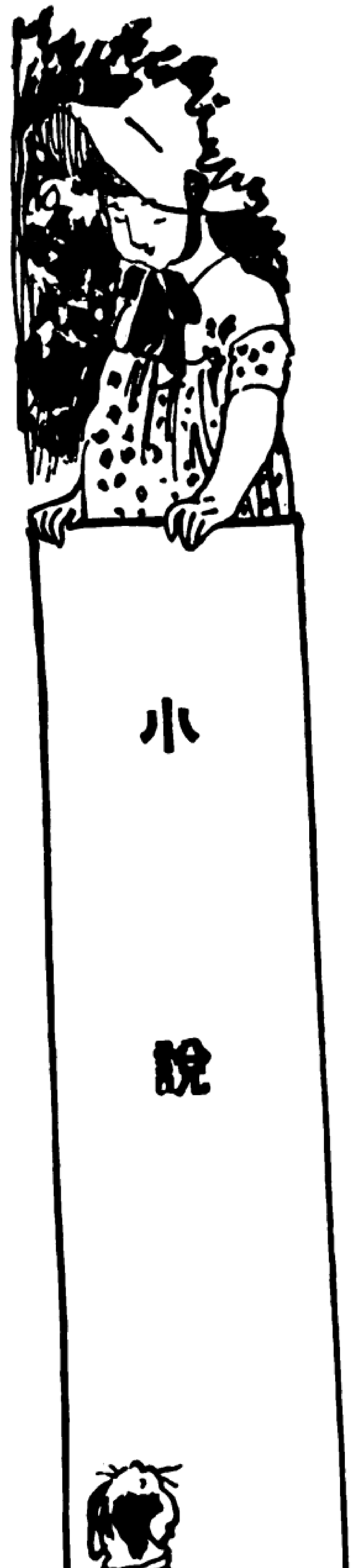
▲良家の寫眞

▲令孃の寫眞

右懸賞募集

懸賞文規程

投書用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明にすべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙縒にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず



小春日

（上）

柳川春葉

麗しい天氣が打續いて、菊に紅葉に秋も一しきり賑しかつたが、それも何時しか消えるやうに淋しくなつて朝霽の空に鮮な富士の姿を見る頃は、霜の音づれも漸く初冬の趣である。

この小春日和のほか〳〵と暖いのに、加之今日は日曜といふ十一月下旬の事、本郷片町の石田の家では最早夕飯も濟んで、臺所の騷も靜つた時分、戶外から勢よく歸つて來たのは長男の政之である。

去年高等學校へ入つたばかり、血氣盛な青年で、學校の制服に外套を無圖と着込み、ノサノサと長火鉢の脇へ來たが、

「お母樣唯今！」とばかり忽ち大胡坐を掻いて、火鉢に手を翳す。

母親といふのは五十四五の健康さうな婦人で、今しも所在が無さに今朝の新聞を拾ひ讀してゐたが、

「はいお歸、大相遲かつたね。今迄本所に居たの。」

「あゝ居たのさ。」

「御膳は？」

「喰べて來たさ。今日はね、丁度義兄樣が家に居たも

のだから、正午から一緒に散歩に出て、淺草から上野をグルツと廻つて、それから夕飯を途中で御馳走に成つて來た。」

「然うかい。」

と母親は眼鏡を取つて同じく火鉢の傍に寄り、

「それは可かつたね、今日はお天氣も好し、上野や淺草は定めし人が出た事だらう。」

「隨分賑だつた。」と衣兜からピンヘツトの箱を出して好味さうに一本吸付ける。

「では保さんは散財だつたね。何處で御馳走に？」

「鳥……鳥八十では無い、ソラ三橋の脇の鳥屋さ……む丶鳥又！」

「然うかいそれぢや次手に家まで來れば可いのに。」

「義兄樣かい、僕も然う云つたけれど、今夜は家へ來る人があるから歸らなければならないつてさ。」

政之は洋服の背中をモジ〳〵爲て、煙草の煙を鼻から出してゐたが、

「お父樣は？」

「何か調物があるつて室の方に居らつしやるよ。それは然うとお千代は何んな鹽梅だつたえ、別に變りも無いかい。」

「非常に健康だそうだ。未だ平氣で起てゐるよ。」

「當然さ、來年の二月產れるといふのに今から寐てゐる者かね。」

「だが腹だつて其樣なに大きくは無いね。」

「お前も馬鹿な事を云ふ、其樣な事を先方でツケ〳〵云やあしまいね。」

「云つたさ。」

「まあ呆れたものだ、男は無鐵砲で困る。」

煙管を取上げて寬々一服詰める。

「だつて可いではないか、姉樣の見舞に行つたのだもの、畢竟其腹を探險に……。」

「探險とは何だい。馬鹿な！」

政之も我ながな可笑しく、大きな聲で笑ひ出す。

「能く其樣な事が云へたものだ。先方の義母樣にでも聞かせて御覽。何んなに怒るか知れやしない。」

『あゝ然う〳〵お土產が有つたつけ。』と政之は脇に置いた風呂敷包を開いて、

『是は御返禮だつて、彼方の義母さんが下すつたのです。』

『然うかえ。』

『何だらう、フム羊羹だな。此奴は此方から持つて行つた物より上等だね。德を爲たやうなものだ。』

『何有お前、』と母親は苦々しく首を掉つて『それは彼のお婆さんが何でも負けない氣だからね。何時も此方から持つて行く物より良い返禮を爲て、是見よがしに爲るのさ。』

『其樣な事があるものか、是は到來物ですつて態々斷つて與れたのだもの。』

『到來なものか、乾と買はしたのに違ひない。』

政之は其菓子折を荷厄介に爲てゐたが、

『何うだつて可い、又母樣は例の僻見を起すから困つて了ふ。何も一々先方だつて惡意があつて爲るんぢやない。相當の禮を盡すんだよ。』

『其禮儀々々と云つて、變に角を立てるのが虫に障るのだよ。それは大事の娘を遣つて置く處だから、妾だつて好んで惡く云ひたくは無し。又保さんだつて彼樣な好い人だから、決して不足は有はしないけれど、妾は何うも彼の母樣が嫌さ。』

『困るな、其樣な事ばかり云つて、母樣好く考へて御覽な。親類といふものはお互に力に成り合はなければならん、其上一人の姉樣が嫁づいてゐる家なのだから此方に爲て見れば謂はゞ一番親しく爲なければ成らない親戚ではないか。それも先方の義母樣と姉さんと折合が付かんと云ふのでもあるなら兎に角の事、少しも其樣な事の無いのに、親同士離てゐて仲が惡いなんて隨分馬鹿な話ではないか。姉樣だつて薄々知つてゐるから、僕に向つて實に困ると話して居たよ。』

政之は熱心に說いた。兼て腹の中に蓄へてゐたので、族から云はう〳〵と思つてゐたのらしい。

母親も理の當然にふゝと行詰つて、少時は何にも云はずに俯いてゐたが、

「それはお前に云はれるまでも無い、私だつて考へてゐる。年を取つた者が詰らない事を根に持つて笑はれるのも承知は爲てゐます。だから何うかして折れて出やうとは思つてゐるが、何にせよ此虫が好ないので。」

「虫が好ない？　それは我儘さ。此まゝで行こうものなら、將にお互の家庭に何んな不幸が湧いて來るか知れやしない。お父樣は彼んな人だから何にも御存知なからうが、解つたら猶困りますせ、だから家の爲や姉さんの爲を思つたら、何うか其樣な面白からん事の無いやうにね。母樣さへ機嫌よく爲てくれゝば何の事は無いのだから。」

「能く解つたよ。私も餘り我が強いから、斯んな事に成たのだらう。是からはお前達にも心配を爲せないやうにします。親が子に苦勞をかけるなんて、眞實に耻入つた事さ。」

有繫に自ら省て、母親は顏を赤らめたのである。

「然う鹿爪らしく云ふ程の事ではないのさ。何有母樣の平常の氣質を知つてゐれば何でも無いのだけれど。」

「私は昔から此毛嫌を爲る方でね。お父樣にも時々叱られた事さ。然し氣質と云ふものは何うも嘘が吐けない。」

「それは知つてゐるよ。母樣は詰り正直一方なんだから、何でも一圖に思ひ込むのだ。然し又能く氣の折れる人なんだから、それは姉さんも云つてゐたよ。」

「何うも斯んな事がお父樣に知れ無やうに爲度ものだお前云ひはしまいね。」

「云ふものか、決して云やあ爲ません。」

「其内私も行かう。行つて話を爲れば事は無からう。」

「むゝ先方の義母さんも然う云つてゐたよ。近日是非お出來が願ひたいつて。」

「お光來が願ひたい？　何の自分の方からだつて稀には足を運んだつて可ぢやないか。」

「夫が可けないのだ。直に然う來るから治らない。」

政之は眉を顰める。

「だつて餘りぢやないかね。私の方からばかり頭を下げて行く理がありますか、先方だつて少とは折れて來

たつて可さゝうなものだと思はれる。』
『だから困るなあ。それが詰り衝突の原なんだ。先方は何うでも此方が先へ然う出れば、又先方だつて應じて來らあね。』
『何の！　彼んな人が應じて來るものか。』
『まあ一つ行つて見て下さい。又姉さんにも考があるだらう。』
政之は火鉢の椽に臂を突て、亂れる頭を確と仰へた。

（中）

お千代は客の歸つた後の席を片附けながら、火鉢に當つて考込む夫に對ひ、
『貴方何を其樣なに考へて？』
夫の郡保雄は或る會社の課長心得を勤めてゐる商業學校出の若手で、學問世才兩ながら會社内に評判の好い人物である。琉球紬の綿入に、節糸織の書生羽織を襲ね、エンチヤンテレスの吸口を指の尖で弄つてゐたが、
『何有、今樫田が來たについて、少し事務の事で分別爲にやならん事が出來たものだからな……然し何れ明日重役に相談爲た上の事だ、俺一人の考で決する譯でも無いから、まあ〳〵止やう。』
『會社の御用でございますか。』
『然うさ。』と徐に鼻下の疎髯を拈つて『面倒なものさ日曜まで斯樣な事で頭を使はなければならん。爲まじきものはお宮仕だね。』
お千代は默つて微笑んだ。斯んな愚痴は寧ろ夫が自分の勤務を勵む氣から出たのだと思ふからである。
保雄は面白さうに煙草を喫ひながら、
『然し是でも他人の事を思へば、然う〳〵自由も云へたものぢや無い。私は能く云ふが何でも人間は家庭を第一に注意すべきものだよ。何程外へ出て巾を利かせてゐても、家へ歸つて面白からん日を送るやうな境遇に居る人は不幸だね。其處へ行くと俺なんぞは至極圓滿なものさ。第一お前とお母樣との間が肉身も及ばぬ仲善しだから、此奴が由來得て難かしものだのに、俺なんぞは實に幸福と云つて可い。』

『私は足ない性ですが、養母様が能爲て下さるから。』
お千代は火針の灰を均し乍ら、極りの惡さうに。
『それに來年は子供が出來るといふので、お母様は酷くお喜びで。』
と云つたが、不圖何やら考へて、
『だが此處に一つ困つた事があるのは、お前の實家と家のお母様とが、何うも折合が惡いやうだな。』
『はい。』お千代は直と胸をついた。
『今日も政之さんと二人で話した事だが、何いふものか男同士には解らんけれど、實に氣が合はんやうだ。』
『政之が何か申して居りましたか。』
『いや唯其丈の事を話した計りだが、是は俺達には一向合點が行かんて。』
『實母が彼の通りの氣難しやですから。』
『否其はお互だ、此方だつて決して好い處ばかりぢや無い、それは俺も能く知つてゐるよ。畢竟兩方とも女にしては少し氣が勝ち過ぎてゐる、それで自然反が合はんのだ。だから此方でも多少は折れて貰はねばならんし。又彼方の養母様にしても時に依つたら歩を讓るやうに爲て下されば、双方好く治るのだらうが。』
『私も近いうちに能く申しましやう。』
保雄は煙草の灰を叩きながら、
『それが又藪から棒に突然云出しては反て他から火の手を揚げるやうで可けない。政之さんも頻に然う云つてゐたが、俺は又機もあらうからと止めて置いたのさ。惡く爲ると實に始末が付かんやうに成る。尤も養父様は彼様な平和な方だから決して何でも無からうが、女同士といふものは其處に又込入つた感情上の問題があるからね。』
『私も實に彼事には困り切つて了ひます。』
お千代は黙と俯いて云つた。
『然し俺とお前が何でも無いから構ひはせんさ。だが自然斯様な事から一の波瀾を此家庭に起すやうな事があつては大變だから、お前も能く注意してな。成るべくは双方の折合が甘く行くやうに骨を折つてくれ。俺も決して怠りは爲んから。』

「はい其意で居ります。何うか疾く斯んな心配の無いやうに爲度ものですね。」
「うむ。」と頷いたが「最早詰らん事を云ふのは止やう大分遲く成つたぜ。」
「今晩もお寒く成りましたね。」
「あゝ、是で明日は忙しい思ひを爲るのかな。」
霜置く屋根の上を高く、五位鷺が鳴いて行く。

(中)の二

年も最早押詰つた師走の廿三日、都合好く晴天が續いて、今年は北風も思つたよりは吹荒れず。逢ふ人毎に先づ是ばかりを喜ぶのであつた。
保雄は八時過に會社へ出て行くと、家は老母にお千代それに女中の三人で、何が無しに閑靜な晝を送るのである。お千代は長火鉢の周圍を掃除して、鐵瓶の下を覗いたが、
「由！　此炭は誠に爆つて爲やうが無いねえ。」
「おや然樣でございますか。」
と女中の由が態々臺所から遣つて來る。
「此度炭屋が來たら然う云つておくれ。」
「仰有る通り、斯樣なに爆りましては困りますねえ。能く然う申して遣ます。先達も大丈夫かといつて念を押たのです。然うすると小僧が受合だなんて申しますから、私も其意で居つたのですよ。彼奴では解りませんから今度は主人を呼んで云つてやりませやう。」
敷居の上に膝を突いて喋り出すのを、お千代は神妙に聞いてゐたが、
「まあ其樣なに大袈裟に爲なくつたつて可いんだよ。主人を呼ぶなんて然も／＼大した事があるやうぢやないか。唯一寸と然う云つて置けば可いのだよ。」
「で御在ますか。」ともぢ／＼して「私は一體口小言を申す方ですから、何でも穴を見付ては云てやりたい。」
「豪い權脈ね。旦那の居らしやる前で其樣な事を云ふと又お冷笑しなさるよ。」
とお千代は笑つた。
「眞實に旦那樣はお口が惡いのね。私なんぞは迚も敵

ひませんよ。」

「當然さ。」

「ですが何程惡口を仰有つても毒が無いから可笑しくつてよ。」

「さうさね。」有繋に嬉しさうに頷く。

「あゝ私は斯樣な事ばかり申して御用を其方除に致しました。」

とお由は忙しさうに立つて行く、入違ひに座敷の襖を明けて入つた來たのは此家の姑であつた。手織紬の綿のドッシリ入つたのに、平常着のお倉紬の綿入羽織福しく、煙草の壺と長羅宇の煙管を持つて靜に火鉢の向方へ座つた。

實家の母親から見ると五つ六つ年上で、髪は奇麗に揃へて切下げに爲てゐる。脊丈の低い人柄な老人だ。

「今日は又朝からえらい暖ですな。」

「ハイ毎日斯んな陽氣だとようございますが。」

お千代は茶棚から茶碗を取り下す。

「先刻から隱居所へ入つてゐましたが、彼處は餘り日當りが能すぎて逆せるやうですよ。」

「頭痛でもなさいますか。」

「否それ程でもないが、一躰私は若いうちからクワックワッとする性分で困りましたよ。其上此冬の日は何ういふものだか直に逆せます。」

と柔さうな煙草を徐々吸うて、

「保雄は何處へも寄路を爲ずに歸宅ますかな。」

「はい夕方は歸ると仰有つてお出かけでしたが、それでも御用の御都合で又お附合に何方かへお廻りに成らないとも限りますまい。」

「然うかね。まことに其附合といふものが五月蠅もので、第一夜遲くまで御酒を飲んだりしては身躰の爲に好くごあすまいよ。」

ゆつたりした物いひに、少し訛りのあるが、至極親切らしい人である。

お千代は少時は躊躇うてゐる、

「ですが、平常から餘り御酒は澤山に召食らない方ですから、他へいらしつても其樣なに深くお醉に成る事

はありますまい。」
「それはね。一躰亡られた親父様からが、極の下戸でゐなされたから、保雄も決して多く飲やうな事は無。」
と確めて又一服。
「時に本郷の方はお變りもないかの？」
お千代は冷りとして思はず俯いた。
「別に變つた事もございませんで。」
「然うかい、お父様は私より二つ年上だと思うたが、相變らず御丈夫だね。お母さんは猶更ね。」
「はい。」
「それにお母さんは氣が輕くておゐでだから猶お若いよ。」
お千代は何と無氣を置いて返事を爲る事も出來ぬ。
「私は近日お天氣の好い日にお邪魔に出やうとは思つてゐるが、最早これ斯う押詰つては老人の長話は御迷惑だらうと思つてね。」
「何の貴方、父も母も別に用のある身ではございませんから。」
「御用は無くとも矢張世間が忙しいと、自然に氣の急くものだからね、來春に成つたら御年始がてら悠り行きましやうよ。」
「何うぞ然うなすつて下さい。其うち母も參りましやう。」
「然うさね。少と遊びに來なさるが可い。それに、お前も來月あたりは臨月だから、然う成つたら是非前から泊りがけて來て戴かなければなるまい。」
あゝ是が又一苦勞かと、お千代は私に案じられる。

（下）

梅咲く春の二月の中旬、郡の家には出入の人も唯わやわやと賑うて、今日しも夫人千代子は玉の如き男の子を產んだといふ事。
外面の樣子すら此通りであるから、家のうちは猶さら大騷ぎで、此月の初から手傳に來てゐる實家の母やら氣の好い此家の姑やら、田舍から呼寄せた保雄の乳母やら、寄つて集つてお愛たいの言づめである。

晝飯の膳には二人の老人が差對ひで、用の多いうちにもぽつ〳〵と話を初る、姑は例の靜な物いひで、

「今日はな、貴方の好な物をと思つて過日から魚屋へ頼んで置いたのですが、丁度今日持つて來てくれました。本場の海鼠腸だと云ひます。一つ食つて下さい。」

「それは〳〵結構ですね。私は若いうちから是が大好物。是はありがたう。何も云ない味でございますね。」

と實家の母は心から喜ぶ。

「貴方は御酒は可けんやうだが、好く御酒家のやうなものを食る。」

「何ういふものか、性が好むのでしやう。」

「成程な。然しお好な物を澤山食つて下さるのは實に嬉しいもので、……時に度々申すやうですが此度は又一方ならんお世話で。お蔭さまで斯樣な慶たい事に成りまして。」

「何う致して貴方、私なぞは反つてお邪魔に參つたやうなもので御座います。」

「勿躰ない。」と姑は箸を措いて、

「私一人では迚も……それに氣ばかり焦つても躰が然う自由には成らず、奉公人では又可かず、貴方のお蔭でまことに斯んなに輕く濟みますやうな譯でした。」

「何うせ私は用も無いのですから、少しもお役に立てばと存じてね。」

實家の母は輕く笑つた。

「それに……。」と姑は少し躊躇したが「それに此何ですよ。私は此通りの性分で、まことに万事に御氣に障るやうな事を爲出すかも知れませんが、是とても決して惡氣といふものは無いのですから、何うか是からも宜敷う願ひますよ。お千代も能う存じて居りますが唯保雄が力で、斯うして居るやうな譯、其處へ今度は又孫の顏を見る事も出來まして。」

未た云はうとするのを此方は遮つて、

「まあ〳〵其事は能く存じて居ります。唯今迄は御同樣に何の斯のと申して行儀張つて居りましたが、斯う成れば貴方、遠慮なんぞは可けません。私も此通りの氣まゝ者で、能く伜にも云はれますのですが、一口に

申せば一徹者とでも云ふのでしやう。兎角御氣に觸るかも知れませんが、其處は何うぞ打明けて、まあ此位近い親類は他にありませんのですから。」

何やら遠廻しの話のうちにも、自から二人は日來の隔を除けて感情が漸く融和するやうな心地に成つた。姑もほく／＼喜んで、

『まづ／＼是でお慶たい。早く保雄が歸つて來れば可いと思ふて居りますよ。」

『最早お歸宅でしやう、オヤ啼聲が致しますね。それでは彼方へ參ります。」

實母は立つて產婦の室へ行くと、程なく玄關に車の下りた音がして、是も大喜で入つて來たのは待つてゐた保雄である。

外套のボタンを外しながら、束々奥へ來て、

『お母樣、二人とも變りはありませんかな。」

『あい、變りはありません。至極丈夫ですよ。」

『然うですか、一つ行つて見て來やう。」

ソハ／＼して是も產婦の處へ來る。お千代は枕頭の母と何やら話を爲てゐたが、

『おや歸宅なさいまし。」

『おつと其まゝで居るが可い、何うだね。」

『何ともございません。」

『それは結構だ。小僧は？」

『今能く寢てゐますよ。」

實家の母は斯う云つて、襁褓を持つたまゝ室の外へ出る。保雄は蒲團の中を覗き込んで、

『むゝ能く寢てゐるな。貴樣の名を付けやうと思つていろ／＼考へたが、矢張是は本鄕の祖父樣に願つた方が可からう。」

『何うか丈夫なやうな名に爲たうございますね。」

『然うさな。まあ其處は宜敷くお慶たく願ふとしやうよ。時にお千代、此頃は不思議だね。」

『何が不思議でございます。」

『不思議といふのも變だが、畢竟俺達の理想が實行されたやうだ……と云つては解るまいが、二人の老人が非常に仲が善く成つたやうだね。」

『はい。』とお千代も嬉しさうに『私も其事を申上げやうと存じてゐました。此頃は全然變つて來ました。』

『難有い。』と保雄は寢てゐる子の頬を輕く突いて『是も皆貴様の手柄だぞ、俺は是で家庭に二つの平和の種子を造つた。』

『是からは實に樂みでしやう。』

『然うとも郡家は萬歳だ。』

と云ふ處へ、ガラリと襖を明けて、

『義兄様萬歳ですな。』

と飛込んだのは政之であつた。

『ヤア君も來て與れたか。』と保雄は其手を取つて、

『サア今夜は祝宴だ。』

雪の朝

冬になりてはむぐらわくる人もなきまゝ、ことさらに塵もはらわれば、木の葉いたう散りしきて暫しこそ紅葉の色も殘りつれ、いつしか散りはてゝ塵塚やうなる庭も、ふりつみたる雪におもがはりし、木々の梢は時ならぬ花さき、見渡す峯は白玉を積みあげたらんやうなり、さばかり音すさまじき谷水は物の底に聞え、しもと吹きならす嵐の音もたえはてて、靜かなる心にかなふ雪のあしたの山里なりけり（富麻衡文）

少女演劇 くりすます

生田葵山人

初幕目

▲登場人物

姉 美子
妹 秀子
片輪 紀洲
片輪 山城

紀『おい山城。俺等は這麼片輪者に產れて來て、世間の慈悲深い人様の御救助で生きて居るだが思ふと情ない身の上だなア。』

山『然うだなア。御前は未だしも右の手一本で、足も滿足だし、眼も兩方とも見えるからいゝが、俺等と來た日にや、目は一つだし、其れに足の工合が惡いと來て居るから始末にいけねい。』

紀『其の變り兩手が動くから同じ事ぢやないか。』

山『然う云やあ那麼ものぢやが、……奈何だい紀州御前腹が減らないか。』

紀「腹が減らないかつて、御互に昨日から何も食でないぢやないか、腹の虫がぐう〳〵云つてる。」
山「俺等も其の通りだ、何か食べたいなア。」
紀「そこいらに生の大根でも、落ちて居りやいゝがねえ。」
山「甘い事を云つて居やがらあ。……あれ前方へ立派な御孃さんが二人連立つて被入つた、御願い申したら乾度惠んで下さるに違い無い。」
紀「うむ然うだ、若し白銅の一つも下さつたら、温い燒芋をうんと買つて食やうぜ。」
斯く話す處へ下手の方より撫子、秀子の姉妹連立ちて登場し來る。
姉「秀子さん、今日は結構な御天氣で、こんな幸福な事は御座いません、鳥は嬉しさうに囀づつて居りますし、花は神樣の光榮を誇る樣に美しう咲て居ります。」
妹「ほんとに姉樣然うで御座んすねえ、御日樣の光りは貧乏な人にも、富貴の人にも同じ樣に輝らして、世間は勇しさうに活働いて居ります。是皆神樣の御惠みで御座いますね。」
貮人の片輪乞食そろ〳〵其の側に寄る。
紀「立派な御孃樣方、勞働く事の出來ない片輪者で御座います。どうか御惠みなさつて下さいまし。」
山「未だ昨日から何も頂きません。お腹が飢つて、息を吐にも苦しう御座います。」
姉妹聲に回顧り、其れと見て乾驚りする態度、飛退く體よろしくあつて。
姉「あゝ吃驚した。何だい御前達は乞食ぢやないか。」
妹「あゝ汚ない、側へ御寄りでない臭いから。」
紀「奈何ぞ御惠みなすつて下さいまし、勞働く事の出來ない者を御救助けになるのは、有難い神樣の御心で若し御惠みなさいましたなら、神樣は乾度孃樣方を御守りなさいますでしやう。」
山「施しをなさいましたなら、美しい御孃樣は其の上にも美しう御爲になります。」
姉「よくまあ種々に御しやべりだなアあゝ煩い。」
妹「御前達が勝手に片輪に産れて來て、御前達の勝手

で生きて居るのぢやないか、お腹が飢らうが、勞働く事が出來なからうが私達の知つた事ぢやないわ。』

紀『まあ御顔にも似はない酷い事を被仰います。此の手を見て下さい、貴方樣は二つ持つて被入います、私は一つしか御座いません。』

山『私の眼は一つしか御座いません、其の上足も一本しか御座いません、働くにも働く事が出來ず、いつだつて御腹一杯に食べた事は御座いません、どうか御惠みなさつて下さいまし。』

姉『えゝ、知らない〳〵人は皆二つの眼、二本の手、二本の足を持つて居るものぢやないか、神樣は人間を然う云ふ態に御造りになつたのだ。』

妹『其れに御前達は一つしか持つて居ないのは、神樣の御罰が當つたのだ。神樣の罰が當つた樣なものに惠むでやる事は出來ない。さあ姉樣、こんな者等に關はずに、早く御家へ歸りましやう。』

之にて姉妹退場後姿見送りて乞食兩人恨めしき態度

紀『すつかり的が外れて了つた。』

山『矢つぱし餓じい御腹を抱えなくちやならないか。』

紀『酷い人達だ、あんな情知らずのものになんで神樣の御惠みがあらう。』

山『俺等の腹の立つ心は神樣が報酬て下さるであらう紀州街の方へ往つて、何か食物に有附かふぢやないか。』之にて乞食兩人退場。

貳幕目

▲登場人物

姉　幾子
妹　秀子
片輪　紀洲
同　山城
姉妹友達　春花
同　近子
天使　三人

秀子幾子連立ちて登場、先刻片輪の乞食に別れ、今家へ歸り着きたる態、戸口に立ちて。

姉『あゝ秀子さん、先刻の可哀想な乞食は奈何しましたらう。私達の心に魔がさしたのやら。惠んで遣り

ませんでした。』

妹『本統に然うでしたねえ、私も道々思つて悲しうなつて來ました。あの人達は昨日から何も食べないと申して居りました。』

姉『息を吐くのさへ苦しいと申して居りました。あゝ惡い事をしました。』

云ひ乍ら已が部屋に入り、机に凭り懸る。

姉『奈何して私達はあんな酷い心になつたのでしやう此の上は神樣に御詫びするより外に仕樣が御座いません。』

妹『ほんとに然うですねえ、心が漸々悲しうなつて參るのも神樣の御罰でせう。』

姉妹只管後悔して惱み居る所へ、友達の譽花、近子の兩人、貳人の態子を知り、美しき花束、花輪を持ちて慰めに來る、戸口の處にて。

譽近『お免なさいまし。』

姉『誰何か御客樣が被入つた樣だ。秀さん見て來て下さいまし。』

『はい。』と妹立ちて見に行く。

妹『あゝ、近子さんに譽花さん。能くまあ御出で下さいました。何か御用で被入いますか。』

譽『いえ、私達は今途中で、貴方も御姉樣も大層沈んだ御顏色で御歸りになつたのを見まして、屹度心配事が出來たのだらうと、御慰めに參つたのです。』

近『恁うして花束を持つて參りましたのは、花の美しさに御心の惱みが紛れるだらうと存じまして。』

妹『其れはまあ有難い御志し、姉も嘸嬉びましやう、さあどうぞ此方へ御越し下さりませ。』

妹先に立ち兩人後に從つて姉の部屋に入る。

妹『姉樣、近子樣と譽花さんが、美しい花を持つて私等を慰めに來て下さいました。』

姉『其れはまあ嬉しい御志し。』と姉立上り。

姉『まあ御貳人樣、ようこそ御見舞ひに來て下さいました、優しい御心の程は只今此方から伺ひましたが、私達は其の御見舞の品を受る事が出來ませぬ。』

譽『其れは又何故で御座います。』

姉「さあ、其の譯と申ますと、若し此の悲しみが、私達の思はない……譬へて申しませうなら御朋友と別れたと云ふ樣な悲みでしたら、それや其の花を頂いて、深切な御志しを受けもいたしましやうが、私達の悲みは、自分の悪い心から起つたのですから、其の御花を頂くと、却つて心苦しいので御座います。」

妹「只今姉が申ました通り、私達は之から神樣の御怒りが解ける迄、自身で苦しもうと存じますから、折角の御志ですが、どうぞ其の花は御持歸り下さいまし」

近「私は又此の花が御氣に入らないのかと心配しましたが、そんなら是非に及びません。」

雪「其れでは致方がない。そんなら幾子さん秀子さん悔悟は宥免れると云ふ事が御座いますから、どうぞ些つとも早く神樣の御宥免が出て、安らかな御心におなりになる樣、私達も共々に御祈りいたしませう。」

之にて二人の朋友退場、後見送りて。

姉「あゝ優しい御朋達の方、其れに引變へて私達は奈何してあゝも黠かつたのであらう。」

妹「私達の心は汚れて居たんですねえ。」

憖所へ先刻の乞食、姉妹の家とは知ず貰ひに來る。

紀「どうぞ御惠みなさつて下さいまし。」

山「昨日から未だ何も食べません。」

戸口の處に立つ姉妹の顏を見て。

紀「駄目だ〳〵先刻の情知らずの御孃さんの家だ。」

山「然うだ、鬼の樣な冷たい心を持つた、御孃さん處だ。歸ろう〳〵。」

乞食行懸けやうとする。

妹「姉さま、先刻の可哀想な乞食です。」

姉「あゝ、之お待ち、私は施しをします。」

紀「えゝ、施を爲る？　貴孃の下さるものなら、石塊か、其れとも毒藥でしやう。」

山「迂濶貰つて食べ樣ものなら、歯も欠けやう、死んで了ふかも知れない。長居は無用往くとしやす。」

姉「いえ、先刻の事を思つて那麼に云ふのは無理も無いが、今は悔いて居ます、さあどうぞ恵して下さい。」

姉妹奥へ這入つて、麵麭と菓物を取つて來て渡す、兩

人の乞食手に受取り。

妃「まあ、これは新しい麵麭。」

山「これは美しい色の林檎。」

妃「まさか張子ぢや無からうなア。」

山「握つて居ると溶けるのぢや無からうねえ。」

妹「決して那麼のぢやないから、私達の心盡しを食べて下さい。」

姉「然して私達の先刻の悪い仕打を忘れて下さいな。」

妃「之は有難い御思召。神様は乾度貴孃方を御守りなさるでしやう。」

山「美しい御心や、御姿は、此の上とも美くしう御なりでしやう。」

乞食両人退場、姉妹顔見合し。

妹「姉様よろしう御座いましたね。」

姉「あの人達が來て與たのは、神様が宥免して遣らうとの御思召で御座いましやう。こんな嬉しい事はない讃美歌を唱つて、感謝の御祈禱をいたしましやう。」

之にて両人唱ふ。（歌畧す）唱ひ終りて感謝の祈禱を爲しつゝある間に眠り來り、跪きながら眠に陷る態。此處にて天使顯はるの獨唱あり（獨唱の歌略す）獨唱に連れて、天使二人顯はれ來る、天使の一人は先に立ち二人は後に從ふ。從ふ者の一人は金の十字架を捧げ、一人は手に美麗なる種々の贈物を携へり、登場して中央に進みし後、前に立ちし天使、大聲に自己の使命を述ぶ。

天「悔ゆるものは許されん。二人の姉妹等一旦は心の曇りより、道に違ひし所業ありしも、眞心より悔ひし心に愛でゝ、神の御怒りは解けたり、斯る優しき心持つものに、などて御恩寵の下らざる事やある。我等天の聖座より、御旨を奉じ姉妹の夢の中に顯はれんとて來れり。いざ十字架持ちしもの前に。」

十字架捧げし天使前に進み、手を組合し跪きつゝある姉妹の頭の上にて十字架を擧ぐ。

天「贈物前に。」

美麗なる贈物持ちし天使前に進み出で、くさ〳〵のものを机の上に置きし後其の天使宣言す。

『あゝ麗しき姿かな、眠りは神の世界なり、善き事せしものに、なにとて御恵の下らざる事やある、いざ十字架捧げて天啓を述べん。』

三個の天使十字架にと寄添ひ、高く捧げし後。

『悔ひ改むものは許されん〱。』

再度大聲に繰回し叫びし後、退場。其後直ぐ、姉妹は夢より覺めたる體にて眼を開き立上る。

姉『あゝ、今のは夢であつたか。』

妹『姉さま、不思議な夢を見ました。天の使ひが此の座へ御越しになりて、いろ〱と其れは有難い御言葉。』

姉『そんなら秀さんも同じ夢を。』

妹『悔ひ改むものは宥免るゝと御叫びありて、美しい贈物を。』

姉『おゝ、其の贈物は此處にある！。』

妹『其れでは矢張し御越しになつたのか。』

之にて兩人天を仰いて掌を組み感謝する態よろしくありて幕

（完結）

（注意）之は來る基督降誕祭に番町教會で行ふんです、基督教の色彩を帶びて居るのは其の行爲です、地方の教會ならば宜ろしいですが東京の教會で本年のクリスマスに御やりになるのは御免を願ひます

午後七時

武田櫻桃

上

『嫂さんは眞個にお氣の毒だつたわ！』

千代子は始終此の語を口にするのであつた。嫂さんと云ふのは、千代子の兄尾澤雪雄の妻で、年上ながら千代子とは小學校時代からの友垣、雪雄の氣にも入れば、自分からも勸めて、嫂さんと仰ぐやうになつたのが、今から丁度三年前である。

名を眞須子と云つた。學校に机を列べた時分から、柔順で容貌も他に立勝り、學校も亦成績のいゝ方であつ

た、疵を云はゞ無論陰氣な性ではあるが、活潑で、寧ろお轉婆の千代子と相容れ、姉妹もたゞならぬ仲であつた。

唱歌の先生が何日かも恁う云つた事がある、千代子さんと眞須子さんは性質が反對して居る、それにあゝして相容れて居ると云ふのは眞須子さんが畢竟千代子さんの云ふことを容れるからだ！　其の通り、千代子は快活で些事に屈托せぬ性質ではあるが、さう云ふ人の癖として多少の我儘が伴ふので、隨分眞須子の面前で痛罵を加へたこともある、それを眞須子は忍んで容れた、千代子はまた眞須子が自分の我儘を赦見して、風に柳と受けてくれることを知つて居る、廣い世間に自分の云條を一から十まで立てゝくれるのは眞須子さん一人！　それは過には眞須子さんが、餘り因循過ぎて焦つたいやうなこともあつたが、眞須子さんの女らしいところが、また、眞須子さんの價値なので、これを咎めれば、先づ自分の勝手から矯めねばならぬ、同じ學校朋輩の年とても僅か二つの差であるが、千代子は寧ろ眞須子を畏友として居たのであつた。

で、眞須子は其の頃から毎日のやうに千代子の家へ遊びに來る、親の慾目にも猶千代子を女らしからぬお轉婆として、始終注意を加へた兩親は、この眞須子を見ると惚れ込んで、「あゝ云ふ娘を伜の嫁に」と云ふ話になつたが、兄の雪雄もまたいつか眞須子を譽めちぎるやうになつた。

千代子は癪に觸らぬでもなかつた。家の娘を貶して、他家の娘を譽める、家の人達はまア何と云ふ心なしであらうかとも思つたが、熟く考へて見ると眞須子さんは、家ばかりではない、何處へ行つても譽められる、さうだ、兄さんもいづれは嫁を貰はねばならぬ、嫂さん！　自分が畏服せねばならぬ嫂さん、若しその人が家の人達のやうに自分をお轉婆と認めたら、それこそ自分の立場はない、家の人達は成程自分を貶す、女らしからぬとも云ひお轉婆とも云ふ、それは畢竟自分の身を案じて下さる上のお叱りに相違ないが、嫂の眼に若しさう映じたとしたら、乾度！　乾度！　注告はや

がて憎みとなつて、相闘はねばならぬ事になる。それよりも眞須子さん、自分の常から畏服する眞須子さんが、家の嫂さんになつてくれゝば、自分が眞須子さんを知つて居る以上に、眞須子さんは自分を知つて居る、これ程の幸福はないのである！から千代子が思ひ返した時は、もうこの縁談が大分進んで居た時で、ある日千代子が眞須子の家を訪ふた時に、眞須子は何日にない不機嫌な顔をして千代子を迎へたのであつた。

『眞須子さん、貴孃什麽かしやしなくッて、大變顔色が惡くつてよ。』

千代子は恁う云つて眞須子の顔を見ると、眞須子は妙に恥羞んで、

『何處も何ともないの！』

『だつて何だか浮かない顔ですもの。』

『さう、貴孃の目にもさう見えて？』

何か心の底に蟠りのあるやうな詞であるので、千代子は疊みかけた。

『何か心配な事でも出來て、え、眞須子さん何だか儂心配になつてよ。』

眞須子は俄かに高く笑ふのであつた。千代子は氣でも狂つたのではあるまいかと疑がつて、暫らく其の顔を瞻めて居ると、やがてまた固の淋しい色に返つて、

『儂何だか恥かしいやうな氣がしますわ。』

『什麽したつて云ふの、え、何が恥かしい事があつて？』

『だつても！』

と一呼吸に聲を咽んで、『儂もう極つたんですもの！』

『えッ。』

千代子は眼を睜つた。

『家へ來るやうになつて？』

『昨日もうお結納が濟んでしまつたの！』

『まア、儂ちッとも知らなくつて、何日の間にそんな仕度をしたか知らッ、でも嬉しいわね。』

千代子は眞須子の手を把つたが、二三度振るやうにして、

「貴嬢、僕の娘さんになるのね！」

眞須子の顔は見る〳〵紅を染めたが、

「千代子さん、どうぞね、だけども妾、貴嬢のお母さまのお氣に入るかと思つて。」

「それはもう。」

と頤でしやくツて、千代子は眞面目になり、

「お母さまから今度のお話が出たんですもの屹度可愛いがつてよ、僕よか大切にするわ。」

「僕はそれが心配で、昨夜も寢られなかつたの！」

それから婚禮の夜までと云ふもの、千代子は眞須子を訪はなかつた。で婚禮の夜を眞須子と語るべく豫期したのであつたが、遂に其機會を捕へ得なかつた。翌る朝眞須子と顔を見合はせた時、自分は何となく言葉も更まるやうに覺えて、云ひたい事も云はず、先方もまた閑寂なに、極めて慇懃な態度をとつた。

日を經るまゝに雪雄と眞須子との仲は膠のやう、兩親の氣にも入つて、二となきものゝやうに囃された。

さアさうなると千代子は眞須子を快からず思ふやうになつて來る、それは自分から勸めて貰つた程の嫁ではあるが、家の娘は日陰者にされてしまつて、他所から來たものが娘のやうに持囃される、此のやうな道理があるべきではない、自分に吩咐けて然るべきことを、眞須子さんでなければならないやうに云つて居る、眞須子さんは屹度兄さんを楯にとつて自分を憎ませるに相違ない！

僻見！　僻見程恐ろしいものはない、自分はもう眞須子さんを敵として立たうと思つた。で、拗ねて〳〵拗ねぬいて、自分ながら什麼して恁う意地が惡くなつたかと思ふばかり、それは〳〵眞須子に中ること！

「千代子さん！　貴嬢は什麼してさう僕が憎いんでせう、少しは僕の身になつて下さいな。」

と眞須子が哀訴に及んだことも幾度か、それを千代子は鼻であしらつて聞かうともしなかつた。で、恐ろしいことではあるが、雪雄との仲を割かうとまで企てた。

「兄さん！　眞須子さんは何て無性な人でせう。」

恁う云つて千代子が雪雄の書齋に引懸けてある羽織を疊みながら、その氣色を覗ふと、

「兎てもお前のやうに氣は利きはしないよ！」

餘計な事をと云はぬばかり。

「だつて餘り無性だわ、一寸疊めばいゝのにこんなことをして置くなんて、妾、眞須子さんを見損つてよ。」

「何を見損つたんだえ？」

「何をつて、あんな人ぢやアないと思つたわ、どうしてあゝ無性なんでせう、其癖自分は朝からお化粧ばかりして……」

其處へ眞須子は這入つて來たが、自分が羽織を疊んで居るのを見ると、

「ま、千代子さん濟みません、今疊まうと思つてましたの！」

何氣ないやうに其處へ座るのを、千代子は迎へて、

「嫂さんも随分無性でいらつしやるのね。」

「え、儂が？」と眞須子は眼を睜つて、

「眞個に無性ですわ、自分で愛情が盡きますの！」

柳にうけて、

「千代子さん、貴孃今日お茶へいらしつて？」

「行きましたわ、それが什麽して。」

「貴孃怒つてらしつて？」

「いゝえ」と空嘯く千代子の顔を追ふやうに眞須子は膝を進めたが、

「怒つてらつしるんでせう、什麽でね、貴孃、儂の悪いとこは幾重にも詫りますから、お友達の昔に返つて下さいな、え、千代子さん、儂は假令什麽なつても、貴孃のお心が解けない中は、も、も、死ぬにも死ねませんわ！」

雪雄は眼を庭の方へ外してしまふ、千代子も有繋恁う聞いては、固から眞須子が憎いと云ふ譯でもない、もう／＼どんな事があるにしても、決して眞須子に逆ふまい、眞須子は畏敬すべき嫂である、それを中傷もし、讒誣もする、自分は什麽して恁う心が拗けたであらうと釋然大悟、それも時の間で、やがてまた消えかけた火へ油は、一層憎みの度を益すばかり！　千代子親ら

もまた此の容易な問題に苦むのであつた。

下

千代子の胸の炎が昂まる程、家内は闃然として、眞須子と雪雄との仲もまた稍面白からぬやうになつた。

「あゝ不愉快だ、誰の顔を見ても一人として愉快さうなのはない！」

恁う云つて雪雄は夜遲くまで歸らぬ事もあるので、始め其仲を割かうとした千代子も、それが事實に進んで來ては、眞須子に對して少しは氣の毒の感もあるので、強いても慰めてやらねばならぬ、兄に對してはまた其不心得を諭さねばならぬ立場になつた。

自分で縺らした糸を自分で解かねばならぬ、何故自分は今迄眞須子さんを苦しめたらう、始めから眞須子さんを敵とすれば、家庭の平和を紊すとは知つて居た、知つて居てから云ふ破目になつた、自分は什麼してかう思慮に乏しかつたであらう、惡かつた、惡かつた！可愛想なのは眞須子さん、自分が心を苦しめた以上、何程まで悶へたか、近頃のあの痩は一通りでない、思へば罪な事をしたものかな、此の上は眞須子さんを慰め、兄さんを諫め、昔の樂しい家庭に還さねば、眞須子さんに濟まぬ、濟まぬ、濟まぬ！

千代子は翻然前非を悔いた、で、眞須子には此方から詫びて出て、とも〴〵兄の放埒を諫めやうと約した時に、眞須子は熱い涙を流して、

「千代子さん、貴孃は儂の罪を許してやらうと被仰るのですね、もう其のお言葉を聞けば、明日が日死んでもお恨みはありませんし」

と何日になく快活に笑つたが、此時はもう既に遲かつた。眞須子は雪雄の妻になつてから約一年後、苦悶に苦悶に重ねた決果はヒステリーを起して居た。

憂鬱症　女には往々ある病であるが、眞須子は逐に起たなくなつた。豐かな頬は痩せ、涼しい眼は濁つて、もう今日か明日かと云ふ時覺束ない聲に千代子を呼んで、

「千代子さん！　儂はもう癒らないだらうと思ひます

が、これまでの貴孃の御恩は忘れません、只その貴孃の御恩を返す事の出來ないのが殘念なのです、どうぞ妾のない後は、お兄さんの御放埓が歇みますやうに、こればかりが心殘りでございます。」

「まア」と千代子は目を大きくして、

「そんな心細い事を云ふものぢやありませんよ、嫂さんをかうして病氣にしたと云ふのも、實は妾が惡いのです、病氣は氣からと云ふ事もありますからね、嫂さん！　どうぞ一日も早く癒くなつて、兄さんの事なんぞもう思はない方が好ござんすわ。」

眞須子は頷くのであつた。

「僕の病氣になつたのが何で貴孃の罪でせう皆僕の惡いのですわ、兄さんをあんなにして皆樣へ御心配をかけるのも、畢竟は僕の足らないから起つたことですわ、どうぞね千代子さん、僕の心を汲んで下さるのは貴孃ばかり、この上は貴孃のお力で、兄さんの放埓を！」

とばかり咽入つたが、千代子の與へた微温湯に漸く息をついで、枕の下から取出したのは眞須子が嫁入以來肌身離さぬ懷中時計である。女持のさまで美はしきものではないが、什麼云ふものか眞須子はこれを大切にかけて、暫くも身を離さず、千代子にさへ預けることをしなかつた。

「これは遺物と云つては失禮ですがね、種々御恩になりましたお禮がはり、どうぞ僕のない後は、これを僕と思つて下すつて。」

眞須子は懷中時計を無理に千代子の手に渡して、疲れたのかすや〳〵と安い眠りに落ちた。見ると懷中時計の針は、午後七時を指して居る、此事のあつたのは午前九時、無論龍頭も卷かずにはあるが、午後七時！　さうよ眞須子さんが雪雄と結婚の式を擧げたのが確かに三月七日の午後七時！　偶然にも其所で止つたこの時刻を忘れまいとの心であつたか、可憐らしい眞須子さん、あゝ自分は何故かうした神樣のやうな、無邪氣な、善人を困しめたのであらう！

千代子は尠からず悲歎に暮れた。翌る夜の午後七時何

分、眞須子は遂に敢果なくなつた。遺物となつた眞須子の懐中時計を見る度に、千代子は云ひ知らず不解の惑に落ちるのであつた。それは眞須子が婚禮の夜の午後七時！　自分が前後にない樂しみと希望とを捧げた其時間と、眞須子が無限の思を呑んで冷たい床に冷たい身體を横たへた午後七時！　自分が前後覺へぬ心の悔と安慰とを得た其の時間、神經の狂か、其時刻を机の手抽に微かなチクタクの響を聞く毎に、千代子は厳然と坐り直して神の名を呼ぶのであつた、千代子が愛用の自轉車は其後塵に塗れたまゝ置捨てられて、人は千代子の唱名を寧ろ怪しむまでになつた。

「嫂さんは眞個にお氣の毒だつたわ！」

繰返す千代子は始終此の語を口にするのであつた！

（完）

トルスイ伯の家庭

現代思想界の巨人として非戰主義の唱主として世界にその名を轟かせし露西亞の文豪トルストイ伯は近頃日露戰爭に就て又其の主義を反覆し痛く戰爭の罪惡を絶叫なしつゝ、世界の耳目を聳動したり、其説の可否は兎もあれ、此の偉人の家庭の清純、優美なるに至つては又一の模範的價値を有するものといはん。

露國の文豪トルストイ伯の夫人は醫學博士バルス氏の第二女なるが伯と結婚を爲すに到りたる逸行には多少興味のあることにて、伯が中世の生活なる軍人の境域を脱したる時、莫斯科府に博士を訪うて懇意を重ね足繁く其家に出入する中、今を盛りと咲き匂ふ博士が自慢の三幹の花の朝な夕なに笑を綻ばして、何れに如かはあられども、伯の眼には第二の花の枝振りが分けて美事に映ひて見ゐければ、遂に包むに餘まる思のたけを打明けて我が庭に移し植ゐたき旨を博士に申込みぬ、されど未だ年若かき伯が文學上の技能は己れが信ずる程に博士の信用を得る能はず姉を措きて先づ妹を嫁せんは秩序正しき事に非ざればとの体能き謝絶を受けたりける、而も日ましに昂まる伯の熱情、意中の人の心にや通じけん將た意中の人の伯が材能を見透かしやしけん意外にも其人より進んで父なる博士に乞うて其許を得芽出度合巹の式を擧げたり、當時伯は三十四歳夫人は實に十八歳の妙齢なりしなり、今や隙なく行く駒の蹄の塵を蒙りて頭髪の白く成りまさりたる伯は、今年七十六歳夫人も積つて六十歳四十二年の長の年月良人の著述を輔け汲々之か整理に任じ未だ一日も怠りしことなく伯が名著なる「平和と戰爭」を淨寫すること前後七回是れ伯が筆蹟の亂暴なる夫人の外は何人も能く之を解讀するを得ざるが故なりといふ、兒を擧ぐること十三人、現存するもの男子五人、女子四人、其最も稚きは十四歳にして千八百九十一年に生れたり、兄弟姉妹打揃うて數ケ國の語に通じ又音樂に堪能にして一度伯か門を訪ふ者は家族に上下の隔なく其家庭の如何にも快活に、如何にも淡白なるを感ぜざるを得ずと言ふ、是伯が方針としてルーソーの自由主義に基づき、兒女の教育を爲し敢て叨りに之を叱責するか如き弊風を避くるの片影に外ならざるなり。

新年の女

卅八年一月一日發行

女子教育は全世界環視の焼點たる我が日本刻下の問題なり、家庭の改良は膨脹的進歩的なる日本刻下の急務なり、我が女學世界は此の必要に應じて聊か婦人社會智識の啓發に資せんと欲す、創刊以來年を閲すること愛に四年、年所淺しと雖も、主婦の務を全うすべき家庭と、將來の賢母を造るべき學窓とに對して多少の貢獻ありしを信ず、斯に來年一月よりて更に誌面に改善を施し、内容を豐富にし、材料を新たにし、以て將來我が女學界の明星たらんことを期す。

▲書畫手本　本誌の巻頭に掲ぐる臨摹帖は精巧なる石版八頁を、書畫兩樣に分ち、書は貴婦人社會の能筆十二大家に毛筆畫は跡見花蹊女史に、鉛筆畫は三宅克己氏に囑托し、以て雲煙龍蛇の筆法、山水、草花、禽鳥に各家獨特の妙技を揮灑すべし。

▲口繪寫眞　書畫手本に次で掲ぐべき寫眞口繪は世界各國の風景、人物、内地の風俗、好尚、社會上の出來事、模範的活家庭の活畫、女學校の内容、生徒の製作品等、新たなる社會の要求に應じ婦人智識の啓發に資すべき材料を網羅す。

▲論說　論說は時代の風潮に伴ひて家庭學校、並に時事の問題を說くを主とし當途專門の大家、斯界の名流に囑托す。

▲家庭　家政の學問をして實際に適應せしむるは本欄の主張にして、家事經濟、家庭衛生、家庭敎育、家門の樂事、庖厨百事、室内裝飾、其他日常團欒生活の上に必要なる事項を網羅し、世の主婦をして居家處世の務を完うせしむるを期す。

▲社交　交際社會に聲名ある貴婦人、江湖名流の内助者、特種の技能ある我が巾幗社會の先覺に就てその平生嗜好生活の概要を紹介し、以て趣味敎育の端緒を開く。

女學世界 第五卷第壹號豫告

新年附錄

婦人風俗双六　縱一尺八寸橫二尺五寸大彩色三度刷美麗高尙　水野年方畫

口繪（風景（水彩）……三宅克己筆／人物（油繪）……楳島武二筆）

畫手本（毛筆畫……跡見花蹊筆／鉛筆畫……三宅克己筆）

習字手本 春の歌……（岩倉公爵夫人筆／鍋島侯爵夫人筆）

新案繪葉書……久保田米齋

寫眞版 名流家庭、世態、風景、繪畫

記事要目

女子の獨立問題……伯爵 松平直亮

女子の新敎育……下田次郎

廿世紀改良家庭……佐々夫人

郡司大尉夫人絕島生活談……

栗野公使夫人露京引揚の實話……

野津大將夫人家庭經營談……

佛蘭西の交際社會……

歐洲各國皇后の嗜好……櫻井義肇

學世界

來年初刊本誌の豫告

▲談叢　教育社會、醫學社界、藝術社會、其他あらゆる方面の大家を訪問してその談話、口述、講演を筆記し、現代思想の潮流を我が誌上に紹介して以て讀者の智嚢を啓發し、充實すべし。

▲實務　婦人世に立ちて如何に活動し、如何に精勵し、如何に成功し以て如何に我が一生の天職を全ふし、以て如何に我が人生の眞趣を完うすべきかに就て、その方法、指鍼を示さんと欲す。

▲史傳　東西古今に傑出せる賢婦烈女の傳記閲歴を掲ぐるを主とし、又時に英雄豪傑、偉人傑士の事歴を尋れ、以て優美なる婦人の特性と剛毅なる兒童の天性を陶冶せしめんと欲す。

▲科學　專ら學術上の利益を與ふるを主とし理化、博物の解說を主とし、自然界の現象に就て極めて趣味ある部分の說示をなし、以て讀者に科學的智識を與へ、その才能を啓發するの料に供す。

▲文苑　文壇の名家が特に本誌の爲めに材を選み、想を構へて洗錬されたる作品を掲ぐ、蓋し一面娯樂に供し、一面人情の秘機を悟了せしむるにあり。

▲手藝　婦人の習得すべき各種の技藝、意匠圖案、繪畫、彫刻、裁縫、造花等に就て實習手引を掲げ、以て我が婦人に他日獨立の地步を作らしむ。

▲衛生顧問　育見、看護、衛生百般の質疑應答を掲ぐ。

▲家事顧問　衣食住、家事經濟等家事一切の質疑應答を掲ぐ。

▲學校消息　各女學校の教授意見、成蹟教育事項等を紹介す。

▲雜錄　家庭以外社會百般の事項を尤も趣味ある筆を以て記し、以て世界の風俗習慣、生活の巨細を知るの料に供し從來蟄居的習慣に馴れたる婦人智見を開發せしむ。

新年增刊 家庭小說 小天地

一月十五日發行

家庭小說作家の氏名左の如し詳細は一月一日發行の本誌に在り

新刊紹介

小說 町の仙女

詩的東京と東京最新繁昌記とを著して文名一時に轟きたる青年文士伊藤銀月氏の作なれば平々凡々たる作家の作とは大に面目の異りたる處ろあるがことし、町の仙女といふ表題からして既に奇抜なり、東京女の粋と意氣とを描きたる處ろ作家の抱負のある處ろ知るべし、作者は新らしき眼をもてる江戸通なり、廿世紀の江戸女の面影を知らんと欲せばこの小説を讀め定價六拾錢といへば高い樣なれど金色社といへる無類飛切の贅澤なる書肆の出版なれば裝訂の美だけにても直打は確かにあるべし。

新体詩 銀鈴

新体詩家としての尾上柴舟君の技倆は世既に定論あり强ちに漫評を加へざるを可とす、銀鈴といふ表題尤もよくこの書の内容を顯はしたりその口調の嶄新にして着想の奇拔なる方今稀に見るの良詩集なり。

女子日英會話

トーマスプレナン氏の著を帝國翻譯社にて譯したるもの、婦人に必要なる日用の會話數十件を網羅して翻譯し猶原語には一々發音を附したれば英語を始めて學ぶ者の爲めに便利なる會話書なり。

定價三十五錢發行所京橋南鞘町帝國翻譯社

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二册 増刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵税 一册 二錢

改正廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁（卅二行）	……	十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁（六十四行）	四十圓	三十三圓	二十七圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年十二月五日發行 第四卷第拾六號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 水谷景長
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 合資會社博進社工場
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 二千六百二十番 千十八番 三千二百二十九番

發兌元　歳暮年始贈答書　博文館

大町桂月君著

（九版）

學生訓

本書は桂月先生が青年學生の學問と躬行とに資せられたるものにして説く所奇警にして着實而かも趣味ありて乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好模範也學生諸君一本を備へて坐右の銘とせざるべからず教育家亦參考に供へられて可也

袖珍美本　正價貳拾錢　郵税四錢

大町桂月君著

（四版）

續學生訓

青年學生諸君の友となりて學藝上實行上、教導し、忠告し、訓戒するもの、學生訓是也

續學生訓出でゝ更に一の益友増したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味ありて雄健、一讀たゞ卷の終ふるを忘る、苟も志あるもの机上此書を缺くべからず

洋装袖珍　正價貳拾五錢　郵税四錢

手藝と禮式

● 實用刺繡術　刺繡術專門 磯村大次郎君著　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税四錢

● 實用造花術指南　山田興松君著　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税四錢

● 裁縫と編物　吉田調子君著　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

● 女子手藝要訣　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册和並綴　正價參拾五錢　郵税八錢

● 實用裁縫全書　小岩井規太郎君 鹽田眞三君合著　全一册和並綴　正價五拾錢　郵税八錢

● 家政學　華族女學校學監下田歌子女史著　全二册和並綴　正價一册參拾錢　郵税一册六錢

● 增訂 日本女禮式大全　坪谷善四郎君著　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋布上綴　正價九拾錢　小包送拾五錢　▲蒔繪函入特製　和上綴正價壹圓貳拾錢　小包送拾五錢

● 女子 普通禮式　華族女學校學監 下田歌子女史著　全一册洋並綴　正價參拾五錢　郵税八錢

● 和洋禮式　大橋乙羽君著　木版刷錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

● 新撰女子作法書　中島義式君著　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

● 新撰小學女禮式　中島義式君著　挿畫挿入　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

大町桂月君著

（三版）

青年訓

著者本書の序に曰く（前略）最も注意して愼重の態度を取りたるもの也。かくて余は天下の青年の友となり又中等教育諸家の參考に供せむとす。これ余が一面の事業也。これ等に說きたる言と他に說きたる言と一寸見れば矛盾するが如きことなしとせざれどもこれ人によりて說法を異にする也自から欺くにあらざる也

洋装袖珍　正價貳拾八錢　郵税六錢

大町桂月君著

（新版）

處世訓

今や社會は智育以外品性の陶冶を望むこと切也才力材能以外品性ある人士を求むるに至れり而して品性の教育は學校教育にのみ任ずべからず本書や靈界の眼縱橫の筆學に志し道に志し世に處するものゝ木鐸となり指導者となり鼓舞者となり今の社會の心靈上の渴を醫すること旱天の雨も啻ならざるものあらん

袖珍美本　正價貳拾五錢　郵税四錢

歳暮年始　發兌元

作文と字典

●東京　博文館編輯局編　木版摺錦繪及寫眞版挿入　全一册洋裝　實價五拾五錢　郵稅貳錢五厘

●京都と奈良　同　木版摺錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋裝　實價五拾五錢　郵稅貳錢五厘

●美辭寶典　西村眞次君編　作文眞材　全一册洋裝　正價參拾五錢　郵稅六錢

●書翰文大成　中村秋香君著　▲和裝箱入　正價六拾五錢　全一册洋布上製　正價壹圓　小包送料拾五錢　郵稅拾六錢

●明治書翰文大全　內山幻堂君著　寫眞版八葉挿入　全一册洋裝　正價五拾錢　郵稅拾錢

●書簡組立法　大和田建樹君著　全一册洋裝　正價拾五錢　郵稅六錢

●通俗書翰文　樋口一葉女史著　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册洋裝　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●女子書翰文　華族女學校學監下田歌子女史著　石版書翰挿入　全一册和裝　正價參拾五錢　郵稅八錢

●明治文選字引　齋木寬直君著　銅刻和紙上製　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●增字文選字引　風月庄左衛門君編　校正三版　全一册和裝　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●新刻正字通　長岡道謙君著　銅刻和紙上製　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●皇國字典　青藍居士編　歷史文章　全一册和紙上製　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●漢語字引　棚橋廣君著　新撰　銅刻和紙上製　正價貳拾五錢　郵稅貳錢

●懷中玉篇　大月曙四郎君編　銅刻洋布上製　正價貳拾錢　郵稅四錢

●西國立志編　文學博士中村正直君譯述　改正　全一册洋裝　正價貳拾七錢　郵稅八錢

●益軒十訓　東京女學館敎授西田敬止君編　全一册背皮上製　正價壹圓　小包送料拾五錢

各宗本山名所圖會

洋裝大判每編寫眞版數拾葉及密畫數十個挿入

◉本派本願寺名所圖會（正價六拾八錢　郵稅拾錢）

◉大谷派本願寺名所圖會（正價四拾錢　郵稅六錢）

◉佛光寺名所圖會（正價貳拾五錢　郵稅四錢）

石倉

內外遊

▲全部十五册　小判洋裝製　正價一册拾貳

ボート競漕……遠山熙君著

新游泳術……稻田實君著

ベースボール　クリツケツト……津田紫彥君著

射的術及弓術（減價）津田紫彥君著

銃獵案內……佐野信三郎君著

庭球術（減價）野田桂園君著

玉突術……三宅鐵骨君著

（後付の二）

歳暮年始　發兌元

明治節用大全
●博文館編輯局編纂彩色美麗木版畫挿入（事物節用）全一册脊皮上綴
●傳家寶典 明治節用大全
正價壹圓六拾錢　小包送貳拾錢

明治少年節用
●少年世界編輯部編纂彩色各國徽章其他十數葉挿入全一册洋布上綴
●明治少年節用
正價七拾五錢　郵稅拾貳錢

美文と韻文

●鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著 美文韻文 花紅葉　全一册洋布上綴　正價参拾錢　郵稅六錢

●文學士大町桂月君著 美文韻文 黃菊白菊　全一册紙皮上綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●文學士土井晩翠君著 天地有情　全一册洋布上綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●文學士武島羽衣君著 美文韻文 霓裳微吟　全一册紙皮上綴　正價参拾五錢　郵稅六錢

●文學士鹽井雨江君著 美文韻文 暗香疏影　全一册紙皮上綴　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●佐々木信綱君、印東昌綱君合著 美文韻文 磯馴松　全一册紙皮上綴　正價貳拾八錢　郵稅六錢

●大和田建樹君著 散文韻文 雪月花　全一册紙皮上綴　正價参拾五錢　郵稅六錢

●大和田建樹君著 散文韻文 深山櫻　全一册紙皮上綴　正價四拾錢　郵稅六錢

●大和田建樹君著 散文韻文 藻塩木　全一册紙皮上綴　實價貳拾五錢　郵稅六錢

●文學博士高山林次郎君著 時代管見　全一册紙皮上綴　正價参拾錢　郵稅六錢

●文學博士高山林次郎君著 文藝評論　全一册紙皮上綴　正價参拾錢　郵稅六錢

●文學士大町桂月君著 大紘小紘　全一册紙皮上綴　正價参拾錢　郵稅六錢

家庭

木村小舟君作歌

（全部十二册）

●第一編 桃太郎
●第二編 舌切雀
●第三編 松山鏡
●第四編 花咲爺
●第五編 浦島太郎
●第六編 文福茶釜

壹册貳錢五厘　拾貳册廿七錢

●大橋乙羽君著 増補 千山萬水　寫眞版二十八葉挿入　全一册洋布上綴　正價五拾錢　郵稅拾錢

●大橋乙羽君著 續千山萬水　寫眞版二十八葉挿入　全一册洋布上綴　正價五拾錢　郵稅拾錢

●安藤紫陽君 箕輪撫鼠君共編 名士の父母　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●無何有道人編 名士の平生　全一册紙皮上綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●中央新聞社編纂 名士の嗜好　全一册紙皮上綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

（後付の四）

贈答適書　博文館

唱歌

田村虎藏君作曲

洋裝袖珍（一

- ●第七編 勝々山
- ●第八編 羅生門
- ●第九編 一寸法師
- ●第拾編 猿蟹合戰
- ●第十一編 俵藤太
- ●第十二編 瘤取り

●六冊拾四錢
●郵税壹冊貳錢宛

小說書類

- 大橋乙羽君著 ●風月集 彩色木版密畫挿入全一册洋布上綴 正價參拾五錢 郵税六錢
- 大橋乙羽君著 政治小說 ●累卵の東洋 全一册洋並綴 正價四拾八錢 郵税四錢
- 江見水蔭君著 ●戀 寫眞銅版挿入 全一册紙皮上綴 正價參拾錢 郵税四錢
- 江見水蔭君著 ●星 寫眞銅版挿入 全一册紙皮上綴 實價貳拾五錢 郵税八錢
- 饗庭篁村君著 ●聚寶盆 全一册紙皮上綴 實價貳拾五錢 郵税六錢
- 巖谷小波君著 ●女波男波 寫眞銅版挿入 全一册紙皮上綴 正價四拾錢 郵税八錢

露伴叢書

幸田露伴先生著

●二日物語 ●縁の縁 ●ひげ男 ●和合樂 ●縁外縁 ●醉郷記 ●夢日記 ●封じ文 ●春の山 ●あやしやな ●獅子庵 ●日蓮上人 ●醉興記 ●地獄溪日記 ●うつし ●ゑ日記 ●知々夫紀行 ●文明の庫緒言 ●同銃器の卷

●折々帖 ●夜の雪 ●休暇傳 ●新學士 ●川舟 ●夢がたり ●冷干水 ●露團々 ●自繩自縛 ●艶馬傳 ●箱根草 ●鄭成功 ●二宮尊德 ●まき筆日記 ●易心後語 ●遊行雜記 ●將棋雜考 ●同陶器の卷 ●同假名の卷 ●僥倖

●毒朱唇 ●迷霧 ●大珍話 ●是は〳〵 ●新浦島 ●鐵三鍛 ●椀久物語 ●蹄鐵 ●銃獵行 ●伊能忠敬 ●突貫紀行 ●客舍雜筆 ●春の一日 ●旅の心得 ●將棋雜話 ●同紙の卷 ●元祿時代 ●の雜劇

全壹册洋裝　正價貳圓五拾錢　小包貳拾錢

- 長田秋濤君著 ●世界富豪の表裏 全一册洋並綴 正價參拾五錢 郵税六錢
- 太陽評論記者 鳥谷部春汀君著 ●明治人物評論 全一册紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 同 ●續明治人物評論 全一册紙皮上綴 正價參拾錢 郵税六錢

- 內山正如君著 ●新撰日本節用 全一册和上綴帙入 正價壹圓 郵税拾錢
- 博文館義輯局編 眞早 ●いろは早引節用 全一册和上綴 正價貳拾錢 郵税六錢

- 大橋乙羽君著 ●歐山米水 彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入全一册特別上綴 正價壹圓五拾錢 郵税八錢
- 大橋乙羽君著 ●歐米小觀 寫眞版挿入 全一册洋布上綴 正價四拾錢 郵税四錢

（後付の五）

歲暮年始　發兌元

小說書類

●換葉篇　泉鏡花君外十四名新作　全一册新形美本　正價六拾錢　郵稅八錢

●女道樂　村井弦齋君著　木版彩色密畫挿入全一册和裝上綴　正價八拾錢　郵稅拾貳錢

●酒道樂　村井弦齋君著　木版彩色密畫挿入全二册布洋上綴　正價一册五拾五錢　郵稅一册八錢

●海底軍艦　押川春浪君著　全一册紙皮上綴　正價參拾錢　郵稅六錢

●英雄小說武俠の日本　押川春浪君著　全一册紙皮上綴　正價四拾錢　郵稅六錢

●海國冒險奇談新造軍艦　押川春浪君著　全一册紙皮上綴　正價參拾錢　郵稅六錢

●傳奇小說銀山王　押川春浪君著　全一册洋並綴　正價參拾錢　郵稅六錢

●新社會主義小說文明の大破壞　理學士依樣軒主人著　全一册洋並綴　正價四拾錢　郵稅八錢

●社會百面相　內田不知庵君著　全一册洋並綴　正價五拾五錢　郵稅拾貳錢

●忘れがたみ　若松賤子女史遺稿　櫻井鷗村君編纂　全一册洋布上綴　正價壹圓　郵稅拾錢

●一葉全集　樋口一葉女史著　全一册洋並綴　正價四拾錢　郵稅拾錢

●花鳥集　大橋乙羽君著　彩色木版密畫挿入全一册洋布上綴　正價壹圓　小包送拾五錢

●歌まなび　大和田建樹君著　全一册洋布上綴　正價壹圓五拾錢　小包送五錢

●增補詠歌自在　佐々木信綱君著　全一册洋布上綴　正價壹圓　郵稅拾貳錢

●仰臥三年　醫學士近藤常次郎君著　全一册洋並綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

●續仰臥三年　醫學士近藤常次郎君著　全一册洋並綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

二段小林鍵

圍碁

一)全部十

第一編 ●圍碁入門
第二編 ●圍碁初步
第三編 ●圍碁定石
第四編 ●圍碁詰方
第五編 ●圍碁布石法
第六編 ●古今名家打碁集

●壹册金拾五錢●六册八拾五錢●拾

天城安

少年商

全部六册
正價一册十

第一編 ●勤儉貯蓄
第二編 ●商業の栞
第三編 ●世界金傑譚

(後付の六)

贈答適書　博文館

太郎君編 全書

二冊和装（一

第七編 ●互先定石集 上
第八編 ●仝 中
第九編 ●仝 下
第十編 ●近古名人打碁集
第十一編 ●近世名人打碁集
第十二編 ●今代名人打碁集

貳册壹圓六拾五錢 ▲郵税壹册貳錢

脚本と稗史

- 福地櫻痴居士作 肥後武士江戸藝者 ●花盛劇楓葉　全一册洋並綴　正價貳拾五錢　郵税四錢
- 福地櫻痴居士作（密畫挿入）●山中平九郎、　全一册洋並綴　正價參拾錢　郵税六錢
- 福地櫻痴居士作（密畫挿入）●芳哉義士の譽　全一册洋並綴　正價參拾錢　郵税六錢
- 高安月郊君作 小峰大羽君畫 彩色口繪挿入 ●江戸城明渡　全一册洋並綴　正價貳拾參錢　郵税四錢
- 高安月郊君譯述 イプセン作 ●社會劇　全一册洋並綴　正價八拾錢　郵税拾錢　▲特製本洋布上綴　正價壹圓　郵税拾貳錢
- 博文館編輯局校訂 ●四大奇書　全二册脊皮上綴　正價一册六拾錢　郵税一册拾四錢

- 博文館編輯局校訂 ●眞書太閤記　全四册脊皮上綴　正價一册六拾錢　郵税一册拾六錢
- 博文館編輯局校訂 ●繪本太閤記 ●附太閤朝鮮軍記　全一册洋布上綴　正價六拾五錢　郵税六錢
- 博文館編輯局校訂 ●通俗三國志　全二册脊皮上綴　正價一册六拾錢　郵税一册拾四錢
- 博文館編輯局校訂 ●南總里見八犬傳　全三册脊皮上綴　正價一册六拾錢　郵税一册拾六錢
- 博文館編輯局校訂 東海奥羽木曾江島 ●道中膝栗毛　全一册脊皮上綴　正價六拾錢　郵税拾六錢
- 博文館編輯局校訂 ●兒雷也豪傑譚　全一册脊皮上綴　正價六拾錢　郵税拾四錢

- 落合直文君著 ●新撰歌典　全一册洋並綴　正價四拾錢　郵税八錢
- 華族女學校學監下田歌子女史著 ●詠歌の栞　全一册和並綴　正價參拾五錢　郵税八錢

- 櫻井駿君著 ●酒量大觀　全一册洋布上綴　正價參拾錢　郵税四錢
- 文學博士加藤弘之君著 ●天則百話　全一册洋並綴　正價參拾錢　郵税六錢

政君著 業文庫

洋装菊判 五錢郵税四錢

第四編 ●商業算の話
第五編 ●商人修身訓
第六編 ●簿記の栞

（後付の七）

女學世界
第四卷第拾六號
（明治卅七年十二月五日發行 毎月一回五日發行）
（明治卅三年拾貳月廿五日 第三種郵便物認可）



（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい) 明治期復刻版㉜
明治37年11月(第4巻第15号)、12月(第4巻第16号)

2007年7月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3173-0　C3321